新潟県埋蔵文化財調査報告書　第84集

一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

なかのさわいせき

中ノ沢遺跡

1997

新潟県教育委員会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

なかのさわいせき

中ノ沢遺跡

1997

新潟県教育委員会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

妙高野尻バイパスは、国道18号が通過する長野県上水内郡信濃町野尻と新潟県中頸城郡妙高高原町毛祝坂間の交通渋滞を解消するために計画された全長４kmのバイパスです。特に新潟県と長野県との県境は全長902ｍの信越大橋が池尻川・関川・清淵川の３本の川をまたぐことによって、交通量の緩和と事故防止が図られ、それぞれの地域の生活環境の保全を図るとともに経済活動等に多大な効果をもたらすものと期待されています。

妙高野尻バイパスについては、県教育委員会が平成３年度にルート選定に伴う分布調査、平成５年度に道路法線にかかる遺跡の一次調査を、平成６年度に二次調査に着手しました。現在は、完成に向けて着々と工事が進められ、最終段階に入っております。

本書は、この道路の建設に先立って発掘調査を行なった「中ノ沢遺跡」の発掘調査報告書です。本遺跡はかつて活火山であった妙高山の東南麓に位置し、火山の爆発によってもたらされた火砕流で文化層が2枚に分離されました。発見された遺構の主なものは、縄文時代と平安時代のもので、縄文時代のものは陥穴状土坑列、平安時代のものは竪穴住居と土壙墓です。出土品は、いずれの時代も信州文化の影響を強く受けており、当地域の地理的結びつきを如実に示しています。

近年、各種の開発事業に伴って、妙高山麓で数多くの縄文時代をはじめとする遺跡が発掘調査されています。遺構・遺物が多量に出土し、明らかに大規模な集落跡とわかるものと、遺構と遺物がごくわずかしか発見されない小規模な遺跡があります。今回調査した遺跡は後者に属し、前者の遺跡と有機的関係をもっていたものと推定され、当時の人々の行動の結果とも考えられます。今後、時期別に地域の遺跡を分析することによって、その行動範囲などが一層明確になるものと考えられます。

今回の調査結果が、今後の本県の縄文時代や平安時代のみならず、歴史を解明するための一資料として広く活用され、広い意味で、文化財に対する理解と認識を深める契機にしていただければ幸いです。

最後に本調査に対して多大なご協力とご援助を賜った地元の方々、ならびに妙高高原町教育委員会をはじめ、建設省北陸地方建設局・同高田工事事務所に対して厚くお礼申し上げます。

平成９年３月

新潟県教育委員会

教育長　平　野　清　明

例　　言

1．本報告書は新潟県中頸城郡妙高高原町大字関川字中ノ沢1043－1ほかに所在する中ノ沢遺跡の発掘調査記録である。

2．発掘調査は国道18号妙高野尻バイパスの建設にともない、新潟県が建設省から受託して実施したものである。

3．発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）が平成５・６年度に実施した。

4．整理および報告にかかる作業は平成６～８年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。

5．出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は「中ノ」として出土地点・層位などを併記した。

6．グリッド杭の打設と地形測量および遺物の地点記録は（有）中郷測量に委託した。

7．本書で示す方位はすべて真北である。ただし、ここでいう「真北」とは日本平面国家座標第八系のＸ軸方向を表す。これは本来の真北から0°－10′－50″西偏している。

8．既成の地図を使用したものについてはそれぞれにその出典を記した。

9．本書の遺物番号は縄文土器、石器、平安時代の遺物でそれぞれ通し番号を付し、挿図と写真図版の番号は一致している。

10．文中の註釈はページごとに脚註を付した。また、引用・参考文献は著者および発行年を文中に（　）で示し、巻末に一括して掲載した。

11．本書の作成は寺崎裕助（埋文事業団第二係長）、和田壽久（同主任調査員、平成９年転出）、阿部雄生（同文化財調査員、平成７年転出）、立木（土橋）由理子（同文化財調査員）、佐藤執二（同嘱託員、平成９年退職）が担当し、編集は立木（土橋）が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章	1	立木	第Ⅱ章	1	立木・佐藤	第Ⅲ章	1	立木	4Ａ	寺崎	第Ⅳ章	1Ａ	立木
	2Ａ	阿部・立木		2	和田		2	立木	4Ｂ	立木		1Ｂ	寺崎
	2Ｂ	立木					3	立木	4Ｃ	立木		1Ｃ	立木
									4Ｄ	立木		2	立木
									4Ｅ	立木			

12．石器の使用痕観察（本文39頁）は沢田敦（埋文事業団第一係文化財調査員）の協力を得た。

13．本遺跡については1995年７月28・29日の発掘調査展示会「妙高山麓の遺跡－高速道路・国道の遺跡－」で概要が報告されたほか、1995年刊行の『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』に記載があるが、本書の記述をもって正式な報告とする。よって、上記報告会や『年報』の内容と本書に齟齬がある点は、本書の記述を採るものとする。

14．遺跡内および周辺の地質については早津賢二氏にご教示を賜るとともに、資料・文献を提供していただいた。

15．周辺の遺跡分布図の作成にあたっては長野県信濃町教育委員会から多くの資料を提供していただいた。

16．本文中の敬称は省略させていただいた。

17．発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示とご協力を賜った。厚くお礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

穴澤義功　小熊博史　大竹憲昭　小笠原永隆　可児通宏　川崎　保　小島正巳　笹沢正史　佐藤雅一　品田高志
高橋　勉　谷　和隆　中村由克　原　明芳　広瀬昭弘　渡辺哲也

目　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査と整理 …… 3
A．発掘調査 …… 3
(1) 調査体制 …… 3
a．一次調査 …… 3
b．二次調査 …… 3
(2) 一次調査の概要 …… 3
(3) 二次調査の概要 …… 3
a．調査方法 …… 3
1．基本層序の確認 …… 4
2．包含層の調査 …… 4
3．遺構確認 …… 4
4．実測・写真 …… 5
b．調査経過 …… 5
B．整理作業 …… 6
(1) 整理体制 …… 6
(2) 整理経過 …… 7
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境 …… 8
1．妙高火山起源の堆積物とその年代 …… 8
2．妙高山麓の縄文時代の遺跡 …… 10
第Ⅲ章　遺　跡 …… 13
1．グリッドの設定 …… 13
2．基本層序 …… 13
3．遺構 …… 16
A．縄文時代の遺構 …… 16
(1) 陥穴状土坑 …… 16
a．Ⅰ類 …… 17
b．Ⅱ類 …… 17
(2) 集石土坑 …… 17
(3) 集石 …… 18
(4) 掘立柱建物 …… 19
(5) 土坑・ピット …… 19
a．Ⅸ層上面検出の土坑 …… 19
b．Ⅷ層上面検出の土坑 …… 19
c．Ⅵ層上面検出の土坑・ピット …… 19
B．平安時代以降の遺構 …… 20
(1) 竪穴住居 …… 20
(2) 土坑 …… 22
4．遺物 …… 23
A．縄文時代の土器 …… 23

(1) 概略 …… 23
(2) 分類と記述 …… 23
(3) 包含層出土の土器 …… 24
a．A区 …… 24
b．B区 …… 25
c．C区 …… 31
(4) 遺構出土土器 …… 35
B．縄文時代の石器 …… 35
(1) 概略 …… 35
(2) 分類と記述 …… 35
(3) 遺構出土の石器 …… 37
(4) 包含層出土の石器 …… 37
a．A区 …… 37
b．B区 …… 38
c．C区 …… 42
d．地区・層位など不明 …… 43
C．弥生時代の土器 …… 44
D．平安時代の遺物 …… 44
(1) 概略 …… 44
(2) 分類と記述 …… 44
(3) 遺構出土の遺物 …… 45
(4) 遺構外出土の遺物 …… 48
E．近世の遺物 …… 48
第Ⅳ章まとめ …… 49
1．縄文時代 …… 49
A．陥穴状土坑 …… 49
B．土器 …… 51
C．石器 …… 56
(1) 石器組成 …… 56
(2) 石材組成 …… 57
2．平安時代 …… 61
A．土器 …… 61
B．遺構 …… 61
(1)ＳＸ６について …… 61
(2)竪穴住居について …… 62
要約 …… 63
引用・参考文献 …… 69

挿図目次

第1図　調査範囲位置図 …… 2
第2図　大堀遺跡の表裏縄文土器 …… 7
第3図　遺跡周辺の地形 …… 9
第4図　妙高山麓の縄文時代早期の遺跡 …… 11
第5図　一次調査トレンチ位置およびグリッド設定図 …… 13
第6図　基本層序 …… 15
第7図　南側斜面沢地地形 …… 16
第8図　ＳＫ２・３実測図 …… 22
第9図　土器分類 …… 23
第10図　Ａ～Ｃ区設定図 …… 24
第11図　銭貨 …… 48
第12図　陥穴状土坑　検出面と底面の面積比と深さの関係 …… 49
第13図　陥穴状土坑　底部規模と深さの関係 …… 50
第14図　縄文時代早期土器層位別組成 …… 53
第15図　泉竜寺遺跡出土の石匙 …… 56
第16図　石器組成（1） …… 58
第17図　石器組成（2） …… 59
第18図　石材組成 …… 60

表 目 次

第1表　出土石器総計 …… 35
第2表　不定形石器分類表 …… 36
第3表　Ａ区出土石器点数表 …… 38
第4表　Ｂ区出土石器点数表 …… 39
第5表　Ｃ区出土石器点数表 …… 43
第6表　土器出土状況（Ｂ区） …… 51
第7表　押型文土器専有率（Ｂ区） …… 55
第8表　遺構計測表 …… 64
第9表　石器計測表 …… 64
第10表　平安時代の遺物計測表 …… 68

図版目次

図面

図版1　下層全体図
図版2　上層全体図
図版3　縄文時代　陥穴状土坑（1）
図版4　縄文時代　陥穴状土坑（2）
図版5　縄文時代　陥穴状土坑（3）
図版6　縄文時代　集石土坑（1）
図版7　縄文時代　集石土坑（2）・掘立柱建物
図版8　縄文時代　土坑・ピット
図版9　平安時代　竪穴住居（1）
図版10　平安時代　竪穴住居（2）
図版11　平安時代　竪穴住居（3）・土壙墓
図版12　縄文時代の土器（1）
図版13　縄文時代の土器（2）
図版14　縄文時代の土器（3）
図版15　縄文時代の土器（4）
図版16　縄文時代の土器（5）
図版17　縄文時代の土器（6）
図版18　縄文時代の土器（7）
図版19　縄文時代の土器（8）・弥生時代の土器
図版20　縄文時代の石器（1）
図版21　縄文時代の石器（2）
図版22　縄文時代の石器（3）
図版23　縄文時代の石器（4）
図版24　縄文時代の石器（5）
図版25　縄文時代の石器（6）
図版26　縄文時代の石器　石材別分布
図版27　縄文時代の遺物分布　Ⅰ～Ⅵ層
図版28　縄文時代の遺物分布　Ⅶ層上位
図版29　縄文時代の遺物分布　Ⅶ層下位
図版30　縄文時代の遺物分布　Ⅷ層
図版31　縄文時代の遺物分布　⑦層最下部
図版32　平安時代の遺物（1）
図版33　平安時代の遺物（2）
図版34　平安時代の遺物（3）
図版35　平安時代の遺物（4）

写真

図版36　下層空撮写真
図版37　基本層序
図版38　SK8半截・完掘　SK9半截・完掘　Pit13半截・完掘　Pit14半截・完掘　SK16半截・完掘
図版39　SK17半截・完掘　SK18半截・完掘　SK19半截・完掘　SK23半截・完掘　SK24半截・完掘
図版40　SK25半截・完掘　SK26半截・完掘　SK27半截・完掘　SK28半截・完掘　SK29半截・完掘
図版41　SK30半截・完掘　SK31半截・完掘　SK33半截・完掘　SK34半截・完掘　SK35半截・完掘
図版42　SK36半截・完掘　SK37半截・完掘　SK38半截・完掘　SK39半截・完掘　SK40半截・完掘
図版43　SB11完掘　SX12礫検出・半截　SX20礫検出・半截・完掘　SX21半截・礫検出　SX22半截・礫検出
図版44　SX32礫検出・半截　集石全景　砥石・磨石共伴出土状況　南側斜面完掘　南側沢地調査風景　SK2半截・完掘　SI4遺物出土状況・完掘
図版45　SI5カマド半截　SI5完掘　SI5カマド周辺　SI15完掘　SX6遺物出土状況　陥穴状土坑列完掘　SB11周辺完掘

図版46　縄文時代の土器（1）
図版47　縄文時代の土器（2）
図版48　縄文時代の土器（3）
図版49　縄文時代の土器（4）
図版50　縄文時代の土器（5）
図版51　縄文時代の土器（6）
図版52　縄文時代の土器（7）・弥生時代の土器・大堀遺跡の土器
図版53　縄文時代の石器（1）
図版54　縄文時代の石器（2）
図版55　縄文時代の石器（3）
図版56　縄文時代の石器（4）
図版57　平安時代の遺物（1）
図版58　平安時代の遺物（2）
図版59　平安時代の遺物（3）
図版60　平安時代の遺物（4）・近世の銭貨

第Ⅰ章　序　　説

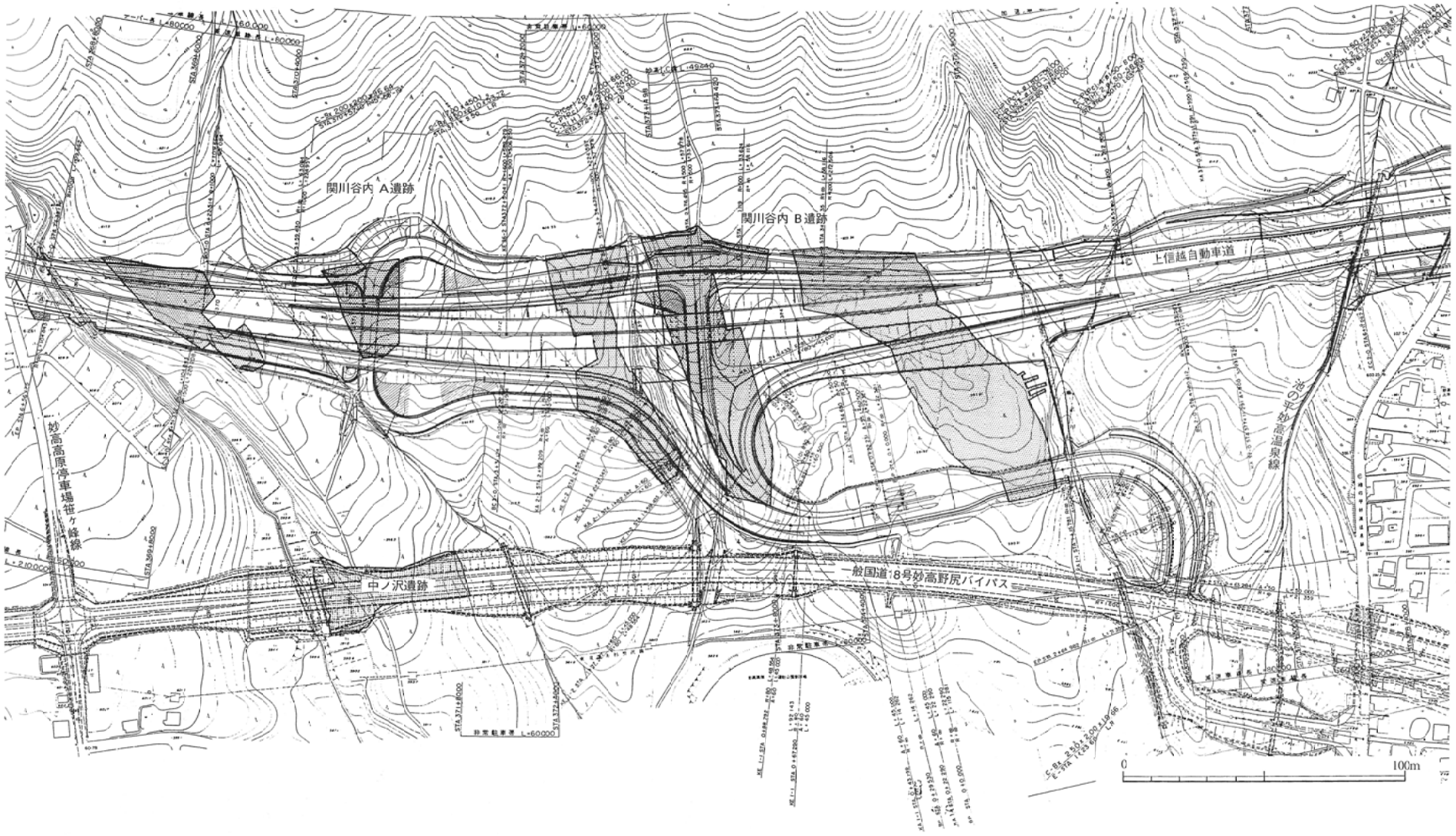
1．調査に至る経緯

一般国道18号の沿線には妙高山麓を中心として、新潟・長野両県に観光地・レジャー施設等が点在している。そのため、当国道は、沿線市町村のみならず遠隔地の利用者も多い。また、新潟・長野県境は全国有数の豪雪地帯であるが、当国道は県境付近で急カーブが連続しており、冬期間事故が多発する地点である。そのような状況下において、上信越自動車道の建設計画と相まって、交通量の緩和と通行の安全確保をはかるための妙高野尻バイパス建設の計画が、建設省北陸地方建設局（以下、「北陸地建」とする）によって立案されるに至った。妙高・野尻バイパスは、新潟県中頸城郡妙高高原町と長野県上水内郡信濃町を結ぶ、延長4 kmのルートが予定され、昭和55年11月29日に承認、昭和58年度に事業化された。そして平成8年度の供用をめざして平成2年度に着工された。

妙高野尻バイパスの建設に先立ち、平成3年1月4日に新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする。）へ北陸地建から、妙高野尻バイパス法線内の遺跡分布調査依頼があった。これに対し県教委は融雪後に実施することとし、実施時期に関しては、後日改めて連絡する旨北陸地建へ通知した。その後、同年4月16日に、北陸地建から実施時期についての問い合わせがあった。その時点で県教委は、すでに各発掘現場の調査が開始されている現状から、分布調査は現場が軌道にのる5月の連休明け以降になるとの回答をした。そして同年5月に、分布調査を6月13日から実施する旨北陸地建に通知した。

分布調査の結果、新遺跡2か所を発見し、本遺跡を含めた周知の遺跡5か所について一次調査をする必要があるという結論を得た。県教委は結果を平成3年7月1日に北陸地建に通知し、一次調査実施時期については妙高野尻バイパスの供用開始が平成8年であること、さらには調査員数確保の問題があることなどから、平成4年度の実施が望ましいことを告げた。その後、同年9月27日に一次調査実施時期について協議がもたれた。北陸地建からは平成4年度実施では工事工程に支障をきたすとして、平成3年度中の実施希望が出された。県教委では体制などを検討した結果、平成3年度の一次調査実施は無理と判断した。結局、本遺跡の一次調査は翌々年度の平成5年8月7日～8月26日に実施された。一次調査の結果、平安時代の土師器・須恵器や縄文時代の早期・後期・晩期の土器片が出土し、ピットや土坑等が検出された。また、包含層および遺構確認面が火砕流を挟んで上下2枚にあることも確認された。

平成5年10月25日、北陸地建、県教委、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする。）の3者による平成6年度の埋蔵文化財に関する協議で、妙高野尻バイパスは平成8年度に全線開通を予定しているため、中ノ沢遺跡は、6年度中に調査を終了してほしいとの要望が北陸地建からあった。そこで、二次調査は、平成6年5月23日～11月30日の間に、県教委から委託を受けて埋文事業団が行うことになった。なお、調査対象面積は、遺物包含層が火砕流層を境に上下2枚確認されたことや調査範囲が当初よりも拡大したことから、全体で6,700 ㎡となった。


関川谷内 A遺跡
関川谷内 B遺跡
上信越自動車道
妙高高原停車場笹ヶ峰線
中ノ沢遺跡
一般国道18号妙高野尻バイパス
妙高高原温泉線
0
100m

第１図　調査範囲位置

2．調査と整理

A．発掘調査

（1）調査体制

a．一次調査

調査期間　平成5年8月7日～8月26日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）

管　　理　藍原直木（専務理事・事務局長）

渡辺耕吉（総務課長）　茂田井信彦（調査課長）

庶　　務　藤田守彦（総務課主事）

調査指導　寺崎裕助（調査第二係長）

調査担当　望月正樹（同主任）

調査職員　三浦泰介（同専門員）　佐藤執二（同嘱託員）

b．二次調査

調査主体、調査、管理、調査指導は平成5年度と同様である。

調査期間　平成6年5月23日～11月30日

庶　　務　泉田　誠（総務課主事）

調査担当　阿部雄生（同文化財調査員）

調査職員　和田壽久（調査第二係主任調査員）　佐藤執二（同嘱託員）

（2）一次調査の概要（第1・5図）

調査対象地は北側を湿地、南側を水田に挟まれた南北約90ｍの台地上に位置している。調査区中程の平坦部は中央よりやや南側にあるため、南斜面は比較的急傾斜になっているのに対して、北斜面は緩やかな傾斜である。現況は台地上が一部植林された唐松林を含む雑木林で覆われており、南斜面の下端は水田として利用されていた。また、水田の一部ではすでにバイパス工事が進められており、構造物（カルバートボックス）が建てられていた。

一次調査の対象面積は5,100㎡で、調査は法線内にトレンチを任意に設定し、バックホーと人力によって堆積土を薄く掘削・精査して、遺構・遺物の有無、土層堆積状況を確認するという方法をとった。実質調査面積は336㎡である。調査の結果、遺構確認面が2面、遺物包含層が4層あることが確認され、縄文時代早期・後期・晩期、平安時代に属する遺物が出土した。南端部の傾斜地では平安時代の土師器を多数表面採集することができた。

（3）二次調査の概要

a．調査方法

調査の基本工程は1.基本層序の確認、2.包含層の調査、3.遺構の検出・精査、4.写真・図面などの記録類の作成である。

1．基本層序の確認

一次調査の結果をもとに、基本層序を確認しながら調査を進めた。調査を始めるにあたって、南北のセクションベルトを4ラインに設定し、その脇に確認トレンチを入れて基本層序を確認した。また、東西のセクションベルトをEライン・Gラインに設定して、土の堆積状況を観察した。実測・写真による記録は南北ラインのセクションにおいてのみ行い、東西ラインは写真撮影と層厚をメモするに留めた。

2．包含層の調査

包含層の調査は赤倉火砕流堆積物（Ⅵ層）を境に上層と下層に大きく分けられる。

上層

一次調査で調査区の南斜面において土師器を採集することができたと報告されていたため、Ⅰ層から人力による調査を行った。ただし、調査区中央の平坦部と北側の緩斜面部では遺物の出土量が少ないと思われたため、事前に重機によって地表面の清掃を行った。発掘調査は排土置場の都合上、北側のCラインから実施した。当初、北側斜面では出土遺物が少なかったこと、基本層序のⅡ層・Ⅳ層の堆積が明確ではなかったことからⅥ層まで掘り下げた。それに対し、調査区中央の平坦部では、Ⅱ層・Ⅳ層の堆積が明確に認められたため、上層から層序ごとに掘り下げることにした。出土した遺物は基本的に柱状に残し、出土状況の平面的な広がりや、下位に遺構が存在しないことを確認した後、小グリッド単位で取り上げた。遺構からの出土遺物は出土状況を記録した後、遺構ごとに取り上げた。Cライン以北では遺物出土量が少ないと予想されたこと、斜面の下部にあたるため流れ込みの土の堆積が厚く、湧水も認められたことなどから、人力による調査が困難と思われたため、バックホーによって慎重に掘り下げ、遺物・遺構の有無を確認した。

下層

Ⅵ層をバックホーで除去した後、下層の調査に入った。下層では縄文時代早期の遺物がおもに出土すると予想され、遺物の出土地点の層位による違いや遺物ごとのまとまりなどを記録することが重要と考えた。そのためトータルステーションシステムを導入して、基本的に1点ずつ出土地点および標高を測定した後、通し番号を付して取り上げた。なお、この記録作業の大半は業者委託とした。

3．遺構確認

遺構確認は上層ではⅥ層上面、下層ではⅧ層上面・Ⅸ層上面で行った。部分的に堆積状況の異なる地点ではそれ以外の層でも遺構検出を試みた。確認された遺構には、時代・種別に関わらず検出順の通し番号をつけた。そのため、一部下層の遺構番号が上層の遺構の番号よりも若いものがある。また、検出後の調査によって遺構ではないと判断された掘り込みにつけられた番号はそのまま欠番とした。以下に、上層と下層に行った確認方法のうち例外的なものについて記す。

上層

調査区中央の平坦部ではⅡ層・Ⅳ層の堆積が認められたため、Ⅱ層・Ⅲ層上面でそれぞれ遺構確認を行い遺構の検出に努めたが、遺構検出には至らなかった。

下層

基本的にⅨ層上面で行っているが、包含層調査中にⅧ層・Ⅷ層中から検出された遺構もある。また、Ⅵ

層除去の後Ⅶ層上面でも遺構精査を行ったが、風倒木痕のみで遺構を検出するまでには至らなかった。

4．実測・写真

遺構の実測は平面図が簡易遣り方で縮尺率20分の1を基本とし、場合により2分の1・5分の1・10分の1を採用して断面図もこれに準じた。全体図の作成は業者委託とし縮尺率は100分の1で行った。

b．調査経過

基本的に調査員2名、委託業者1名、作業員40名の体制で調査を行った。作業員は隣接する大堀遺跡（妙高野尻バイパス関係の発掘調査現場）から動員した。当初上層・下層あわせて6,100㎡を調査する予定であったが、下層の遺物包含層がさらに南側へ伸びていることが判明したため、調査範囲を上層・下層あわせて600㎡拡張し、合計で6,700㎡の調査を実施した。以下に調査経過を上層・下層に分けて記述する。

上層

5月23日から3日間、バックホーによる地表面の清掃を中央平坦部と北斜面において行った。その後、ベルトコンベアーなど機材の搬入、プレハブの建設、基準杭の打設などを行い、6月1日から本格的な発掘調査に入った。まず、調査区の南北、4ラインのセクションベルトに沿ってトレンチを掘り、基本層序を確認した。その後、排土の搬出方法が正式に決定していなかったため、排土置場に比較的余裕のある調査区北側のCラインから遺物包含層の発掘を行った。調査はさらに南側へと移行していったが、北斜面では遺構検出・出土遺物量ともにわずかであった。中央の平坦面にかかると遺物の出土量が多くなり、6月21日には3Ⅰで、23日には5Ⅰで土師器の集中地点が認められた。その後、これらの遺物集中地点にトレンチを入れて精査した結果、壁の立ち上がりと固く締まった床面が検出されたため、竪穴住居として調査を進めることにした。これらの竪穴住居の調査は、住居内からの出土遺物が多く、斜面上という立地条件が影響して残存状況が悪かったことなどから、予想以上に時間を要した。7月18日には南斜面を除いた遺構の調査が終了したため、翌19日に南斜面を除いてⅥ層上面での完掘写真を撮影した。その後、下層の調査と並行して南斜面の遺構の調査を行った。8月30日には更にもう1基の竪穴住居跡が検出され、竪穴住居は合計で3基となった。9月6日に南斜面の遺構の調査がほぼ終了したので、南斜面の完掘写真を撮影した。南斜面のⅥ層は人力で除去し、下層の調査に入った。

下層

南斜面以外の上層の調査が終了したため、7月20～21日まで、固く締まったⅣ層の除去をバックホーとクローラーダンプによって行った。その終了を待って、22日から遺物出土量の多いことが予想されるHラインから人力によるⅦ層の掘り下げを開始した。それと並行してBライン以北の包含層の掘削をバックホーによって慎重に行い、Ⅸ層直上まで掘り下げた。その頃から晴天が続くとともに気温が上昇し、厳しい条件のもとで調査は続いた。そして、8月11日から21日まで現場作業は盆休みを兼ねた夏休みに入り、22日から調査が開始された。26日からは調査区の調査と並行して出土遺物の洗浄を1日5～6人体制で始めた。9月12日には2Ⅰで集石を3基検出した。その後さらに南斜面の下方に調査が及ぶと、南端に至っても遺物包含層が終息せず、調査区外に伸びている可能性が生じたため、29日にバックホーによる試掘を行った。調査区外南側の東半分は排土置場になっていたため、西側に2×4mのトレンチを2か所掘って土層を観察した。上層から土師器が1点出土したが、斜面が急峻なため流出したのか、下層には南斜面上方のような遺物包含層は認められなかった。東側の試掘は排土の搬出を待って後日行うこととした。

10月4日からは南斜面に並ぶ土坑群の調査を開始した。この土坑群は陥穴状土列であり、覆土から縄文

土器が出土するものもあった。7日から懸案であった東側部分の試掘を行ったところ、下層から縄文土器片が10数点出土した。このためさらに試掘を行い遺物の分布範囲の把握に努めることとした。その結果、南斜面はカルバートボックスまでの範囲を全面調査する必要が生じた。10月21日には南斜面部の排土除去作業が開始され、25日には表土剥ぎに入った。遺物の出土する斜面部には旧流路が存在することが明らかとなり、11月9日前後には流路の方向も定まり、遺物がおもに旧流路から出土していることがわかってきた。この頃には陥穴状土坑群の実測などもほぼ終了し、調査の主体は南側斜面に移っていった。なお、11月2日には隣接する関川谷内A・B遺跡（上信越自動車道関係の発掘調査現場）とともに、航空写真撮影を行った。11月14日からカルバートボックス東側（6K21付近）まで調査範囲を拡張したところ、そのあたりから標高が急激に下がり、遺物の出土量も減少することが分かってきた。南斜面については22日まで遺構検出作業を行い、25日までに遺構の掘り上げを終了した。

記録類の作成は中郷測量が11月11日から14日まで最終的な遺物の取り上げや地形測量を行ったほか、調査職員が平板測量による遺物取り上げ・遺構実測・写真記録を行い、22日までにすべての記録を作成した。出土遺物の整理は9月30日から註記作業を始め、11月24日以降遺物台帳などの最終的な整理を行い、30日に発掘調査を終了した。

B．整理作業

（1）整理体制

平成6年度

発掘調査体制と同様である。

平成7年度

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　平野清明）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　平野清明）

管　　理　藍原直木（専務理事・事務局長）

　　山上利雄（総務課長）　亀井　功（調査課長）

庶　　務　泉田　誠（総務課主事）

調査指導　寺崎裕助（調査第二係長）

整理担当　和田壽久（同主任調査員）

平成8年度

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　平野清明）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　平野清明）

管　　理　藍原直木（専務理事・事務局長）

　　山上利雄（総務課長）　亀井　功（調査課長）

庶　　務　泉田　誠（総務課主事）

調査指導　寺崎裕助（調査第二係長）

整理担当　立木（土橋）由理子（同文化財調査員）　和田壽久（同主任調査員）

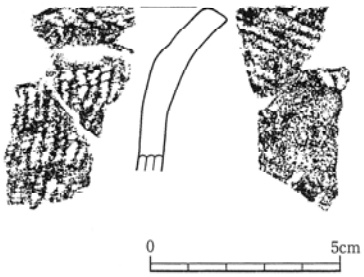
　　佐藤執二（同嘱託員）

（2）整理経過

平成6・7年度に大堀遺跡の整理作業と並行して基礎整理を行った。遺構図面の図面合わせ・土器の接合作業が主な作業であった。

平成8年度に報告書作成のための本格的な整理作業を行った。土器整理の途中、前年度まで並行して整理作業を行っていた大堀遺跡の遺物が1点紛れ込んでいるのがわかった。大堀遺跡の調査報告書は既に刊行されてしまい（立木・寺崎ほか1996）、報告書に収録できなかったので、この場を借りて報告する（第2図）。

この表裏縄文土器は大堀遺跡の9Jグリッド Ⅳ層から出土した。口縁が外反し、端部が外側へ弱くつまみ出される。LRの縄文が外面と口唇部、内面の口縁外反部に施文されている。外面の縄文は唇部から5mm程下がったところから施文されている。胎土には繊維と多量の石英・長石が含まれる。胎土に繊維が含まれることから『大堀遺跡』（立木・寺崎ほか1996）のⅠ群B類に分類される。



第2図　大堀遺跡の表裏縄文土器

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

1．妙高火山起源の堆積物とその年代（第3図）

中ノ沢遺跡の所在する妙高高原町は、行政区画としては中頸城郡に属している。北方は妙高村、西方は糸魚川市、そして南方は関川を挟んで長野県上水内郡信濃町と境を接している。妙高高原町は関川本流および支流沿いのごく限られた沖積低地を除くと、ほぼ全域が山地や高原から成っている。

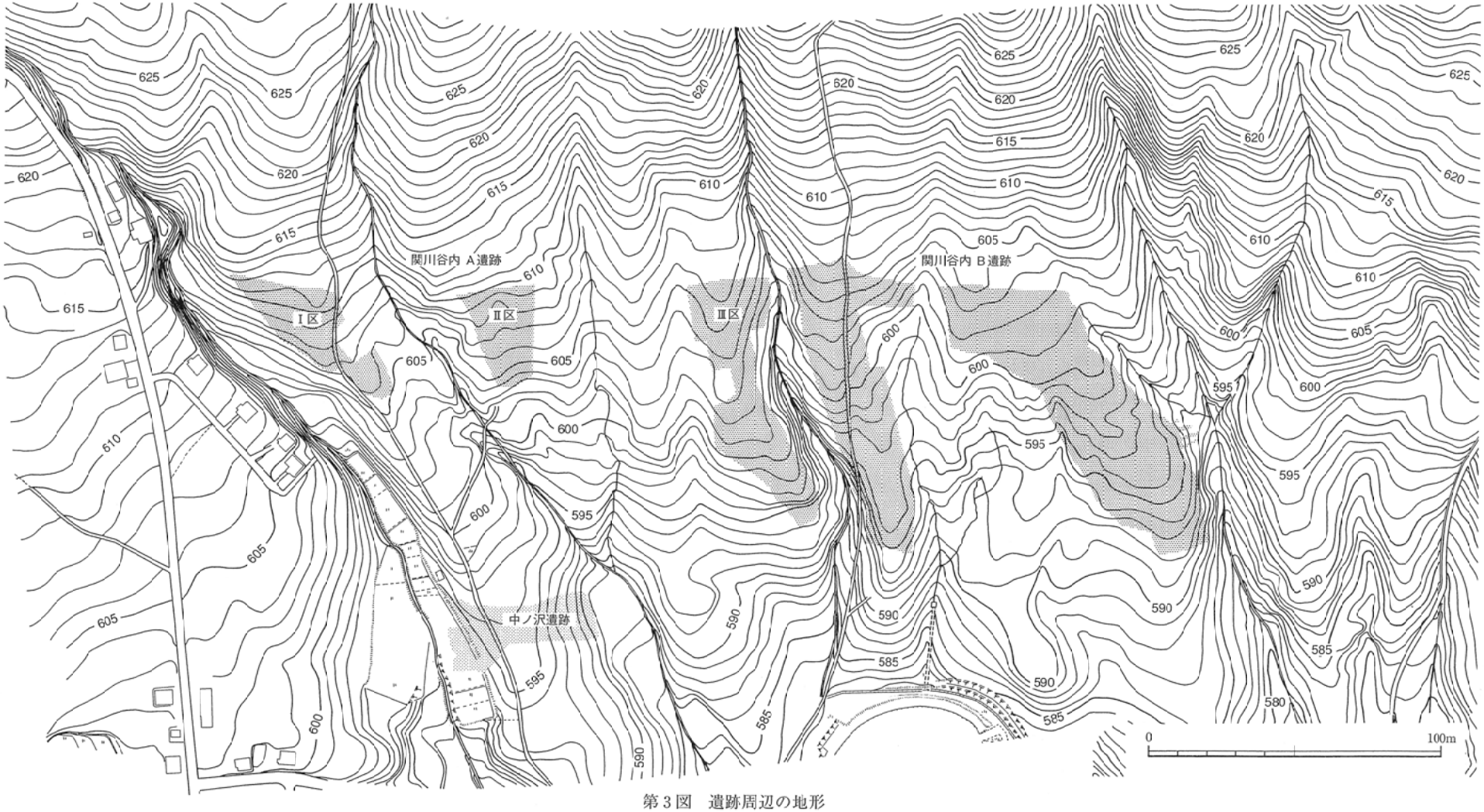
町の基盤をなすのは新生代第三紀中新世の隆起によって生まれた火打山（2,462m）などの山と、隆起に伴って起こった火成岩の貫入により生まれた金山、天狗山、乙妻山、高妻山などの山である。これら非火山の山々は町の中のかなりの面積を占めている。その後の火山活動で生まれた妙高火山（2,445.9m）や焼山火山（2,400m）は西頸城山地の上に載る形で町の中部から東部を占めている（山崎1986）。また関川を挟んで南側には黒姫山、佐渡山、さらに南へ進むと飯縄山、南東側には斑尾山などがそびえている。中ノ沢遺跡は妙高山麓三ツ山の標高約593mの南東山裾に立地する。中ノ沢遺跡から北西にいった標高約600mの所に関川谷内A・B遺跡、南にいった標高約620mの所に大堀遺跡がある。これら3遺跡は平面的にみると直径1kmの範囲内に収まる。いずれも縄文時代早期の押型文土器の時期を主体とする遺跡である。

妙高山麓で発掘調査を行うと、遺跡内に妙高火山起源の噴出物が複数枚堆積しているのが認められる。妙高火山は数十万年前から現在に至るまでに4回の活動期と、活動期の間に挟まれる3回の休止期があり、その間噴火と崩壊・侵食を繰り返しながら今見るような複式成層火山となった。このうち遺跡の発掘で認められる噴出物は第4回目の活動期（第Ⅳ期）に噴出されたものが主体である。第Ⅳ期は約3万年前のシブタミ川火砕流の噴出に始まり、現在はその終末期にあたる（早津1985）。中ノ沢遺跡で認められた田口岩屑なだれ堆積物・赤倉火砕流堆積物・大田切川火山灰はこの第Ⅳ期の噴出物である。

田口岩屑流堆積物は、妙高山南東麓において姶良－丹沢火山灰（ＡＴ）の上位赤倉火砕流堆積物の下位にある岩屑流堆積物のうち、関川岩屑流堆積物を除いたものを指す（早津1985）(註)。関川岩屑流堆積物は神奈山と前山に挟まれた谷に沿って流下したと推定される堆積物で、^{14}Ｃ年代値は19,600±600y.B.P.(Gak-409)が当てられていた（早津1985）。田口岩屑流堆積物は当初、黒色土層を挟んで上部と下部に分けられており、^{14}Ｃ年代値は上部層に7,780±160y.B.P.（Gak-7545）（早津・古川1981）、間層の黒色土に17,700±400y.B.P.(妙高団研グループ1969)が得られていた（早津1985）。ところが、関川岩屑流堆積物と田口岩屑流堆積物下部層の分布境界付近に、北の関川岩屑流堆積物と南の田口岩屑流堆積物下部層にそれぞれ連続する1層の薄い岩屑流堆積物が存在することが明かとなった。両堆積物は層位・^{14}Ｃ年代の上からも矛盾が見られないので、これらを同一層とみなし、合わせて関川岩屑流堆積物と定義し直し、同時にそれまでの田口岩屑流堆積物上部層を独立させ、新たに田口岩屑流堆積物（約8,000年前）と定義し直した（早津・河内ほか1992）。その後、大堀遺跡において関川岩屑流堆積物とは別に、田口岩屑流堆積物に比定できる層が黒色土を挟んで上下2層確認されたため、このうち下位の堆積物を田口岩屑流堆積物Ⅰ、上位の堆積物を田口岩屑流堆積物

（註）「岩屑流：「岩屑なだれ」などと同義に使用されるが適切な用語とはいえない」（高浜1996）。「岩屑なだれ：粘性の高いマグマの貫入による火山体の変形や水蒸気爆発、地震などが原因で、火山体の不安定な部分が表層なだれのように高速で崩れ落ちる現象。」「岩屑なだれ堆積物：表面に流れ山地形をもち、分解しきれなかった給源火山体構成物の大きな塊を含むことが特徴。低温のことが多く、運搬機構に水は寄与しない」（宇井1996）。

「関川岩屑流堆積物」「田口岩屑流堆積物」も現象を忠実にとらえた場合、「関川岩屑なだれ堆積物」「田口岩屑なだれ堆積物」というのが正しい（早津氏のご教示による。）なお、本文中では参考文献で「関川岩屑流堆積物」「田口岩屑流堆積物」の語が用いられていたときは、これに従った。



第３図　遺跡周辺の地形

Ⅱと呼称している。現在のところ、大堀遺跡のほかで田口岩屑流堆積物Ⅰ・Ⅱに対比される層は確認されていないため、池ノ平～田切地域に分布する^{14}Ｃ年代値Ca.8,000y.B.P.が得られている堆積物との対応関係はつかめていない（早津1994a）。

赤倉火砕流堆積物は、妙高山の東麓に広く分布し、北は片貝川から南は池の平までの範囲で認められる。考古遺物からみた噴出時期は、従来縄文時代早期末～前期初頭と考えられてきた。ところが関川谷内Ａ遺跡で赤倉火砕流堆積物が縄文時代前期中葉の有尾式土器を包含する黒色土を覆っているのが確認され、従来の認識を改める必要が出てきた（小島1995）。^{14}Ｃ年代値は5,880 ± 190y.B.P.(Gak-7543)（早津・古川1981）、5,710 ± 140y.B.P.（Gak-11393）（早津1985）が得られていたが、最近妙高村道添遺跡で5,310 ± 110y.B.P.（I-17,943）が出た。この測定結果と遺物の出土層位との関係から、赤倉火砕流堆積物の噴出時期については従来よりも若干新しい時期、つまり有尾式より新しく、諸磯ｃ式並行期よりは古い時期、実年代では約5,300年前と捉え直すのが妥当と考えられている（早津1995c）。大田切川火砕流堆積物は妙高山の東方から北東にかけての、古二俣川・関川・片貝川流域に分布する。噴出時期は考古遺物との関係では縄文時代中期末～後期初頭が考えられているが（早津・小島1985）、噴出年代は^{14}Ｃ年代値の測定値にばらつきがあるため、約4,000～4,500年前という幅をもった値が示されている。なお、妙高山南東麓にはこれにともなって噴出された大田切川火山灰のみが分布している（早津1985）。

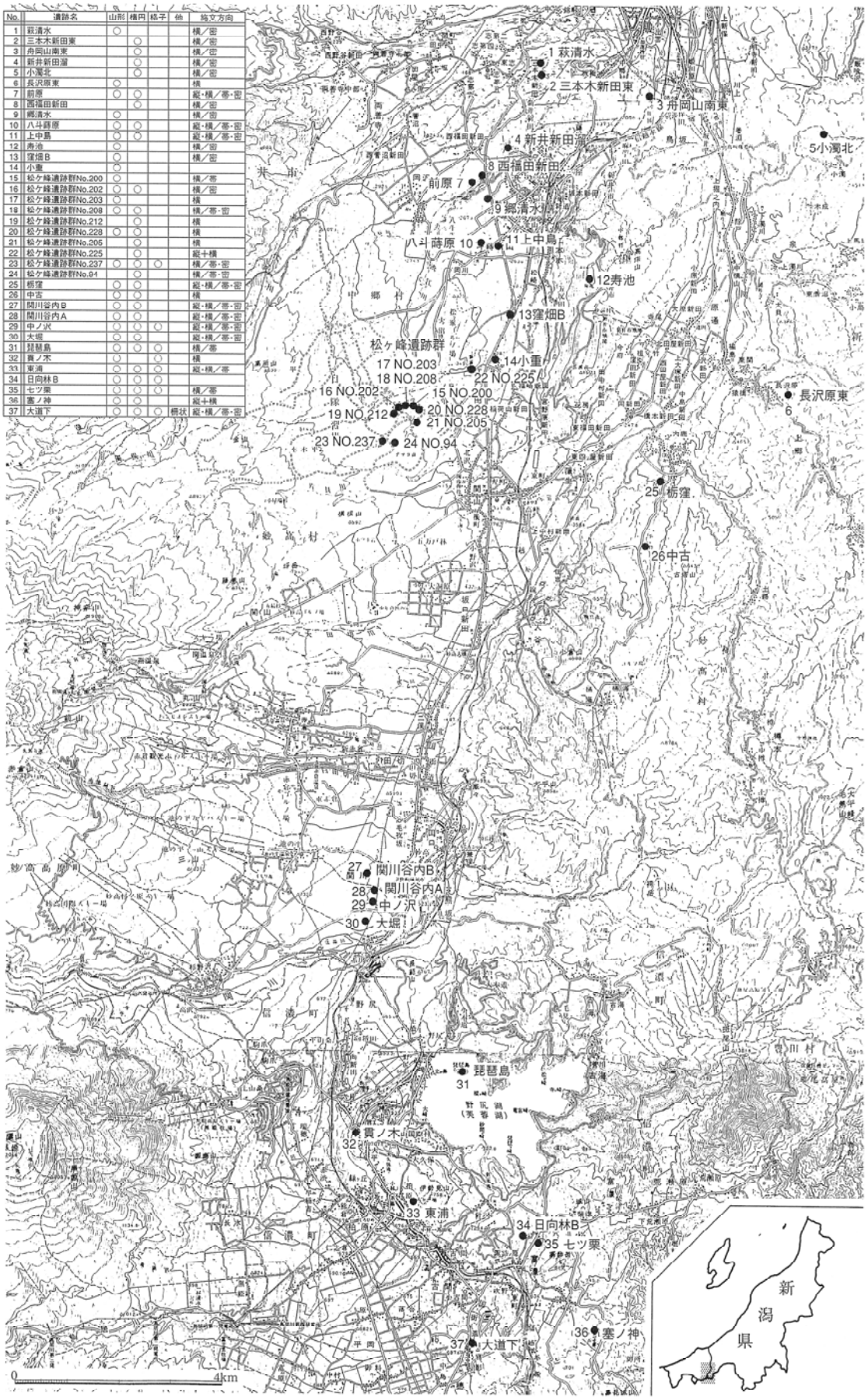
中ノ沢遺跡や関川谷内Ａ遺跡（小池1995）の発掘限界面は一連の田口岩屑なだれ堆積物上面であるが、大堀遺跡は関川岩屑なだれ堆積物上面である（立木・寺崎ほか1996）。これはこの付近の田口岩屑なだれ堆積物の分布にムラがあることに起因するもので、中ノ沢遺跡でも田口岩屑なだれ堆積物の下に関川岩屑なだれ堆積物が存在する可能性は高い。

縄文時代早期の遺物包含層は、中ノ沢遺跡と関川谷内Ａ遺跡では田口岩屑なだれ堆積物と赤倉火砕流堆積物に挟まれた黒色土あるいは暗褐色土であるが、大堀遺跡では関川岩屑なだれ堆積物の上位に堆積した暗褐色土層である。大堀遺跡では押型文土器の分布域に田口岩屑なだれ堆積物が堆積していなかったため、押型文土器と田口岩屑なだれ堆積物の間に直接の上下関係は確認できなかった。また、大堀遺跡では関川岩屑なだれ堆積物と暗褐色土層の間にローム層が挟在し、そこから草創期に属する可能性のある無文土器が出土している。

２．妙高山麓の縄文時代の遺跡（第４図）

妙高山麓周辺での縄文時代の遺跡の発見や調査は、戦前より知られている。『新潟縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第７輯』（齊藤1937）には、杉野沢遺跡、大洞原遺跡、葎生遺跡など34遺跡が掲載されているが、中古遺跡、長沢遺跡、大貝遺跡、小濁遺跡など22遺跡は位置不明である。また、縄文時代の遺跡は三仏生式か石倉式または不明形式として分類されている。1963年から1965年にかけての新潟県教委および頸南地区総合学術調査会の分布調査の結果は、『頸南』（室岡ほか1966）にまとめられ47遺跡について報告されている。頸南地区総合学術調査と同じ頃、立教大学により葎生遺跡と大貝遺跡で発掘調査が行われ、葎生遺跡（中川1966）では、後期末から晩期にかけての配石遺構など、大貝遺跡（中川ほか1967）では、縄文時代中期の住居跡33軒などが検出されている。1970年～1980年代は、諸開発により妙高高原町の兼俣遺跡（本間・室岡1976）や、妙高村の中古遺跡（室岡・早津1986）、中郷村の籠峰遺跡（室岡1986、中郷村教育委員会1987）、南田遺跡（親跡1988）などの発掘調査が行われた。90年代には国道や上信越自動車道関係の発掘調査が行わ

No.	遺跡名	山形	楕円	格子	他	施文方向
1	萩清水	○				横／密
2	三本木新田東		○			横／密
3	舟岡山南東		○			横／密
4	新井新田瀬		○			横／密
5	小濁北		○			横／密
6	長沢原東	○				横
7	前原	○	○			縦・横／帯・密
8	西福田新田		○			横／密
9	郷清水	○				横／密
10	八斗蒔原	○	○			縦・横／帯・密
11	上中島	○	○			縦・横／帯・密
12	寿池	○				横／密
13	窪畑B	○				横／密
14	小重	○				
15	松ケ峰遺跡群No.200	○				横／帯
16	松ケ峰遺跡群No.202	○	○			横／密
17	松ケ峰遺跡群No.203	○				横
18	松ケ峰遺跡群No.208	○	○			横／帯・密
19	松ケ峰遺跡群No.212		○			横
20	松ケ峰遺跡群No.228	○	○			横
21	松ケ峰遺跡群No.205		○			横
22	松ケ峰遺跡群No.225		○			縦＋横
23	松ケ峰遺跡群No.237	○	○	○		横／帯・密
24	松ケ峰遺跡群No.94		○			横／帯・密
25	栃窪	○	○			縦・横／帯・密
26	中古	○	○			横
27	関川谷内B	○	○			縦・横／帯・密
28	関川谷内A	○	○			縦・横／帯・密
29	中ノ沢	○	○	○		縦・横／帯・密
30	大堀	○	○			縦・横／帯・密
31	琵琶島	○	○	○		横／帯
32	貫ノ木	○	○	○		縦＋横
33	東浦	○	○	○	桐状	縦・横／帯・密



第４図　妙高山麓の縄文時代早期の遺跡

原図：国土地理院　1：50,000
高田西部（昭和63年）・高田東部（昭和63年）
妙 高 山（昭和63年）・飯　　山（平成３年）
戸　　隠（昭和56年）・中　　野（平成６年）

れ、資料の蓄積が進んでいる。

妙高山麓の押型文土器の出土例については、中郷村の松ケ峯遺跡Aトレンチから出土したものが『頸南』（室岡ほか1966）に掲載されている。最近では、松ケ峯遺跡群を踏査した小島正巳氏が、十数か所から押型文土器を表採している（小島1991,1993a,1993b）。このうちNo.237遺跡の資料については、楕円文は横位密接施文を主体に、施文方向の不規則なものもあり、山形文も横位密接文とみられ、明確な帯状施文はなく、異種並列も伴うと総括されている。No.202遺跡は、楕円の横位密接が主体で、楕円＋山形、楕円＋平行線文などがある。No.208遺跡は山形の横位密接と帯状施文のほかに、横位密接楕円文とネガテイブの楕円横位帯状施文などが認められる。

最近の国道や上信越自動車道建設に係わる発掘調査で押型文土器が出土している遺跡は、上新バイパス関係では萩清水遺跡ほか4か所、上信越自動車道関係では関川谷内A・B遺跡（小池1995・滝沢1995）・八斗蒔原遺跡（飯坂1997）・前原遺跡（橋谷田1997）など、妙高野尻バイパス関係では大堀遺跡（立木・寺崎ほか1996）、中ノ沢遺跡（阿部1995）がある。とくに上信越自動車道関係の調査の進展により、新井市以南の頸城平野西側の丘陵地にも押型文土器を出土する遺跡が存在することが確認され、これまで妙高山麓に分布が限られていた押型文期の遺跡が海岸線近くまで点在する様子が明かとなってきている。

中ノ沢遺跡に隣接する関川谷内A・B遺跡や大堀遺跡では、横位の密接および帯状施文の楕円、山形、格子目文と山形＋楕円などのほか、縦位帯状の山形文も認められるなど押型文の種類が多岐にわたっている。

野尻湖周辺の押型文土器出土遺跡は、1964年に調査された塞ノ神遺跡（笹沢・小林1966）、大道下遺跡（中村ほか1994）など4か所と琵琶島（小笠原1994）、東裏遺跡（1992、1993発掘）などがある。また、上信越自動車道建設に関わる長野県埋蔵文化財センターの調査により、貫ノ木遺跡（大竹1995）、東浦遺跡（岡村1993）、日向林B遺跡（谷1994）、七ツ栗遺跡（渡辺1993）でも押型文土器が検出されている。これらの遺跡の中で押型文土器がまとまって出土したのは、塞ノ神遺跡と大道下遺跡（中村ほか1994）の2遺跡である。塞ノ神遺跡の調査は僅か4日間であったが、押型文土器が出土土器全体の80%を占め、その内訳は楕円押型文138点、山形押型文7点、変形押型文7点と報告されている。拓影を見ると楕円密接の横位施文が主体で、まれに斜位が含まれ、山形文で横位帯状、楕円＋山形、楕円＋柵状文、楕円文に斜線部と平行線部の組合わせが交互に連続する押型文などが見られる。大道下遺跡では、押型文土器が全体の66.2%（192点）を占め、内訳は山形文が49.3%、楕円文が13.3%、格子目文が5.5%、特殊な押型文1.0%となっている。拓影を見ると山形文は、横位と縦位の帯状が主体で、中には口縁部に横位、胴部に縦位の組合わせも含まれている。楕円文は横位帯状の施文が多く、胴部から底部にかけては縄文を施しているものもある。「特殊な押型文」とは柵状文と変形格子目文のことを指すと推測される。

以上のように、妙高山麓周辺の押型文土器出土遺跡は、1990年代以前は栃窪遺跡（小島1991）と中古遺跡を除くと、山麓北東の関川左岸側に集中するとみられていたが、関川谷内遺跡、大堀遺跡、中ノ沢遺跡などの調査により、標高500m以上の南東麓にも押型文期の遺跡が分布していることが明らかとなったのである。

縄文時代前期に噴出した赤倉火砕流堆積物の分布範囲が妙高高原町関川地区から新井市矢代川まで拡がっており、大田切川付近では厚さ数十mにも達するため、大田切川以南では赤倉火砕流噴出前の遺跡の発見は困難と考えられてきた。しかし、中ノ沢遺跡の赤倉火砕流堆積物層は最も厚いところで約0.5m、浅いところでは数cmとなっており、調査を容易に進めることができた。また、野尻湖周辺では、旧石器時代の遺跡の上位または、隣接して押型文土器の散布が見られる。

第Ⅲ章　遺　跡

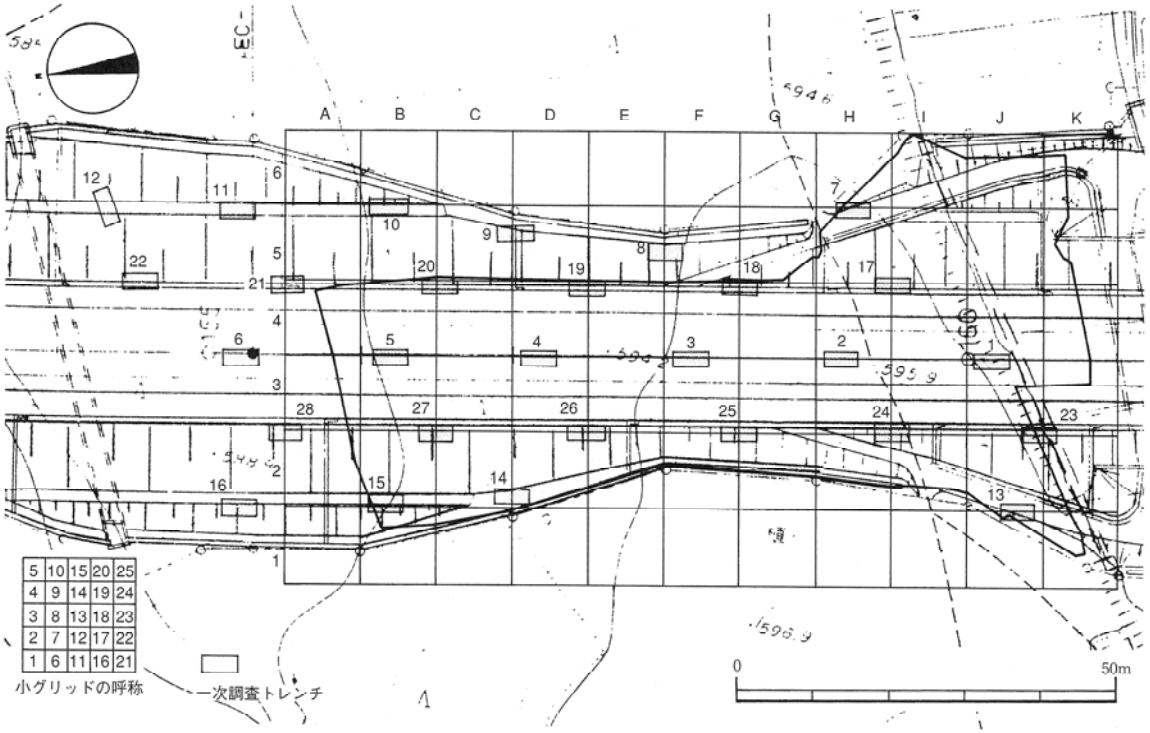
1．グリッドの設定（第5図）

グリッドは道路法線のセンター杭に基づき設定した。ＳＴＡNo.159(国家座標第８象限：X=95469.803、Y=－26840.242)とＳＴＡNo.160(同：X=95469.803、Y=－26842.746)を結ぶラインをＸ軸、これに直交するラインをＹ軸とし、これを基に方眼を組んだ。Ｘ軸は真北に対して７°－11′－33″東偏する。

10ｍ方眼を大グリッドとし、この中を２×２ｍの小グリッドに区切った。大グリッドの呼称は、調査区の北から南にかけて英大文字のＡ～Ｋ、西から東にかけて算用数字の１～６で区分し、両者の組み合わせにより「１Ａ」のように表示した。小グリッドは１～25の算用数字を用いて北西隅を起点「１」、南東隅を終点「25」とし、「１Ａ25」などと大グリッド表示の後に付けて呼称した。

2．基本層序（第6図・図版37）

中ノ沢遺跡は調査区のほぼ中央の平坦面と南北両端の斜面地からなっており、その比高差は約６ｍである。地形的に均一でないため、場所によって土層の堆積状況が異なっている。そこで遺物の出土量が多く、土層の堆積も比較的安定していると思われる中央の平坦面の層位を基本層序とした。基本層序は以下のとおりである。



第５図　一次調査トレンチ位置およびグリッド設定図

Ⅰ層：褐色土。粘性しまりに欠ける。層厚は5～15cmである。

Ⅱ層：明赤褐色土。サラサラした感触で、粘性・しまりに欠ける。層厚は5～20cmである。中央の平坦部にのみ存在する。焼山火山灰（約2,700年前）を含むと推定される。

Ⅲ層：灰褐色土にⅣ層の小粒が少量含まれる。粘性・しまりに欠ける。層厚は5～15cmである。中央部の平坦部にのみ存在する。

Ⅳ層：淡黄色のシルト質の土。大田切川火山灰（約4,000～4,500年前）である。中央部の平坦部にのみ点在する。

Ⅴ層：黒褐色土。粘性・しまりに欠ける。層厚は15～20cmである。中央の平坦部南側斜面部調査区の北端に存在する。

Ⅵ層：灰黄色の砂質土。非常に固く、しまりが良い。層厚は10～45cmである。赤倉火砕流堆積物（約5,300年前）で、下部には妙高山の山体が崩落したことによって堆積した黄色の砂質土層が堆積している。調査区全域に存在する。

Ⅶ層：黒色土層。粘性に欠けるが、しまりは良い。層厚は5～30cmである。調査区全域に存在する。

Ⅷ層：暗黄褐色土。粘性に欠けるが、しまりは良い。層厚は5～30cmである。Ⅶ層とⅨ層の漸移層で、調査区全域に存在する。

Ⅸ層：黄褐色粘質土。田口岩屑なだれ堆積物（約8,000年前）に該当する層である。この面を発掘限界面とした。

遺物包含層はⅠ～Ⅲ層とⅦ～Ⅷ層で、前者と後者はⅥ層の赤倉火砕流堆積物層によって明確に区分される。出土遺物の時期はⅠ層が平安時代以降、Ⅱ層が平安時代と縄文時代後期、Ⅲ層が縄文時代後期、Ⅶ・Ⅷ層が縄文時代早期～前期である。Ⅶ層では遺物が層の上下に別れて出土する傾向があったので、地質的な差異はないが「Ⅶ層上位」「Ⅶ層下位」に区分した。発掘調査時には、便宜的にⅠ～Ⅲ層を「上層」、Ⅶ・Ⅷ層を「下層」とし、遺物台帳の作成や遺構図面などの記録・保管の単位の目安とした。

基本層序は前述のとおりであるが、斜面部に関しては若干堆積状況が異なるので補足しておく。

北側斜面部　中央の平坦部に比べてⅨ層までの深度が浅くなる。とくに、Ⅰ層～Ⅴ層は5～15cmほどの堆積幅しかなくなり、なかでもⅡ層は4Ｆ杭と4Ｇ杭の中間から以北、Ⅳ層は4Ｆ杭より北では見られなくなる。また、斜面の終息部に近い4Ｂ杭と4Ｃ杭の中間付近より北ではⅨ層までの深度が再び深くなる。

南側斜面部　4Ｉ杭付近の平坦面から南斜面へと移行する傾斜変換点以南では、Ⅱ層とⅣ層が見られなくなる。また、Ⅵ層の堆積も4Ｉ杭と4Ｊ杭の中間付近では非常に薄くなる。なお、斜面の終息部であるＫ列より南は沢地となっており（第7図）、ほかの部分と層相に違いが認められた。そのため、基本層序とは別に①～⑧層に分層した。層序は以下のとおりである。

①層：濃灰褐色粘土。しまりがある。現代の水田耕作土である。

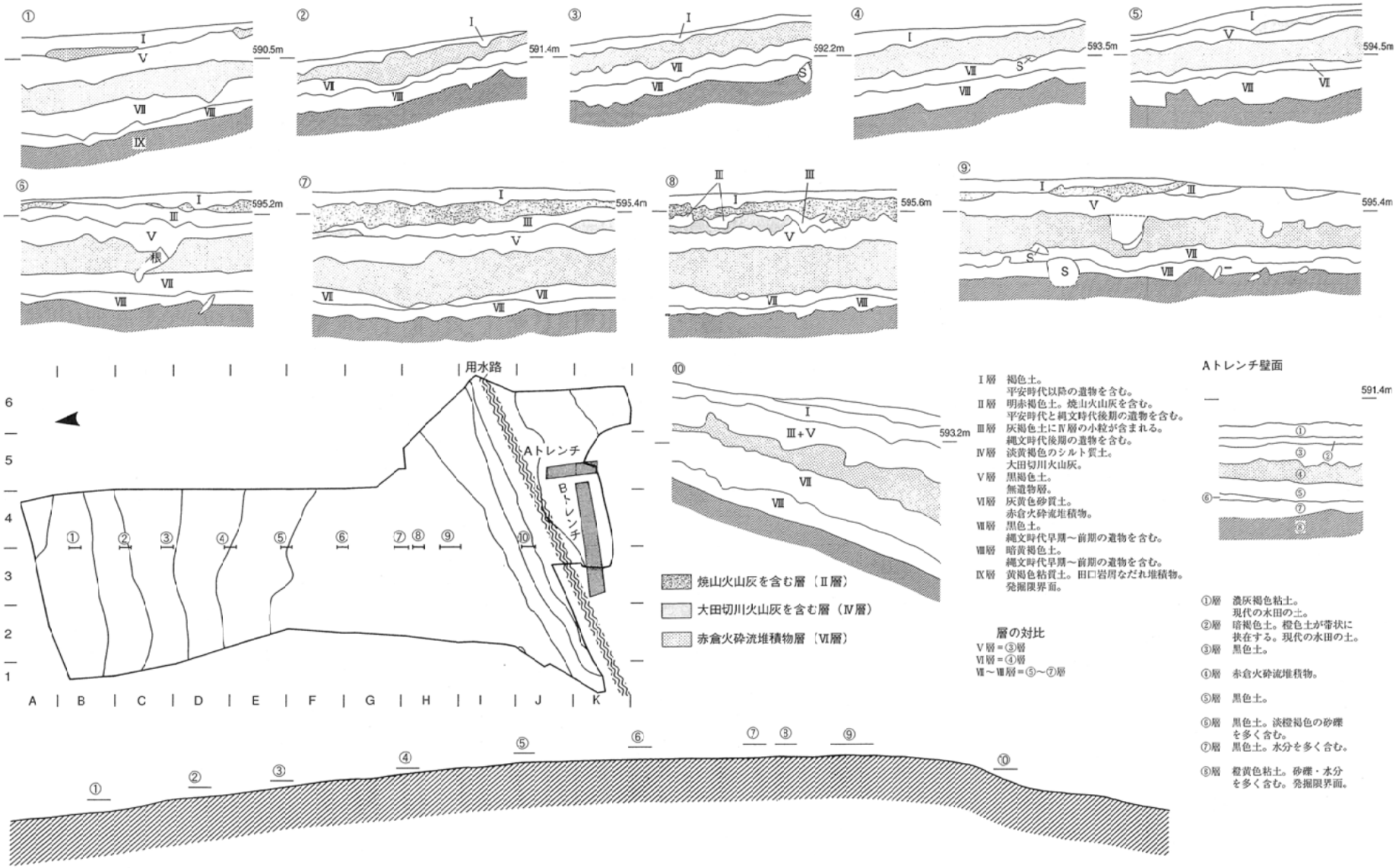
②層：暗褐色土に鉄分の沈着による橙色土が帯状に挟在する。しまりがあり、固い。現代の水田耕作土である。

③層：黒色土。やや粘性があり、しまりが良い。

④層：灰色黄褐色土。しまりが良く、固い。赤倉火砕流堆積物に対比される。

⑤層：黒色土。

⑥層：黒色土。淡橙褐色の砂礫を多く含む。ややしまりがある。



第6図　基本層序（土層断面図の縮小率 1：50）

⑦層：黒色土。水分を多く含み、もろい。

⑧層：橙黄色粘土。砂礫を多く含む。水分を多く含み、もろい。

なお、場所によっては、②層中、あるいは③層中に大田切川火山灰と推定される白黄褐色土がブロック状に点在する。

水田耕作土の①・②層以外の層は、基本層序とおよそ次のように対比される。③層＝Ⅴ層、④層＝Ⅵ層、⑧層＝Ⅸ層である。⑤～⑦層は層相にあまり変化がなく、⑤層から⑦層へ下がるにしたがって含水量が多くなる。このことから同一層であったものが沢の中に堆積する間に粒度などの違いによって3層に分離したものと推定される。⑤～⑦層から縄文時代早期から前期の遺物が出土していることや、④層によって③層以上とは明確に区別されていることから、⑤～⑦層は基本層序のⅦ～Ⅷ層に対比されると考えられる。

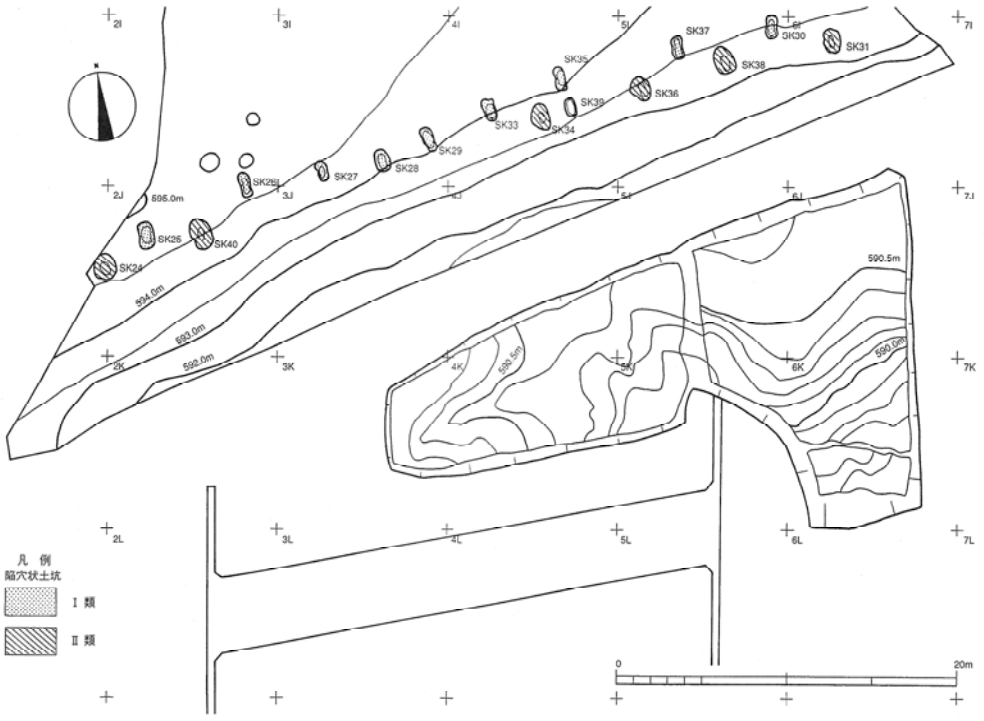
3．遺構

A．縄文時代の遺構（図版1・36）

縄文時代の遺構はⅥ層上面、Ⅶ層中、Ⅷ層中・Ⅸ層の上面で検出された。各検出面で検出された遺構は、Ⅵ層上面がＳＫ8・9・13・14、ＳＢ11、Ⅶ層中がＳＸ12・20～22、ＳＸ32、Ⅷ層上面がＳＫ16・17～19、Ⅸ層がＳＫ23と陥穴状土坑列である。各検出面の遺構の構築時期は火砕流や遺物包含層との関係から、およそ次の時期に該当すると考えられる。検出面Ⅶ層中・Ⅷ層上面・Ⅸ層上面の遺構が縄文時代早期から前期中葉、検出面Ⅵ層上面の遺構が縄文時代前期末葉から後期までである。

（1）陥穴状土坑（第7図・図版3～5・38～42）

陥穴状土坑はⅨ層において16基検出された。16基の陥穴状土坑は、調査区南側の平坦面から斜面へ移行する等高線に沿って列をなしている。グリッドでは1～6列のＩ～Ｊ列にまたがる。陥穴状土坑列の検出された面の標高は約593～594ｍで、陥穴状土坑列から南は急激に標高を下げ、比高下約2ｍのところに沢



第7図　南側斜面沢地地形

地が形成されている。なお、この陥穴状土坑列は東西の調査範囲外に続いていくものと推定される。

陥穴状土坑は形態によって2大別できる。

Ⅰ類：平面形が隅丸長方形で、掘形が上部のほうが若干広い箱形のもの。底部に小ピット1基がある。

Ⅱ類：平面形が楕円形で、掘形がほぼ円錐形のもの。底部に小ピット1基がある。

Ⅰ類はＳＫ25～30・33・35・37、Ⅱ類はＳＫ24・31・34・36・38・40である。ＳＫ39はほかのものより浅く、長軸長が短いこと、底面に巨大な礫があることから、構築開始後まもなく巨大な礫に阻まれ掘削を継続することが困難になり、放棄されたものと推定される。

ａ．Ⅰ類

掘り込み面　ＳＫ30がⅧ層に対比可能な層を掘り込んでいるのが観察されているが、ＳＫ30はＳＩ５の下位から検出されたため、掘り込みがⅧ層上面からなのかというとことまではつかめなかった。また、Ⅶ層との直接の関係も不明である。ただし、Ⅵ層は赤倉火砕流堆積物であることから、掘り込み面を最も新しく考えたとしてもⅧ層上面に求められる。

規模　検出面における長軸長は約110～150cm、短軸長は約60～90cm。検出面からの深さは約70～90cm、底部の小ピットの直径は約20cm、深さは約20cmである。

覆土　堆積は基本的に水平堆積であるが、検出面との境で土層が断ち切られていることから、上部は削平されていると考えられる。覆土は黒色土あるいは茶褐色土が多く、底部に黒色土の堆積するのは9基中4基である。Ⅸ層の黄褐色土の崩落はあまり見られない。

配列　斜面の等高線に並行して1列に並ぶ。間隔は3～7ｍである。

長軸　列に対して直交する。

出土遺物　ＳＫ27からＡ群Ⅰ類1山形文の押型文土器（図版19－316）、ＳＫ33からＢ群Ⅱ類の羽状縄文土器（図版19－318）、ＳＫ29からも細片であるが山形文とみられる押型文土器が出土した。

ｂ．Ⅱ類

掘り込み面　ＳＫ24がⅦ層に完全に覆われているのが確認されていることから、ＳＫ24はⅦ層が堆積するより前に構築されたことが分かる。そのほかの陥穴状土坑は、検出面付近の土層断面でレンズ状堆積の流れ込み際部分に近い状態を捉えることができることから、検出面と掘り込み面の間に大きな差はなく、ＳＫ24と同様にⅦ層堆積以前に構築されたと推定される。

規模　検出面における長軸長は約125～150cm、短軸長は約80～120cm。検出面からの深さは約110～130cm、底部の小ピットの直径は約20cm、深さは約20～30cmである。

覆土　堆積は底部から70cmほどの深さまでが一括埋没、それより上位がレンズ状堆積をするもの（ＳＫ34・31・40）と下半部が水平堆積、上半部がレンズ状堆積をするもの（ＳＫ36・38）がある。覆土は黒色土あるいは茶褐色土が主体であるが、Ⅸ層の崩落によると推定される黄褐色土の堆積も見られた。

配列　Ⅰ類と同様に、斜面の等高線に並行して1列に並ぶ。Ⅱ類の陥穴状土坑列はⅠ類の列より斜面側に列をなす。間隔はＳＫ40とＳＫ34の間が20ｍ、ほかは5ｍである。

長軸　列に対して直交する。

出土遺物　ＳＫ24から前期中葉の所産とみられるＢ群Ⅱ類羽状縄文土器片（図版19－317）が出土した。

（２）集石土坑（図版6・7・43・44）

集石土坑はⅧ層中で4基検出された（ＳＸ20～22・32）。ＳＸ20～22は近接して存在し、グリッドでは

2 I 20・23～25に位置する。S X 32はⅦ層の下部から検出され、5 G 22に位置する。

集石は基本的に直径20～35cmの比較的扁平大形の礫と、直径10cm前後の小形の角礫から構成されている。いずれの集石の礫も被熱により赤変しているものが多いが、これらの礫は河原礫ではなく田口岩屑なだれ堆積物（Ⅸ層）中の礫であるため、赤変が人為的なものなのかどうかは断定しかねる。礫の検出面では下部の土坑の平面形を検出することが困難だったため、礫群の中央を断ち割って土層断面の確認を行った。その結果、Ⅶ層中からの浅い掘り込みが認められた。覆土は黒色土あるいは暗褐色土であった。しかし、いずれの集石土坑の覆土にも明確な炭化物や焼土の堆積層は見られなかったため、この場で火を焚いたとの断定はできない。

これらの集石土坑の構築時期は、周囲から縄文時代早期の土器片が多数出土していることから、同時期に属すると考えられる。

S X 20

2 I 24・25に位置する、3基中で最大の集石土坑である。集石は約100点の礫から構成され、長径104cm、短径80cmの範囲に広がっている。集石を構成する礫は3基中で最も大きなものが用いられている。下部の土坑は確認面・底面ともに不整楕円形で、規模は長軸84cm、短軸68cm、深さ8 cmである。集石の礫は土坑の底面直上から堆積していた。台石（図版20－2）が出土した。

S X 21

2 I 23・24に位置する。上層の遺構発掘の際に南東半分の一部が撹乱を受けているが、検出された集石は約60点の礫から構成され、径約80cmの範囲に広がっている。下部の土坑は明瞭な平面形をつかむことはできなかったが、確認面底面ともに不整楕円形と推定される。規模はおよそ長軸82cm、短軸60cm、深さ16cmである。土坑の底面には直径24cmの大形で扁平な礫が敷いたように据えられていた。

S X 22

2 I 15・20に位置する。集石は約60点の礫から構成され、長径90cm、短径60cmの範囲に広がっている。下部の土坑は明瞭な平面形をつかむことはできなかったが、土層断面から径約90cmの円形または楕円形であったと推定される。深さは約8 cmである。土坑の底面には直径20cm前後の扁平な礫が並べられており、その上に小形の礫が積み上げられていた。覆土はS X 20・21とほぼ同質であるが、少量の炭化物が含まれている。

S X 32

集石は約40点の礫からなる。礫は径100cmの範囲に、南西に開くU字形に並んでいる。下部の土坑は不整楕円形で、規模はおよそ長軸140cm、短軸80cm、深さ10cmである。集石の礫は主に土坑上部に存在し、底面に接するものは見られなかった。

（3）集石（図版7・43）

S X 12

集石は3 B 20において1基検出された（S X 12）。検出面はⅦ層上部である。径50cmの範囲に15～20cmの礫が6個、拳大の礫が21個集まっており、その上を長径48cm、短径24cm、厚さ16cmの角礫が覆っている。礫に赤化しているものはなく、被熱していないと考えられる。構築時期は周辺に出土遺物がないので断定し難いが、検出面がⅦ層上面ということから縄文時代早期あるいは前期に属すると推定される。

（4）掘立柱建物（図版7・43）

ＳＢ11

掘立柱建物は2Ｇにおいて1基検出された（ＳＢ11）。検出面はⅥ層上面である。ＳＢ11は6基のピットが六角形の稜角位置に配される柱穴列で、中央の主軸となるｐ2－ｐ3間は約3.2ｍ、ｐ1－ｐ5間、ｐ4－ｐ6間はそれぞれ2.8ｍである。北辺ｐ1－ｐ4間は2.2ｍ、南辺1.9ｍで、南辺がやや狭い。各ピットの平面形は確認面で直径30～48cmの円形または楕円形、深さは30～56cmである。ピット内に柱痕は認められなかった。遺構内から遺物は出土しなかったが、周辺から縄文時代後期の土器が出土していること、籠峰遺跡（小池1996a）の同様の遺構が後期後半から晩期に比定されていることなどから、ＳＢ11も縄文時代後期に構築時期を求められよう。

（5）土坑・ピット（図版8・38・39）

土坑・ピットはⅨ層上面でＳＫ23、Ⅷ層上面でＳＫ16・17～19、Ⅵ層上面でＳＫ8・9、Pit13・14が検出された。土坑・ピットは各検出面とも散在しており、互いの関連性については不明である。

ａ．Ⅸ層上面検出の土坑

ＳＫ23

3Ｈ15に位置する。平面形は楕円形で、長軸60cm、短軸36cm、掘り形は深さ11cmの浅い皿状を呈する。覆土はしまりの良い灰黄褐色の粘質土で、底面直上に炭化物と焼土の堆積が見られた。出土遺物はない。

ｂ．Ⅷ層上面検出の土坑

ＳＫ16

3Ｅ23付近に位置する。平面形は楕円形で、規模は検出面が140×130cm、底面が125×120cmである。断面形は中間部が若干すぼまる鼓形で、深さは56cmである。覆土は10層に分けられるが、これらは上部のしまりの良い褐色系の土、中部のⅨ層のブロックを含んだ黄褐色系の土、下部のしまりに欠ける暗褐色系の土に3大別される。土層の堆積状況がレンズ状や水平堆積ではないので、人為的に埋め戻された可能性もある。出土遺物はない。

ＳＫ17

4Ｆ13に位置する。平面形は楕円形で長軸100cm、短軸86cm、掘り形は深さ14cmの浅い皿状を呈する。覆土はしまりが良くやや粘性を帯びた暗褐色土が主体である。出土遺物はない。

ＳＫ18

4Ｇ8に位置する。平面形は隅丸方形で長軸78cm、短軸72cm、掘り形は深さ10cmの浅い皿状を呈する。覆土はしまりは良いが粘性に欠ける暗褐色土が主体である。出土遺物はない。

ＳＫ19

3Ｆ23に位置する。平面形は不整円形で、直径63cm、掘り形は深さ18cmの椀状を呈する。覆土は粘性を帯びたしまりの良い暗褐色土と、同質の暗黄褐色土からなる。出土遺物はない。

ｃ．Ⅵ層上面検出の土坑・ピット

ＳＫ8

4Ｃ25に位置する。平面形は隅丸方形で長軸76cm、短軸64cm、掘り形は深さ26cmの椀状を呈する。覆土は3層に分けられるが、いずれもしまりの良い褐色土である。出土遺物はない。

ＳＫ９

４Ｅ19に位置する。平面形は確認面、底面とも楕円形で、規模は確認面で長軸142cm、短軸76cm、底面で長軸116cm、短軸50cmである。掘り形は逆台形に近いが、南壁がほぼ垂直に掘り込まれるのに対し、北壁では上部で１段テラスを有し、そこからやや斜めに掘り込まれる。深さは110cmである。覆土は褐色系で、中位にⅨ層のブロックが混じる。出土遺物はないが、覆土から径24cmの礫が１点出土した。

Pit13

２Ｆ24に位置する。平面形は直径約35cmの円形で、掘り形は深さ46cmの円筒形を呈する。覆土は３層に分けられるがいずれも褐色系で、最下層は非常に良くしまった粘質土である。出土遺物はない。

Pit14

４Ｈ９に位置する。平面形は確認面が直径43cmの円形、底部が長軸30cm、短軸18cmの楕円形で、掘り形は深さ102cmの円筒形を呈する。覆土はややしまりに欠ける暗褐色土の単層である。出土遺物はない。

Ｂ．平安時代以降の遺構（第８図・図版２・９～11・44・45）

平安時代以降の遺構はⅥ層上面で検出された。平安時代の遺構には竪穴住居３基（ＳＩ４・５・15）と土壙墓１基（ＳＸ６）がある。竪穴住居と土壙墓の出土遺物の所属時期は越後の編年（坂井1984）のⅥ～Ⅶ段階、松本盆地西南部の編年（小平1990）の８期、佐久平の編年（寺島1991）の９段階に相当することから、遺構の構築時期もこれに相当すると考えられる。西暦ではおよそ９世紀後半から10世紀初頭に当たる。このほかに時期不明の遺構としてＳＫ２・３がある。

（１）竪穴住居（図版９～11・44・45）

竪穴住居は西から東へ下る尾根の、先端部平坦面から南側斜面にかけて構築されている。同一尾根上には関川谷内Ａ地点Ⅰ区があり、そこでは平安時代の遺物が少量出土している（小池1995）。

ＳＩ４

３Ⅰに位置する。西側２か所を大きく撹乱されており残存状態は良好ではない。掘り込みを確認できたのが北辺南辺の一部と北東隅、南東隅に限られるため詳細な形状は不明であるが、唯一両端が検出された東辺から推測して、ＳＩ４は１辺の長さ約3.5ｍの方形になるものと考えられる。ただし、南辺の中央部には外側への張り出し部分がある。周溝や柱穴は検出されていない。掘り込みはⅦ層上面まで及び、深さは北壁の壁際でⅥ層上面から16cmである。覆土はおおむね７層に分けられる。このうち最下層の７層は固くしまった褐灰色の砂質土で住居の床面と推定される。土質がⅥ層に似ていることから、Ⅵ層を削り取った最下部を床面として利用したものと考えられる。覆土の堆積状況は、北側では比較的安定しているが、南側へいくとやや乱れた堆積状況となる。また、遺物が集中していた南東隅壁際においても、すべての遺物が床面から出土するのではなく、かなり上位からも出土している。

カマドは南東隅の遺物集中地点の最下層において炭化物粒を含む橙色の焼土が堆積していたことから、その位置に構築されていたものと推定される。焼土は床面の下位に約８cmの厚さで堆積していた。周辺からカマドを構築するのに使用したと見られる礫や土壌は検出されなかった。なお、南辺中央の張り出し部分は煙道であった可能性がある。

出土遺物は黒色土器の無台椀・有台椀、土師器の椀・長甕・小甕、須恵器の甕・壺、灰釉陶器の長頸壺がある（図版32・33－５～38）。無台椀には「六」「王」の墨書土器が各１点ずつある。

ＳＩ５

５Ｉに位置する。約４ｍ北東にはＳＩ15がある。住居の南半分は斜面にかかっており、残存状況は良好ではない。掘り込みを確認できたのは北辺・東辺の一部と北西隅に限られるため詳細は不明であるが、ＳＩ５は１辺の長さ約3.3ｍの方形になるものと考えられる。掘り込みはⅧ層上面まで及び、深さは北壁の壁際でⅥ層上面から16cmである。周溝は検出されなかったが、ピットは東壁際とカマドの北側で検出された（ｐ１・ｐ２）。ｐ１はⅨ層上面でＳＫ30の覆土を精査中に検出された。検出面における平面形は22×13cmの楕円形で、検出面からの深さは６cmである。ｐ２は平面形40×30cmの浅い楕円形のピットである。いずれも柱穴かどうかは断定しかねる。

南東隅において、ほぼ直立した状態の径33cmの扁平な礫とその回りに密集する20cm前後の大きさの礫が検出された。礫の北側には約４cmの厚さで赤褐色の焼土が堆積していた。また、周辺からは焼土粒と多くの遺物が出土した。カマドはこの付近の南壁際に築かれていたと考えられ、礫はカマドの焚き口の袖石に当たり、これを芯にカマドの側壁が作られていたと推定される。その地点における土層観察では、覆土は４層に分層された。掘り込みはⅧ層まで及んでおり、最下層の４層は固くしまった暗褐色砂質土で、住居の床面と推定される。ＳＩ４と同様、Ⅵ層の上部を削り取った最下部を床面として利用したものと考えられる。床面は南側へ向けて若干標高を下げる。

ＳＩ５の中央からやや北側に寄ったところに、径30～40cmの礫が約20点重なって出土した。礫の下に掘り込みは認められず床面直上に乗っている。礫の下の床面下の土層堆積に若干乱れが生じているが、人為的な掘り込みではないと判断した。礫に被熱した様子は認められず、焼土も確認されていない。

出土遺物は黒色土器の無台椀・盤、土師器の椀・長甕・小甕、灰釉陶器の碗、フイゴの羽口がある（図版33・34－39～57）。無台椀には「六」の墨書土器が１点ある。フイゴの羽口が出土しているが、住居内でカマド周辺以外のところに焼土が認められないこと、鉄製品や鉄滓の出土もないことから、住居内で鍛冶が行われていた可能性は低いと思われる。なお、覆土から縄文時代の石器（図版20－1）も出土している。

ＳＩ15

６Ｈに位置する。約４ｍ南西にはＳＩ５がある。東半分は調査対象範囲外であるため調査しておらず全容は不明であるが、掘り込みが確認された西壁から、この住居は１辺の長さ約4.15ｍの方形になるものと推定される。

ＳＩ15を南北に横切っている発掘調査範囲の東側境界壁で掘り込み面や覆土を観察することができた。掘り込みはⅡ層上面からⅧ層またはⅥ層まで及んでいる。周溝はない。覆土はしまりのない褐色系の１～３層と固くしまった４層に分けられ、３層には炭化物粒が少量含まれる。最下層の４層は床面と推定され、ほかの２基の住居と同様にⅥ層の上部を削り取り床面に利用していたと考えられる。

床面においてピットが３基検出された（ｐ１～３）。１は西壁の中央付近にあり、平面形は径44cmの円形で深さは床面から44cmである。Ｐ２は南西隅にあり、平面形は径40cmの円形で深さは約40cmである。ｐ１・ｐ２とも底面に径18～20cmの円形で深さ６～８cmの柱痕が認められたことから、この２基はＳＩ15の柱穴と考えられる。ｐ３はｐ１とｐ２の中間付近で検出された。平面形は長径44cm、短径36cmの楕円形で、深さは床面から28cmである。なお、カマドは調査範囲内において検出されなかった。

出土遺物は黒色土器の椀（図版35－58・59）があるのみである。

（２）土坑（第８図・図版11・44・45）

土坑は２Ｊ12で検出されたＳＸ６と３Ｅ６で検出されたＳＫ２・３がある。

ＳＸ６

Ⅵ層上面までの包含層発掘中に、組み合わされた３点の土師器椀が脇に刀子を伴った状態で検出された。土師器の組み合わせ方は有台椀（図版32－１）の上に無台椀（図版32－３）を重ね、その上に蓋をするように有台椀（図版32－２）を被せるというものだった。

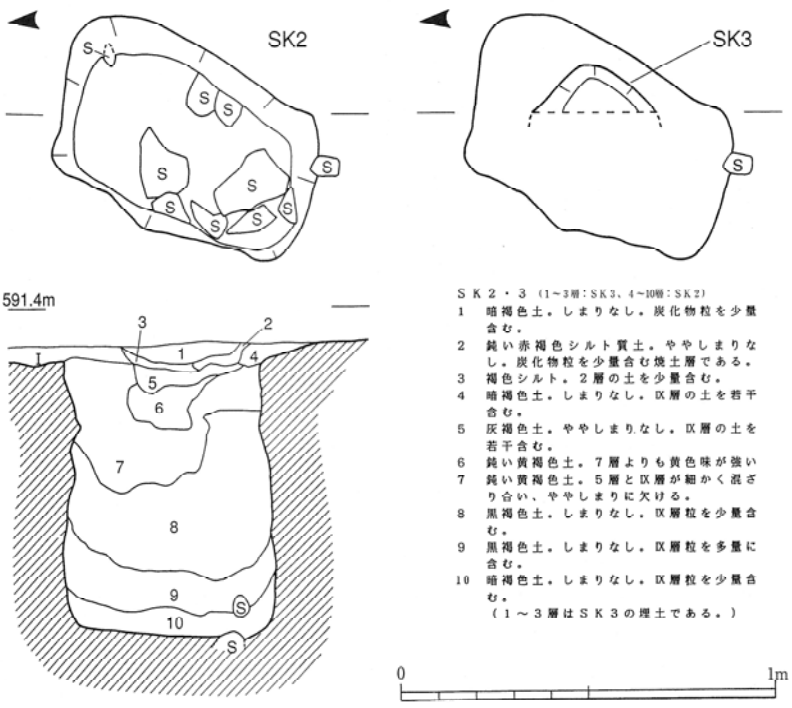
遺物の西側を一次調査の試掘溝、東側を重機の侵入路によって撹乱されていたため、掘り形は明らかにすることができなかった。しかし、ＳＸ６の南北に堆積しているⅥ層がＳＸ６の周囲には存在せず、代わりにしまりに欠ける暗褐色土が堆積していたことから、ＳＸ６はⅥ層を掘り抜いてⅦ層上部まで掘り込まれた土坑であったと推定される。土坑底部と遺物の間にも暗褐色土が堆積していることから、土坑掘削後底部から20cm程を埋め戻した段階で土師器などを据え、その後同質の埋土で一気に埋め戻したのであろう。土坑の規模や平面形は不明であるが、遺物を中心として南北90cmの範囲でⅥ層が認められないので、少なくとも底部の１辺は90cm以上あったと推定される。骨片などは出土していないが、遺物の出土状況などから土壙墓の可能性がある。

ＳＫ２・３

一次調査時に検出されたため、試掘溝によって西半分が失われてしまった。出土遺物がなく詳細な構築時期などは不明である。ただし、Ⅰ・Ⅱ層を掘り込んでいることから近世、あるいはごく最近の構築であるということは推定される。

ＳＫ２は確認面・底面ともに平面形隅丸長方形で、規模は確認面で長軸160cm、短軸100cm、底面で長軸130cm、短軸75cm、掘り方は深さ150cmの箱形である。覆土は６層に分けられるが、上位の鈍い黄褐色土と下位の黒褐色土に２大別できる。いずれもしまりに欠け、人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物はないが、底面から径40cmの礫が２点と径10～20cmの礫が３点出土した。土坑の形状から近世の土壙墓の可能性がある。

ＳＫ３はＳＫ２の上部に重複して検出された。覆土に焼土が堆積する浅い皿状の土坑である。



第８図　ＳＫ２・３実測図

4．遺物

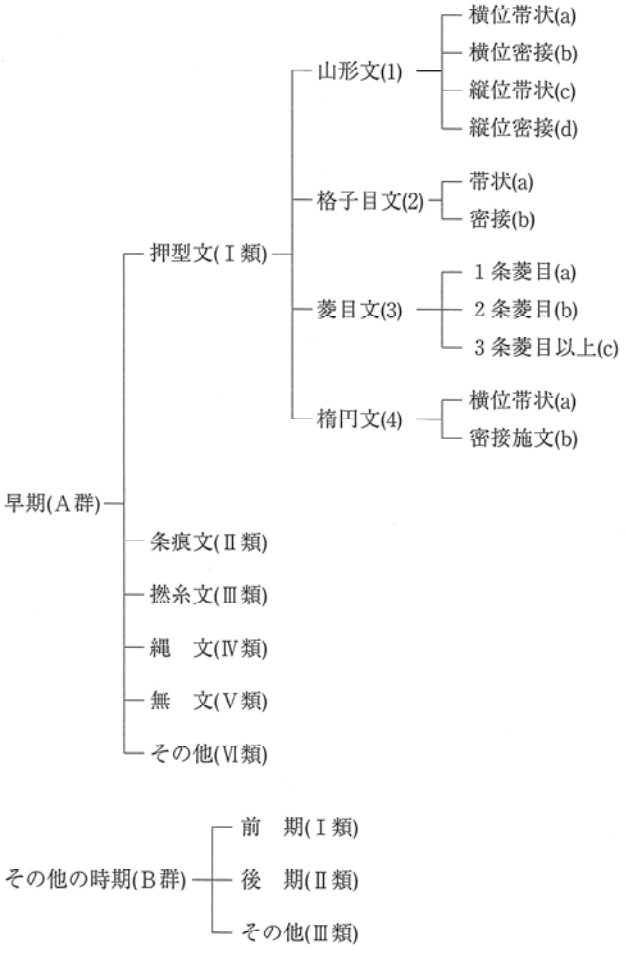
A．縄文時代の土器（図版12～19・27～31・46～52）

(1) 概略

当遺跡からは、大田切川火山灰上位のⅠ～Ⅲ層から500点余り、赤倉火砕流堆積物下位のⅦ～Ⅸ層から1,300点余りの都合1,800点余の縄文土器が出土している。それらはほとんどが深鉢形土器で、出土は、平面的には発掘区全体にわたって認められるが、南側の2～4H・Iに過半数が集中している。層位的には上層に当たるⅠ層～Ⅵ層からが約20%、下層に当たるⅦ層上位～Ⅸ層からが約80%と下層が圧倒的に多数を占めており、中でもⅦ層下位からの出土が約35%と最も多い。時期的には早期～後期に比定されるものが出土しているが、その内訳は早期が約90%を占め、前期～後期は残りの10%にすぎない。早期の中でも押型文土器が約80%を占めて他を圧倒している。

(2) 分類と記述

分類は第9図のように早期（A群）とそれ以外の時期（B群）に大別し、A群は、文様で押型文（Ⅰ類）・条痕文（Ⅱ類）・撚糸文（Ⅲ類）・縄文（Ⅳ類）・無文（Ⅴ類）・その他（Ⅵ類）に6類別した。そして、押型文は山形文(1)・格子目文(2)・菱目文(3)・楕円文(4)に細別し、さらに山形文は横位帯状(a)・横位密接(b)・縦位帯状(c)・縦位密接(d)、格子目文は帯状(a)・密接(b)、菱目文は1条菱目(a)・2条菱目(b)、3条菱目以上(c)、楕円文は横位帯状(a)・密接施文(b)というようにそれぞれ施文技法で再細別した。B群は前期（Ⅰ類）・後期（Ⅱ類）・その他（Ⅲ類）というように時期によって類別した。全体の記述は地点別と層位ごとのまとまりを重視した（第10図）。すなわち、発掘区の中で丘陵北斜面の標高593.5mライン以下をA区、標高593.5m～594.5mの丘陵平坦面をB区、丘陵南斜面の標高593.5mライン以下をC区として、それぞれの区域内出土の土器を層位ごとに記述し、図版もそのような意図で作成した。層位区分



第9図　土器分類

は、A・B区では基本層序に従いⅠ～Ⅸ層とし、C区は沢地で基本層序を対応させるには無理があるため①～⑧層という独自の層位区分を用いた。なお、赤倉火砕流堆積物（約5,300年前)に相当するⅥ層（A・B区）または④層（C区）より上位で前期中葉の有尾式比定よりも古い土器が出土している場合は、参考資料として掲載した(註1)。個々の土器に対する記述は、出土地点・分類・時期・胎土・焼成などを対象に行なった。

(3) 包含層出土の土器（図版12～19・27～31・46～52）

a．A区

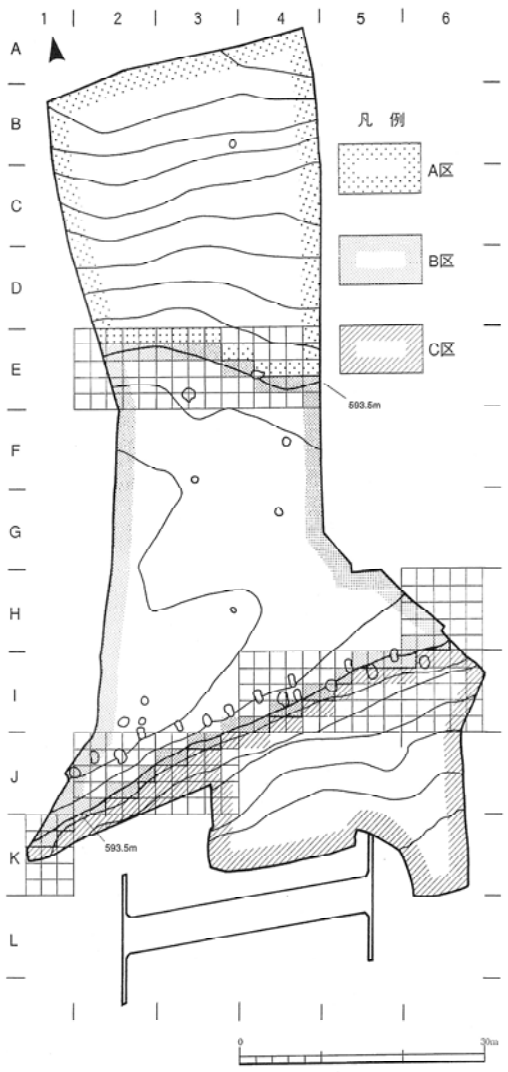
Ⅱ層（図版12－1、図版46）

B群Ⅲ類 (1)　4D23から出土している。2単位の橋状把手を持つ深鉢。口縁部は無文帯で頸部に並行沈線がめぐり沈線間に同一工具による刺突が加えられている。胴部及び橋状把手部分には原体Lの撚糸文が縦方向に施文されている。中期末葉に比定され、胎土中に凝灰岩(註2)と角閃石を含み、焼成は良好で器壁は9㎜と厚めで、内外面にスス状炭化物が付着している。

Ⅶ層上位（図版12－2～9・46－2～6）

押型文土器のほかに早期末葉・前期初頭の土器が出土している。押型文土器は、山形文と楕円文が認められ、焼成が良好で他の土器と比べて器壁が薄い。

A群Ⅰ類1a (2)　2C3から出土している。胎土中に角閃石を含み焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。



第10図　A～C区設定図

A群Ⅰ類1b (3)　2Cから出土している。胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好で器壁は4㎜と薄い。

A群Ⅰ類4b (4)　3B20から出土している。口径17㎝余りと推定される。胎土に角閃石・繊維を含み、焼成は良好で、外面にスス状炭化物が付着している。

A群Ⅱ類 (5･6)　共に4E13から出土している。胎土中に5は繊維、6は凝灰岩と繊維を含み、器壁は、5は9㎜、6は10㎜と厚い。早期末に比定される。

B群Ⅰ類 (7～9)　7は4C17、8・9は4C23から出土している。7・9は口縁部に「D」字状の刺突が2列めぐり、胎土に繊維を含んでいる。出土地点が近接していることや同タイプであることから同一個体の可能性がある。器壁は、9が9㎜と厚い。8は胴下部の破片で原体LRの縄文が施文されており、胎土中に凝灰岩と礫を含む。いずれも前期前葉に比定されるものと考えられる。

(註1) この報告は、発掘者と報告者が異なるため、報告者は発掘調査において個々の遺物がどのような出土状況であったかは把握していない。それゆえ、このような措置をとった。

(註2) 本遺跡および近接する大堀遺跡（立木・寺崎ほか1996）から出土する押型文土器を中心に、胎土中に軟質な白色の砂礫がよく含まれている。この砂礫については凝灰岩ではないかと言われているが、まだ特定するに至っていない。今回は、「白色の砂礫」は適当ではないと考え、あえて「凝灰岩」という語句を用いた。今後、この軟質な白色の砂礫については、機会を得て特定していきたい。

Ⅶ層下位（図版12－10～15、図版46）

出土した土器は全て早期前半の土器で、無文土器も押型文土器に伴うものと考えられる。胎土中に凝灰岩を含むものや焼成が良好なものが多く、スス状炭化物の付着が目立つ。押型文土器は、横位・縦位・密接といった違いはあるが、いずれも山形文である。

A群Ⅰ類1a（10･11）　10は3D17、11は4E14から出土している。10は口縁の内面にも横位帯状の山形文が施文されており、長野県の樋沢式や岐阜県の沢式との関連がうかがわれる。共に胎土に凝灰岩を含むが、11はその含有が特に多い。器壁は10が5㎜と薄い。11の外面にはスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類1b（12･13）　12は2C1、13は3D23から出土している。12は胎土中に石英を含み、焼成良好である。13は胎土中に凝灰岩を含み、同様に焼成は良好である。外面にスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類1d（14）　3E2から出土している。胎土中に凝灰岩を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。内外面にスス状炭化物が付着している。

A群Ⅴ類（15）　2B25から出土している。胎土中に赤礫と凝灰岩を含み、焼成は良好である。外面にスス状の炭化物が付着している。

Ⅷ層（図版12－16～19、図版46）

横位帯状に施文された山形の押型文が主体で、胎土中に凝灰岩を含むものが目立ち、器壁は5㎜余りのものが多い。

A群Ⅰ類1a（16～18）　16は2D8、17は2E4、18は4E14から出土している。16・17は胎土に凝灰岩と石英、18は凝灰岩を含む。焼成は16が良好で、器壁は16・17が5㎜と薄い。18の外面にはオコゲ状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類2b（19）　4C3から出土している。胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好、器壁は5㎜と薄い。外面にスス状炭化物が付着している。

b．B区

Ⅱ層（図版12－25・図版13－20～37、図版46・47）

2･3H、3･4Gを中心に中・後期の土器が出土している。中期は後葉以降のもの、後期は前葉でも中葉に近いものであろう。胎土中に凝灰岩が混じるものがほとんどで、焼成も良好なものが多い。器壁は概して厚いものが目立つ。

B群Ⅱ類（20～27）　20は2E23、21は4G1、22は4G3、23は4G8、24は4G10、25は2･3H、26は3H23、27は4K12から出土している。20は無文の胴下半部で、底径10㎝を測る。胎土中に凝灰岩を含み、焼成は良好である。外面にはスス状炭物が付着している。21は口縁部が無文帯で頸部に平行沈線がわずかに見られる。胎土に凝灰岩を多く含み、焼成は良好である。外面にスス状炭化物が付着している。22～24は、原体Lの撚糸が施文されている。胎土に凝灰岩を含んでおり、23･24は多量である。器壁はやや厚く、焼成は23が良好である。22は外面にスス状炭化物が付着している。25は器形全体が把握できる注口土器で、器高9.2㎝、底部の長径12.5㎝・短径6.2㎝を測る。平面形は長円形で、断面形は、長軸方向は体部全体が丸みを帯びたひしゃげた壷形、短軸方向はなで肩状の壺形を呈する。注口部は直立気味の鋭角に立ち上がる。口縁部は短く外反し、長軸方向の前方部に2か所、後方部に1か所孔が穿かれており、それらの付近から口縁を縦断する形で橋状把手が付けられていた痕跡がうかがえる。文様は、よく研磨された器面に2本ないしは3本一組の沈線で、体部全体にどちらかといえば横割り付けの曲線文や渦巻文が施文され

ている。底部には網代痕が認められる。胎土中には凝灰岩を含み、焼成は良好で、器壁は4㎜と出土土器の中では最も薄い部類に含まれる。26は幅広の沈線で区画された区画内に原体LRの細かい縄文が施文され、それ以外はていねいに摩り消され、研磨されている。断面の傾きから注口土器になる可能性もある。胎土中に凝灰岩を含み、焼成は良好で器壁は9㎜と厚い。27は無文帯の直下に刻目が施された微隆帯が添付され、その下位は単沈線で施文されている。後期前葉に比定されるものと考えられる。

B群Ⅲ類（28～37） 28は4F18、29は3G2、30は3G12、31～33は2H4、34は2H5、35は2H19、36は3H2、37は3H18から出土している。出土地点からみて31～34は同一個体と考えられる。30は胴部が張る甕状を呈し、頸部には2条の沈線がめぐる。原体LRの縄文が縦方向に施文される。胎土には角閃石や凝灰岩を含み、焼成は良好である。外面にスス状炭化物が付着している。31～34には30と類似する原体LRの縄文が施文されており、胎土も30と同様に凝灰岩と角閃石を含んでいる。焼成なども類似することから出土地点はやや離れているが、同一個体の可能性がある。28・29・35～37も施文されている縄文・胎土・焼成などが類似する土器である。29の外面と36の内面にはオコゲ状炭化物が付着している。中期後葉～後期前葉に比定されるものと考えられる。

Ⅶ層上位（図版13－38～図版14－77、図版19－319～321、図版47・48）

2·3Ⅰ、3·4Hといった発掘区の南側で過半数以上が出土し、時期的には早期の押型文土器およびそれに伴うと考えられる土器が大半を占める。胎土には凝灰岩が含まれるものがあいかわらず目立ち、焼成は良好なものとそうでないものが相半ばしている。器壁は押型文土器を中心に薄いものが目立ち、炭化物の付着が認められるものは少ない。

A群Ⅰ類1a（38～49） 38は2E25、39は4G16、40は3H24、41は4H9、42は3Ⅰ5、43・44は3Ⅰ6、45は3Ⅰ9、46は3Ⅰ21·22、47・48は4Ⅰ1、49は5Ⅰ11から出土している。44には円形の刺突が加えられている。全ての胎土に凝灰岩が含まれており、中でも40・46～48は多い。ほとんどが焼成良好で、器壁も薄い。42の外面にオコゲ状炭化物、45の外面にスス状炭化物がそれぞれ付着している。

A群Ⅰ類1b（50～53） 50は4H11、51は4H13、52は2Ⅰ14、53は2Ⅰ15から出土している。A群Ⅰ類1aと同様に全ての胎土に凝灰岩が含まれており、特に50は多い。焼成は50のみが良好である。器壁は総じて薄い。51の内外面にはスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類1c（54） 尖底の底部で、4H12から出土している。胎土に凝灰岩と石英を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。

A群Ⅰ類1d（55） 54と同様に尖底の底部で、4H11から出土している。胎土中に凝灰岩を多く含み、焼成良好で、器壁は5㎜と薄い。

A群Ⅰ類2a（56） 4Ⅰ3から出土している。胎土に凝灰岩を多く含む。

A群Ⅰ類2b（57） 2Ⅰ14から出土しており、焼成は良好である。

A群Ⅰ類3（58・59） 58は4H15、59は2Ⅰ13から出土している。58の胎土には石英・雲母・角閃石、59の胎土には凝灰岩が含まれており、焼成は共に良好で、器壁も薄い。59の外面にはスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類4b（60～65） 60～64は3H24、65は2Ⅰ9から出土している。60～64は同一グリッドから出土しており、粗雑な施文で雰囲気も似ていることから同一個体の可能性が高い。いずれも胎土中に凝灰岩を多く含み、62～64の焼成は良好で、器壁は総じて薄い。外面にはスス状炭化物が付着している。65は

胎土に凝灰岩を含む。

A群Ⅱ類（66～69） 66は3G1、67は4G1、68は2Ⅰ14、69は2Ｊ2から出土している。いずれも胎土に繊維を含み、焼成は67を除いては良好ではなく、器壁も厚い。67と69は底部近くの破片である。早期末葉に比定される。

A群Ⅳ類（70～72、319～321） 70は5H11、71は5H22、72は3Ⅰ4、319・320は4H18から出土している。押型文土器に伴う縄文施文の土器と考えられ、319～321は表裏縄文土器である。70・71は胎土に角閃石と凝灰岩、72は多くの石英、319～321は角閃石と凝灰岩を含む。

A群Ⅵ類（73･74） 73は3G13、74は2Ⅰ14から出土している。共に口縁部およびその付近に刺突文が施文されている。73は下方から、74は右横方向から刺突が加えられている。73は胎土に雲母、74は石英が含まれており、器壁は薄い。74は焼成も良好である。

B群Ⅰ類（75～77） 75は2F3、76は2Ⅰ24、77は3Ⅰ16から出土している。75は外面に縄文、内面に条痕文が施文され、胎土に繊維を多く含んでいる。前期初頭に比定されるものと考えられる。76は無文地上の口縁部に2本1組の沈線で直線状・放射状・渦巻状の文様が施文されている。胎土中に角閃石を多く含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。内面にオコゲ状、外面にスス状炭化物が付着している。文様構成から前期中葉に比定されるものと考えられる。77は底部近くの破片で、全面に縄文が施されている。胎土に繊維と石英を含み、器壁は9㎜とかなり厚い。

Ⅶ層下位（図版14－78～97・図版15・図版16－151～171、図版48・49）

Ⅶ層上位と同じく2･3Ⅰ、3～5Hといった発掘区の南側で過半数以上が出土している。出土土器は、早期の押型文土器およびそれに伴うと考えられる早期の土器が大半を占め、その割合はⅦ層上位よりも高い。胎土には相変わらず凝灰岩を含むものが多く、過半数をはるかに越えて認められる。焼成は、良好なものとそうでないものが相半ばするが、押型文土器では良好なものが過半数を越える。器壁は全体としては薄くもなく厚くもないが、押型文土器では薄いものが多数を占めている。炭化物の付着は少なく、付着していてもスス状炭化物がほとんどである。

A群Ⅰ類1a（78～94） 78は3E14･15、79は3G18、80は2H9、81は2H18、82は4H13、83～85は5H19、86は5H19･25、87は5H24、88は2Ⅰ13、89は3Ⅰ1、90は3Ⅰ7、91・92は4Ⅰ7、93は4Ⅰ8、94は5Ⅰ4から出土している。80は10と同じく内側にも横位帯状の山形文が施文されている。89・90の無文帯部分には山形文に沿って2条の刺突が加えられている。83と84は同一個体である。79・80・90・93・94を除くその他は、胎土中に凝灰岩を含んでいる。中でも89・92は多量である。80は角閃石を多量に含んでいる。焼成は良好なものが多い。器壁は厚いもので9㎜余り、薄いもので4㎜余りであるが、6～7㎜のものが目立つ。炭化物が付着しているものは少なく、報告資料では80・82～84・86の5点にすぎない。

A群Ⅰ類1b（95～102） 95は4G11、96は4G13、97は4H7、98は2Ⅰ13、99・100は2Ⅰ18、101は3Ⅰ14、102は5Ⅰ4から出土している。100は平行状線文的であるが、微妙な山形文である。焼成良好なものが少ない点を除けば、胎土、器壁の厚さ、炭化物の付着などの特長はA群Ⅰ類1aと類似する。

A群Ⅰ類1c（103～107） 103は3G23、104は2H25、105は3H21、106は2Ⅰ17、107は2Ｊ4から出土している。105の胴部下半には条痕状の器面調整が認められる。106は縦位だけではなく横位の山形文も見られる。103・105は胎土中に凝灰岩を多く含む。その他はA群Ⅰ類1bと同様である。

A群Ⅰ類1d（108） 2H18から出土している。胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好である。

A群Ⅰ類1（109）　3Ⅰ3から出土している。薄く横位の山形文が認められるが、帯状なのか密接なのかは不明である。

A群Ⅰ類2a（110～112）　110は2F23、111・112は2Ⅰ23から出土している。110は縦位、111・112は横位の格子目文である。111・112は凝灰岩を多く含み、111は焼成が良好である。111・112の外面にはス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類2b（113·114）　113は3G14､114は2H14から出土している。いずれも胎土に凝灰岩を多く含む。

A群Ⅰ類3a（115～119）　115は4G12、116は3H8、117は4H6､118は4H25､119は3Ⅰ7から出土している。116・117・118は密接施文、115・119は帯状施文である。116・117は胎土中に石英を多く含む。いずれも焼成は良好で、器壁も薄い傾向にある。116・118は外面にス状炭化物､115は内面にオコゲ状・外面にス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類3b（120）　4G24から出土している。帯状施文である。胎土に凝灰岩と石英を含む。

A群Ⅰ類3c（121·122）　121は2Ⅰ19、122は2Ⅰ20から出土している。121は密接施文で、胎土に凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好である。内面にス状炭化物が付着している。122は器壁が5㎜と薄く、外面にス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類3（123～127）　123は2E13、124は4G13、125は4G23、126は5H21、127は4Ⅰ5から出土している。123・125·127は密接施文、124・126は帯状施文と考えられる。123・125の胎土には凝灰岩、126・127の胎土には石英が含まれている。焼成はいずれも良好である。123・125・126・127の外面にはス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類4a（128～131）　128～130は3G18、131は3Ｊ2から出土している。128～130は同一個体と考えられる。胎土は、129・130は石英と雲母、131は凝灰岩を含んでいる。焼成は129・130が良好である。器壁は､131が5㎜と薄い。129・130の外面にはス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類4b（132～140）　132・133は2H25､134は3H19、135は3H22､136は5H16､137は2Ⅰ5､138は2Ⅰ13､139·140は3Ⅰ3から出土している。133・138の口唇部にも楕円文と考えられる押型文が施文されている。135·139は粗雑な施文である。133以外の胎土には凝灰岩の混入が認められ、中でも134は多い。133・134・137の焼成は良好である。器壁も全体的に薄く、中でも138は5㎜と薄い。132・137の外面にはス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類（141·142）　141は4H23､142は2Ⅰ23から出土している。細かい点列が帯状に2～3条施されている。押型文とするか否かで迷ったが、一応押型文と考えておきたい。両者とも凝灰岩を多く含み、142は器壁が9㎜と厚い。

A群Ⅲ類（143～155）　143は3H23､144は3H24､145は3H25､146は4H16､147は4H17､148は5H13､149～151は3Ⅰ2､152は3Ⅰ4､153～155は3Ⅰ7から出土している。143～145·147·149·151·154·155は原体R、146·153は原体Lである。胎土は凝灰岩と角閃石を含むものが多数を占め、148は凝灰岩が多く混入している。焼成は良好なものが少なく、143·149·151のみが良好である。器壁は7㎜以上のものが目立ち、146·148·150は9㎜と厚い。143の内面と145～147·152·154の外面にはス状炭化物が付着している。

A群Ⅳ類（156～161）　156·157は3H24､158·159は4H15､160は5H3､161は5H12から出土している。156と157は表裏縄文で、156の原体はLR､157の原体はRLである。158と159は同一個体で、原体はLRである。胎土には凝灰岩と角閃石の混入が目立ち、158は凝灰岩、159は角閃石が多い。焼成は156·157

のみが良好である。器壁は厚めのものが目立つ。

A群V類（162～168）　162は2F14、163・164は2I8、165は2I14、166は2I18、167は3I23、168は5I7から出土している。ほとんどの胎土に凝灰岩が含まれており、162～165は多い。焼成は168のみが良好である。器壁は薄いものと厚いものが相半ばしているが、168は5㎜と薄い。162の外面にはオコゲ状炭化物、163～165の外面にはスス状炭化物が付着している。

B群I類（169～171）　169は4G19、170・171は5H13から出土している。169は口縁に2条の沈線がめぐり、沈線中に刺突が加えられ、それ以下は縄文？が施文されている。170・171は同一個体である。170は全面縄文のほかに微隆帯がめぐり、171は全面に縄文が施文されている。169は胎土には凝灰岩が多く含まれるほか石英や繊維も混入している。170・171は169と同じく凝灰岩を多く含むほかに繊維の混入も認められる。焼成はいずれも良好であり、器壁は9～10㎜と厚い。169の外面にはスス状炭化物が付着している。170・171は微隆帯を持つことから前期初頭～前葉に比定されるものと考えられる。169も口縁にのみ文様帯を持つこと、胎土や器壁の厚みが170・171と近似することからほぼ同時期と考えられる。

Ⅷ層（図版16－172～203・図版17－204～222、図版49・50）

Ⅶ層上位・Ⅶ層下位と同じく2・3I・3H・5Hといった発掘区の南側からの出土が目立つ。中でも3Hからの出土が突出している。出土土器は押型文土器とそれに伴う土器がほとんどを占めており、押型文土器においては、山形文が圧倒的に多く、次いで楕円文・菱目文の順となっている。胎土は相変わらず凝灰岩や角閃石の混入が目立ち、焼成は良好なものが多い。器壁の状況もⅦ層と同様であるが、炭化物の付着はⅦ層よりも目立つ。

A群I類1a（172～181）　172は3H4、173は3H5、174は3H9、175は3H12、176は3H19、177は5H21、178は2I10、179は2I12、180は3I25、181は5I5から出土している。173は菱目文の可能性もある。176・181は凝灰岩を多く含んでいる。焼成は多くが良好で、172・178は外面、175は内面にスス状炭化物が付着している。

A群I類1b（182～184）　182は2J4、183は2J10、184は3H2から出土している。胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好で、器壁は4㎜と極めて薄い。内面にはスス状炭化物が付着している。

A群I類1c（185・186）　185は3H18、186は4H4から出土している。185は胎土に凝灰岩・石英・角閃石を含み、焼成は良好である。186は胎土に凝灰岩を含み、内外面にスス状炭化物が付着している。

A群I類1d（187・188）　187は3H9、188は2G19から出土している。187は凝灰岩を多く含み、器壁も5㎜と薄い。188は焼成良好で、器壁は4㎜と極めて薄い。

A群I類1（189・190）　189は3H21、190は5H23から出土している。190は施文が明瞭ではないが、焼成は良好である。

A群I類2a（191）　3H11から出土している。胎土に凝灰岩を多く含む。

A群I類2b（192・193）　192は3H8、193は2I23から出土している。192は胎土に凝灰岩を多く含み、外面にスス状炭化物が付着している。193は縦位の施文である。

A群I類3c（194）　4H4から出土している。帯状の施文である。凝灰岩を多く含んでいる。

A群I類3（195～198）　195は3G6、196は3H4、197は4H2、198は5H24から出土している。197は帯状施文である。195は胎土中に凝灰岩を多く含む。196・198は焼成良好で、197は器壁が10㎜と極めて厚い。195と196の外面にはスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類4a（199～206）　199・200は2H25、201は3H11、202は3H17、203は5H2、204は5H14、205は5H17、206は3Ⅰ3から出土している。なお、200はⅧ層でも下位からの出土である。すべての胎土に凝灰岩か角閃石が含まれており、焼成は202以外は良好である。器壁はやや厚いものが目立ち、199・204・206の外面にはスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類4b（207）　2H20から出土している。粗雑な施文である。内面にオコゲ状炭化物、外面にスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ（208・209）　208は2Ⅰ8、209は2Ⅰ13から出土している。共に線状圧痕が施された押型文と考えられる。208の胎土は凝灰岩を多く含み、焼成は両者とも良好である。208の口唇部にはスス状炭化物が付着している。

A群Ⅲ類（210・211）　210は3H18、211は3Ⅰ2から出土している。210の原体はL、211の原体はRである。210の胎土には角閃石が多く含まれており、211の焼成は良好である。210の外面にはオコゲ状炭化物、211の外面にはスス状炭化物が付着している。

A群Ⅳ類（212～220）　212は3H4、213は3H18、214は3H23、215は2Ⅰ8、216は3Ⅰ2、217は3Ⅰ3、218は4Ⅰ3、219は4Ⅰ17、220は5Ⅰ2から出土している。212の縄文原体はRL、213・218の縄文原体はLRである。215は撚糸の可能性もある。すべての胎土に角閃石か凝灰岩を含み、焼成は良好なものが多い。器壁は厚めのものが目立つが、215は5㎜、219は4㎜と薄い。215・217の外面にはスス状炭化物が付着している。

B群Ⅰ類（221・222）　221は2H24、222は5H2から出土している。両者とも口縁部と頸部の境界につまみあげたような微隆帯がめぐる。胎土中に凝灰岩と繊維を含むが、221は凝灰岩が多い。器壁は、221は12㎜と極めて厚い。出土層位は異なるが、170・171・221は同一個体と考えられる。

Ⅸ層（図版17－223・224、図版50）

A群Ⅰ類1（223・224）　223は3H12、224は3H16から、ともに発掘限界面であるⅨ層上面に食い込んだ状態で出土している。2点とも文様が不鮮明である。胎土に凝灰岩を多く含み、器壁は、223は7、224が6㎜とほぼ同じ厚さである。223の外面にはスス状炭化物の付着が認められる。同一個体の可能性が高い。

Ⅱ・Ⅳ～Ⅵ層（図版17－225～234、図版19－314・315、図版50・52）

赤倉火砕流堆積物層（Ⅵ層）よりも上位で出土した前期中葉以前の土器をとりまとめた。これらの土器はすでに元位置が失われているものと考えられる。

A群Ⅰ類1a（225・226）　225は一次調査23トレンチのⅤ層、226は5H25のⅥ層から出土している。胎土に角閃石や凝灰岩を含むが、226は石英が多い。焼成は両者とも良好で器壁もどちらかといえば薄い。

A群Ⅰ類1d（227～229）　227は4Ⅰ14のⅣ層、228は3Ⅰ5のⅤ層、229は5Ⅰ6のⅥ層から出土している。いずれも胎土に凝灰岩や石英を含み、焼成は良好である。227は、焼成は良好で、器壁は薄い。228は、器壁が5㎜と薄い。

A群Ⅰ類3c（230）　一次調査2トレンチのⅥ層から出土している。胎土に石英と凝灰岩を含み、焼成は良好である

A群Ⅰ類3（231）　4Ⅰ5のⅡ層から出土している。胎土に石英を含み、焼成良好で、器壁も5㎜と薄い。

A群Ⅱ類（232・233）　232は3Ⅰ11のⅣ層、233は2Ｊ2のⅥ層から出土している。条痕が施されており、232は内外面に認められる。両者とも胎土に繊維を含み、焼成は良好である。器壁は両者とも厚く、232は

10㎜、233は13㎜を測る。

B群Ⅰ類（234・314・315）　234は4Ⅰ4のⅡ層、314・315は一次調査のさい7トレンチから出土している。234は、原体LRの縄文が体部だけではなく口唇部にも施文されている。胎土に繊維を含み、焼成良好で、器壁も4㎜とかなり薄い。木島式系の土器の可能性もあり、前期初頭に比定される。314・315は同一個体である。口縁部には半截竹管でコンパス文が施文され、口縁部と胴部の境界には同一工具で平行沈線と爪形文がめぐっている。胴部は羽状縄文である。胎土には繊維と凝灰岩を含み、焼成は良好である。器壁は9㎜と厚めであるが、内面の整形は丁寧である。内外面にスス状炭化物が付着している。前期中葉に比定される。

c．C区

⑤層（図版17－235～253、図版18－254～271、図版50・51）

5J・6Jといった南東側斜面からの出土が目立つ。出土層位は、その多くが⑤層下位である。5K・6Kで前期中葉の土器、6Jで早期末葉の土器が若干出土しているのみでその他は押型文土器およびそれに伴うと考えられる縄文施文もしくは無文の土器などである。押型文土器は山形文のほかに格子目文や楕円文が見られるが、やはり山形文が目立つ。胎土は凝灰岩や角閃石を含むものが多いが、それらのほとんどは押型文土器である。焼成は良好なものが多く、器壁は6～7㎜のものが主体である。

A群Ⅰ類1a（235～244）　235は5J16、236は5J20、237は6J7、238・239は6J13、240は6J17・22、241は6J18、242は5K1、243は6K4、244は6K12から出土している。240は口唇部と口縁に1条づつの山形文が施文され、胎土には凝灰岩を含み、器壁は3㎜と極めて薄い。235・237～239・241は胎土に凝灰岩を多く含み、237・238の焼成は良好である。236は胎土に凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好で、内外の器面整形は丁寧である。242は胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好で、内外面にスス状炭化物が付着している。243は胎土に凝灰岩と角閃石を多く含み、焼成は良好で、外面にスス状炭化物が付着している。244は胎土に凝灰岩を含み、器壁も9㎜と厚い。出土層位は241は⑤層上位、それ以外は⑤層下位である。

A群Ⅰ類1b（245～248）　245は5J21、246は6J13、247は6J13・22、248は6K7から出土している。245は胎土に多くの角閃石と凝灰岩を含み、焼成は良好である。246は胎土に凝灰岩を多く含み、焼成は良好である。247は胎土に凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。248は胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好で、外面にスス状炭化物が付着している。出土層位は、245・246は⑤層下位、247・248は⑤層上位である。

A群Ⅰ類1d（249～252）　249は6J21、250は4J19、251は5K4、252は4J20から出土している。249は胎土に多くの凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。250は胎土に多くの凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好である。251は胎土に凝灰岩・石英・雲母を含み、焼成は良好である。252は胎土に凝灰岩を多く含む。出土層位は、249・250は⑤層下位、251・252は⑤層上位である。

A群Ⅰ類2b（253）　5J16から出土している。胎土に雲母を含み、焼成は良好で、内面にオコゲ状炭化物が付着している。出土層位は⑤層下位である。

A群Ⅰ類4a（254～257）　254は4J25、255は5J19、256は6J13、257は6K4から出土している。254・256は胎土に凝灰岩を多く含み、254は外面にスス状炭化物が付着している。255は胎土に凝灰岩・角閃石・石英を含む。257は胎土に石英と凝灰岩を含み、器壁は9㎜と厚く、外面にスス状炭化物が付着している。出土層位は255は⑤層上位、256・257は⑤層下位である。

A群Ⅰ類（258）　6Ｊ16から出土している。尖底の底部である。残存部分は無文であるが、押型文土器の底部と推定される。胎土に凝灰岩と石英を含む。出土層位は⑤層下位である。

A群Ⅱ類（259）　6Ｊ18から出土している。内外面に条痕文が施文され、胎土に繊維が含まれている。出土層位は⑤層下位である。

A群Ⅲ類（260）　5Ｊ18から出土している。外面に原体Ｌの撚糸、内面に原体RLの縄文が施文されている表裏縄文土器である。胎土に角閃石を含み、焼成は良好で、内外面にスス状炭化物が付着している。出土層位は⑤層下位である。

A群Ⅳ類（261～263）　261は5Ｊ18、262は6Ｊ13、263は4Ｋ3から出土している。261は胎土に角閃石を含み、焼成は良好である。262は胎土に凝灰岩・石英・角閃石を含み、外面にスス状炭化物が付着している。263は胎土に角閃石と凝灰岩を含み、焼成は良好である。出土層位はいずれも⑤層下位である

A群Ⅴ類（264･265）　264は5Ｋ4、265は6Ｋ4から出土している。264は口縁がやや外反し、口径約26㎝と推測される。胎土に赤礫と凝灰岩を含み、焼成は良好で、器壁は4㎜と薄い。265は胎土に凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好である。共に押型文土器に伴う無文土器と考えられる。出土層位は264は⑤層上位、265は⑤層下位である。

B群Ⅰ類（266～268）　266･267は5Ｋ3、268は6Ｋ9から出土している。266は原体RLの縄文が施文されている。胎土に繊維を含み、焼成は良好で、器壁は10㎜と厚い。267は原体RLの縄文が施文されている。胎土に白砂と繊維を含み、焼成は良好であるが、器壁は11㎜と厚い。外面にスス状炭化物が付着している。267は266および層位は異なるが313と同一個体と考えられる。268は羽状縄文が施文され、胎土に繊維と赤礫を含む。焼成は良好で、外面にスス状炭化物が付着している。出土層位は268が⑤層下位である。いずれも前期中葉に比定されるものと考えられる。

B群Ⅲ類（269～271）　時期が特定できないものを一括した。269は4Ｊ19、270は5Ｊ16、271は6Ｊ7から出土している。269は無文で、胎土に小礫・凝灰岩・繊維を含み、焼成は良好である。胎土に繊維が含まれていることから前期中葉以前に比定される。270･271は共に胎土に角閃石と凝灰岩を含む。271は原体LRの縄文が施文されている。出土層位は269が⑤層上位、270･271は⑤層下位である。

⑥層（図版18－272～275、図版51）

押型文土器と前期中葉の土器が混在して出土しているが、その出土量は決して多くはない。層厚も薄くＡトレンチ南側では確認されていない。

A群Ⅰ類1b（272）　6Ｋ4から出土している。胎土に凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。

A群Ⅰ類4a（273）　5Ｊ21から出土している。口縁がやや外傾し、口径は約18㎝と推定される。胎土に凝灰岩を含む。外面にオコゲ状炭化物が付着している。

B群Ⅰ類（274･275）　274は4Ｋ12、275は6Ｋ1から出土している。274は平底の底部で、底径約16㎝と推定される。原体RLの縄文が施文され、胎土に繊維を含み、焼成は良好である。出土層位やグリッドが異なるが、266･267･311と同一個体の可能性が考えられる。前期中葉に比定される。275は原体RLの縄文が施文され、胎土に繊維と凝灰岩を含み、焼成は良好である。

⑦層上位（図版18－276～290、図版19－291～310、図版51・52）

丘陵南斜面の3Jからの出土が目立つ。出土土器は早期と前期に2分されるが、大半が早期の土器で、押型文土器とそれに伴うと考えられる無文土器が多くを占める。押型文土器は、山形文が中心であり、その他では格子目文・菱目文・楕円文が認められる。胎土は、押型文土器およびそれに伴出すると考えられる土器には凝灰岩や角閃石が多く、早期末～前期の土器には繊維が目立つ。焼成は良好なものが大半で、器壁も薄いものが過半数を占める。

A群Ⅰ類1a（277） 3J11から出土している。胎土に角閃石・石英・凝灰岩を含み、焼成は良好である。

A群Ⅰ類1b（276・278・279） 276は3J5、278は5Ⅰ12、279は3J10から出土している。276は胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。278は胎土に凝灰岩を多く含み、焼成は良好である。279は胎土に凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄い。内外面にスス状炭化物の付着が認められる。

A群Ⅰ類1d（280） 3J16から出土している。胎土は石英を多く含み、焼成は良好である。外面にスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類2a（281） 3J12から出土している。胎土は、凝灰岩と石英を含み、器壁は5㎜と薄い。

A群Ⅰ類3c（282） 3J16から出土している。胎土に礫を含み、焼成は良好である。器壁は5㎜と薄い。

A群Ⅰ類4a（283） 3J8から出土している。胎土は凝灰岩を含み、焼成は良好である。

A群Ⅱ類（284・285） 284は5Ⅰ17、285は3J9から出土している。共に表裏に条痕が施され、胎土は繊維と凝灰岩・石英を含み、器壁は、284が9㎜、285が12㎜と厚い。早期末葉に比定される。

A群Ⅴ類（286・287） 286は3J5、287は3J10から出土している。押型文土器に伴う無文土器と考えられ、胎土中に凝灰岩・角閃石・石英を含んでいる。焼成は良好である。

B群Ⅰ類（288・289） 288は3J8、289は4J4から出土している。288は原体LRの縄文が施文され、胎土に多くの凝灰岩と繊維を含み、焼成は良好である。器壁は9㎜と厚く、外面にスス状の炭化物が付着している。289は丸底状の底部で、縄文が施文され、底部に近い箇所には孔が穿かれている。胎土中に繊維を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜と薄く、内面にはスス状炭化物が付着している。288は前期中葉、289は前期初頭に比定される。

A群Ⅵ類（290） 3J9から出土している。縄文地上に沈線で施文されている。胎土に雲母と石英を含み、焼成は良好である。時期的には早期ではないかと考えられるが、詳細は不明である。

⑦層下位（図版19－291～301、図版51・52）

⑦層上位と同じく3Jからの出土が過半数を占める。全てが早期に比定され、そのほとんどは押型文土器およびそれに伴うと考えられるものである。押型文土器では山形文がほとんどを占める。胎土は凝灰岩を含むものが多く、焼成は大半が良好である。器壁は7㎜前後のものが目立つ。

A群Ⅰ類1a（291～293） 291は5Ⅰ13、292は3J17、293は3J18から出土している。291は胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好で、器面の整形は丁寧である。292は胎土に凝灰岩を多く含み、内面にスス状炭化物、外面にオコゲ状炭化物の付着が認められる。293は胎土中に多量の凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好で、外面にスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類1b（294） 4J8から出土している。胎土に礫を含み、焼成は良好である。

A群Ⅰ類（295・296） 295は3J16、296は3J21から出土している。同一個体で文様構成がある程度把握可能な口縁部～胴部上半にかけての大型破片である。口縁部が外傾して立ち上がり口唇部に面を持つ。口

縁部と胴部上半には山形の押型文が一帯づつ横位帯状に巡り、胴部上半から縦位の帯状山形文が胴下部へと施文されている。口唇部にも山形文が施文されている。胎土には石英を多く含むほか、角閃石や凝灰岩も認められる。焼成は良好である。

A群Ⅰ類2b（297）　3Ｊ17から出土している。胎土に凝灰岩を含み、焼成良好で、器壁は5㎜と薄い。内面にスス状炭化物が付着している。

A群Ⅰ類3（298）　3Ｊ19から出土している。鮮明ではないが菱目文が認められる。胎土中に凝灰岩と角閃石を含み、焼成は良好である。外面にスス状炭化物が付着している。

A群Ⅲ類（299）　3Ｊ19から出土している。横位に細かい撚糸が施文され、その下位は縦位の撚糸を施文後粗く磨消している。胎土に凝灰岩を多く含み、焼成は良好で、内外面にスス状の炭化物が付着している。押型文土器に伴うものと考えられる。

A群Ⅳ類（300）　6Ⅰ2から出土している。300は原体LRの縄文が施文されており、胎土に凝灰岩と角閃石が含まれている。器壁は8㎜とやや厚い。押型文土器に伴うものと考えられる。

A群Ⅵ類（301）　4Ｊ2から出土している。口径は14㎝余りと推定される平口縁の深鉢で、器形は口縁が若干内彎して頸部がくびれ、胴部がやや張り出す。文様は単沈線で口唇部に波状文、口縁部にクランク状の平行沈線文が施文され、口縁部の空白部分は櫛歯状工具による刺突文で密に充填されている。胎土には石英と礫を含み、焼成は良好で器壁は5㎜と薄い。関東地方の田戸上層式の系統を引く土器である。

⑦層最下部（図版19－302～310、図版52）

3Ｊ・4Ｊからの出土が目立つ。ほとんどが押型文土器でそれに伴うと考えられる無文土器が若干出土している。胎土は、ほとんどで角閃石の混入が認められる。焼成は良好なものが大半で、器壁も概して薄い。

A群Ⅰ類1a（302～304）　302･303は3Ｊ18、304は4Ｊ6から出土している。302･303は同一個体で、外面にスス状炭化物が付着している。304は胎土に角閃石のほかに凝灰岩を含み、器壁は4㎜とかなり薄い。

A群Ⅰ類1b（305･306）　305・306は4Ｊ9から出土している。同一個体の可能性がある。

A群Ⅰ類1d（307･308）　307は3Ｊ9、308は4Ｊ12から出土している。308は胎土に角閃石のほかに石英を含む。器壁は両者とも5㎜と薄い。

A群Ⅰ類（309）　4Ｊ1から出土している。口縁は無文で、口唇部と口縁下に押型文？が施文されているが、詳細は不明である。胎土は角閃石のほかに凝灰岩を含み、器壁は4㎜とかなり薄い。

A群Ⅴ類（310）　3Ｊ5から出土している。胎土に角閃石のほかに凝灰岩を含む。押型文に伴う無文土器と考えられる。

②・④層（図版19－311～313、図版52）

B区同様に赤倉火砕流堆積物層（④層）よりも上位で出土した前期中葉以前の土器をとりまとめた。

A群Ⅰ類4a（311）　5Ｋ12から出土している。胎土に凝灰岩を含み、焼成は良好である。②層からの出土である。

B群Ⅰ類（312･313）　312は4Ｊ3、313は5Ｋ9、から出土している。312は羽状縄文が施文され、胎土に繊維・礫・石英を含み、焼成は良好である。器壁は4㎜と薄い。313も羽状縄文が施文され、胎土に繊維・白砂・礫を含み、焼成は良好である。器壁は10㎜と厚い。共に④層からの出土である。いずれも前期中葉に比定されるものと考えられる。

（4）遺構出土土器（図版19－316～318、図版52）

ＳＫ27（316）　Ａ群Ⅰ類1に分類される。横位山形文とそれと直行する縦位帯状山形文が施文されている。胎土に凝灰岩と石英を含み、焼成は良好で、器壁は5㎜を測る。外面にスス状の炭化物が付着している。

ＳＫ24（317）　Ｂ群Ⅱ類に分類される。羽状縄文の痕跡が薄く認められる。胎土に石英・凝灰岩・繊維を含み、焼成は良好である。器壁は7㎜を測る。前期中葉に比定される。

ＳＫ33（318）　Ｂ群Ⅱ類に分類される。317と同じく羽状縄文が施文されている。胎土に繊維・石英・礫を含み、焼成は良好である。器壁は6㎜を測る。

Ｂ．縄文時代の石器（図版20～31・53～56）

（1）概略

縄文時代の石器は、下層にあたるⅦ・Ⅷ層と上層にあたるⅠ～Ⅳ層から出土し、一部は南側沢地の①・②・⑤～⑦層から出土した。出土地点は調査区全域にわたるが、分布の中心は各層とも2～4Ｈ・Ｉと5Ｈにある。これは縄文土器の出土地点とよく一致することから、石器の多くは縄文時代早期、中でも押型文土器の時期の所産であると推定される。出土石器の形態・点数などは第1表に示すとおりである。

（2）分類と記述

出土石器の分類は次のとおりである。

石鏃　「矢の先端につける石製の矢じり」（鈴木1991）。平面形で以下のように細分される。

Ａ類：凹基無茎石鏃。平面形が逆ハート形を呈する。抉りが逆「Ｕ」字状のものを1類、逆「Ｖ」字状のものを2類とする。

Ｂ類：凹基無茎石鏃。平面形が逆「Ｖ」字形を呈する。抉りの深いものを1類、浅いものを2類とする。

Ｃ類：凹基無茎石鏃。平面形が基部に比較的浅い抉りをもつ二等辺三角形を呈する。

形態	分類	黒曜石	珪質頁岩	頁岩	珪質凝灰岩	無斑晶質安山岩	チャート	安山岩	砂岩	花崗岩	粘板岩	蛇紋岩	流紋岩	不明	合計
石鏃	Ａ	3													3
	Ｂ	3			1										4
	Ｃ	2													2
	Ｄ	3													3
	Ｅ		1												1
	不明	7													7
両極石器	二極一対	5	9			3									17
	四極二対	8				2									10
石匙			3			1									4
不定形石器	Ａ	1		1										1	3
	Ｇ				1										1
	Ｆ	1													1
	Ｉ	1													1
	Ｊ	10	1												11
筐状石器					6										6
剥片		65	11	19	12	12	2								121
砕片		10													10
打製石斧				2											2
磨製石斧												1			1
磨石類	Ａ							5	1						6
	Ｂ							2							2
	Ｃ								2	1					3
	Ｄ							1	1						2
	Ｅ							2	1						3
	Ｆ							1	1						2
	Ｇ								1		1				2
	Ｈ							2							2
	不明								1						1
特殊磨石	Ａ							3	1						4
	Ｃ							5	2	1					8
	Ｄ							1	2				1		4
礫		4				3	3		1						11
擦切石器									1						1
砥石									2						2
パステル形石製品			1												1
小計		123	26	22	20	21	5	22	17	2	1	1	1	1	262
Ｂ区　層位不明		3	1		2	1		2							9
区・層とも不明		5		(Ⅲ層)1		1	1								8
合計		131	27	23	22	23	6	24	17	2	1	1	1	1	279

第1表　出土石器総計

D類：凹基無茎石鏃。大きく開く脚部が器体の半分の長さを占める。

E類：平基無茎石鏃。平面形が二等辺三角形を呈する。

石匙　「一端につまみ状の突起をもち縁辺を刃部とする石器」（田中1991）。

両極石器　両極に打痕・剥離痕のあるものを両極石器とした。2個1対の極をもつものと4個2対の極をもつものがある。実測図では打点を▲印で示した。

不定形石器　従来「掻・削器類」・「スクレイパー」・「二次加工のある剥片」・「使用痕のある剥片」・「微細剥離のある剥片」・「不定形剥片石器」などといわれている石器を一括し、細分類は（第2表）（高橋1990）に従った。

剥片・砕片　ともに石核からの剥片生産あるいは石器製作の過程などで生じた石のかけらだが、1cm四方未満の大きさのものを砕片として便宜的に区別した。

篦状石器　両面調整あるいは片面調整によって作り出された石器。平面形は上方が狭く、下方が広がるほぼ左右対称をしており、刃部は片刃である。

打製石斧　「礫または大型の剥片を素材とし、大ぶりな成形・調整によって斧形に仕上げられた石器」（藤巻1991）。

磨製石斧　全面を研磨して、斧形に仕上げられた石器。

台石　大形で安定性のある扁平な礫の、1面あるいは両面に凹部などの作業面をもつ石器。

砥石　断面凹状の砥面や溝状の砥面をもつ石器。

磨石類　「素材となる礫（転石）の正面および側縁に磨痕・敲打痕・くぼみ痕を有するもの」（北村1990）。使用痕などの組み合わせで以下の8類に細分される。分類は（高橋1990）をもとに加筆した。

A類：磨痕

B類：磨痕＋凹痕

C類：磨痕＋敲打痕

D類：磨痕＋凹痕＋敲打痕

E類：凹痕

F類：凹痕＋敲打痕

G類：敲打痕

H類：下端が打ち欠かれ、スタンプ状に整えられているもの。

特殊磨石　「三角柱・四角柱・楕円柱状などの河原石（転石）を素材とし、その稜の部分に細長い機能面を有するもの」（北村1990）とし、使用痕の組み合わせで次のように細分される。

第2表　不定形石器分類表

分類	刃部形状			刃部ライン	素材	二次加工部位	細分類
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離			――	縦長	側縁と端部	A1類
					横長	片側縁と底縁	A2類
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続剥離			外彎状	縦長	片側縁と端部	B1類
					横長	底縁	B2類
C類	鋸歯縁石器 大型・中型・急角度・鋸歯状剥離			直線状	縦長・厚手	片側縁	C1類
					横長・厚手	底縁	
				内彎状	縦長・厚手	片側縁	C2類
					横長・厚手	底縁	
				外彎状	縦長・厚手	片側縁	C3類
					横長・厚手	底縁	
	スクレイパーと鋸歯縁石器の複合形			――	厚手	――	C4類
D類	鋭利な尖端部を持つ石器	大型・急角度剥離		直線状	厚手	片側縁（一方の片側縁は古い剥離面や折断面等を利用する）	D1類
				内彎状	厚手		
		大型・浅角度剥離		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	D2類
						両側縁	
				内彎状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	
						両側縁	
		小型剥離		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	D3類
				内彎状			
				直線状	薄手	両側縁	石錐
				内彎状			
E類	抉入石器（ノッチ）	大ノッチ	大型・中型・急角度剥離	内彎状	縦長・厚手	側縁	E1類
					横長・厚手	底縁	
			大型・中型・浅角度剥離		縦長	側縁	
					横長	底縁	
		小ノッチ	中型・急角度剥離	内彎状	縦長	側縁	E2類
					横長	側縁・底縁	
			小型剥離		縦長	側縁	
					横長	側縁・底縁	
F類	中型・小型・急角度・不連続剥離			――	縦長	側縁	F1類
				端部に丸味	縦長	側縁と端部	F2類
				――	横長（台形状）	底縁 底縁と側縁	F3類
G類	大型・中型・浅角度剥離			直線状	縦長	側縁	G類
					横長	底縁	
				外彎状	縦長	側縁	
					横長	底縁	
H類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕）小型・浅角度剥離			外彎状	背面は自然面 横長	底縁	H類
I類	端部に小型・連続剥離			端部に丸味	縦長・薄手 横長・薄手	端部	I類
J類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕）			――	縦長	側縁	J類
					横長	側縁・底縁	

※　ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多い。

A類：稜上の磨面のみのもの

B類：稜上の磨面のほかに、磨面があるもの

C類：稜上の磨面のほかに、端部に敲打痕があるもの

D類：稜上の磨面のほかに、磨面・端部の敲打痕があるもの

上記の分類に従い記載を進める。実測図は左側を表面または背面、右側を裏面または腹面と表す。石器の左右はとくに断りがない限り、表面に向かった時の左右である。

(3) 遺構出土の石器（図版20－1・2、図版53）

遺構から出土した石器は両極石器・台石各1点がある。

両極石器（1） 平安時代の竪穴住居ＳＩ５から出土した。２極１対の両極石器で、両側面が両極打撃時の衝撃で破損している。破損後も継続して使用されており、破損面の端部に小剥離痕が確認される。珪質頁岩製で、上端右側に礫面が残っている。

台石（2） ＳＸ20から出土した。上面は平滑で、中央部に浅い円形のくぼみがある。Ⅸ層中に含まれる礫を素材としている。

(4) 包含層出土の石器（図版20～31・53～56）

記述は縄文土器と同様に、発掘区をＡ～Ｃの３地区に分けて層位ごとに行う（第10図）。Ａ区は標高593.5ｍ以下の丘陵北斜面、Ｂ区は標高593.5～594.5ｍの丘陵平坦面、Ｃ区は標高593.5ｍ以下の丘陵南斜面および沢部である。各区の石器出土点数は表３～５に示すとおりである。

ａ．Ａ区（第3表）

Ⅱ層

チャートの礫片１点が出土した。

Ⅵ層

珪質頁岩製の剥片が１点出土した。

Ⅶ層上位（図版20－3・4、図版53）

石鏃と磨石類各１点が出土した。

石鏃（3） 黒曜石製のＢ２類の石鏃である。

磨石類（4） 紡錘形の礫の片端を折り取り、その断面を打面として周縁を打欠き、スタンプ形に整えている。上下端に敲打痕がある。H類に分類される。

Ⅶ層下位（図版20－5～7、図版53）

石鏃２点と磨石類１点が出土した。

石鏃（5・6） ２点とも黒曜石製のＡ２類の石鏃で、３Ｄ21・24という比較的近い位置から出土した。

磨石類（7） Ｄ類で表面と右側面に磨痕、右側面に敲打痕がある。多孔質の目の粗い石材である。

Ⅷ層（図版21－8、図版53）

特殊磨石、剥片が各１点出土した。

特殊磨石（8） Ｃ類で円筒状の礫の下端に敲打痕がある。敲打痕の中央が直径約1.5㎝の浅い円形にくぼんでいる。上端にも敲打によるとみられる打点の不明瞭な剥離がある。全体に被熱している。

形態	分類	黒曜石	珪質頁岩	頁岩	珪質凝灰岩	無斑晶質安山岩	チャート	安山岩	砂岩	花崗岩	粘板岩	蛇紋岩	流紋岩	不明	合計
石鏃	A	2													2
	B	1													1
	C														
	D														
	E														
	不明														
両極石器	二極一対														
	四極二対														
石匙															
不定形石器	A														
	G														
	F														
	I														
	J														
筒状石器															
剥片			1		1										2
砕片															
打製石斧															
磨製石斧															
磨石類	A														
	B														
	C														
	D							1							1
	E														
	F														
	G														
	H							1							1
	不明														
特殊磨石	A														
	C							1							1
	D														
礫							1								1
擦切石器															
砥石															
パステル形石製品															
合計		3	1		1		1	3							9

第３表　Ａ区出土石器点数表

ｂ．Ｂ区（第４表）

Ⅰ層（図版21－9、図版53）

特殊磨石とチャートの礫が各１点出土した。

特殊磨石（9）　Ａ類で四角柱の礫の１稜上に短い磨面がある。多孔質の目の粗い石材である。

Ⅱ層（図版21－10～12、図版53）

打製石斧・特殊磨石・磨石類・チャートの礫各１点、剥片３点が出土した。

打製石斧（10）　器体の上半部の両側縁に２対の抉入部をもつ。抉入部は緩やかな弧状を呈しており、弦にあたる部分の長さは約25㎜、深さは約５㎜である。上部の１対は弧の部分の稜線がつぶれている。対になる抉入部を結ぶ間の表裏の器面に磨耗などは認められないことから、これらが着柄に関わるものとは考え難い。

特殊磨石（11）　11はＣ類で楕円柱の１稜上に磨面がある。下端部に敲打痕がある。

磨石類（12）　比較的目の細かい石で、磨面と礫面の境界は明瞭である。Ａ類に分類される。

Ⅲ層（図版21－13～15、図版53）

石鏃・石匙・打製石斧・剥片各１点が出土した。

石鏃（13）　Ｃ類である。両脚先を欠くが、右脚は後世の欠損である。

石匙（14）　縦長の石匙である。両面が中軸を越える剥離で整えられた後、表面への剥離で側縁とつまみ部分の抉入部が作り出されている。末端部は表裏面への交互剥離によって先鋭に整えられている。上端から３㎝以下の器面は側縁部を含め稜線が磨耗し、光沢を帯びている。また、その部分と上端部ではわずかに色調が異なる。上端から３㎝まではやや白っぽい灰褐色であるが、それより下は茶色がっかった褐灰色を呈する。なお、表面左側縁には後世の剥離痕が連続する。

打製石斧（15）　表面に節理面あるいは礫面が広く残る大形の剥片を素材としている。上端部は表面左側縁部からの加撃により欠損しているが、欠損後の再剥離などは認められない。平面形は櫂のような形をし

（ ）内は層位不明の石器数量

形態	分類	黒曜石	珪質頁岩	頁岩	珪質凝灰岩	無斑晶質安山岩	チャート	安山岩	砂岩	花崗岩	粘板岩	蛇紋岩	流紋岩	不明	合計
石鏃	A	1													1
	B	1			1										2
	C	1													1
	D	3													3
	E														
	不明	6													6
両極石器	二極一対	5	9 (1)			3									17 (1)
	四極二対	7				2									9
石匙			3			1									4
不定形石器	A	1		1										1	3
	G				1 (1)										1 (1)
	F	1													1
	I	1													1
	J	10	1												11
篦状石器					6										6
剥片		58 (3)	10	17	10 (1)	10 (1)	2								107 (5)
砕片		10													10
打製石斧				2											2
磨製石斧												1			1
台石								(1)							(1)
磨石類	A							5	1						6
	B							1							1
	C								2	1					3
	D								1						1
	F							2 (1)	1						3 (1)
	F							1	1						2
	G								1		1				2
	H							1							1
	不明								1						1
特殊磨石	A							2	1						3
	C							4	2						6
	D							1	2				1		4
礫		3				2	2		1						8
擦切石器									1						1
砥石									2						2
パステル形石製品															1
合計		108 (3)	23 (1)	20	18 (2)	18 (1)	4	17 (2)	17	1	1	1	1	1	230 (9)

第４表　Ｂ区出土石器点数表

ている。上半の「柄」にあたる部分は裏面を上方から加撃しておよその形が作り出されたあと、両面に急斜度の剥離が施され整えられている。側縁部を含めた器面全面がよく磨耗し、下半部は剥離の稜線がほとんどわからないような状態になっている。特に左側縁から末端部にかけての磨耗は進んでおり、器体の長軸に並行する線状痕が弱いながらも観察される。磨耗は周囲の器面と比べてかなり窪んだ剥離痕の内部にまで及んでいる。使用痕観察ではＡ型（草刈）（阿子島1989）という結果が得られた。

Ⅵ層

剥片３点と礫片１点が出土している。いずれも石材は黒曜石である。

Ⅶ層上位（図版21－16～25、図版22－28～42、図版23－43・44、図版53・54）

石鏃２点、石匙２点、不定形石器４点、両極石器８点、篦状石器２点、特殊磨石３点、磨石類11点、擦切石器１点、砥石２点、剥片32点が出土した。

石鏃（16）　16はＢ１類で、早期に特徴的に見られる基部の抉りが深い凹基無茎石鏃である。もう１点も凹基無茎石鏃であるが先端と両脚を欠損している。

石匙（17･18）　２点とも横形石匙である。17は幅広の剥片を素材としており、裏面右上に単剥離打面が残存している。調整は剥片の形状を生かしながら周縁部にのみ行われている。調整はつまみ部分の作り出しを除いては表面から裏面へ向けて行われている。18は幅広の剥片を素材として上半を切断により除去し、完成品のおよその大きさに近づけている。その後つまみや刃部を両面への剥離で整えているが、調整は周縁部のみに行われており、素材面は両面とも広く残存している。右側は後世の、左側は当時の欠損である。

不定形石器（19・20）　不定形石器はＩ類１点、Ｊ類２点（19・20）が出土した。いずれも黒曜石製である。19は横長剥片の末端に微細な剥離痕が残る。20は縦長剥片の両側縁に微細な剥離痕が残る。

両極石器（21～25）　両極石器は８点出土した。７点が２極１対で、24だけが４極２対である。21は縦長剥片の打面部と末端部を機能部としている。22は長軸約17㎜と非常に小形の石器で、両極からの剥離が対極まで届いている。上端の機能部はツブレている。23は末端部を両極打撃の際に欠損したものと推定され

る。24は左右側縁を機能部とする打撃で裏面左側を欠損している。25は上端折れ面の表面側縁にツブレが見られる。下端の機能部は線状である。両面とも上下方向の剥離で埋め尽くされている。

篦状石器（26・27） 26は表面に礫面あるいは節理面をもつ厚手の剥片を素材としている。裏面には素材の腹面が広く残っている。調整は周縁部に施されているが、右側縁が直線的で薄く整えられているほかは、素材の形状を大きく変えるものではない。末端部は裏面側がわずかに調整されているだけである。風化の激しい石材のため磨耗などは観察できないが、右側縁を機能部とする石器だったと推定される。裏面右下は後世に破損している。27も背面に礫面をもつ厚手の剥片が素材とされている。ほぼ全面が剥離に覆われ、横断面形は裏面が平坦な「D」字形となっている。両側縁は両面に剥離が施され、表面は急斜度の階段状剥離となっている。両側縁に比較して末端部の剥離は平坦で、とくに表面はほとんど無調整で礫面が残っている。これも風化の激しい石材のため判断は難しいが、右側縁下半部の稜線がほかの部分に比べてツブレが激しいようである。

特殊磨石（28・29・33） A類1点（28）、C類1点（29）、D類1点（33）がある。28は四角柱礫の1稜上に磨痕がある。礫面との境界は明瞭である。29は下端を欠損するが、残存する下端面は比較的平坦で敲打痕がある。稜上の磨痕の横断面形は弱く曲がる「く」の字状である。33は1稜上と1面に磨痕、両端に敲打痕がある。稜上の磨痕は礫面よりザラつく感じである。

磨石類（30～32・34～41） 磨石類はA類5点（30～32・34・35）、C類2点（36・37）、D類1点（38）、F類2点（39・40）、H類1点（41）が出土した。30は多孔質の円礫の一部が磨耗によりなめらかになっている。31は扁平な円礫の片面がごくわずかにくぼんだ磨面となっている。32・35は1稜上に磨痕があるが礫面との境界は不明瞭である。34は多孔質の直方体の礫であったと推定されるが、半分が欠損している。残存部分の1稜上に磨痕がある。36は多孔質の楕円礫の一部に磨痕、左側面中ほどに平坦な敲打痕がある。全体に被熱している。37は非常に目の細かい円柱礫を素材としている。正面に平滑な磨痕、両端に敲打痕がある。下端からの敲打の衝撃で左下半部は欠損したと推定される。38は目の細かい円礫の周囲がすべて敲打されている。磨面は片面にあり、中央に直径約5㎜の小さな凹痕がある。一部赤化している。39は凝灰岩などの挟在物が多量に入る多孔質の円礫を素材としている。不明瞭であるが両面に凹痕が認められる。40は楕円形の砂岩の両面に凹痕、下端に敲打痕がある。41は四角柱の片端が打ち欠かれ、スタンプ形に整えられている。両端に敲打痕がある。砥石（44）と並んで出土した（図版8・44）。

擦切石器（42） 非常に目の細かい砂岩を素材としている。刃部は上下の縁辺にあり、下端の刃部は縦断面形V字形をしている。上端の方は剥離痕が比較的よく残っており、一部の端部稜線が磨滅している程度である。これは砥面再生が行われていたことを示すのかもしれない。刃部のほか表裏面が磨耗して平滑になっている。表面には剥落している部分があるが、裏面はとくになめらかである。

砥石（43・44） 43は非常に目の細かい砂岩を素材としている。大きく破損しているため全容は不明であるが、残存部では両面と側面に砥面がある。表面の砥面にはごく短く浅いものであるが線状痕が認められる。44も非常に目の細かい砂岩を素材としている。両面と左側面に砥面がある。右側面から上面にかけては敲打されている。非常に使い込まれたのか、元の礫の形態を反映しているのかはわからないが、下端部は厚さ約3㎜までに磨り減っており、縦断面形がクサビ形を呈している。砥面はなめらかであるが、緩やかな凹凸がある。また、両面の砥面には数は多くはないが切り込んだような線状痕が認められる。

Ⅶ層下位（図版23－45～59、図版24－60～62、図版54・55）

石鏃4点、不定形石器7点、両極石器5点、篦状石器1点、特殊磨石5点、磨石類4点、剥片38点、砕

片5点・礫3点が出土した。

石鏃（45～47） 石鏃は未製品を含め4点が出土した。いずれも黒曜石製の凹基無茎石鏃であり、45・46はD類に分類される。47は先端部の作り出しが鈍いことから未製品の可能性もある。

不定形石器（48～50） A類（49）・J類各3点（48・50）が出土した。48は礫面を打面とする剥片を素材としている。末端部と右側の折れ面には微細な刃こぼれ状の剥離が認められる。49も礫面を打面とする剥片を素材とし、剥片の左右を断ち切るようにして両側縁を作り出している。両側縁部とも細かなツブレが認められる。50は点状の打面をもつ剥片を素材とする。打面には小さいパンチ痕が確認できる。上端を除く縁辺に微細な刃こぼれ状の剥離が認められる。

両極石器（51～53） 出土した5点はすべて2極1対の両極石器である。51は左右側縁に機能部があるが両極打撃の後、打点近くに抉入部が作り出されている。抉入部はツブレている。両極石器を素材として別の形態の石器を作り出そうとしたのか、あるいは両極打撃のための打面調整をしたものなのかは判断し難い。52は上下の縁辺に機能部をもち、下端のほうは両極打撃の衝撃で割れて鋭くとがっている。53は背面に礫面が広く残る大形厚手の剥片が素材にされている。上下の縁辺に機能部がある。

篦状石器（54） 大形厚手の剥片を素材としている。表面が素材の腹面で、素材となった剥片の反りを石器自体の形態に反映させているようである。調整は周縁部に施されるが、稜線はあまり直線的ではなく波状を呈する。風化の激しい石材であるが、稜線などに磨耗は認められないようである。

特殊磨石（55～57・59） A類1点、C類2点（55・57）、D類2点（56・59）が出土した。55・56は三角錐の1稜上に磨痕、両端に敲打痕がある。56は裏面にも磨面がある。磨痕は礫面よりザラつく感じがする。57は上端部を新しく欠損するが一稜上に磨痕、下端部2箇所と裏面の稜上に敲打痕があるのが認められる。59はおそらく楕円礫を素材としていたのであろうが、磨耗が進み平面形は柱状に近い半円形になっている。磨痕は横断面形「く」の字状に緩やかに屈曲する。

磨石類（58・60～62） B類（58）・C類（60）・E類（61）・G類（62）各1点が出土した。58は両面と右側面に凹痕がある。非常に挟在物の多い安山岩が用いられており、脆い。60は細粒の砂岩の周縁に敲打痕がめぐる。61は多孔質の楕円礫の表面に小さな凹痕がある。62は小礫の片端と両側面に敲打痕がある。

剥片・砕片 剥片38点の石材構成は、黒曜石21点、珪質頁岩7点、頁岩4点、無斑晶質安山岩3点、珪質凝灰岩2点、チャート1点で黒曜石が大半を占める。砕片5点もすべて黒曜石である。

Ⅶ層（図版24－63、図版55）

Ⅶ層上位かⅧ層下位か判然としないものを一括した。石鏃破損品、両極石器（63）、剥片各1点がある。石鏃と両極石器は黒曜石、剥片はチャートである。

両極石器（63） 4極2対の両極石器で、周縁部はスクレイパーの刃部の調整のような剥離がめぐっている。また、周縁の稜線はツブレている。

Ⅷ層（図版24－64～81、図版25－82～85、図版55・56）

石鏃5点、石匙1点、不定形石器6点、両極石器12点、篦状石器3点、磨製石斧1点、特殊磨石3点、磨石類4点、剥片29点が出土した。

石鏃（64・65） 破損品を含めて5点出土したが、いずれも黒曜石製である。64はA1類で、全体に細身で脚部がやや内彎気味に伸びる。65はD類であり、胴部との間に明瞭な屈曲部をもって脚部に至る。64・65ともに片脚を欠損する。

石匙（66）　無斑晶質安山岩製の剥片を素材とする横形石匙である。打面側をつまみ部分にしており、上端には単剥離の打面が残存している。つまみ部分は両面から剥離を施し作出されているが、下端の刃部はもっぱら表面への剥離で整えられている。

不定形石器（67～72）　F類1点（67）、J類5点（68～72）が出土したが、いずれも黒曜石製である。67は背面が礫面に覆われた薄い剥片の両側面に剥離が施されている。調整は左側縁が平坦剥離であるのに対し、右側縁は急斜度の剥離である。68・69は左側縁に刃こぼれ状の微細な剥離痕が認められる。69は礫面を打面とする剥片を素材としている。70・71は両側縁、72は裏面右側縁に微細な剥離痕が認められる。

両極石器（73～78）　12点のうち7点が4極2対、5点が2極1対である。76が無斑晶質安山岩製の4極2対の両極石器であるほかは、黒曜石製の4極2対の両極石器である。74は4極とも礫面である。

篦状石器（79･80）　篦状石器は3点出土したが、1点は破損品で頭部だけが残存している。いずれも風化の激しい石材で磨耗などの観察は困難である。79・80は剥片を素材とし、54と同様に素材となった剥片の腹面を表面として、剥片の反りを石器自体の形態に反映させているようである。調整は周縁部に施されるが、稜線はあまり直線的ではなく波状を呈する。80は裏面が風化のため一部剥落している。

磨製石斧（81）　片刃の磨製石斧である。全面が研磨されているので判断は難しいが、左右非対称で器面に弱い凹凸が見られることから、扁平な円礫を素材としていたのではないかと推定される。

特殊磨石（82～84）　C類が2点（82・83）、D類1点（84）が出土した。82は四角柱の礫の1稜線上に磨面、上下端に敲打跡がある。稜線上の磨面は礫面よりザラつく感じがする。83は三角柱の礫の3稜線上に磨面がある。下端は欠損しているが、上端にはわずかだが敲打痕が認められる。84は三角錐形の礫の1稜線上と1面に磨面、下端に敲打痕がある。稜線上の磨面は礫面よりザラつく感じがする。

磨石類（85～87）　E類2点（85・86）、G類1点（87）、分類不明のもの1点が出土した。85は楕円礫の表面に小さな凹みがある。86は楕円礫の両面に凹み痕がある。87は扁平な楕円礫の左側面に敲打痕がある。

層位不明（図版25－88、図版56）

不定形石器G類、磨石類E類各1点と剥片5点が出土した。

磨石類（88）　多孔質で非常に目が粗い楕円礫を素材としている。両面に凹みがある。磨面もあるようだが、風化が激しく断定できない。出土層位はⅦ～Ⅷ層のいずれかである。

c．C区（第5表）

C区は沢地であり、A・B区とは土層堆積状況が異なる。基本層序の項で述べたとおり遺物が出土しているのはおもに⑤層である。

①・②層

剥片が1点出土した。

②層（図版25－89、図版56）

パステル形石製品と剥片各1点が出土した。

パステル形石製品（89）　半分を欠損するが、下端部が鈍く尖る棒状の石器である。研磨によって仕上げられているが、研磨の方向は長軸に対して並行あるいは右下がりである。横断面形は円形に近い不整六角形を呈する。正面には正面形「二」字形、縦断面形「W」形の彫刻がある。

⑤層上位

剥片2点と黒曜石の礫1点が出土した。

⑤層下位（図版25－90～96、図版56）

石鏃4点、両極石器1点、剥片6点、特殊磨石2点、磨石類1点が出土した。

石鏃（90～92）　4点が出土したが1点は黒曜石製の未製品である。90・91は黒曜石製の凹基無茎石鏃である。90がC類、91がB2類に分類される。92は珪質頁岩製の平基無茎石鏃でE類に分類される。形態から見て前期の所産と考えられる。

両極石器（93）　4極2対の両極石器である。裏面左下と右側面の剥離面の風化がほかより進んでいることから、転石を素材としていると考えられる。

特殊磨石（94・95）　A類（94）とC類（95）が各1点出土した。94は三角柱の礫の1稜上に磨面がある。95は三角錐の礫の1稜上に磨面、下端に敲打痕がある。2点とも磨面は礫面よりザラつく感じがする。

磨石類（96）　B類が1点出土した。96は楕円礫の表裏面にごく浅い凹痕が認められる。

剥片6点のうち5点が黒曜石、1点が頁岩である。黒曜石製の剥片はすべて礫面を有しており、内2点には水磨が認められる。

⑥層

剥片が1点出土した。

⑦層下位

剥片が1点出土した。

d．地区・層位など不明（図版25－97、図版56）

両極石器1点と剥片2点・砕片5点が出土した。

両極石器（97）　チャート製の4極2対の両極石器である。下端は微細な剥離によって、弧状に整えられている。打点の形状は上下の極が点状、左右が線状である。

剥片2点の石材は、無斑晶質安山岩・頁岩、砕片はすべて黒曜石である。

形態	分類	黒曜石	珪質頁岩	頁岩	珪質凝灰岩	無斑晶質安山岩	チャート	安山岩	砂岩	花崗岩	粘板岩	蛇紋岩	流紋岩	不明	合計
石鏃	A														
	B	1													1
	C	1													1
	D														
	E		1												1
	不明	1													1
両極石器	二極一対														
	四極二対	1													1
石匙															
不定形石器	A														
	G														
	F														
	I														
	J														
筒状石器															
剥片		7		2	1	2									12
砕片															
打製石斧															
磨製石斧															
磨石類	A														
	B							1							1
	C														
	D														
	E														
	F														
	G														
	H														
	不明														
特殊磨石	A							1							1
	C									1					1
	D														
礫		1				1									2
擦切石器															
砥石															
パステル形石器			1												1
合計		12	2	2	1	3		2		1					23

第5表　C区出土石器点数表

C．弥生時代の土器（図版19－322・52）

２Ｇ３Ⅲ層で壺の胴部破片が１点出土した。器面には縄文を地文に「工」字文風の文様が沈線で描かれている。弥生時代中期の栗林Ⅰ式土器古（神村1985）に分類されよう。胎土には石英・長石・チャートの小粒が多量に含まれる。器壁の色調は赤褐色を呈する。

D．平安時代の遺物（図版32～35・57～60）

(1) 概略

平安時代の遺物は土壙墓（ＳＸ６）と３基の竪穴住居（ＳＩ４・５・15）からおもに出土し、総量は平箱に８箱程度である。遺物のほとんどは土器で、土師器・黒色土器を主体に須恵器、灰釉陶器が少量存在する。土師器には無台椀・長甕・小甕がある。黒色土器は１点の盤を除き、すべて椀である。須恵器は壺・甕があるがいずれも小片である。灰釉陶器には光ケ丘１号窯の製品とみられる碗と長頸壺がある。土器のほかには刀子、土製品、フイゴの羽口、鉄滓が各１点ある。

遺物の所属時期は松本盆地西南部の編年（小平1990）の８期、佐久平の編年（寺島1991）の９段階、越後の編年（坂井1984）のⅥ～Ⅷ段階におよそ該当し、大きな時期幅はないと考えられる。

(2) 分類と記述

土器の分類は次のとおりである。なお、器種内の大別はＡ・Ｂ・Ｃ･･･、細別は１・２・３･･･と表した。法量は各器種ごと幾つかに細分されると思われるが、小破片が多く量的な保証もないことから細分しなかった。

記述にあたり、成形・調整の表現・名称を統一しておく。

1.「ロクロナデ」はロクロ回転を利用したナデで、そのほかのものは、ただ単に「ナデ」とし、「ナデられる」等と表現した。

2.「ロクロ痕」はロクロナデでつく螺旋状の凹凸を言う。

3.「ケズリ」は手持ちの「ヘラケズリ」のことで「ケズられる」などと表現し、椀底部にみられるロクロ回転を利用したケズリは「ロクロケズリ」とした。実測図ではケズリの方向を矢印で示した。

4.黒色土器などにみられるヘラミガキは、ただ単に「ミガキ」とした。

土師器　無台椀・小甕・長甕がある。椀は明確に有台とわかるものが無かったので、ここでは全て無台椀に分類した。

無台椀：数が少なく、細片では黒色土器の黒色処理が不鮮明なものとの区別が困難であるため、ここでは図化したものを説明する。図化したものは３種に分類される。Ａ類は器形が半球状を呈する。ロクロナデ・底部回転糸切りの後底部外面がケズられ、内面が磨かれている。Ｂ類はロクロナデ後体部下半がロクロケズリされている。体部が内彎し、口縁がそのまま内屈する。Ｃ類は浅い皿形で、ロクロナデで仕上げられている。

小甕：３種に分類される。Ａ類はロクロナデで仕上げられたもので、底部は回転糸切りである。Ｂ類はロクロナデ後、外面体部下半部がケズられている。Ｃ類はロクロナデ後、外面体部がほぼ全面的にケズられている。Ａ・Ｂ類に比べ、粗雑な作りである。

長甕：２種に分類される。Ａ類はロクロナデ後、体部がケズられている。口縁形態で次のように２細分される。体部から「く」字状に開く口縁部をもつＡ１類、体部からほぼ直立する口縁部をもつＡ２類であ

る。B類はロクロナデ後、ケズリとタタキで仕上げられているものである。

黒色土器　黒色土器は内外面黒色処理のものが1点あるほかは、すべて内面黒色処理のものである。とくに断りがない限り本文中の「黒色土器」は内面黒色処理のものを指す。黒色土器はロクロナデ後内面にミガキが施され、黒色処理されている。ミガキの施し方で2大別できる。1つはミガキが粗雑で暗文風になり、大部分が無調整のまま黒色処理されているもの、もう1つは内面全面にミガキを施すもので、中には暗文が描かれているものもある。

有台椀：内彎気味にのびる体部に外側にふんばる比較的高く細い高台がつく。底部は回転糸切り後、高台が張りつけられている。

無台椀：細片が多いため全容を知ることは困難であったが、およそ5種に分類される。A類は体部が直線的に開く椀で、ロクロナデによって仕上げられている。底部は回転糸切り無調整である。B類は体部が内彎気味にのびる椀である。調整によって2細分される。B1類はロクロナデ後、外面体部下半がロクロケズリ、底部が回転糸切り後回転ロクロケズリされている。B2類はロクロナデ、底部は回転糸切り無調整である。C類はロクロナデ後、底部と体部下半部がロクロケズリされている。体部が内彎し、口縁が内屈気味になるか、あるいは若干肥厚する。土師器椀Bに似る器形である。A・B類に比べ全体に厚ぼったい印象を受ける。D類は身が浅く、皿形に近いものである。このほかに灰釉陶器模倣品とみられる、器壁が薄く口縁が玉縁状になったものがある。

盤：外彎気味にのびる高い高台を有する浅い皿形の器。

須恵器　細片のみの出土であるが、甕・壺・杯がある。

灰釉陶器　細片のみの出土であるが、椀・長頸壺がある。

(3) 遺構出土の遺物（図版32～35・57～60）

ここで「遺構出土の遺物」として扱うのは、1個体分の破片すべてが遺構から出土したもののほか、包含層出土で遺構出土のものと接合したものも含めている。

ＳＸ6（1～4）

黒色土器の有台椀2点（1・2）と無台椀A類1点（3）、刀子1口（4）が出土した。

黒色土器（1～3）　正位に置かれた1の上に3が正位に重ねられ、その上に2が伏せられていた。刀子はその脇に置かれていた。1～3にはいずれも暗文風のミガキが施されている。1・2は中央に向かって放射状に6条、口縁付近に横方向に2～3条が認められる。ミガキの順序は口縁付近が先で、放射状のものはその後引かれている。3は中央に向かって放射状に数条、口縁付近に横方向のものが1条認められる。3点とも被熱しているのか、内面にはじけたような痕がある。

刀子（4）　錆化がひどく原形は留めていないが長さ20㎝程度のものだったと推定される。

ＳＩ4（5～38）

土師器の椀・小甕・長甕、黒色土器の有台椀・無台椀、須恵器の甕・壺、灰釉陶器の長頸壺がある。口縁部残存率計測法（宇野1991）による比率では椀47%、小甕15%、長甕32%であり、これに須恵器と灰釉陶器が少量ともなう。椀のうち約9割は黒色土器である。

灰釉陶器（5）　長頸壺の頸部の破片が1点ある。内外面に釉がかかっている。外面の釉は斑点状にごくわずかにかかっている。

須恵器（6・7）　須恵器は甕・壺があるが小片であり、器形を復元できるものはない。6は壺の底部付近で、底部との境にはロクロケズリが施されている。9は甕の底部付近の破片で外面に平行タタキ目が残る。

黒色土器（8～18）　有台椀と無台椀がある。

有台椀（8）は底部のみが残存していた。暗文はなく、内面は丁寧なミガキが施されている。高台は1・2に比べて肉厚である。

無台椀はA類（9）・B類（10・11）・C類（12・13）・D類（14）、灰釉陶器模倣品（15）がある。9は内面底部がほかの椀に比べ平らで、須恵器の坏の底部を思わせる作りである。10は器面が大きく剥落している。16は10とよく似た胎土の底部である。11は外面に墨書があり、不鮮明であるが正位で「六」と読み取れる。内面のミガキは暗文風にはなっていないが、口縁付近は横方向、それ以外は放射状にミガキが施されている。大きさの割に重量感のある土器である。C類の2点（12・13）は内面の色調が黒色というより、暗褐色に近い。14は内面中央に直径約1.5cmの円形の浅いくぼみがある。くぼみの中にも黒色処理が及んでいることから、焼成前からのくぼみであると推定される。外面に墨書があり一部欠損しているが、横位で「王」と読み取れる。15は器壁が著しく薄く、口縁端部が面取りされ外面がわずかに玉縁状になっていることから、灰釉陶器の模倣品と考えた。

このほかに無台椀の底部（17・18）があるが、いずれも底部から体部への立ち上がりが緩やかで完形であればかなり大きな口径になると推定される。17はロクロナデ、底部回転糸切り無調整、25は底部・体部ともロクロケズリされている。調整のあり方から17はA類、18はC類に分類されよう。

土師器（19～38）　椀・小甕・長甕がある。

椀はB類（19・20）とC類（21）がある。19～21は内面に黒色土器のようなミガキが施されている。ただ、黒色土器のそれに比べると若干粗い。

小甕はA類（22～26）、B類（27・28）がある。22は直立気味の口縁をもつ。内外面とも顕著なススの付着は認められない。23は短く外反する口縁をもつ。内面口縁部と外面にうっすらとススが付着する。24～26はいずれも回転糸切り無調整の底部であるが、5.5～9cmと法量に幅がみられる。28は体部中ほどで強く屈曲し球胴に近い形態をしている。口縁端部は弱く波打つ。体部下半のケズリの方向は一定していないが、全体として平滑に仕上げられている。27は26とは対象的に口縁部から胴部まで目立った屈曲点をもたない。ケズリの方向は上下方向でほぼ一定しているが、粗い仕上がりである。そのほか、29は外面の体部と底部がケズられている。内面に明瞭なロクロ痕は見られない。

長甕（30～38）はA類（30～32）、B類（33）がある。30～32の外面のケズリは縦方向に下から上へ行われている。31はロクロナデとケズリで口縁と体部を作り出した後、粘土を付け足して底部を作り出している。このことは粘土の接合痕が残ること、付け足された粘土が剥落した部分で体部のケズリ痕が認められることから推定される。内面下半部にはハケ目のようなナデ痕が残る。30は31と同様直立気味の口縁を有する。32は前2者に比べ器壁が薄く部位によっては5mmに満たない。33はロクロナデと外面下半部にケズリを施した後、体部下半をタタキで整えている。体部外面のケズリ痕はタタキによってつぶれている。また内面には当て具痕とみられる不整同心円の重なりが認められる。このほか調整による分類はできないが、直線的に開く口縁（34・35）や内彎気味に開く口縁（36）、「く」字状に開く口縁（37・38）が出土している。

ＳＩ５（39～57）

灰釉陶器の椀・黒色土器の椀・盤、土師器の椀・小甕・長甕、フイゴの羽口がある。口縁部残存率計測法による比率では黒色土器65%、小甕13%、長甕17%で、これに土師器の椀と灰釉陶器が少量伴う。

灰釉陶器（39）　椀の口縁部で、端部は外面に弱く引き出され玉縁状を呈する。光ケ丘1号窯式に属する。

黒色土器（40～47）　無台椀と盤がある。

無台椀はA類（40）、B類（41～44）、D類（45）がある。40は外面に逆位の「六」の墨書がある。42はほかのB類より身が深い。また胎土に白色の砂粒、長石・斜長石の細片を多く含み、ほかのものより粗い胎土となっている。41・43・44は内面にミガキが施されている。内外面とも被熱したのか、器壁がはじけている。41は口縁の円周が歪んだ楕円形となっている。口縁部に横方向のミガキが施されているほかは無調整である。ほかの椀にみられるような放射状の暗文は描かれていない。外面には逆位に「六」と墨書されている。45は口縁がやや肥厚する。46は器壁がやや厚めで、直立気味の口縁をもつ。

盤（47）はこの1個体のみである。灰釉陶器の器形を模したもので、皿形の身の底部に高台が丁寧なロクロナデで貼りつけられている。内面は丁寧にミガキが施された後黒色処理されている。

土師器（48～56）　椀・小甕・長甕がある。

椀（48）はA類に分類される。器形は41・43に似るが、口縁部の調整が粗く、弱く波打っている。

小甕はC類（49・50）が出土した。両者ともロクロナデの後外面体部を非常に粗いケズリで調整している。器壁はほかの小甕に比べると倍近く厚い。50は内面の肩部に強い指押えの痕が残っている。このほか「く」字状の口縁の小甕（51）がある。

長甕はA類（52～55）とB類（56）が出土した。A類は口縁の形態によってA1類（52）とA2類（53～55）の2種に分けられる。53は口縁部から肩部までは内外面ともロクロナデであるが、肩部より下については内面がナデ、外面がケズリで調整されている。ケズリはやや斜めに上から下へ施されている。内外面にススが付着するが、付着部位は体部が主体で口縁部への付着は少量である。52の外面のケズリは縦方向に下から上へ向けて行われており、53と対象的である。55は肩部が幅約2㎝の帯状に破損している。外面のケズリはやや斜めに上から下へ行われている。56は肩部がロクロナデそれより下はケズリとタタキで仕上げられている。肩部以下は3.5～4㎝幅で帯状に破損したり、亀裂が入ったりしている。外面のタタキ目は幅2㎝程度の工具によってつけられている。内面の当て具痕は浅い皿状の凹凸が連続することから、機能面が球状の当て具によってつけられたと推定される。

フイゴの羽口（57）　厚さ7㎜ほどの粘土板を直径約1.7㎝の軸に巻きつけて成形している。孔の壁面に長軸に平行する筋が多数走っていること、孔の断面形が下端では隅丸方形、上端ではほぼ円形と一定しないことなどから、軸は1本の棒ではなく、植物の茎のようなものを多数束ねたものであったとも考えられる。外面には幅約2㎝で長軸に平行して平坦になっている部分が2面ある。生乾きの粘土に板状のものが押しつけられたような状態である。あるいは生乾きの状態で平らな所に置いた時の接地面なのかもしれない。このほか太さ約3㎜の縄痕が1～1.5㎝間隔で螺旋状にめぐっている。縄痕は平坦な部分にも付いている。両端部を破損しているが、先端には泡状の鉄滓が薄く付着する。植物の茎を束ねて芯として、それに粘土板を巻付けてフイゴの羽口を整形する方法は製錬の際に用いる大型品を作る時に見られるもので、このような小型品で見られることは珍しいことという（註）。

ＳＩ15（58・59）

黒色土器の椀、土師器の長甕があるが、長甕は小片で図化できなかった。ほかに鉄滓の小片がある。

黒色土器（58・59）　椀がある。

椀は内外黒色処理されているもの（58）と内面黒色処理のもの（59）がある。58は内外面ロクロナデの後、両面とも丁寧なミガキが施されている。59は内面に横方向を主体としてミガキが施されているが、あまり

（註）　穴澤義功氏よりご教示を賜った。

丁寧ではないため一部にミガキの及ばないところもある。

（4）遺構外出土の遺物（図版35・60）

遺構外の包含層Ⅰ・Ⅱからは灰釉陶器、須恵器、黒色土器、土師器、土製品が出土した。ここでは器種ごとに報告する。

灰釉陶器（60～64）　椀の底部（60）と口縁部（61～64）が出土した。60は断面三日月高台を有する底部で、内面にわずかだが降灰釉がかかる。61は口縁端部が長めに引き出され外反している。釉がやや緑がかっていることから緑釉の可能性もある。62は内面のみ刷毛塗りで施釉され、外面は生地が露出している。63・64は内外面とも刷毛塗りにより施釉されているが、64は口縁部の釉が剥落している。所属時期はいずれも光ケ丘1号窯式と推定される。だだ、62のような外面に施釉しない手法は前段階の黒笹14号窯式にみられることから、62は若干古くなる可能性がある。

須恵器（65）　杯はなく、甕・壺の破片のみがある。65は内外面格子タタキ目の甕の体部である。

黒色土器（66～75）　無台椀Ｂ類（66・67）と分類不明の底部（68～73）、口縁部（74・75）がある。

66は外面に正位の「六」の墨書がある。71と72には暗文が施されている。暗文はＳＸ6の椀のような整った放射状ではない。72は隙間なく放射状のミガキが重ねられ、71では3㎝幅くらいの単位で一定方向のミガキが複数方向から施されている。また、暗文以外の器面にも磨きが施されている。74と75は内面の黒色処理がほとんど消滅し、よく磨かれた生地が露出している。両者とも身の浅い皿形に近い器形である。

土師器（76～83）　長甕と小甕がある。

長甕は直立気味の口縁をもつもの（76）、外に開く口縁をもつもの（77･78）などがある。

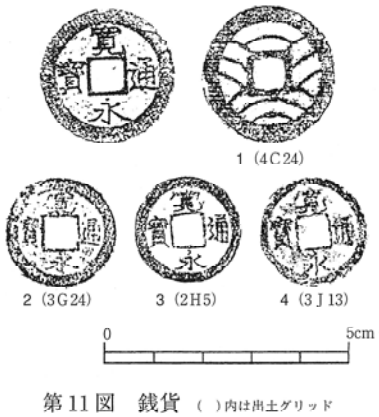
小甕はＡ・Ｂ類はあるがＣ類は認められない。79は直立しつつ弱く内彎する口縁をもつＢ類の小甕で、体部に上下方向の弱いケズリが施されている。ほかは口縁部付近の破片であるため分類はしないが、残存する内面全面に薄くススが付着するもの（80）や口縁部のみにススが付着するもの（81～83）がある。80は外面体部にも炭化物が付着している。

土製品（84）　隅丸長方形の板状の土製品である。両面と側面部が焼成後研磨されている。土器片を素材としているのか成形当初からこの形であったのかは不明である。

E．近世の遺物（第10図）

近世の遺物には陶磁器類･銭貨がある。すべて包含層から出土し、出土量は浅箱1箱に満たない。陶磁器は肥前系の17～18世紀代の遺物が大半である。

銭貨（1～4）寛永通寶が4点ある。1は1769年以降に鋳造された11波の四文銭である。2・3・4は1636～1659年に鋳造された古寛永である。これらの年代は出土した陶磁器の年代ともほぼ一致する。



第11図　銭貨　（　）内は出土グリッド

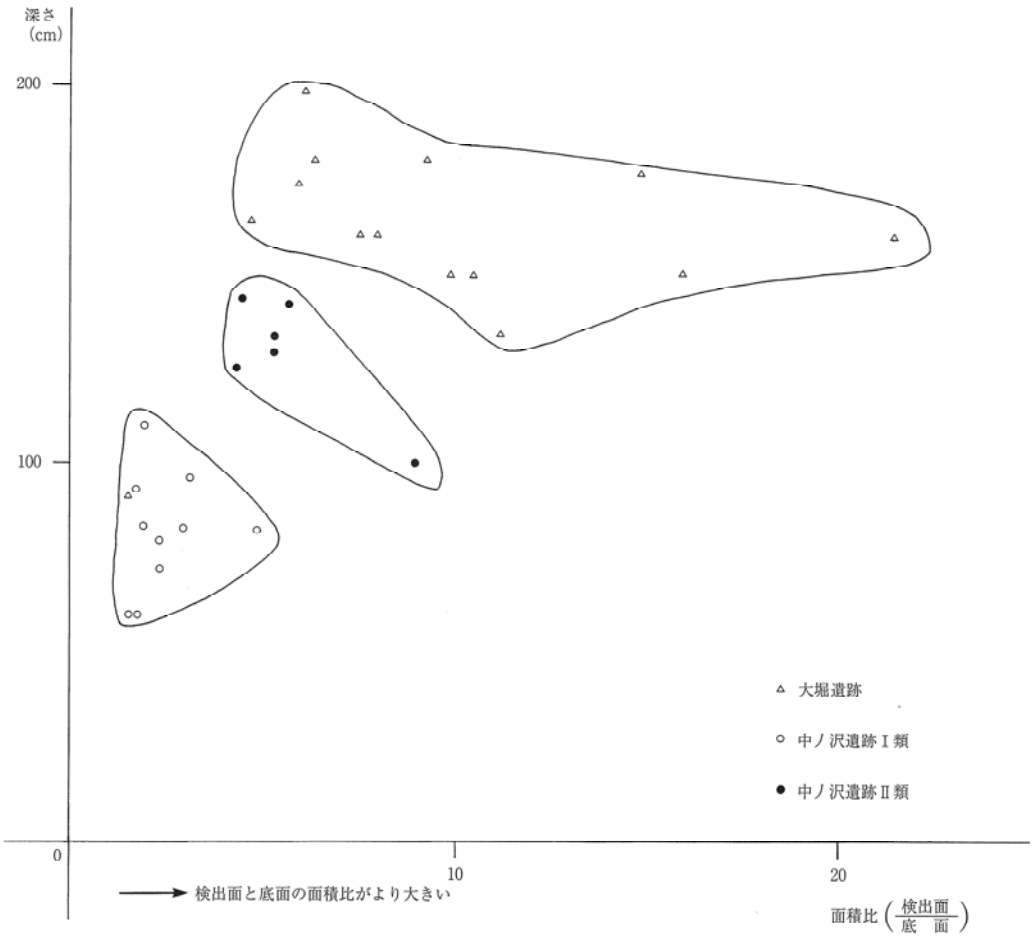
第Ⅳ章　まとめ

1．縄文時代

A．陥穴状土坑（第12・13図）

中ノ沢遺跡では16基の陥穴状土坑が検出された。これらは調査区南端の平坦部と斜面部の境あたりに等高線に沿う形で1列に並んでいたが、形態によって2分類される。Ⅰ類は平面形が隅丸長方形で、掘形の上部が若干広い箱形のもの、Ⅱ類は平面形が楕円形で、掘形がほぼ円錐形のものである。両者とも底部に1基の小ピットがある。掘り込みはⅡ類がⅦ層堆積前、Ⅰ類がⅥ層堆積前だが、Ⅰ類とⅦ層の関係は不明である。検出面はⅠ・Ⅱ類ともⅨ層上面であるが、Ⅰ類はⅡ類に比べて軒並み浅く、また土層の堆積をみると上部が断ち切られたような印象を受けるので、Ⅰ類の方が若干高い位置から掘り込まれていた可能性がある。よって、Ⅰ類とⅡ類の間にはⅡ類→Ⅰ類の構築順序があったことが推定される。

構築順序を追うと次のようになる。まずⅡ類が平坦面の縁に沿って構築される。この時ＳＫ39の掘削も試みられるが、巨礫に阻まれ掘削を断念せざるをえなくなり、代わりに近接するＳＫ34が構築されたのだ



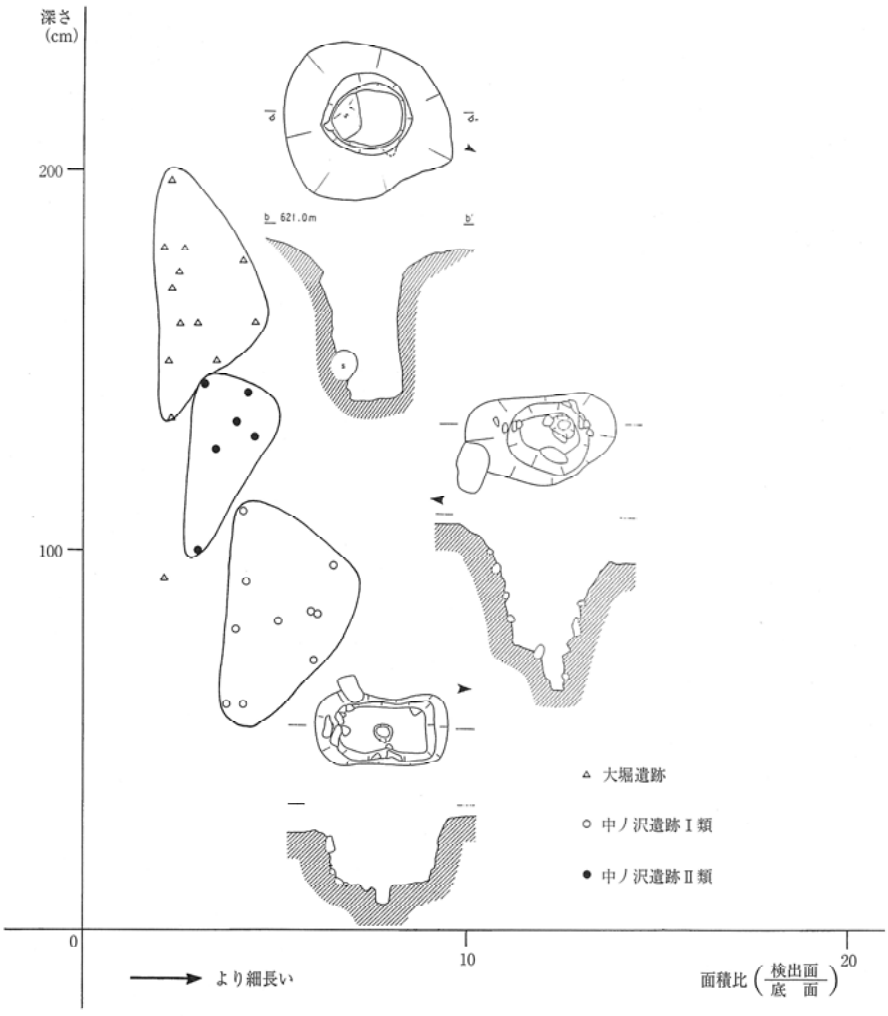
第12図　陥穴状土抗　検出面と底面の面積比と深さの関係

ろう。次にⅠ類が構築されるが、この時にはまだⅡ類は埋没しきっていなかったとみられ、Ⅱ類の間を縫うようにして築かれている。

次にⅠ類とⅡ類が、陥穴としての機能を同時に有する時期があったかということに関して検討する。Ⅰ類がⅡ類の間を縫うように構築されている点や、ＳＫ34からＳＫ40までの間隔の広い箇所にはⅠ類の陥穴状土坑がほかと比べ密に分布していることなどから、Ⅰ類構築時にⅡ類が陥穴として意識するに充分な状態であったと推定される。また、ＳＫ34とＳＫ40までの間にⅠ類を密に築くことで、Ⅰ類とⅡ類を合わせてみたときにほぼ等間隔で陥穴が並ぶことになったのだろう。なお、Ⅱ類の土層には掘り返しの痕なども観察されない。よって、Ⅰ類構築時にはⅡ類は手を加えずに陥穴として使用できる状態にあったと考えられるのではないだろうか。

次に陥穴状土坑の編年的位置付けについて触れておきたい。

中ノ沢遺跡の南に位置する大堀遺跡（立木・寺崎ほか1996）でも13基の陥穴状土坑が検出されている。これらは関川岩屑なだれ堆積物上面に堆積したローム層（Ⅵ層）上面で検出されており、一部は縄文時代早期の遺物包含層に対比されるⅤ層とさらにその上に堆積する田口岩屑なだれ堆積物に覆われていた。（大堀遺跡では田口岩屑なだれ堆積物の分布範囲で押型文土器は出土していないので、押型文土器と田口岩屑なだれ堆積物との関係を直接つかむことはできなかった。）また、掘り込み面であるⅥ層からは草創期？に属する可能性のある無文土器が出土していること、Ⅴ層の^{14}Ｃ年代値に10,170 ± 140y.B.P.（GaK － 18719）が得られていることなどから、大堀遺跡の陥穴状土坑の構築時期は草創期より後から早期以前、とくに早期でも前葉までに限定されると考えた。これに対して、中ノ沢遺跡の陥穴状土坑がⅨ層田口岩屑なだれ堆積物（約8000年前）上面以上から掘り込まれ、Ⅵ層赤倉火砕流堆積物（約5300年前）に覆われているのは確実である。遺物はⅠ類ではＳＫ27・29から帯状施文の山形文押型文土器、ＳＫ33から羽状縄文土器、Ⅱ類ではＳＫ24から羽



第13図　陥穴状土坑　底部規模と深さの関係

状縄文土器が出土した。よって、中ノ沢遺跡の陥穴状土坑は縄文時代早期～前期中葉までの間に構築されたと推定される。以上のことから陥穴状土坑の形態の推移を見ると、早期前葉から前期中葉までの幅の中で、大堀遺跡の漏斗型のものから中ノ沢遺跡のⅡ類円錐形、Ⅰ類箱形へと推移していく様子が伺われる。底面形態においても長幅比が次第に大きくなり、長狭化が進むことが分かる。底部の小ピットも、大堀遺跡では存在しなかったが、中ノ沢遺跡では認められるようになる。大堀遺跡の陥穴が、中ノ沢遺跡の陥穴の形態へと直接変化していったのかは即断はできないかもしれないが、平面形態や深度の点からⅡ類への変化はあり得るのではないだろうか。ここからⅠ類への変化が連続的なものかどうかは分からないが、前期中葉までにはこの形態が出現していたことは指摘できよう。

最後に陥穴列から推定される狩猟形態について触れておきたい。大堀遺跡では陥穴列が急な崖際に構築されていることから、追い込み猟に用いられたと推定した（立木・寺崎ほか1996）。中ノ沢遺跡においても陥穴列は平坦面から斜面に移行する部分に築かれている。ただ中ノ沢遺跡の場合、斜面は大堀遺跡ほど急なものではなく、むしろ尾根の南際に沿って構築されていると見るほうが妥当である。また斜面の下は沢地でもあることから、中ノ沢遺跡の陥穴列は水を求めてやってきた動物を捉える目的で構築されていた可能性が高いと推定される。

B．土器

先述したように本遺跡からは、多数の早期の土器が出土している。これらの早期の土器の中でA群Ⅰ類（押型文土器）は約8割を占めている。そして、それに伴うと考えられるA群Ⅲ類（撚糸文土器）・A群Ⅳ類（縄文土器）・A群Ⅴ類（無文土器）を加えると早期の土器は出土土器の約9割を占めるといっても過言ではない。また、本遺跡は活火山である妙高山麓に位置していることから、その層序には鍵層となり得る大田切川火山灰、赤倉火砕流堆積物と呼ばれている2つの火山噴出物を認めることができる。今回は、過半数の土器が出土し、層位的にも安定した状況を呈しているB区において、赤倉火砕流堆積物下のⅧ～Ⅸ層より出土したA群Ⅰ類およびそれに伴うと考えられるA群Ⅲ類～Ⅴ類等に注目し、層位的な出土状況の把握を中心に本遺跡における押型文土器の変遷と編年対比を考えてみたい。

B区からは出土層位・地点が明確な547点の早期の土器が出土している。その内訳は、A群Ⅰ類378点（70%）・A群Ⅳ類84点（15%）・A群Ⅴ類50点（9%）・A群Ⅲ類35点（6%）である。A群Ⅰ類は、A群Ⅰ類1（山形文）・A群Ⅰ類2（格子目文）・A群Ⅰ類3（菱目文）・A群Ⅰ類4（楕円文）等からなり、出土点数は、A群Ⅰ類1は226点、A群Ⅰ類2は37点、A群Ⅰ類3は36点、A群Ⅰ類4は75点である。出土層位は、Ⅸ層・Ⅷ層・Ⅶ層下位・Ⅶ層上位の4層で、Ⅸ層からは2点・Ⅷ層からは146点（27%）・Ⅶ層下位からは290点（53%）・Ⅶ層上位からは109点（20%）が出土している。Ⅸ層を除くⅧ層・Ⅶ層下位・Ⅶ層上位（以下「各層位」とする。）の出土状況の詳細は、第6表のとおりである。それによれば、各層位で主体を占める土器はA群Ⅰ類1であり、Ⅷ層からⅦ層下位にかけてはA群Ⅰ類2･3類の減少とA群Ⅴ類の増加、Ⅶ層下位からⅦ層上位にかけてはA群

層位／分類	Ⅷ層	Ⅶ層下位	Ⅶ層上位
A群Ⅰ類1	42%	40%	47%
A群Ⅰ類2	9%	5%	8%
A群Ⅰ類3	9%	5%	5%
A群Ⅰ類4	15%	15%	12%
A群Ⅰ類	75%	65%	72%
A群Ⅲ類	8%	7%	3%
A群Ⅳ類	17%	17%	14%
A群Ⅴ類	0%	11%	11%

第6表　土器出土状況（B区）

Ⅲ類の減少目立っが、全体においてはそれほどの変化は認められない。

次に、B区において各層で40%以上の占有率を占めるA群Ⅰ類1と常に10%以上の占有率を有するA群Ⅰ類4および「卯ノ木式」(小熊1997a)の指標となる菱目文を特徴とするA群Ⅰ類3について、細分類段階での各層位における出土率の変化を見てたい。それによるとA群Ⅰ類1a(横位帯状施文の山形文)は、Ⅷ層67%・Ⅶ層下位52%・Ⅶ層上位49%と下層ほど出土率が大きく、Ⅷ層は前層比の29%増と最大である。A群Ⅰ類1b(横位密接施文の山形文)は、Ⅷ層11%・Ⅶ層下位32%・Ⅶ層上位37%とA群Ⅰ類1aとは反対に下層ほど出土率は小さく、Ⅷ層では前層比の66%減となる。A群Ⅰ類1c·d(縦位施文の山形文)は、Ⅷ層22%・Ⅶ層下位16%・Ⅶ層上位14%とA群Ⅰ類1aと同様に下層ほど出土率が大きくなり、Ⅷ層では前層比の38%増と最大となる。A群Ⅰ類3は、Ⅷ層31%・Ⅶ層下位55%・Ⅶ層上位14%とⅦ層下位では前層比の77%増の55%ととなり最大値を示すが、Ⅶ層上位では前層比の72%減と急激に落ち込む。A群Ⅰ類4aは、Ⅷ層67%・Ⅶ層下位32%・Ⅶ層上位27%と下層ほど出土率が大きくなり、Ⅷ層では前層比の109%増と最大になる。A群Ⅰ類4bはⅧ層33%・Ⅶ層下位68%・Ⅶ層上位73%とA群Ⅰ類4aとは反対に上層に行くにしたがい出土率を増加させる。そして、Ⅶ層下位では前層比の106%増の68%、Ⅶ層上位では前層比の7%増の73%と横這いではあるが最大となる。

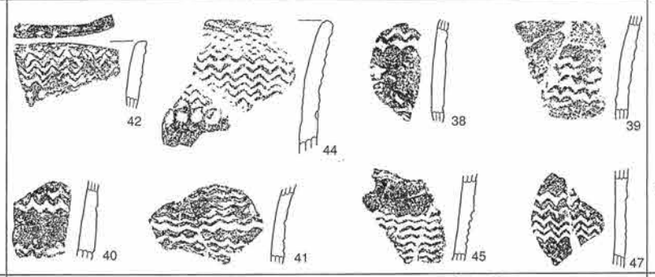
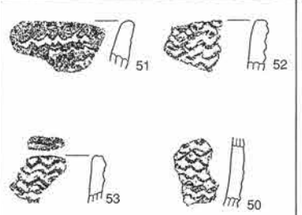
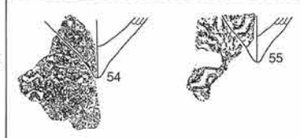
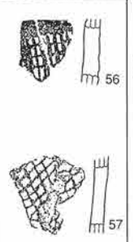
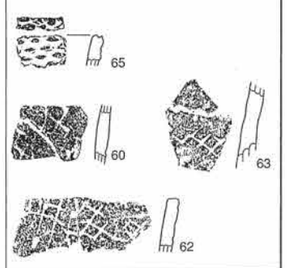
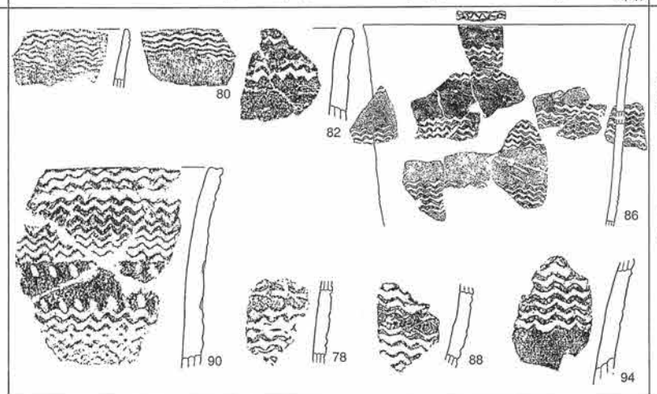
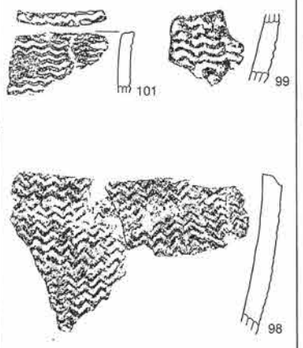
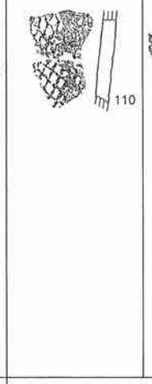
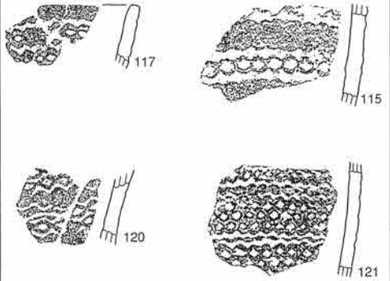
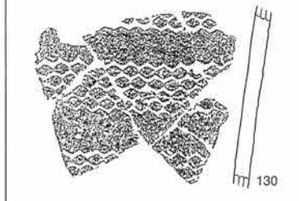
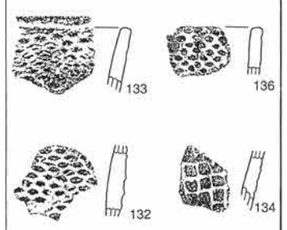
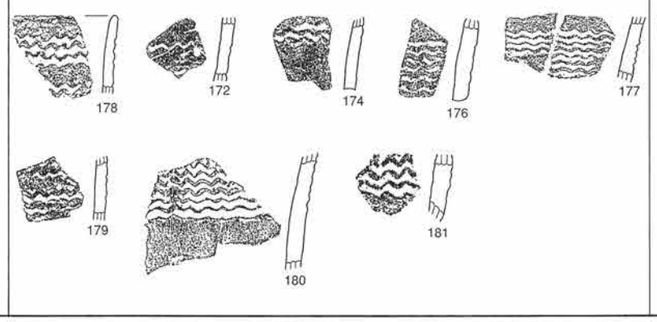
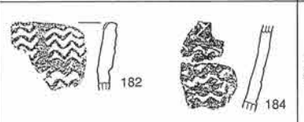
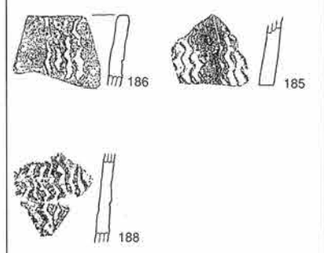
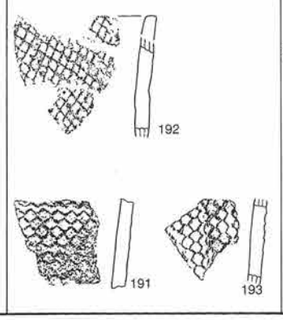
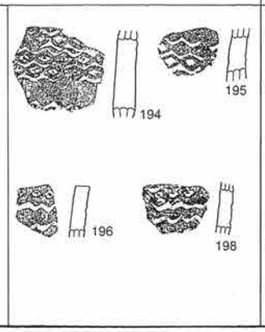
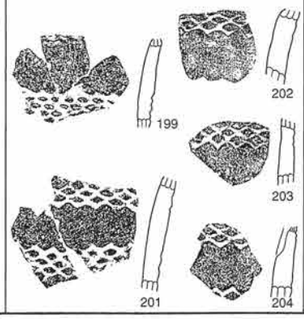
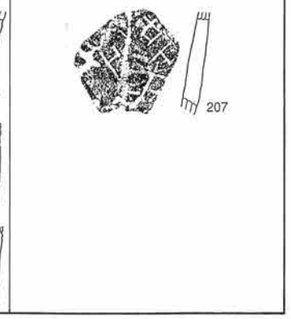
このように、A群Ⅰ類1aとA群Ⅰ類1c·dおよびA群Ⅰ類4aは下層ほど出土率が大きく、反対にA群Ⅰ類1bとA群Ⅰ類4bは上層に行くにしたがい出土率が増加する。すなわち、本遺跡においては下層から上層に行くにしたがい文様施文の主体が帯状施文から密接施文へと変化することが見てとれる。またA群Ⅰ類3は、Ⅶ層下位においてピークに達するというように、帯状施文から密接施文への変化とは異なった動態を示す。

では、各層位毎の特徴はどうなのかというと、各層位における押型文全体の占有率の変化は第7表のとおりである。各層位において共通していることは、A群Ⅰ類1は過半数以上あるいはそれ近くを占め、A群Ⅰ類4は20%前後を占めるということである。中でもA群Ⅰ類1a(横位帯状施文の山形文)は30%～31%と安定しており、各層位において占有率が最も高い。

Ⅷ層においては、押型文では、A群Ⅰ類1はa以外ではc・dが目立ち、他では2·3·4aが多い。ゆえに本層位は、A群Ⅰ類1aや4aに代表されるような帯状施文タイプの割合が多く、A群Ⅰ類1bに代表されるような密接施文タイプの割合が少ないのが特徴であるということができる。なお、Ⅸ層出土の2点のA群Ⅰ類1については、「発掘限界面であるⅨ層上面に食い込む形で出土している。」という発掘所見からみて、Ⅷ層の押型文等に先行するものと考えている。

Ⅶ層下位は、出土量においては最も多い。そして、Ⅷ層と比較してA群Ⅰ類1bは著しい増加、A群Ⅰ類2(格子目文)は著しい減少を示す。そして、A群Ⅰ類4はa(横位帯状施文)の減少とb(横位密接施文)の増加が認められる。この他A群Ⅰ類3は本層位が出土率のピークとなることから、本層位を特徴づける土器と言うことができよう。このようにⅦ層下位においては、押型文では各層位と同様にA群Ⅰ類1aを主体としながらもA群Ⅰ類3の盛行やA群Ⅰ類1b·4bの増加およびA群Ⅰ類2の著しい減少、押型文以外ではA群Ⅴ類(無文)の出現が特徴である。

Ⅶ層上位においては、A群Ⅰ類1はb(横位密接)が各層位の中で最も占有率が高く、A群Ⅰ類3(菱目文)は各層位の中で最も占有率が低い。A群Ⅰ類4(楕円文)ではb(横位密接施文)の占有率が高い。ゆえに本層位は、押型文ではA群Ⅰ類1aを主体としながらもA群Ⅰ類1bとA群Ⅰ類4bという密接施文タイプが目

分類 / 層位	A群Ⅰ類1a	A群Ⅰ類1b	A群Ⅰ類1c-d	A群Ⅰ類2	A群Ⅰ類3	A群Ⅰ類4a	A群Ⅰ類4b
Ⅶ層上位							
Ⅶ層下位							
Ⅷ層							

第14図　縄文時代早期土器層位別組成

立つ。押型文以外ではA群Ⅲ類（撚糸文）の著しい減少が特徴である。

次に、このような事実を踏まえて各層位の編年対比を試みてみたい。本県における押型文土器の研究は、戦前の1930年代後半において、県内の資料が八幡一郎や齊藤秀平によって紹介（八幡1936・齊藤1937）され、その存在が周知された。戦後は、中村孝三郎の津南町卯ノ木遺跡（中村1963）や上川村室谷洞窟遺跡（中村1964）の発掘調査において本格的な研究が開始された（中村1966）。その後かなりの空白期間はあったが、1980年代後半以降、研究は再び盛んになり継続されている（駒形・石原・小熊1984・1986、駒形・小熊1988、佐藤1987、北村1990ほか）。

そのような研究の経緯の中で、最近、小熊博史は北村　亮の研究（北村1990）を踏まえて、本県における押型文土器群の変遷案を発表した（小熊1997a）。それによると、押型文系土器を第1～4期に区分し、第1期は立野式～樋沢式古段階に並行させ、県内では北村編年第Ⅰ期（北村1990）に対比した。そして、その特徴は撚糸文系土器が主流で、押型文土器は客体的な存在であるとした。第2期は樋沢式の新段階に並行させ、北村編年第Ⅱ期に対比した。その特徴は、横位帯状施文の押型文の盛行である。また、第2期は新旧2段階に細分される可能性が強く、湯沢町宮林B遺跡（佐藤1987）の横位施文の山形文土器を標識とするものが旧段階、津南町卯ノ木遺跡の菱目文土器を標識とするものが新段階であると指摘している。第3期は細久保式に並行し、北村編年第Ⅲ期に対比される。その特徴は、楕円文を主体とした横位密接施文が顕著となり、沈線文系土器が地域は限定されるが展開する。第4段階は高山寺式以降に並行する。その特徴は、押型文系土器がほぼ消滅し、沈線文系土器が県内全域に分布する。

この変遷案にB区各層位出土の土器群を対比すると、まず全体的に見てA群Ⅰ類1a（横位帯状山形文）が主体を占め、撚糸文土器の存在が顕著ではなく、沈線文土器は出土していないという特徴から、これらの土器群は、変遷案の第2～3期にほぼ対比されるであろうということが言える。

各層位においては、Ⅷ層は、A群Ⅰ類4aや1bに代表されるように帯状施文の割合が高く密接施文の割合が少ない、無文土器が未検出という特徴を考えると、第2期旧段階に対比される。Ⅶ層下位は、A群Ⅰ類3（菱目文）の盛行およびⅧ層と比較して帯状施文の減少と密接施文の増加が特徴としてあげられることから、変遷案第2期新段階あるいは卯ノ木式（小熊1997b）に対比される。しかし、80の口縁部内面における横位帯状施文の山形文は、宮林B遺跡（佐藤1987）の横位施文の山形文土器にも認められる変遷案第2期旧段階に近似する資料であるというような一面も有している。またA群Ⅴ類では、156・157のような表裏縄文土器も認められる。Ⅶ層上位は、A群Ⅰ類1bやA群Ⅰ類4bといった密接施文の占有率が最も高くなる一方、A群Ⅰ類4aに代表される帯状施文の占有率が最も低くなる。これらの特徴から、Ⅶ層上位は変遷案第3期に比定される。

以上のことから、B区Ⅷ層とⅦ層下位は樋沢式の新段階、Ⅶ層上位は細久保式にそれぞれ並行するものと考えられる。ただ、第7表を見るかぎりにおいては、押型文土器における様相

層位 / 分類	Ⅷ層	Ⅶ層下位	Ⅶ層上位
A群Ⅰ類1a	31%	30%	31%
A群Ⅰ類1b	5%	17%	23%
A群Ⅰ類1c・d	10%	9%	9%
A群Ⅰ類1	46%	56%	63%
A群Ⅰ類2	17%	6%	10%
A群Ⅰ類3	17%	17%	10%
A群Ⅰ類4a	13%	7%	5%
A群Ⅰ類4b	7%	14%	12%
A群Ⅰ類4	20%	21%	17%

第7表　押型文土器占有率（B区）

の画期は、Ⅶ層下位とⅧ層の間に存在することがうかがえる。なお、先述しているように各層位においてA群Ⅰ類1a（横位帯状施文の山形文）が主体を占めていることは、本遺跡の押型文土器における大きな特徴である。

また、南側に近接する大堀遺跡出土の押型文土器（立木・寺崎ほか1996）との対比は、大堀遺跡出土の押型文は山形文が施文されているもの（Ⅱ群A類）が主体で、次いで楕円文が施文されているもの（Ⅱ群B類1）が続くという点で本遺跡の状況と一致する。しかし、大堀遺跡においては、楕円文を中心に密接施文が目立ち、異種原体同一施文も認められる。このような事実から、大堀遺跡出土の押型文土器は、今のところ本遺跡のⅦ層上位またはそれ以後に対比される可能性が強いと考えられる。

最後に、本遺跡における押型文土器と表裏縄文土器の関係に触れて終わりとしたい。本遺跡において表裏縄文土器は、156･157はB区Ⅶ層下位、260はC区⑤層下位、319～321はB区Ⅶ層上位から出土している。これらの層位からは、いずれも押型文土器が出土しており、これらの表裏縄文土器は、押型文土器と共伴する可能性が大きい。仮に押型文土器と表裏縄文土器が共伴することが事実とするならば、本県における表裏縄文土器は、草創期末（？）→早期初頭（大堀）（立木・寺崎ほか1996）→早期前半（中ノ沢）という変遷をたどり、最終的には早期後半の下別当遺跡の表裏縄文土器（中村1959）に至る可能性が指摘できる。ただ、このような仮説の事実認識は、今後の資料の増加を待って検討を加え、検証していきたい。

C．石器

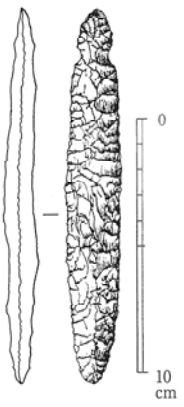
本文では出土石器を地区別の層位ごとに報告した。土器の方は層位で微妙な時期差が捉えられるようだが、石器では層位ごとに石器形態や組成に大きな差が出なかった。そこで中ノ沢遺跡の全地区・全層位出土石器を一括して押型文土器形式のうち樋沢式～細久保式に伴う石器群として捉え、その形態組成・石材についてまとめておきたい。なお、一部早期以外の石器が含まれているようなので、それについてもここで改めて検討する。

（1）石器組成（第1表・第16・17図）

中ノ沢遺跡から出土した石器は全地区・全層位合わせると279点で、内訳は石鏃20点、石匙4点、不定形石器18点、両極石器29点、篦状石器6点、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨石類24点、特殊磨石16点、擦切具1点、砥石2点、台石1点、パステル形石製品1点、剥片128点、砕片15点、礫11点である。これを狩猟具・工具・調理具の割合（鈴木1996）に直すと、狩猟具（石鏃）7.1%（20点）、工具（打製石斧・磨製石斧・篦状石器）3.2%（9点）、調理具（石匙・磨石類・特殊磨石）15.8%（44点）であり、調理具の割合が高いことが分かる。次に各石器形態ごとに見ていきたい。

石鏃　E類だけは前期に属すると推定される。ほかはすべて押型文土器に伴うものと考えられるが、わずかな差を捉えるなら、A・C・D類がⅦ層下位とⅧ層から出土し、B類がⅦ層上位から出土していることから、B類が若干新しい可能性もある。

石匙　4点のうち、1点だけが縦形である（14）。この時期の石匙は刃部とつまみ部分を集中的に作り出すものが多いが、Ⅲ層出土の14は全面が平坦剥離で覆われている。形態や調整だけでなく、使用石材が良質の珪質頁岩であるという面からも中ノ沢遺跡では異質なものであり、時期的に分離される可能性が高い。なお、同種の石匙は中里村泉竜寺遺跡に例がある（第15図）。泉竜寺遺跡は前期諸磯a式期を主体とする遺跡で



第15図
泉竜寺遺跡出土の
石匙（中村1978）

あることから、中ノ沢遺跡の14も前期に属する石器なのかもしれない。

不定形石器　J類のいわゆる「微細剥離のある剥片」が多い。素材となる剥片も各類通して小型のものに限られている。

両極石器　2極1対と4極2対のものがある。このうち黒曜石製のものは後で石材組成のところで述べるように、出土状況から石器製作の過程で作出された可能性もある。

篦状石器　幅広の剥片の周縁部に施された粗い調整により、全体が楕円形あるいは撥型に仕上げられている。長さにより8㎝前後のものと10㎝前後のものに2大別される。篦状石器は東北地方を中心に分布する石器であるが（鈴木1991）、岩原Ⅰ遺跡など中魚沼地方の早期の遺跡でも検出されている。中ノ沢遺跡で検出された篦状石器は同種の石器の分布域を考える上で重要である。

打製石斧　出土した2点は一般的な打製石斧の形とは異なる上半部に弱い抉入部をもつものである。とくに15は末端部の磨耗が激しい。

磨製石斧　蛇紋岩製の小型の片刃石斧である。素材となった礫の形状を比較的よく残す。

擦切石器　刃部の断面形Ｖ字形の擦切石器であるが、対象物は不明である。

パステル形石製品　中ノ沢遺跡のものは下端部が尖っているが、回転などによって生じる長軸に直行する方向の擦痕は認められず、研磨によってついたと思われる並行あるいは右下がりの線状痕があるのみである。同種の石器は攻玉工具の可能性もあるとされているが（藤田1991）、今回の例については限定しかねる。また、同種の石器の報告例は少なく、早期に属するという確証はない。出土層位がＣ区②層なので早期より新しい時期に属する可能性もある。

磨石類　A類が6点とやや多いが、ほかの類も2～3点ずつほぼ均等に出土している。

特殊磨石　磨りの機能に限定されるA類は4点で、敲きの機能を合わせもつＣ・Ｄ類が12点と75%を占める。

砥石　2点とも筋砥石であるが、筋状の砥面が断続的で断面形も不安定であることから、玉などの加工に伴うものではないと推定される。44は磨石（41）と並んで出土した。台石と磨石が1か所から出土した例は上越市大塚遺跡などにもある（山崎1997）。このような出土状態が使用形態を反映しているのか、埋納したものなのかは、今後の類例の増加を待って検討する必要がある。

（2）石材組成（第18図・図版6）

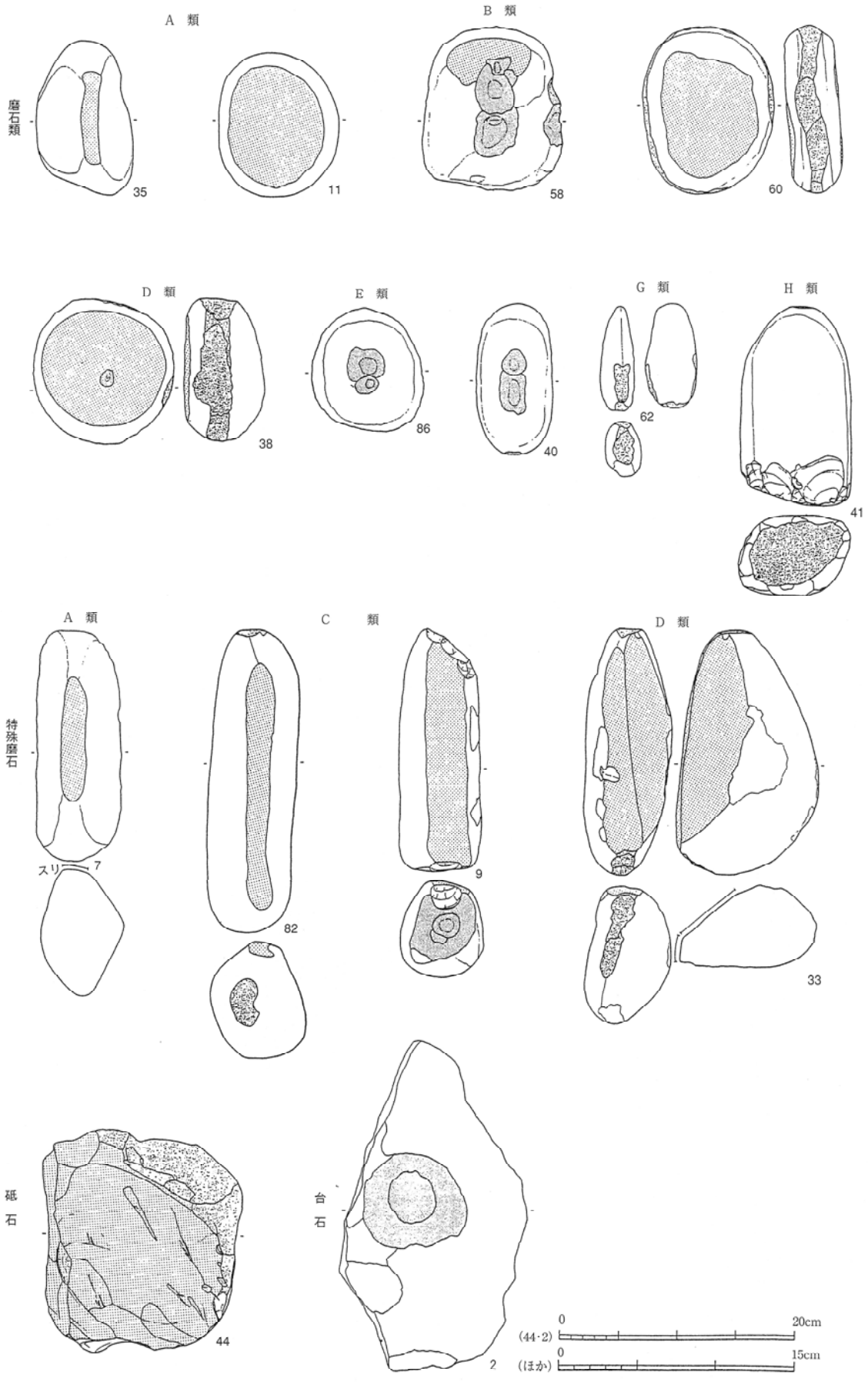
中ノ沢遺跡の石器石材組成は第16図に示すとおりである。重量組成の上位3位までを占める安山岩・砂岩・花崗岩は磨石類など大型の石器に主に用いられたものであり、点数では15.4%にあたる。いずれも川原石を素材としているが、どの河川から搬入したのかまでは特定できなかった。

次に剥片石器の石材について石材ごとに概要を述べる。剥片石器の石材には黒曜石・珪質頁岩・頁岩・無斑晶質安山岩・チャートなどが使われている。

黒曜石　重量では187.76gと少量であるが、点数は131点と全体の47%を占め、ほかを圧倒している。石質は透明度が高く、球顆の入らないものである。黒曜石の多くは剥片・砕片であり、比較的集中して出土した。とくに2Ｆではほかの石材を交えず黒曜石だけが集中していた。接合資料はなかったが、石鏃未製品（47）や両極石器（73）が存在していることから、ここで石鏃が製作されていた可能性もある。ほかに黒曜石が集中する箇所に2Ｈと5Ｈがあるが、いずれも両極石器を含んでおり、ここでも何らかの剥離作業が行われていたことが推定される。石器素材となる黒曜石の搬入形態は原石面をもつものが少ないことや、

A1類
A2類
B1類
B2類
C類
D類
E類
未製品
石鏃
64
5
16
3
90
45
92
47
石匙
66
17
18
14
A類
F類
J類
不定形石器
49
67
68
69
48
19
両極石器
74
75
25
52
22
53
23
篦状石器
27
79
54
80
26
打製石斧
10
15
磨製石斧
81
擦切石器
42
パステル形石製品
59
(27・79・54・80・26・10・15・81・42)
66・17・18・14・53
0
15cm
0
10cm
(ほか)

第16図　石器組成（1）


A 類
B 類
磨石類
35
11
58
60
D 類
E 類
G 類
H 類
38
86
40
62
41
A 類
C 類
D 類
特殊磨石
スリ
7
82
9
33
砥石
台石
44
2
0
20cm
(44·2)
0
15cm
(ほか)

第17図　石器組成（2）

あっても小さいこと、未加工の原石があっても2㎝に満たず、石器素材とするには小形すぎることから、ある程度剥離が進んだ状態であったと考えられる。

珪質頁岩　黒曜石に次いで多く、27点（9.7%）である。石質は白色と青灰色が帯状に入るもので、ほとんど全てがこの母岩に属するとみられる。石匙（18）もこの母岩に属する。珪質頁岩は2Ⅰ～3Ⅰと4H～5Hの2箇所に比較的まとまって分布している。石器形態は剥片・両極石器が多い。

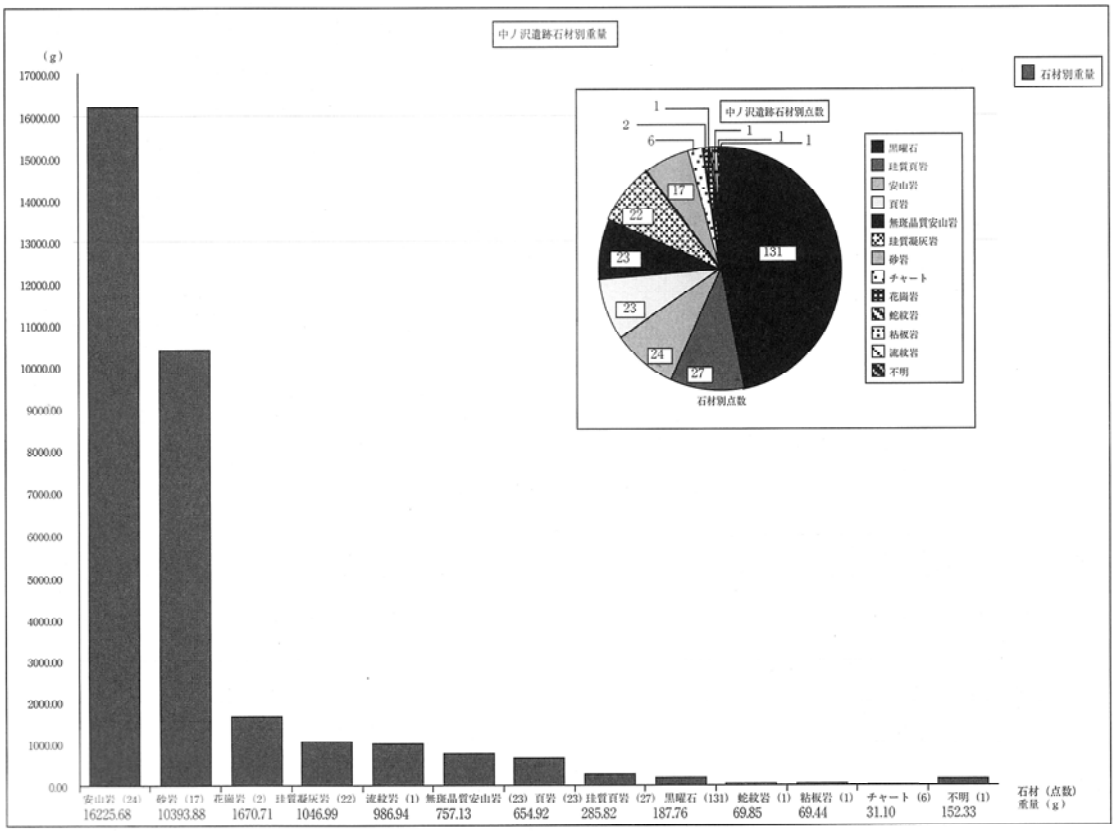
無斑晶質安山岩　23点で、南側斜面部に散漫に分布し集中地点は形成していなかった。石器形態には石匙と剥片・両極石器がある。両極石器は長さが5㎝前後のものが多く、最大で9㎝ほどの大きさのものがある。礫面や節理面をもつものがほとんどないことから、おそらく荒割終了段階で搬入されたものと推定される。石質は複数あるが母岩を特定するには至らなかった。

頁岩　23点で、無斑晶質安山岩と同様に南側斜面部に散漫に分布し、集中地点は形成していなかった。石器形態には不定形石器と剥片がある。

珪質凝灰岩　22点あり、主に2Ⅰに分布する。石器形態は篦状石器と石鏃・剥片などがあるが、剥片と製品との石質は同一ではない。

チャート　6点出土している。両極石器と剥片・礫片がある。

石材組成は以上のようであるが、剥片石器において黒曜石が多いのが特徴である。産地同定はしていないがおそらく信州系のものと推定される。隣接する大堀遺跡でも黒曜石は多くはいっており、剥片石器全体の58.3%（21点）を占めている。ちなみに大堀遺跡のこのほかの石材は珪質頁岩6点（16.7%）、無斑晶質安山岩5点（13.9%）、チャート・玉髄各2点（各5.6%）である。両遺跡とも黒曜石を主体に珪質頁岩・無斑晶質安山岩が伴う組成である。関川右岸の長野県信濃町大道下遺跡（中村ほか1994）の石材組成は黒曜石・無斑晶質安山岩・珪質凝灰岩が主体であり、黒曜石と無斑晶質安山岩を主体とする石材組成がこの時期のこの地域の石材選択の傾向としてあるといえよう。



第18図　石材組成

2. 平安時代

A．土器

ＳＩ４・ＳＩ５・ＳＸ６から比較的まとまった量の土器が出土した。器種は黒色土器の有台椀・無台椀、土師器の無台椀・長甕・小甕、ほかに灰釉陶器の長頸壺・椀、須恵器の壺・甕がある。主体は黒色土器と土師器で、須恵器と灰釉陶器はごく少数である。器形や組成から、これらの土器は松本盆地西南部の編年（小平1990）の８期、佐久平の編年（寺島1991）の９段階、頸城地方の編年（坂井1984）のⅥ～Ⅷ期に該当する資料だと考えられる。土器の様相としてはこの中でも佐久平のものによく類似する。実年代ではおよそ９世紀後半が当てられる。ここでは各器種ごと特徴あるものをあげ、まとめとしたい。

黒色土器内面のミガキの方法に内面全面を隙間なく磨くものと、暗文風にミガキを施すものがある。佐久平の９段階に入ると食器の７割が黒色土器が占めるようになる。すると、それまでミガキ残しのないように丁寧に行われていたミガキが大量生産にともない粗雑化し、縦ミガキが４～６条、横ミガキも口縁付近の狭い範囲のみとなり、結果として暗文風になるものが現れる（寺島1991）。中ノ沢遺跡の黒色土器もその流れの中で理解されるものである。墨書のあるものは５点出土したが、内４点が「六」、１点が「王」である。「六」は中ノ沢遺跡から北へおよそ200ｍほど行った所にある関川谷内Ｂ遺跡の平安時代の住居跡からも出土している。土器の様相では中ノ沢遺跡の方が若干古い印象を受ける。『新潟県の墨書文字（一）』（小林・戸根1995）を見ても「六」は県内ではほかに類例はないようである。なお、平城宮に出土例があるが、数は多くないようである（奈文研1989）。「王」は県内では田上町道下遺跡、吉川町寺町遺跡（小林・戸根1995）、横越町上郷遺跡（赤羽1994）長野県では松本市三間沢川左岸遺跡などで出土している。

土師器長甕はいずれもロクロ成形された酸化焼成のいわゆる「北信系の甕」である。調整により２大別される。１つはロクロ成形後ヘラケズリで仕上げるもの、もう１つはロクロ成形後ヘラケズリとタタキで仕上げるものである。このうち後者については口縁形態の違いで、端部を丸く収める「北信型（系）」、口縁端部を内屈させる「越後型（系）」に分けられている（笹沢浩1988・坂井1988・笹沢正史1995ほか）。中ノ沢遺跡にはこのうち口縁端部を丸く収める「北信型」のみが存在する。なお、このなかには体部内面にススの付着するものがみられる。笹沢正史は長甕の内面に付着した炭化物はコメを煮た時に生じるという民俗例（小林1991）を援用し、長野市において確認された内面に炭化物の付着する長甕がコメを煮たことによって生じたと仮定した。その上で越後ではコメは蒸していたという仮説（坂井1988）を引き、両地域ではコメの調理法が異なっていたと推定している（笹沢正史1995）。これに基づけば、中ノ沢遺跡ではコメを煮ていた可能性が高くなり、土器の形態だけではなく使用方法においても信州に近いことになる。

B．遺構

(1) ＳＸ６について

ＳＸ６は合わせ口の黒色土器と刀子が出土した土坑である。遺物の出土状況から、ＳＸ６の性格は土壙墓の可能性が高いと思われる。新潟県内で平安時代の土壙墓が検出された例は現在のところごく少数であるが、頸城地方では新井市高柳宮ノ本遺跡（高橋1985）・杉明遺跡（高橋1989）などがある（高橋1991）。長野

県では長野市松原遺跡（飯島1993）、松本市北栗遺跡（百瀬1990）、同市南栗遺跡（市村1990）、塩尻市吉田川西遺跡（金原1989）などに検出例がある。このうち中ノ沢遺跡と同時期のものは松原遺跡と北栗遺跡にある。松原遺跡のＳＪ３では仰臥伸展葬の人骨とともに土師器無台椀が出土した。椀の出土状況は、棺上に重ねて置かれていたと推定されるものと棺下あるいは人骨の下に埋められていたものの２種類がある。出土位置はいずれも人骨の左肩付近である。北栗遺跡のＳＫ43は伸展葬の枕元にあたる部分に黒色土器の無台椀・有台椀が別々の方向に倒れ込んだ状態で出土した。中ノ沢遺跡ＳＸ６の遺物は、合わせ口の状態があまり崩れずに残っていたこと、共伴する刀子と下端が共通することから埋設時の状況をよく保っているものと考えられる。よって、これらの遺物が副葬品として土壙に埋納されたとすれば棺上に副葬されたとは考え難く、北栗遺跡ＳＫ43のように土壙底部に置かれていたと考えられる。

（2）竪穴住居について

中ノ沢遺跡ではＳＩ４・５・15の３基の竪穴住居が検出された。住居の時期は松本盆地西南部の編年（小平1990）の８期、実年代ではおよそ９世紀末葉の構築時期が考えられる。

検出状況は良好ではないが、わかる範囲で住居の特徴をあげ、まとめとしたい。

はじめに各住居の構造についてまとめておきたい。ＳＩ４・５は柱穴をもたない１辺が約3.5ｍの方形の住居で、カマドが南辺のほぼ中央に作りつけられている。ＳＩ５では「U」字形に配された礫が検出されたことから、カマドの袖全体に礫が芯材として用いられていたと考えられる。燃焼部はカマドの位置からみて、若干壁を掘り込んでいたと推定される。これに対してＳＩ４では芯材となるような礫は検出されておらず、また、燃焼部も検出された焼土の位置から考えて壁下にあったと推定される。なお、ＳＩ４のカマドの燃焼部付近では大量の土器が出土している。長野県栗毛坂遺跡群Ｂ地区139号住居址のようにカマドの燃焼部に土器を詰め込んだりする例がある（寺島1991）ことから、ＳＩ４でも同様の行為が行われた可能性がある。

ＳＩ15は北東半分が調査範囲外のため全容は不明である。しかしながら、ＳＩ４・５と大きく異なる点として、柱穴とみられるピットが検出されたことがあげられる。

信州の８期の竪穴住居の多くは柱穴のない１辺の長さ約3.5ｍの方形を呈すものである。カマドは燃焼部が竪穴住居の壁下にあるものと、壁を方形に掘り込んでいるものの２種類が支配的である（望月1990）。これとＳＩ４・５を比較すれば、規模・構造ともよく類似していることが分かる。一方、柱穴をもつ建物は各集落の中でも大規模な建物でしか検出されない（望月1990）。このことから、ＳＩ15の構造についてはもう少し検討の余地がありそうである。

近年の発掘調査の結果、妙高山麓の尾根上には９世紀後半から10世紀初頭にかけての遺跡が点在することが明らかとなってきた。その中にあって、信州との境に位置する中ノ沢遺跡が、住居形態や土器様相、土器の使用形態まで信州の系統を強く引いていることは、この地域の開発に携わっていた集団を考える上で興味深い。

要　　約

1. 中ノ沢遺跡は新潟県中頸城郡妙高高原町大字中ノ沢1043－1ほかに所在する。遺跡は妙高山麓南東麓の尾根の先端付近、標高約590～595ｍの所に位置する。遺跡から南へ約1kmのところを関川が東流している。
2. 発掘調査は国道18号妙高野尻バイパスの道路法線内に遺跡が存在したことに起因する。一次調査は平成5年8月7日から26日、 二次調査は平成6年5月23日から11月30日に実施した。 調査面積は6,700㎡である。
3. 調査の結果、縄文時代早期～前期・後期・弥生時代・平安時代・近世？の遺物が出土した。遺構は縄文時代と平安時代のものが検出された。遺跡の主体は縄文時代早期と平安時代である。
4. 縄文時代早期の土器は押型文土器が8割を占め、残りは撚糸文土器・縄文土器などがある。後期の土器には注口土器がある。
5. 石器は大部分早期の所産と見られ、組成は調理具（石匙・磨石類・特殊磨石）15.8%、狩猟具（石鏃）7.1%、工具（打製石斧・磨製石斧・篦状石器）3.2%の割合で、調理具の比率が高い。剥片石器の石材の特徴に黒曜石の割合が比較的高いことが挙げられる。
6. 縄文時代の遺構には早期～前期の陥穴状土坑列・集石土坑・後期の掘立柱建物がある。
7. 平安時代の遺物には黒色土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・フイゴの羽口などがあり、大部分が遺構から出土した。器形・胎土・使用法において、信州の影響を強く受けている様子が窺われる土器群である。時期的には9世紀後半が考えられる。
8. 平安時代の遺構には土壙墓・竪穴住居がある。土壙墓には合わせ口状に重ねられた3枚の黒色土器と刀子が副葬されていた。

第８表　遺構計測表

＊（　）内は推定

遺構No.	位　置	検出層位	種　別	細分	長軸上cm	長軸下cm	短軸上cm	短軸下cm	深さcm	底部ピット深さ(cm)	長軸方向	備　考
ＳＫ２	３Ｅ－６・７	Ⅱ	土壙墓？	－	147	120	100	75	150	－	Ｎ－７°－Ｅ	ＳＫ３に切られる
ＳＫ３	３Ｅ－６・７	Ⅰ	焼土坑	－	(70)	40	(24)	(36)	16	－	Ｎ－７°－Ｅ	ＳＫ２を掘り込んでいる
ＳＩ４	３Ｉ－１５	Ⅴ・Ⅵ	竪穴住居	－	(350)	－	(350)	－	Ⅵ上から16	－	Ｎ－２３°－Ｗ	土器（図版32・33－５～38）
ＳＩ５	５Ｉ－４・５	Ⅵ	竪穴住居	－	(330)	－	(330)	－	Ⅵ上から16	P1－6cm・P2－?	Ｎ－３８°－Ｗ	土器、フイゴ羽口（図版33・34－39～57）
ＳＸ６	２Ｊ－１２	Ⅵ	土壙墓？	－	－	－	－	－	－	－	－	土器、刃子（図版32－１～４）
ＳＫ８	４Ｃ－２５	Ⅵ上面	土坑	－	76	60	64	55	26	－	Ｎ－３３°－Ｅ	
ＳＫ９	４Ｅ－１９	Ⅵ上面	土坑	－	142	116	76	56	110	－	Ｎ－１３°－Ｅ	
ＳＢ１１	２Ｇ	Ⅵ上面	掘立柱建物	－	320	－	190~280	－	－	－	Ｎ－３°－Ｗ	周囲から縄文土器片出土
ＳＸ１２	３Ｂ－２０	Ⅶ	集石	－	50	－	50	－	－	－	－	
Ｐｉｔ１３	２Ｆ－２４	Ⅵ上面	ピット	－	(35)	18	(35)	18	46	－	－	
Ｐｉｔ１４	４Ｈ－９	Ⅵ上面	ピット	－	43	30	43	18	102	－	－	
ＳＩ１５	６Ｈ－１２	Ⅱ	竪穴住居	－	(415)	－	(415)	－	Ⅱ上から25	備考参照	－	土器、鉄滓・P1－48cm・P2－40cm・P3－28cm
ＳＫ１６	３Ｅ－２３	Ⅷ上面	土坑	－	140	(125)	130	(120)	56	－	Ｎ－８５°－Ｗ	
ＳＫ１７	４Ｆ－１３	Ⅷ上面	土坑	－	100	85	86	75	14	－	Ｎ－４１°－Ｗ	
ＳＫ１８	４Ｇ－８	Ⅷ上面	土坑	－	78	60	72	58	10	－	Ｎ－４７°－Ｗ	
ＳＫ１９	３Ｆ－２３	Ⅷ上面	土坑	－	63	35	63	35	18	－	－	
ＳＸ２０	２Ｉ－２４・２５	Ⅶ	集石土坑	－	84	－	68	－	8	－	－	台石（図版20－２）
ＳＸ２１	２Ｉ－２３・２４	Ⅶ	集石土坑	－	82	－	60	－	16	－	－	
ＳＸ２２	２Ｉ－１５・２０	Ⅶ	集石土坑	－	(90)	－	(60)	－	8	－	－	
ＳＫ２３	３Ｈ－１５	Ⅸ	土坑	－	60	42	36	22	11	－	Ｎ－２３°－Ｗ	
ＳＫ２４	１Ｊ－１５・２Ｊ－１１	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅱ類	150	56	120	36	100	－	Ｎ－１８°－Ｗ	押型文土器片（図版19-317）
ＳＫ２５	２Ｊ－７	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	152	100	74	50	80	18	Ｎ－９°－Ｅ	
ＳＫ２６	２Ｉ－２５・２Ｊ－５	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	134	90	48	30	72	14	Ｎ－３°－Ｗ	
ＳＫ２７	３Ｉ－２２	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	114	56	52	22	82	14	Ｎ－６°－Ｗ	押型文土器片（図版19-316）
ＳＫ２８	３Ｉ－１９・２４	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	134	92	56	42	110	20	Ｎ－７°－Ｗ	
ＳＫ２９	３Ｉ－２０	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	140	104	60	50	60	4	Ｎ－１１°－Ｗ	上層から押型文土器片
ＳＫ３０	５Ｉ－５	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	126	92	60	30	84	24	Ｎ－８°－Ｅ	
ＳＫ３１	６Ｉ－２	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅱ類	132	68	96	32	142	44	Ｎ－５°－Ｗ	
ＳＸ３２	５Ｇ－２２	Ⅶ	集石土坑	－	140	－	80	－	10	－	－	
ＳＫ３３	４Ｉ－１２	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	112	94	60	44	92	60	Ｎ－４°－Ｗ	小ピット上面から羽状縄文土器片（図版19-318）
ＳＫ３４	４Ｉ－１３・１８	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅱ類	150	74	100	46	144	38	Ｎ－４°－Ｗ	
ＳＫ３５	４Ｉ－９・１４	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	140	92	58	28	96	20	Ｎ－０°	
ＳＫ３６	５Ｉ－６・１１	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅱ類	134	72	102	36	134	28	Ｎ－１０°－Ｗ	
ＳＫ３７	５Ｉ－２・７	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅰ類	106	90	50	30	84	18	Ｎ－５°－Ｅ	
ＳＫ３８	５Ｉ－４・９	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅱ類	156	90	122	40	130	36	Ｎ－９°－Ｅ	
ＳＫ３９	４Ｉ－１４	Ⅸ	陥穴状土坑	－	104	90	64	48	60	－	Ｎ－０°	掘削中放棄？
ＳＫ４０	２Ｊ－８・９	Ⅸ	陥穴状土坑	Ⅱ類	166	70	74	40	126	36	Ｎ－８°－Ｗ	

第９表　石器計測表（出土石器全点）

図No.	区	グリッド	層位	注記No.	石　材	形　態	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備　考
1	B	ＳＩ－５	不明		珪質頁岩	両極石器	47.25	34.55	12.85	10.84	大きく破損　二極一対
2	B	ＳＸ－２０	不明		安山岩	台石	280	160	64	3330	
3	A	4Ｄ－８	Ⅶ上	474	黒曜石	石鏃Ｂ２	14.25	13	2.65	0.34	
4	A	4Ｄ－１８	Ⅶ上	469	安山岩	磨石Ｈ	124	75	56.5	760	磨（多面）+敲　被熱
5	A	3Ｄ－２４	Ⅶ下	486	黒曜石	石鏃Ａ２	24.1	15.3	3.85	1.13	
6	A	3Ｄ－２１	Ⅶ下	488	黒曜石	石鏃Ａ２	24.85	16.1	3.85	1.27	
7	A	2Ｃ－２	Ⅶ下	498	安山岩	磨石Ｄ	107	90	36	399.19	磨（両面）+敲（一部）+凹み（片）
8	A	2Ｃ－２	Ⅷ	499	安山岩	特殊磨石Ｃ	156	52	63	766.47	磨（一稜、一端）+敲（両端）被熱
9	B	2Ｈ－２４	Ⅰ		安山岩	特殊磨石Ａ	146	54.5	81.5	1012.96	磨（一稜）
10	B	2Ｈ－８	Ⅱ		頁岩	打製石斧	147.65	45	20.5	163.03	
11	B	5Ｈ－１２	Ⅱ		安山岩	特殊磨石Ｃ	115	46	71	563.14	磨（一稜）+敲　被熱
12	B	４Ｉ－７	Ⅱ		安山岩	磨石Ａ	126	42.5	101	658.06	磨（二稜）被熱
13	B	2Ｉ－１８	Ⅲ		黒曜石	石鏃Ｃ	18	13.4	3.75	0.63	両脚欠損（右脚は後世の欠損）
14	B	2Ｊ－７	Ⅲ		珪質頁岩	石匙	113.4	21.3	7.6	23.01	縦形
15	B	5Ｈ－１２	Ⅲ		頁岩	打斧	142	55.35	17.25	158.61	使用痕（Ａ型草刈？）顕著
16	B	5Ｈ－６	Ⅶ上	271	黒曜石	石鏃Ｂ１	12.85	15.5	1.65	0.27	
17	B	2Ｇ－２０	Ⅶ上	233	珪質頁岩	石匙	46.75	55.2	8	16.8	横形
18	B	2Ｉ－１０	Ⅶ上	681	珪質頁岩	石匙	21.5	53.35	4.15	6.7	横形　末端欠損
19	B	4Ｈ－２２	Ⅶ上	1016	黒曜石	不定形石器Ｊ	13.7	31.25	4.1	1.72	礫面あり
20	B	4Ｈ－２１	Ⅶ上	477	黒曜石	不定形石器Ｊ	41.1	17	5.6	3.56	線打面
21	B	４Ｉ－５	Ⅶ上	1095	珪質頁岩	両極石器	32.85	16.55	5.35	2.51	単剥離打面？　二極一対
22	B	4Ｈ－１５	Ⅶ上	1046	珪質頁岩	両極石器	17.2	14	8.9	2.07	二極一対
23	B	2Ｉ－１７	Ⅶ上	784	無斑晶質安山岩	両極石器	24	26	4.85	2.85	上半欠損　二極一対
24	B	4Ｈ－２１	Ⅶ上	885ｃ	無斑晶質安山岩	両極石器	52.2	28.05	10.25	12.32	四極二対
25	B	5Ｈ－２	Ⅶ上	288	黒曜石	両極石器	18.15	11.1	5.4	1.04	二極一対
26	B	2Ｉ－１７	Ⅶ上	782	珪質凝灰岩	篦状石器	15.95	51.6	18.95	116.47	
27	B	４Ｉ－１	Ⅶ上	485	珪質凝灰岩	篦状石器	77	37.8	19.55	66.23	
28	B	5Ｈ－１０	Ⅶ上	1154	砂岩	特殊磨石Ａ	120.5	64	62	561.89	磨（一稜、一部）
29	B	4Ｈ－２４	Ⅶ上	1090	安山岩	特殊磨石Ｃ	111.5	59	73	552.89	磨（一稜）+敲（片端）被熱
30	B	3Ｆ－１１	Ⅶ上	255	安山岩	磨石Ａ	90	99	42	563.41	磨（一ヶ所）被熱
31	B	3Ｉ－２３	Ⅶ上	861	安山岩	磨石Ａ	93	78	39	379.46	磨（片面）被熱
32	B	5Ｈ－１０	Ⅶ上	1152	砂岩	磨石Ａ	126.5	67.5	66	703.75	磨（稜）　被熱
33	B	4Ｆ－１１	Ⅶ上	1295	砂岩	特殊磨石Ｄ	157	55	90	939.81	磨（一稜+敲（両端））
34	B	5Ｈ－１０	Ⅶ上	1153	安山岩	磨石Ａ	71	43	74	381.06	磨（多面）半分欠損？　被熱
35	B	5Ｈ－１６	Ⅶ上	1083	安山岩	磨石Ａ	98	62	65	472.31	磨（稜上）
36	B	3Ｈ－２３	Ⅶ上	592	花崗岩	磨石Ｃ	114	38	76.5	507.09	磨（片面）+敲（一部）被熱
37	B	4Ｈ－２２	Ⅶ上	997	砂岩	磨石Ｃ	169	35.5	35.5	263	磨（片面）+敲（両端）欠損多
38	B	4Ｈ－２２	Ⅶ上	1001	砂岩	磨石Ｄ	93	90.5	52	556.72	磨（片面）+敲（周）+凹み　被熱
39	B	4Ｇ－１８	Ⅶ上	385	安山岩	磨石Ｆ	101	86	50	521.98	凹み（両面）+敲（両端）

40	B	2H－14	Ⅶ上	131	砂岩	磨石F	97	49	30	231.06	凹み（両面）+敲（一ケ所）
41	B	4H－11	Ⅶ上	342	安山岩	磨石H	128	71	51	799.94	敲　砥石（44）と共伴　被熱
42	B	2I－25	Ⅶ上	815	砂岩	掻切石器	61	94	12	77.05	左右端部欠損
43	B	3F－18	Ⅶ上	242	砂岩	砥石	95	61	41	188.2	
44	B	4H－11	Ⅶ上	341	砂岩	砥石	189	158	78	2360	
45	B	2F－19	Ⅶ下	433	黒曜石	石鏃D	27	17	2.25	0.64	片脚欠損
46	B	2H－19	Ⅶ下	147	黒曜石	石鏃D	22.85	16.4	2.75	0.57	片脚欠損
47	B	2F－19	Ⅶ下	433	黒曜石	石鏃（未成品？）	22.3	16	3.5	0.94	
48	B	2F－14	Ⅶ下	420a	黒曜石	不定形石器J	17.55	21.3	7.25	2.31	単剥離打面
49	B	2F－19	Ⅶ下	411a	黒曜石	不定形石器A	23	13.45	6.05	1.95	
50	B	5H－6	Ⅶ下	273	黒曜石	不定形石器J	23.95	15.3	4.35	1.54	点面打面
51	B	5H－3	Ⅶ下	1134	黒曜石	両極石器	24.15	34.55	10.25	6.97	礫面打面　二極一対
52	B	5H－7	Ⅶ下	263	珪質頁岩	両極石器	26.85	26.7	11.7	5.43	礫面有　二極一対
53	B	5H－16	Ⅶ下	1237	無斑晶質安山岩	両極石器	93.1	78.5	28.55	207.25	二極一対
54	B	3I－6	Ⅶ下	658	珪質凝灰岩	篦状石器	96.4	52.6	14.75	87.62	
55	B	4H－19	Ⅶ下	1230	安山岩	特殊磨石C	150	76	68	864.32	磨（一稜）+敲（両端）被熱
56	B	2I－17	Ⅶ下	797	流紋岩	特殊磨石D	164	75	77	986.94	磨（一稜、一面）+敲（両端）
57	B	3I－6	Ⅶ下	644	砂岩	特殊磨石C	167.5	61	77	950.97	磨（一稜）+敲（三ケ所）被熱
58	B	4I－4	Ⅶ下	1093	安山岩	磨石B	105.5	90	39	402.55	磨（両面）+凹み（両面、一稜）
59	B	3I－7	Ⅶ下	636	安山岩	特殊磨石D	116	45	67	536.9	磨（一稜、一面）敲（両端）被熱
60	B	2I－18	Ⅶ下	785	砂岩	磨石C	105	85	37.5	518.06	磨（両面）+敲（周）
61	B	4H－2	Ⅶ下	323	安山岩	磨石E	96	74	40	406.42	凹み（片面）被熱
62	B	2H－19	Ⅶ下	148	粘板岩	磨石G	66	23	34	69.44	敲（一端+両側面）
63	B	2I－24	Ⅶ		黒曜石	両極石器	18.65	19.6	5.4	2.3	四極二対
64	B	2I－24	Ⅶ	926	黒曜石	石鏃A1	24.35	11.55	2.75	0.54	片脚欠損
65	B	3I－8	Ⅶ	614	黒曜石	石鏃D	25.4	18.95	2.45	0.71	片脚欠損
66	B	3I－16	Ⅶ	813	無斑晶質安山岩	石匙	55.45	67.35	11.3	35.23	横形
67	B	4H－7	Ⅶ	528	黒曜石	不定形石器F	17.2	27.4	4.5	1.82	背面礫面
68	B	3H－3	Ⅶ	6	黒曜石	不定形石器 J	21.45	15.45	4	1.54	点打面
69	B	2H－24	Ⅶ	155	黒曜石	不定形石器J	21.25	24.9	5.2	1.93	礫面打面
70	B	3H－21	Ⅶ	94	黒曜石	不定形石器J	20.2	15.4	3.7	0.92	打面消失
71	B	2I－13	Ⅶ		黒曜石	不定形石器J	21.4	22.3	3.4	1.44	打面消失
72	B	3I－6	Ⅶ	663	黒曜石	不定形石器J	71.5	11.45	5.4	1.55	線打面
73	B	2F－19	Ⅶ	417	黒曜石	両極石器	27.5	33.75	9.65	7.59	四極二対？
74	B	2H－9	Ⅶ	119	黒曜石	両極石器	26.15	24.45	6.65	4.14	四極一二対
75	B	5H－16	Ⅶ	1052b	黒曜石	両極石器	30.9	21.3	10	5.12	四極二対　礫面有
76	B	3H－7	Ⅶ	23	無斑晶質安山岩	両極石器	56.45	51.45	13.6	41.78	四極二対
77	B	3H－21	Ⅶ	92	黒曜石	両極石器	19.15	16.6	6.85	1.57	四極二対
78	B	2I－15	Ⅶ	762	黒曜石	両極石器	26.7	23.7	8.75	5.49	四極二対　礫面有
79	B	3H－13	Ⅶ	53	珪質凝灰岩	篦状石器	81.75	50.75	14	52.49	
80	B	3H－13	Ⅶ	50	珪質凝灰岩	篦状石器	100.6	49.55	16.65	94.65	
81	B	3H－14	Ⅶ	55	蛇紋岩	磨製石斧	87.2	38.55	13.25	69.85	片刃（刃部左側欠損）
82	B	3I－16	Ⅶ	814	砂岩	特殊磨石C	194	60.5	74	1250.78	磨（一稜）+敲（両）
83	B	4H－8	Ⅶ	321	安山岩	特殊磨石C	108	49	48	372.75	磨（三稜）+敲（片端）（半分欠損）被熱
84	B	5H－14	Ⅶ	1242	砂岩	特殊磨石D	140	69	77	840.21	磨（一稜、一面）+敲（片端）被熱
85	B	3H－8	Ⅶ	26	砂岩	磨石E	119	49	32	316.04	凹み（片面）
86	B	4I－17	Ⅶ	1040	安山岩	磨石E	79.5	71	44	329.55	凹み（両面）
87	B	4H－23	Ⅶ	1231	砂岩	磨石G	83	55	26	184.53	敲（周）
88	B	3H	不明		安山岩	磨石E	114	85.5	39	324.96	磨（片面）+凹み（両面）
89	C	4K－17	②		珪質頁岩	パステル形石製品	39	6	6.5	2.7	
90	C	6K－7	⑤下	1339	黒曜石	石鏃C	21.45	14.75	2.75	0.57	
91	C	4J－25	⑤下	1374	黒曜石	石鏃B2	13.25	16	2.35	0.39	先端欠損
92	C	5K－4	⑤下	1444	珪質頁岩	石鏃 E	30.45	16.1	4.3	1.78	
93	C	6J－12	⑤下	1315	黒曜石	両極石器	17.45	22	9.35	2.6	四極二対　礫面有
94	C	5K－6	⑤下	1395	安山岩	特殊磨石A	159	56	69.5	962.98	磨（一稜）
95	C	6K－9	⑤下	1412	花崗岩	特殊磨石C	138	74	83	1163.62	磨（一稜）+敲（片端）被熱
96	C	4K－5	⑤下	1462	安山岩	磨石B	109	80	42	457.56	凹み（両面）+磨（稜）被熱
97		不明	不明		チャート	両極石器	19.7	25.85	7.85	5.04	四極二対
	A	4D－24	Ⅱ		チャート	礫片	17.7	6.95	8.35	1.02	
	A	3D－1	Ⅵ		珪質頁岩	剥片	58.2	43.35	11.8	18.34	節理による割れ面有
	A	2D－8	Ⅷ	490	珪質凝灰岩	剥片	32.75	35.55	10.15	9.68	単剥離打面
	B	4F－25	Ⅰ		チャート	礫片	19.7	14	9.5	3.1	
	B	4I－4	Ⅱ		珪質凝灰岩	剥片	37.25	40.1	7.45	8.94	打面消失
	B	1G－9	Ⅱ		頁岩	剥片	28.85	42.3	7.65	8.95	複剥離打面
	B	1G－9	Ⅱ		頁岩	剥片	16.15	28	4.95	1.72	複剥離打面
	B	4H－18	Ⅱ		チャート	礫片	26.6	19.85	23.15	9.6	
	B	3G－7	Ⅲ		頁岩	剥片	68.4	38.85	10.9	28.07	使用痕有？上半欠損
	B	4I－1	Ⅵ		黒曜石	剥片	18.45	30.3	6.2	2.03	複剥離打面　背面に礫面有
	B	4I－4	Ⅵ		黒曜石	剥片	16	21.9	6.15	1.58	打面消失
	B	4I－9	Ⅵ		黒曜石	剥片	24.95	10.75	5.45	0.78	複剥離打面
	B	4I－1	Ⅵ		黒曜石	礫片	11.9	28.3	9.2	2.81	三面に礫面有
	B	2I－17	Ⅶ		黒曜石	石鏃	15.15	9.6	2.3	0.3	先端のみ残存
	B	3H－22	Ⅶ	99	チャート	剥片	25.85	43.65	8.95	8.41	礫面打面
	B	2F－19	Ⅶ下	411b	黒曜石	砕片	9.9	9.25	0.85	0.05	線打面
	B	4H－5	Ⅶ下	297	黒曜石	砕片	9.8	5.65	1.25	0.07	線打面
	B	5H－16	Ⅶ下	1056	黒曜石	砕片	8.3	5.5	0.95	0.05	線打面
	B	5H－16	Ⅶ下	1061	黒曜石	砕片	12.85	7.3	1.5	0.09	上半欠損
	B	5H－17	Ⅶ下	1179	黒曜石	砕片	7.45	6	1.3	0.07	打面消失
	B	2H－19	Ⅶ下	147	黒曜石	石鏃（未成品？）	13.9	13.1	2.6	0.46	
	B	5H－6	Ⅶ下	264	安山岩	特殊磨石A	90.5	51	54	406.82	磨（一稜、二面）（半分欠損）

	B	5H－7	Ⅶ下	258	チャート	剥片	27.25	20.5	9.9	3.93	礫面打面
	B	2H－10	Ⅶ下	120	珪質凝灰岩	剥片	23	18.45	6.5	3.98	上半欠損
	B	2I－13	Ⅶ下	730	珪質凝灰岩	剥片	45.75	27.35	11.45	9.8	単剥離打面
	B	4H－4	Ⅶ下	304	珪質頁岩	剥片	15.5	20.65	2	0.56	単剥離打面
	B	4H－10	Ⅶ下	293	珪質頁岩	剥片	19.15	21.25	3.75	1.16	単剥離打面
	B	4H－10	Ⅶ下	296	珪質頁岩	剥片	40	26.3	5.6	5.04	礫面打面
	B	5H－7	Ⅶ下	259	珪質頁岩	剥片	15.45	13.9	3.35	0.63	礫面打面
	B	2I－24	Ⅶ下	811	珪質頁岩	剥片	19.45	45.65	6.4	7.21	摂理が複面　複剥離打面
	B	3I－6	Ⅶ下	648	珪質頁岩	剥片	31.85	18.6	6.35	4.11	線打面
	B	5I－6	Ⅶ下	1280	珪質頁岩	剥片	11.65	19.55	4	0.58	礫面打面
	B	2F－8	Ⅶ下	430	黒曜石	剥片	12.85	19.55	5.1	1.57	打面消失
	B	2F－10	Ⅶ下	426	黒曜石	剥片	21.7	15.6	3.75	0.96	点打面
	B	2F－14	Ⅶ下	421	黒曜石	剥片	11.35	13.3	4.95	0.43	礫打面
	B	2F－14	Ⅶ下	424	黒曜石	剥片	25.2	21.45	6.25	2.2	上半欠損　背面礫面
	B	2F－14	Ⅶ下	425	黒曜石	剥片	13.4	12.15	4	0.55	単剥離打面
	B	2F－14	Ⅶ下	425	黒曜石	剥片	12.3	2.25	2.4	0.37	打面消失
	B	2F－19	Ⅶ下	408	黒曜石	剥片	16.7	18.25	5	1.14	点打面
	B	2F－19	Ⅶ下	419	黒曜石	剥片	46.85	21.6	4.65	4.28	背面礫面　左半分欠損
	B	2H－9	Ⅶ下	118	黒曜石	剥片	9.15	6.2	5.7	0.62	打面消失
	B	2H－14	Ⅶ下	133 a	黒曜石	剥片	11.5	19.1	4	0.69	打面消失
	B	2H－14	Ⅶ下	133 b	黒曜石	剥片	13.4	7.4	1.35	0.15	点打面
	B	2H－15	Ⅶ下	140	黒曜石	剥片	17.65	24.75	3	1.22	礫面打面
	B	2H－18	Ⅶ下	146	黒曜石	剥片	15	23.55	5	1.25	礫面打面（消失）
	B	3H－8	Ⅶ下	28	黒曜石	剥片	11.85	26.9	3.4	1.1	打面消失　背面礫面
	B	3H－24	Ⅶ下	568	黒曜石	剥片	13.9	11.25	2.3	0.32	単剥離打面
	B	4H－9	Ⅶ下	306	黒曜石	剥片	17	18	5.3	1.32	礫面有
	B	4H－10	Ⅶ下	267	黒曜石	剥片	10.9	7.6	1.35	0.1	複剥離打面
	B	4H－12	Ⅶ下	1277	黒曜石	剥片	14.9	25.25	2.65	0.9	礫面打面
	B	4H－14	Ⅶ下	308	黒曜石	剥片	19.7	10.1	5.15	0.9	単剥離打面
	B	2I－19	Ⅶ下	754	黒曜石	剥片	16.15	9.4	4.35	0.67	点打面
	B	3J－1	Ⅶ下	822	黒曜石	剥片	39.15	17.1	7.3	3.48	礫面打面（消失）背面礫面
	B	4H－10	Ⅶ下	293	頁岩	剥片	17.65	15.7	3.3	0.94	礫打面　背面礫面
	B	4H－22	Ⅶ下	1003	頁岩	剥片	37.2	40.7	9.55	10.43	複剥離打面　背面礫面
	B	2I－4	Ⅶ下	679	頁岩	剥片	33.95	38.2	9.3	10.49	単剥離打面
	B	2I－19	Ⅶ下	749	頁岩	剥片	50.65	56.95	13.55	34.61	礫打面
	B	2H－25	Ⅶ下	171	無斑晶質安山岩	剥片	16.25	26.7	3.2	1.1	複剥離打面　背面礫面
	B	3I－7	Ⅶ下	633	無斑晶質安山岩	剥片	55.85	68.55	15.75	49.53	打面消失　右下端欠損　背面礫面有
	B	4I－3	Ⅶ下	1013	無斑晶質安山岩	剥片	50.8	79.3	7.7	25.41	打面消失　右半欠損
	B	2F－14	Ⅶ下	422	不明	不定形石器A	76.1	57.15	38.85	152.33	上半欠損
	B	2H－5	Ⅶ下	106	頁岩	不定形石器A	118.3	55.85	19.45	143.35	上半欠損
	B	2H－25	Ⅶ下	164	珪質頁岩	不定形石器J	30.35	50.35	8	10.76	
	B	2F－14	Ⅶ下	420 b	黒曜石	不定形石器J	27.2	22.35	7	4	
	B	4H－23	Ⅶ下	1224	珪質頁岩	両極石器	29.45	36.45	4.45	4	複剥離打面　二極一対
	B	5H－6	Ⅶ下	265	珪質頁岩	両極石器	14.65	25	6.25	2.53	上部欠損　二極一対
	B	2J－3	Ⅶ下	802	無斑晶質安山岩	礫	35.9	27.75	15.1	14.78	
	B	2H－14	Ⅶ下	132	黒曜石	礫	17.35	15	8.8	1.52	不規則な剥離？有
	B	3I－2	Ⅶ下	627	黒曜石	礫	20.7	13	7.4	1.57	二次加工有？
	B	6H－11	Ⅶ上	1289	珪質凝灰岩	石鏃B	18.85	14	5.15	0.98	上下端欠損
	B	4H－13	Ⅶ上	318	珪質凝灰岩	剥片	32	55.3	15.55	27.65	礫面打面
	B	4H－19	Ⅶ上	985	珪質凝灰岩	剥片	45.75	51	15.3	32.24	単剥離打面
	B	2I－8	Ⅶ上	703	珪質凝灰岩	剥片	34.2	19.8	5.25	3.6	礫面打面
	B	2I－9	Ⅶ上	687	珪質凝灰岩	剥片	58.3	62	12.05	36.78	単剥離打面
	B	2I－9	Ⅶ上	713	珪質凝灰岩	剥片	25.7	32.25	5.75	4.17	単剥離打面
	B	2I－10	Ⅶ上	681	珪質凝灰岩	剥片	21.4	21.2	5.5	1.86	礫打面（右半分欠損）
	B	2G－24	Ⅶ上	236	珪質頁岩	剥片	46.3	25.85	5.45	5.61	打面消失
	B	4H－9	Ⅶ上	303	珪質頁岩	剥片	29.85	19.25	9.15	2.88	上半欠損
	B	2F－14	Ⅶ上	423	黒曜石	剥片	14.45	18	4.75	1.03	礫打面
	B	2F－18	Ⅶ上	416	黒曜石	剥片	15.15	15.6	16.95	1.02	打面消失
	B	4G－21	Ⅶ上	1028	黒曜石	剥片	15.4	18.95	19.95	0.47	打面消失
	B	4G－25	Ⅶ上	361	黒曜石	剥片	21.65	14.7	3.6	1.08	単剥離打面
	B	2H－8	Ⅶ上	115	黒曜石	剥片	11	12	2.95	0.22	上半欠損
	B	2H－14	Ⅶ上	130 a	黒曜石	剥片	12.45	12.55	4.35	0.54	礫打面
	B	2H－14	Ⅶ上	130 b	黒曜石	剥片	9.9	16.15	3.95	0.29	打面消失　下半分欠損
	B	3H－7・12	Ⅶ上	24	黒曜石	剥片	17.3	20.8	7.3	2.28	打面消失
	B	3H－23	Ⅶ上	596	黒曜石	剥片	19.2	33.7	6.2	1.98	打面消失　背面水磨した剥離面
	B	4H－13	Ⅶ上	329 b	黒曜石	剥片	14.75	11.8	2.35	0.37	点打面
	B	4H－14	Ⅶ上	307	黒曜石	剥片	26.65	10.1	2.1	0.51	点打面
	B	4H－15	Ⅶ上	1048	黒曜石	剥片	12.15	14.85	2.45	0.4	礫面打面
	B	4H－21	Ⅶ上	476	黒曜石	剥片	17.7	30.65	4.45	2.08	礫面打面
	B	2I－9	Ⅶ上	686	黒曜石	剥片	20.65	21.3	6.85	3.12	礫面打面　背面礫面
	B	2H－4	Ⅶ上	101	頁岩	剥片	46.2	34.15	7.1	7.1	礫打面
	B	4H－1	Ⅶ上	352	頁岩	剥片	32.35	28.2	5	3.78	礫打面
	B	2I－8	Ⅶ上	695	頁岩	剥片	35.75	37.55	11.7	15.26	単剥離打面
	B	2I－10	Ⅶ上	679	頁岩	剥片	21.8	21.7	4.75	1.69	上下端欠損
	B	2I－14	Ⅶ上	745	頁岩	剥片	33.95	48.2	8.7	11.5	下端欠損
	B	3I－1	Ⅶ上	650	頁岩	剥片	15.95	20.6	3.9	1.23	上半欠損
	B	4I－21	Ⅶ上	484	頁岩	剥片	24.2	49.7	16.55	7.3	礫打面
	B	4H－9	Ⅶ上	311	無斑晶質安山岩	剥片	6.45	55.15	14.75	17.59	二次加工有？上半欠損　礫面有
	B	4H－21	Ⅶ上	885 a	無斑晶質安山岩	剥片	65.25	33.15	14.9	24.42	背面礫面有　上半部欠損
	B	4H－21	Ⅶ上	885 b	無斑晶質安山岩	剥片	31.05	42	7.55	9.88	上半欠損

	B	2I－13	Ⅶ上	776	珪質凝灰岩	不定形石器 G	18.8	113.25	25.85	388.32	擦痕有
	B	4H－13	Ⅶ上	329 a	黒曜石	不定形石器 I	27.7	26.95	7.2	5.91	礫面打面　背面礫面
	B	4H－23	Ⅶ上	999	珪質頁岩	両極石器	25.55	26.1	10.15	5.94	打面欠損　礫面有
	B	3I－6	Ⅶ上	660	珪質頁岩	両極石器	40.65	22.5	7.15	8.55	二極一対
	B	5G－21	Ⅶ上	356	黒曜石	両極石器	32.7	20.2	8.95	7.02	二極一対
	B	2I－19	Ⅶ上	748	砂岩	礫	137.95	54.95	47	371.46	二次加工有？
	B	2F－18	Ⅷ	415 b	黒曜石	砕片	7.4	9.3	2.45	0.14	礫打面
	B	2F－18	Ⅷ	415 d	黒曜石	砕片	7.2	8.45	1.25	0.07	点打面
	B	4H－4	Ⅷ	300	黒曜石	砕片	8.65	7.45	9.95	0.06	複剝離打面
	B	5H－16	Ⅷ	1082	黒曜石	砕片	7.5	9.65	0.9	0.07	複剝離打面
	B	5H－16	Ⅷ	1084	黒曜石	砕片	10.55	9.3	2	0.13	点打面
	B	2J－4	Ⅷ	808	黒曜石	石鏃	13.85	19.15	2.25	0.49	脚部のみ残存
	B	5H－17	Ⅷ	1073	黒曜石	石鏃（脚部）	12.4	10	1.7	0.22	片脚のみ残存
	B	3I－12	Ⅷ	638	黒曜石	石鏃（破損品）	12.65	12.35	4.35	0.41	先端・脚部欠損
	B	2J－2	Ⅷ	933	珪質凝灰岩	剝片	19.45	41.4	8.25	4.9	複剝離打面
	B	4H－4	Ⅷ	302	珪質頁岩	剝片	35.75	43.95	10.65	13.69	複剝離打面
	B	2F－4	Ⅷ	428	黒曜石	剝片	13.5	16.75	3.45	0.55	礫打面
	B	2F－18	Ⅷ	415 a	黒曜石	剝片	12.1	14	2.95	0.49	複剝離打面
	B	2F－18	Ⅷ	415 c	黒曜石	剝片	10.3	8.8	1.35	0.11	線打面
	B	2F－20	Ⅷ	407	黒曜石	剝片	18	24.9	6.45	2.71	礫面打面（点打面）
	B	3F－20	Ⅷ	244	黒曜石	剝片	12.55	27.6	12.25	3.14	線打面
	B	2G－4	Ⅷ	959	黒曜石	剝片	14.55	20.3	3.2	0.8	礫打面
	B	2H－8	Ⅷ	116	黒曜石	剝片	16.9	32.3	6.1	2.38	単剝離打面
	B	2H－24	Ⅷ	159	黒曜石	剝片	23.55	23.15	7.3	3.68	点打面　左半分欠損
	B	3H－9	Ⅷ	32	黒曜石	剝片	11	14.1	2	0.33	打面消失
	B	3H－23	Ⅷ	599	黒曜石	剝片	15.9	17.3	4.45	1.39	全面水磨　単剝離打面
	B	5H－11	Ⅷ	1051	黒曜石	剝片	11.95	18.35	3.25	0.5	上半分欠損
	B	5H－13	Ⅷ	1166	黒曜石	剝片	19.35	13.65	2.95	0.51	礫面打面
	B	5H－14	Ⅷ	1164	黒曜石	剝片	10.75	19.25	4	0.94	全体に水磨している　両端欠
	B	5H－15	Ⅷ	1157	黒曜石	剝片	27.6	15.65	8.35	3.92	背面礫面　左半欠損
	B	5H－15	Ⅷ	1158	黒曜石	剝片	11.45	20.95	1.4	0.29	点打面
	B	5H－16	Ⅷ	1052 a	黒曜石	剝片	14.1	22	9.75	2.7	礫面打面　背面礫面　下半欠損
	B	5H－17	Ⅷ	1073	黒曜石	剝片	8	11.55	4	0.3	上半欠損　背面礫面
	B	2I－15	Ⅷ	763	黒曜石	剝片	12	9.7	2	0.17	礫面打面
	B	4I－5	Ⅷ	1098	黒曜石	剝片	22.45	31.45	8.9	5	複剝離打面
	B	4I－14	Ⅷ	1037	黒曜石	剝片	8.85	10	1.65	0.12	複剝離打面
	B	2G－14	Ⅷ	230	頁岩	剝片	20.75	24.55	8.15	3.38	単剝離打面
	B	3H－21	Ⅷ	95 a	頁岩	剝片	33.65	50.75	8.6	12.78	打面消失
	B	3H－21	Ⅷ	95 b	頁岩	剝片	5.95	14.65	2.75	0.21	線打面　下半欠損
	B	2H－14	Ⅷ	137	無斑晶質安山岩	剝片	46.25	56.4	12.55	37.52	単剝離打面（4片接合）
	B	5H－17	Ⅷ	1081	無斑晶質安山岩	剝片	34.35	20	6.05	2.49	単剝離打面
	B	2I－17	Ⅷ	1471	無斑晶質安山岩	剝片	46.35	75.7	21.4	72.45	複剝離打面
	B	5I－6	Ⅷ	1102	無斑晶質安山岩	剝片	21.75	32.5	7.25	5.89	上半欠損
	B	3H－6	Ⅷ	22	珪質凝灰岩	篦状石器	52.95	41.55	15	34.95	製作中節理面で破損？
	B	2I－17	Ⅷ	900	砂岩	磨石	75	19	43	80.35	端部欠損
	B	5H－12	Ⅷ	1071	珪質頁岩	両極石器	17.6	21.55	5	1.87	複剝離打面　二極一対
	B	4H－19	Ⅷ	987	珪質頁岩	両極石器	81.25	42.6	36.4	120.52	二極一対
	B	2H－25	Ⅷ	161	黒曜石	両極石器	20.6	15.9	6.75	1.94	背面礫面　二極一対
	B	2H－14	Ⅷ	135	黒曜石	両極石器	15.25	12.55	7.95	1.22	二極一対
	B	4H－17	Ⅷ	907	黒曜石	両極石器	12.15	15.85	8.2	1.45	礫面あり　四極二対？（破損品）
	B	3I－5	Ⅷ	1290	無斑晶質安山岩	両極石器	59.65	50.45	12.25	38.96	二極一対
	B	5H－18	Ⅷ	1181	無斑晶質安山岩	礫片	66.75	14.35	5.9	7.07	
	B	SI－4	不明		珪質凝灰岩	剝片	19	27.65	4.25	2.39	線断面
	B	3I－14	不明		黒曜石	剝片	24	17.75	4.45	1.48	打面消失
	B	3I－14	不明		黒曜石	剝片	22.9	17.3	5.1	1.26	点打面
	B	3I－14	不明		黒曜石	剝片	20.75	16	3	0.97	上半欠損
	B	5H－11	不明	1241	無斑晶質安山岩	剝片	36.25	30	8.1	6.4	上半欠損
	B	3I－5	不明		珪質凝灰岩	不定形石器G	50.05	87.75	12.95	50.82	
	C	5I－10	①·②		珪質凝灰岩	剝片	26.85	48.6	7.25	8.47	礫打面
	C	6J－11	②		無斑晶質安山岩	剝片	34.55	36.55	6.85	12.72	二次加工有？上半欠損　礫面有
	C	6J－18	⑤下	1425	黒曜石	石鏃（未成品）	14.8	12.6	3.3	0.55	
	C	6J－12	⑤下	1311	黒曜石	剝片	22.35	33.55	8.6	5.21	打面消失　背面礫面有
	C	6J－18	⑤下	1421	黒曜石	剝片	22.4	9	5	0.66	上部欠損　背面礫面有
	C	4K－4	⑤下	1465	黒曜石	剝片	16.6	18.35	6.4	2.36	礫面打面　背面礫面（水磨）
	C	5K－2	⑤下	1396	黒曜石	剝片	15.2	13.9	2.5	0.43	礫面打面　背面礫面（水磨）
	C	6K－9	⑤下	1416	黒曜石	剝片	15	29.3	5	1.81	礫打面（点）
	C	6K－8	⑤下	1414	黒曜石	剝片	28.9	14.8	4.2	1.43	単剝離打面
	C	5J－21	⑤下	1458	頁岩	剝片	38	43.15	9.45	11.86	右上欠損
	C	6J－22	⑤下	1344	黒曜石	礫	11	17.9	3.3	0.71	半分欠損　二次加工有？
	C	6J－22	⑤上	1344	頁岩	剝片	15.75	25.1	5.5	1.23	単剝離打面
	C	4J－20	⑥	1367	無斑晶質安山岩	剝片	35.65	27.65	7.25	6.48	単剝離打面
	C	4I－20	⑦下	1130	黒曜石	剝片	17.7	19.45	4.75	1.11	礫面打面
	C	4J－6	⑦下	1264	無斑晶質安山岩	礫片	87.2	64.95	22.6	92.81	二次加工有？
		不明	Ⅲ		頁岩	剝片	47.85	54.55	6.4	17.4	上半欠損
		不明	不明		黒曜石	砕片	9.5	8.5	6	0.37	
		不明	不明		黒曜石	砕片	7.45	7	1.1	0.06	
		不明	不明		黒曜石	砕片	6	3.95	0.9	0.03	
		不明	不明		黒曜石	砕片	3.8	8.35	0.9	0.02	
		不明	不明		黒曜石	砕片	6.7	8	0.95	0.05	
		不明	不明		無斑晶質安山岩	剝片	63.95	37.6	15	32.2	単剝離打面　礫面残存

第10表　平安時代の遺物計測表

図No.	出土位置	層位	種別	法量（推定ｃｍ）	胎土	色調（内）	色調（外）	焼成	手法	備考
1	ＳＸ６下	－	黒色有台椀	口14.高5	英、チャ	黒	橙5ＹＲ６／８	良	暗文風ミガキ	被熱
2	ＳＸ６上	－	黒色有台椀	口14.高5	英、チャ	黒	橙5ＹＲ６／８	良	暗文風ミガキ	被熱
3	ＳＸ６中	－	黒色椀Ａ1	口13、底4.5、高4	英、チャ	黒	橙5ＹＲ６／６	良	暗文風ミガキ	被熱　左回り
4	刀子	－	－	－	－	－	－	－	－	
5	ＳＩ４	－	灰釉長頸壺	－	－	灰白7.5Ｙ７／１	灰白2.5Ｇ Ｙ８／１	並	－	
6	ＳＩ４⑮ほか	Ⅰ.Ⅱ	須恵壺	(底8.7)	白色砂	暗灰黄2.5Ｙ５／２	黄灰2.5Ｙ４／１	良	底付近ケズリ	
7	ＳＩ４①	－	須恵甕	(底14.7)	白色砂	黄灰2.5Ｙ５／１	黒褐2.5Ｙ３／１	良	内外自然釉	
8	ＳＩ４①	－	黒色有台椀	高台径7	良	黒	明赤褐5ＹＲ５／６	良	内ミガキ、回転糸切	
9	ＳＩ４④⑪ほか	－	黒色椀Ａ２	口12.7、底6、高4	チャ	黒	明赤褐5ＹＲ５／６	並	回転糸切	須恵杯に形似る
10	ＳＩ４③⑪	－	黒色椀Ｂ	口13	白色砂	黒、橙5ＹＲ６／８	橙5ＹＲ６／８	並	－	器面剥落
11	ＳＩ４⑥	－	黒色椀Ｂ	口13、底5、高3.8	チャ、斜長	黒	橙5ＹＲ６／８	－	内ミガキ	外面墨書「六」、左回りロクロ、底部体部墨き
12	ＳＩ４③④	－	黒色椀Ｃ	口15、底5.5、高5	良	黒	にぶい褐7.5ＹＲ５／４	並	内ミガキ	
13	ＳＩ４③④	－	黒色椀Ｃ	(口13.5)	長石、チャ、白色砂	褐7.5ＹＲ４／３	明褐7.5ＹＲ５／８	良	内ミガキ	
14	ＳＩ４③	－	黒色椀Ｄ	(口13.5) 底6（高3.8）	チャ、英、長	黒	橙7.5ＹＲ７／６	良	内ミガキ、回転糸切	内面中央に凹み、外面墨書「王」
15	ＳＩ４①	－	黒色椀	(口13.5)	チャ、斜長石	黒	明赤褐5ＹＲ５／８	良	内ミガキ	灰釉陶器椀の模倣品か？
16	ＳＩ４④⑪	－	黒色椀Ｂ	(底7)	白色砂	黒、橙5ＹＲ６／８	橙5ＹＲ６／８	並	回転糸切	器面剥落
17	ＳＩ４	撹乱	黒色椀Ａ？	底6	チャ、斜長石	黒	橙5ＹＲ６／６	良	ロクロナデ、底部回転糸切	被熱？左回りのロクロ？
18	ＳＩ４	－	黒色椀Ｃ？	(底6)	チャ、白色砂、英、長	黒	褐7.5ＹＲ４／４	良	ロクロケズリ	右回りのロクロ
19	ＳＩ４	－	土師椀Ｂ	(口13.5)	チャ、白色砂、英、斜長	明赤褐5ＹＲ５／８	橙2.5ＹＲ６／６	並	内ミガキ	
20	ＳＩ４	－	土師椀Ｂ	(口12)	長、斜長	赤褐2.5ＹＲ４／６	赤褐2.5ＹＲ４／８	良	内ミガキ	右回りのロクロ
21	ＳＩ４	－	土師椀Ｃ	(口10.5)	チャ、白色砂、斜長	明赤褐2.5ＹＲ５／８	明赤褐2.5ＹＲ５／６	並	内ミガキ	
22	ＳＩ４	－	土師小甕Ａ	口12	英	にぶい褐7.5ＹＲ５／４	にぶい橙7.5ＹＲ６／４	並	－	器面剥落
23	ＳＩ４⑩ほか	Ⅰ	土師小甕Ａ	口12	チャ、長、斜長	にぶい褐7.5ＹＲ６／３	橙7.5ＹＲ７／６	並	－	内外スス
24	ＳＩ４⑩	－	土師小甕Ａ	底5.5	チャ、長、斜長、	橙7.5ＹＲ６／６	にぶい褐7.5ＹＲ５／４	並	－	外スス、左回りロクロ
25	ＳＩ４③④	－	土師小甕Ａ	底9	チャ、長、斜長、英	橙5ＹＲ６／６	橙5ＹＲ６／８	並	－	左回りロクロ
26	ＳＩ４①②	－	土師小甕Ａ	底8	長、英	褐7.5ＹＲ４／３	橙5ＹＲ６／６	並	－	左回りロクロ
27	ＳＩ４①②	－	土師小甕Ｂ	(口13.5)	チャ	にぶい橙7.5ＹＲ６／４	にぶい橙7.5ＹＲ６／４	並	－	
28	ＳＩ４①②	－	土師小甕Ｂ	口18	チャ、長、斜長、英	橙7.5ＹＲ６／８	明褐7.5ＹＲ５／６	良	－	外スス
29	ＳＩ４③ほか	－	土師小甕	底7	チャ、長、	橙7.5ＹＲ６／６	明褐7.5ＹＲ５／６	並	外ケズリ	外スス
30	ＳＩ４①	－	土師長甕Ａ	(口22.5)	チャ、白色砂、英、長	橙5ＹＲ６／８	橙5ＹＲ６／８	並	－	
31	ＳＩ４③④⑤⑦⑨	－	土師長甕Ａ	(口26)	チャ、長、斜長、	赤褐2.5ＹＲ４／８	明赤褐5ＹＲ５／８	良	－	
32	ＳＩ４④⑩⑯	－	土師長甕Ａ	－	英	明赤褐2.5ＹＲ５／８	明赤褐2.5ＹＲ５／８	良	－	
33	ＳＩ４③④⑮	－	土師長甕Ｂ	(口24)	チャ、長、	にぶい赤褐5ＹＲ５／４	にぶい赤褐5ＹＲ５／４	良	ロクロナデ、タタキ、ケズリ	
34	ＳＩ４③④⑮	－	土師長甕	(口23)	チャ、白色砂、長	明赤褐5ＹＲ５／８	橙5ＹＲ６／８	並	－	
35	ＳＩ４③	－	土師長甕	(口18)	白色砂、英、長	にぶい赤褐5ＹＲ５／４	にぶい赤褐5ＹＲ５／４	並	－	内スス
36	ＳＩ４⑮	－	土師長甕	(口24)	チャ	にぶい橙5ＹＲ6／4	にぶい橙5ＹＲ6／4	並	－	
37	ＳＩ４③⑪	－	土師長甕	(口21)	チャ、長、斜長、	橙5ＹＲ６／６	明赤褐5ＹＲ５／６	並	－	
38	ＳＩ４⑨・カマド南	－	土師長甕	(口19.5)	チャ、長	赤褐2.5ＹＲ４／８	明赤褐2.5ＹＲ５／６	並	－	外スス
39	ＳＩ５	Ⅰ.Ⅱ	灰釉碗	(口16.2)	－	浅黄2.5Ｙ7／3	浅黄2.5Ｙ7／3	並	－	光ケ丘1号窯式
40	ＳＩ５床面	Ⅰ	黒色椀Ａ	口13.5	チャ、英	黒	にぶい橙5ＹＲ6／4	並	口縁のみミガキ	外面墨書『六』
41	ＳＩ５カマド南	－	黒色椀Ｂ	(口14.7) 高5（底6）	チャ、斜長	黒	橙2.5ＹＲ6／6	並	内口縁ミガキ	外面墨書『六』右回りのロクロ
42	ＳＩ５カマド南	－	黒色椀Ｂ	(口15)	白色砂、チャ、長、斜長	黒褐5ＹＲ２／１	明赤褐5ＹＲ５／６	並	－	
43	ＳＩ５カマド床	－	黒色椀Ｂ	(口15) 高5（底6）	チャ、斜長、英	黒	橙2.5ＹＲ6／6	並	内ミガキ	被熱？右回り
44	ＳＩ５カマド南	－	黒色椀Ｂ	(口15)	チャ、英	黒	明赤褐5ＹＲ５／８	並	内ミガキ	被熱？
45	ＳＩ５カマド南	－	黒色椀Ｄ？	(口15)	チャ、斜長	黒	橙5ＹＲ6／6	並	内ミガキ	
46	ＳＩ５	－	黒色椀Ｃ２？	(口13)	チャ、白色砂、英、斜長	黒	明赤褐5ＹＲ５／６	並	内ミガキ	
47	ＳＩ５	－	黒色盤	口13.5、高3.5、底7	チャ、長	黒	橙5Ｙ R6／6	並	内ミガキ	被熱？
48	ＳＩ５	－	土師椀Ａ	口14、高5.7、底6.5	チャ、白色砂、英、斜長	にぶい赤褐5ＹＲ５／４	にぶい橙5ＹＲ6／4	並	内ミガキ	被熱？
49	ＳＩ５カマド北	－	土師小甕Ｃ	(口15)	チャ、長、英、斜長	橙5Ｙ R6／6	橙5Ｙ R6／6	並	ロクロナデ、ケズリ	
50	ＳＩ５カマド南	－	土師小甕Ｃ	(口12)	チャ、長、英、斜長	橙5Ｙ R6／6	橙5Ｙ R6／6	並	ロクロナデ、ケズリ	
51	ＳＩ５フク土	－	土師小甕	(口13.2)	チャ、白色砂、英、長、斜長	灰褐5ＹＲ５／２	にぶい赤褐5ＹＲ５／６	並	ロクロナデ	
52	ＳＩ５床カマド南	－	土師長甕Ａ１	(口26.4)	チャ、白色砂、英、	橙5Ｙ R7／6	橙5Ｙ R6／6	良	ロクロナデ、ケズリ	
53	ＳＩ５床、床西、カマド南	－	土師長甕Ａ２	(口23.1)	チャ、斜長、	橙5Ｙ R6／8	橙5Ｙ R6／8	良	ロクロナデ、ケズリ	内スス
54	ＳＩ５カマド北、南	－	土師長甕Ａ２	(口28)	チャ、白色砂、	にぶい赤褐5Ｙ R5／4	にぶい橙7.5Ｙ R7／4	並	ロクロナデ、ケズリ	内外スス
55	ＳＩ５カマド南	－	土師長甕Ａ２	(口24)	チャ、英、白色砂、	にぶい赤褐5ＹＲ５／４	にぶい赤褐5ＹＲ５／３	並	ロクロナデ、ケズリ	内外スス
56	ＳＩ5カマド北、南、東	－	土師長甕Ｂ	－	チャ、長、英、	橙5Ｙ R６／６	橙5Ｙ R６／８	並	ロクロナデ、ケズリ、タタキ	内外スス
57	ＳＩ５	－	フイゴの羽口	－	白色砂	にぶい褐7.5Ｙ R6／3	明褐7.5Ｙ R５／６	並	－	
58	ＳＩ15	－	内外黒色	(口11.4)	斜長	黒	黒	並	内外ミガキ	
59	ＳＩ15　P3	－	黒色椀	(口13)	チャ、長	黒	明赤褐5ＹＲ５／６	良	内ミガキ	
60	23トレ	Ⅰ	灰釉碗	(底6.5)	－	浅黄2.5Ｙ R７／３	浅黄2.5Ｙ R７／３	並	内自然釉？、外刷毛ぬり	光ケ丘1号窯式
61	6Ｊ-２２	－	灰釉碗	(口13.8)	－	浅黄5Ｙ７／３	浅黄5Ｙ７／３	並	内外釉	光ケ丘1号窯式（緑釉か？）
62	－	表採	灰釉碗	(口13.8)	－	オリーブ黄5Ｙ６／３	灰白5Ｙ７／１	並	内刷毛ぬり、外無釉	光ケ丘1号窯式（若干古いか？）
63	5Ｈ－１５	Ⅰ	灰釉碗	(口13.8)	－	浅黄5Ｙ７／３	浅黄5Ｙ７／３	並	内外刷毛ぬり	光ケ丘1号窯式
64	5Ｈ－２	Ⅰ	灰釉碗	(口13.8)	－	オリーブ黄5Ｙ６／４	浅黄5Ｙ７／４	並	内外刷毛ぬり	光ケ丘1号窯式
65	25トレ	Ⅰ	須恵甕	－	英、長	灰黄2.5Ｙ6／２	暗灰黄2.5Ｙ5／２	不良	内外格子目	
66	7トレ	－	黒色椀Ｂ	(口12.6)	チャ、英	黒	明赤褐5ＹＲ５／６	並	内ミガキ、回転糸切	外面墨書『六』
67	5Ｉ－２３	Ⅰ	黒色椀Ｂ	(口13)	チャ、英、	黒	にぶい赤褐5ＹＲ５／４	並	内ミガキ	外面スス
68	3Ｊ－１７	Ⅰ	黒色椀	(底5.7)	チャ、斜長	黒	橙5ＹＲ６／６	並	回転糸切、内ミガキなし？	
69	1トレ	表採	黒色椀	(底5.7)	チャ、長	黒	明赤褐5ＹＲ５／８	良	回転糸切、内ミガキ	
70	3Ｉ－２１	Ⅰ	黒色椀	(底6.9)	チャ、斜長	黒	にぶい橙7.5Ｙ R７／４	並	回転糸切、内ミガキ	
71	5Ｉ－３	Ⅰ.Ⅱ	黒色椀	(底6)	－	黒	にぶい橙7.5Ｙ R７／４	並	回転糸切、内ミガキ	暗文あり
72	6Ｈ－１６	－	黒色椀	(底5.6)	チャ	黒	明赤褐5Ｙ R５／６	良	回転糸切、内ミガキ	暗文あり
73	5Ｉ－５	Ⅰ.Ⅱ	黒色椀	底6.3	チャ、斜長	黒	にぶい橙7.5Ｙ R７／４	並	回転糸切、内ミガキ	
74	6Ｊ－１６	Ⅱ	黒色椀	(口19)	チャ、斜長	明赤褐5ＹＲ５／８	明赤褐5ＹＲ５／８	良	内ミガキ	被熱？もとは黒色土器か？
75	5Ｉ－１０	Ⅰ.Ⅱ	黒色椀	(口14.5)	チャ、斜長、白色砂	橙5Ｙ R６／６	橙7.5Ｙ R６／６	良	内ミガキ	被熱？もとは黒色土器か？
76	3Ｉ－８・１４	－	土師甕	(口22)	チャ、斜長	明赤褐2.5Ｙ５／８	明赤褐2.5Ｙ R５／６	良	ロクロナデ	
77	6Ｊ－１６	Ⅱ	土師甕	(口25)	チャ、英、長、斜長	にぶい橙7.5Ｙ R6／4	橙7.5Ｙ R７／６	並	ロクロナデ	
78	6Ｊ－１６	Ⅱ	土師甕	(口24)	英、長、斜長	明赤褐5Ｙ R５／６	にぶい赤褐5Ｙ R５／４	良	ロクロナデ	
79	3Ｉ－６	Ⅰ	土師小甕	(口12.6)	チャ、英、長	橙7.5Ｙ R６／６	明赤褐5Ｙ R５／６	並	ロクロナデ、ケズリ	内面スス、
80	1トレ	Ⅰ	土師小甕	(口12.6)	白色砂、長、斜長	にぶい褐7.5Ｙ R５／３	明赤褐5Ｙ R５／８	並	ロクロナデ	内面スス、とくに口縁
81	5Ｋ－３	Ⅱ	土師小甕	(口14)	チャ、英、	橙5Ｙ R６／６	橙5Ｙ R６／６	並	ロクロナデ	口縁スス
82	4Ｉ－１２	Ⅰ	土師小甕	(口14)	チャ、英	にぶい橙7.5Ｙ R7／4	にぶい橙5Ｙ R６／４	並	ロクロナデ	口縁スス
83	3Ｉ－６	－	土師小甕	(口10.2)	チャ、斜長、英	にぶい橙5Ｙ R６／４	橙5Ｙ R６／６	並	ロクロナデ	口縁スス
84	2Ｋ－３	Ⅰ	土製品	－	チャ		にぶい橙5Ｙ R６／４	並	－	

胎土凡例）英：石英、チャ：チャート、長：長石、斜長：斜長石　　色調は『新版標準土色帖』（小山・竹原1967）による

法量凡例）口：口径、底：底径、高：器高

引用・参考文献

赤羽正春　1994 『上郷遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第62集　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

阿子島香　1989 『石器の使用痕』考古学ライブラリー56　ニューサイエンス社

阿部雄生　1995 「中ノ沢遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成6年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

飯坂盛泰　1997 「八斗蒔原遺跡・野林遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

飯島哲也　1993 「第Ⅲ章第4節　奈良・平安時代の遺構と遺物」『松原遺跡Ⅲ』長野市の文化財第58集　長野市教育委員会

市村勝巳　1990 「第2章2節　古代の遺構」『南栗遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書7　長野県埋蔵文化財センター

宇井忠英　1996 「岩屑なだれ」『新版　地学事典』地学団体研究所　平凡社

宇野隆夫　1991 「食器計量の意義と方法」『律令社会の考古学的研究ー北陸を舞台としてー』桂書房

大滝良夫・小池義人　1996 「第Ⅴ章　柳平遺跡」『横引遺跡　籠峰遺跡　柳平遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

大竹憲昭　1995 「貫ノ木遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』12　長野県埋蔵文化財センター

小笠原永隆　1994 「琵琶島遺跡採集の縄文土器」『野尻湖博物館研究報告』第2号　信濃町立野尻湖博物館

岡村秀雄　1993 「東浦遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』10　長野県埋蔵文化財センター

小熊博史　1997 a 「卯ノ木遺跡出土土器の研究Ⅰ」『長岡市立科学博物館研究報告』第32号　長岡市立科学博物館

小熊博史　1997 b 「新潟県における押型文系及び沈線文系土器群の様相」『押型文と沈線文』シンポジウム本編長野県考古学会縄文時代（早期）部会

春日真実　1995 「古代集落の展開ー越後を事例としてー」『研究紀要』1995　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1997 「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号　北陸古代土器研究会

金原　正　1989 「第5章第2節2（2）墓」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3ー松本市内その1ー総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3　長野県埋蔵文化財センター

神村　透　1985 「3弥生土器」『長野県史考古資料編全一巻（四）遺構遺物』　長野県史刊行会

北村　亮　1990 『岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集　新潟県教育委員会

小池義人　1995 「関川谷内A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成6年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　1996a 「第Ⅳ章　籠峰遺跡」『横引遺跡　籠峰遺跡　柳平遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　1996b 「関川谷内B遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小島正巳　1985 「妙高山麓松ヶ峯遺跡群」『信濃』37巻5号　信濃史学会

小島正巳　1991 「妙高山麓採集の押型文土器ー松ヶ峯No.202・208遺跡ほか（17遺跡）ー」『新潟県考古学談話会会報』第7号

小島正巳　1993a 「妙高山麓高床山山地の遺跡ー表面採集からの所見ー」『新潟県考古学談話会会報』第12号

小島正巳　1993b 「妙高村松ケ峯No.237遺跡の縄文時代早期土器」『新潟考古』4

小島正巳　1995 「妙高山麓における最近の考古学事情」『妙高火山研究所年報』第3号

小島正巳・早津賢二　1992 「妙高村松ケ峯No.237遺跡採集の押型文土器ー日計式の波及ー」『長野県考古学会誌』64号

小平和夫　1990 「第3章第5節　古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4ー松本市内　その1ー総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4　長野県埋蔵文化財センター

小林昌二・戸根与八郎　1995 『新潟県出土の墨書文字（稿一）』　新潟墨書土器研究会

駒形敏郎・石原正敏・小熊博史　1984 「新潟県における縄文時代早期・前期の基礎的研究（1）」『長岡市立科学博物館研究報告』第19号　長岡市立科学博物館

駒形敏郎・石原正敏・小熊博史　1986 「新潟県における縄文時代早期・前期の基礎的研究（3）」『長岡市立科学博物館研究報告』第21号　長岡市立科学博物館

駒形敏郎・小熊博史　1988 「新潟県における縄文時代早期・前期の基礎的研究（5）」『長岡市立科学博物館研究報告』第23号　長岡市立科学博物館

小林正史　1991 「土器の器形と炭化物からみた先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』創刊号　北陸古代土器研究会

齊藤秀平　1937 「新潟県における石器時代遺蹟調査報告」『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯　新潟縣

坂井秀弥　1984「第Ⅵ章１　今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集　新潟県教育委員会
坂井秀弥　1988「古代のご飯は蒸した『飯』であった」『新潟考古学談話会会報』第２号　新潟考古学談話
笹沢　浩　1988「古代の土器」『長野県史』考古資料編　遺構、遺物
笹沢浩・小林孚　1966「長野県上水内郡信濃町塞ノ神遺跡出土の押型文土器」『信濃』18-4　信濃史学会
笹澤正史　1997「越後頚城郡内の須恵器生産の推移と技術系譜の問題について」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会
笹澤正史　1995「信・越地域にまたがるロクロ土師器甕の在り方について」『新潟考古学談話会会報』第15号　新潟考古学談話
佐藤雅一　1987『川久保遺跡Ⅱ・宮林Ｂ遺跡』湯沢町埋蔵文化財報告第６輯　湯沢町教育委員会
品田高志　1997『呑作－新潟県柏崎市藤橋東遺跡群・呑作Ｇ遺跡発掘調査報告書－』　柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集　柏崎市教育委員会
鈴木俊成　1994「第Ⅵ章１．平安時代の土器」『一之口遺跡東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木俊成　1996「第Ⅶ章３　石器」『清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
鈴木道之介　1991『図録　石器入門事典　縄文』　柏書房
高橋　勉　1989『杉明遺跡』新井市教育委員会
高橋　勉　1985『新井市遺跡調査報告書　上百々遺跡　高柳宮ノ本遺跡』新井市教育委員会
高橋　勉　1991「古代葬送の一形態」『新潟考古学談話会会報』第８号
高橋保雄　1990「第Ⅳ章第２節　石器」『清水上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集　新潟県教育委員会
高浜信行　1996「岩屑流」『新版　地学事典』地学団体研究所　平凡社
滝沢規朗1995「関川谷内Ｂ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成６年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
田中　靖　1991「第Ⅳ章２Ｃｄ　石匙」『城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集　新潟県教育委員会
谷　和隆　1994「日向林Ｂ遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』11　長野県埋蔵文化財センター
親跡　喬　1988『図録　南田遺跡』中郷村教育委員会
立木（土橋）由理子　1996「第Ⅲ章　横引遺跡」『横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
立木（土橋）由理子・寺崎裕助ほか　1996『大堀遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第75集　新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
寺島俊郎　1991「第３章第18節５（１）　古墳時代末から平安時代の遺物」『木戸平Ａ遺跡　ほか』（財）長野県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書12　長野県埋蔵文化財センター
中川成夫・岡本勇・加藤晋平　1966「葎生遺跡」『頸南』　新潟県教育委員会頸南地区総合学術調査会
中川成夫・岡本勇ほか　1967『大貝遺跡』　立教大学考古学研究会
中郷村教育委員会　1987『籠峰遺跡発掘調査概報』
中村孝三郎　1959「縄文早期　下別当遺跡」『ＮＫＨ』Vol.2　No.1　長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1963『卯ノ木押型文遺跡』　長岡市立科学博物館考古研究調査報告第五冊　長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1964『室谷洞窟』　長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1966『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館考古研究調査報告第八冊　長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1978『越後の石器』　学生社
中村孝三郎・小片保　1954『室谷洞窟』長岡市立科学博物館考古研究調査報告第六冊　長岡市立科学博物館
中村由克ほか　1994『丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書－平安時代住居址・押型文土器の遺跡－』信濃町の埋蔵文化財第１集　信濃町教育委員会
奈良国立文化財研究所　1989『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』奈良国立文化財研究所史料第31冊　奈良国立文化財研究所
橋谷田裕治　1997「前原遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成８年度
早津賢二　1985『妙高火山群－その地質と活動史－』第一法規
早津賢二　1994a「妙高火山群研究の1993年における新展開と問題点」『妙高火山研究所年報』第２号
早津賢二　1994b「新潟焼山火山の活動と年代－歴史時代のマグマ噴火を中心として－」『地学雑誌』Vol.103,No.2

早津賢二　1995a 「妙高村史の「妙高山の地形と地質」に関する部分の論評」『妙高火山研究所年報』第3号
早津賢二　1995b 「妙高火山群研究の1994年における新展開と問題点」『妙高火山研究所年報』第3号
早津賢二　1995c 「妙高火山－赤倉火砕流の^{14}C年代」『道添遺跡Ⅱ』 妙高村教育委員会
早津賢二　1996 「妙高火山の火砕流・岩屑なだれ堆積物と降下テフラ」『第四紀露頭集－日本のテフラ』 日本第四紀学会
早津賢二・河内晋平ほか　1992 「妙高火山の大規模崩壊堆積物」『八ヶ岳韮崎岩屑なだれ堆積物の側方岩相変化と発生源の不整合および妙高火山の大規模崩壊堆積物』中部日本における火山体の巨大崩壊堆積物の特性に関する調査研究（研究課題番号03201125）平成3年度科学研究費補助金（重点領域1）研究成果報告
早津賢治・小島正巳　1985 「火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係」『妙高火山群－その地質と活動史－』第一法規
早津賢二・古川成光　1981 「妙高火山赤倉火砕流堆積物と田口泥流堆積物の^{14}C年代」『第四紀研究』20
原　明芳　1989 「第7章第2節吉田川西遺跡にみられる食器の変容」『吉田川西遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3　長野県埋蔵文化財センター
藤巻正信　1991 「第Ⅳ章2Cg　打製石斧」『城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集　新潟県教育委員会
藤田富士夫　1991 「パステル形石製品について」『考古学論究』創刊号　立正大学考古学会
本間信昭・室岡博　1976 『兼俣遺跡　新潟県中頸城郡妙高高原町兼俣遺跡発掘調査報告』妙高高原町文化財調査報告書第1集　妙高高原町教育委員会
町田洋・新井房夫　1992 『火山灰アトラス－日本列島とその周辺』東京大学出版会
妙高団体研究グループ　1969 「妙高火山の形成史と山麓の水理地質－新潟県の第四系・その10－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』No.14
室岡　博ほか　1966 「先史・古代の頸南」『頸南－中頸城郡南部学術総合調査報告書－』 新潟県教育委員会・頸南地区総合学術調査会
室岡　博　1986 『籠峯遺跡－新潟県中頸城郡中郷村籠峯遺跡第一次発掘調査報告書』 中郷村教育委員会
室岡　博・早津賢治　1986 『中古遺跡』妙高村教育委員会
望月　映　1990 「第3章第1節古代の竪穴住居址」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4　長野県埋蔵文化財センター
百瀬新治　1990 「第2章第3節5墓址」『北栗遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書8　長野県埋蔵文化財センター
山崎静雄　1986 「第一章　自然的概観」『妙高高原町史』 妙高高原町
山崎忠良　1997 「大塚遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
八幡一郎　1936 「越後魚沼郡手坂の土器略報」『人類学雑誌』第51巻12号　日本人類学会
渡辺敏泰　1993 「七ツ栗遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』10　長野県埋蔵文化財センター

図　　版

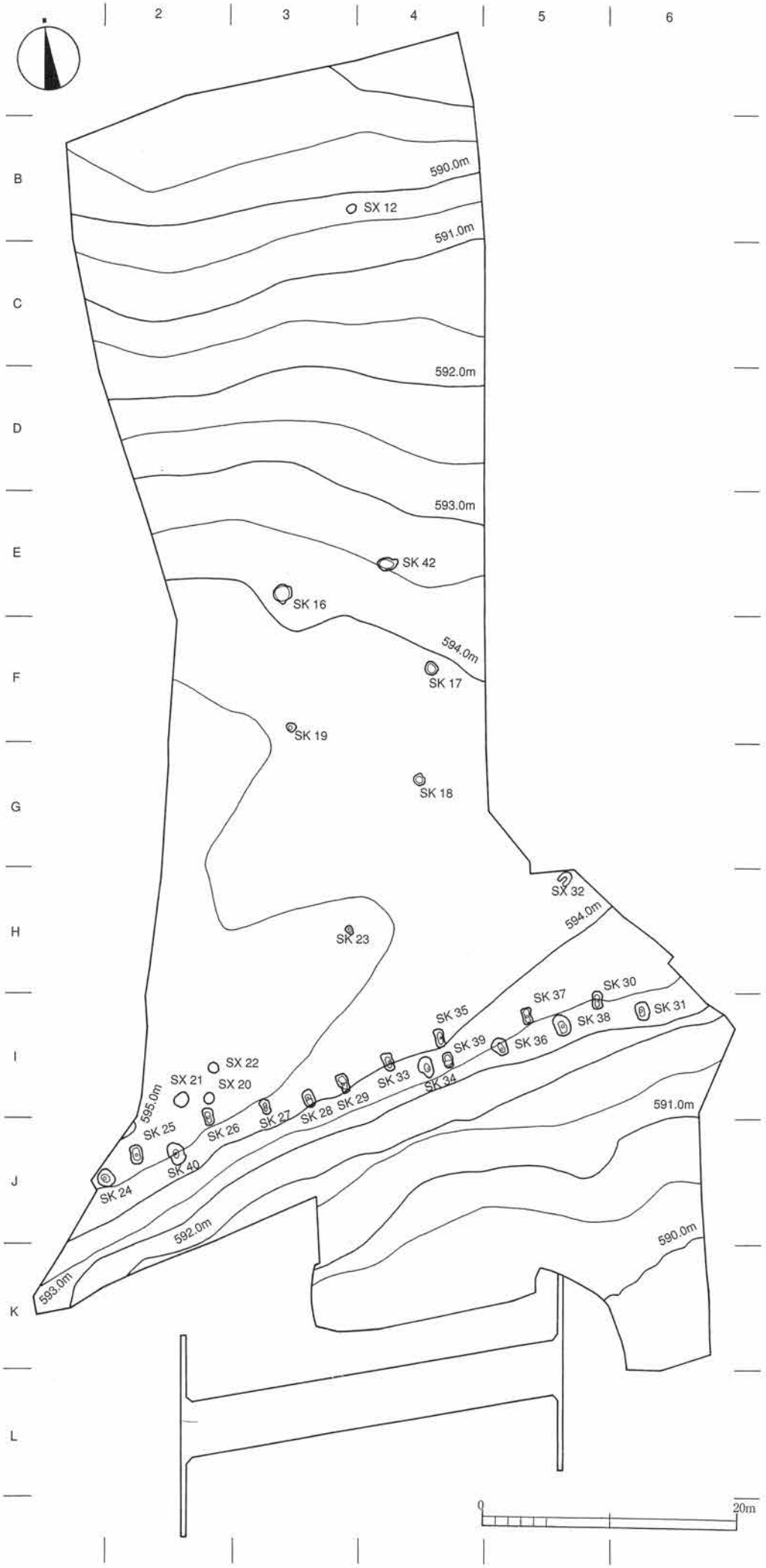
凡　例

1．石器実測図のスクリーントーンは図版20・21に凡例を示した。

2．平安時代の土器実測図は断面白ぬきが土師器・黒色土器、黒塗りが須恵器、網かけが灰釉陶器である。また、黒色土器の黒色処理部分も網かけで表現してある。

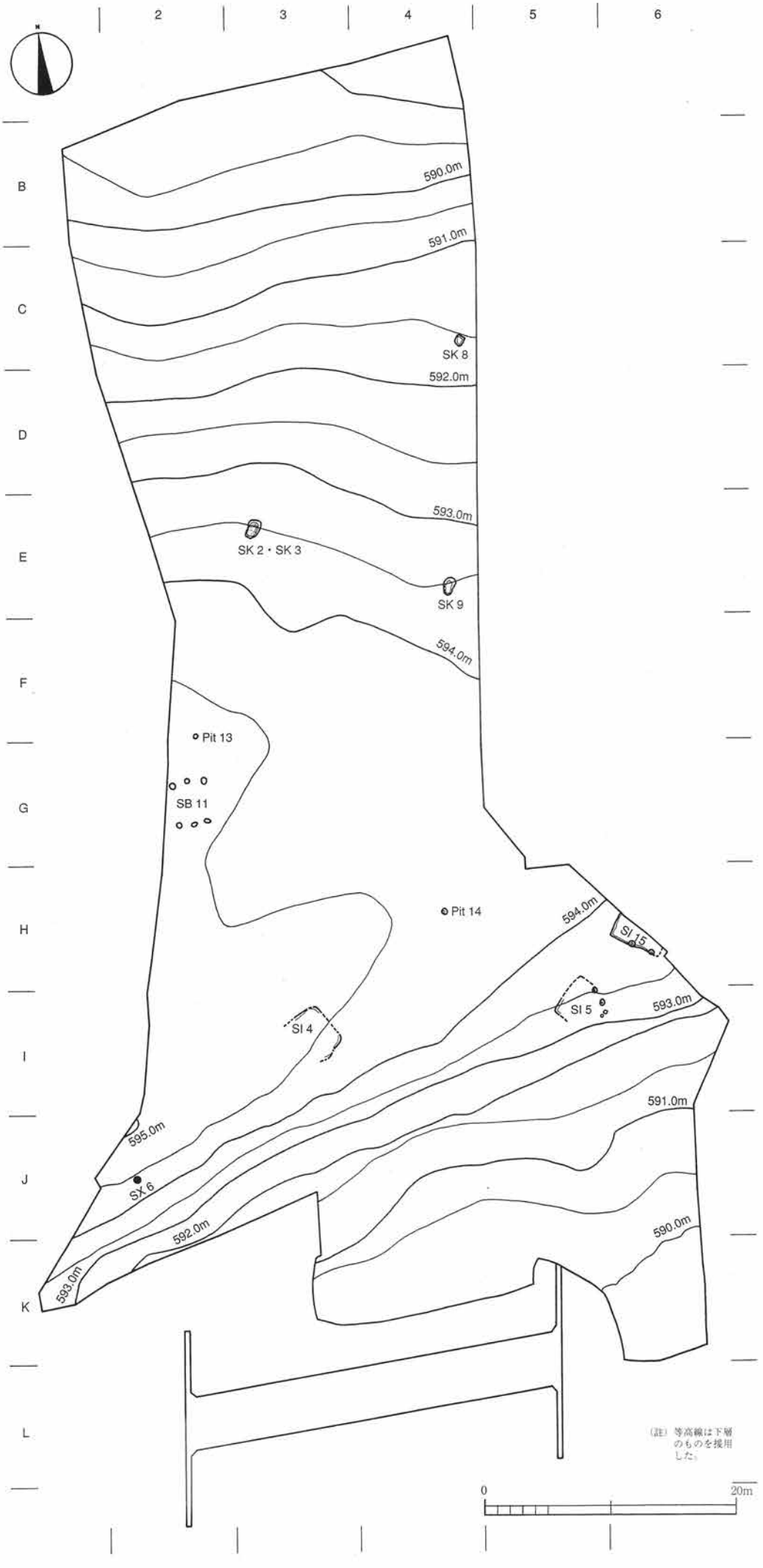
3．墨書土器の墨書は、実測図左側に正面観を表現した。

下層全体図

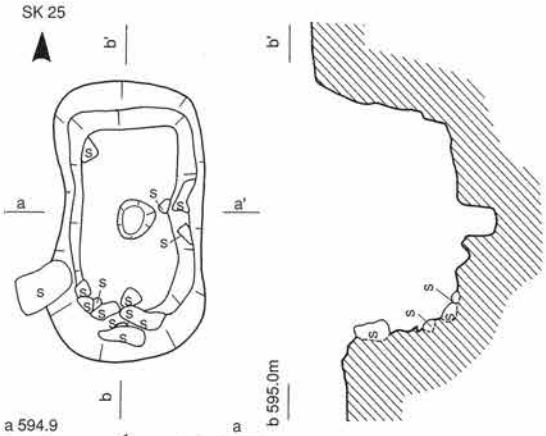

2
3
4
5
6
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
590.0m
591.0m
592.0m
593.0m
594.0m
595.0m
SX 12
SK 42
SK 16
SK 17
SK 19
SK 18
SX 32
SK 23
SK 35
SK 37
SK 30
SK 31
SK 38
SK 39
SK 36
SK 34
SK 33
SK 29
SK 28
SK 27
SK 26
SK 40
SK 25
SK 24
SX 21
SX 22
SX 20
0
20m

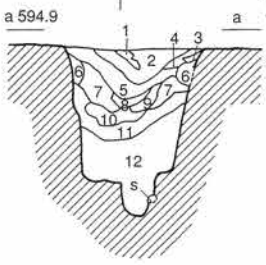
図版 2

上層全体図


2
3
4
5
6
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
590.0m
591.0m
592.0m
593.0m
594.0m
595.0m
SK 8
SK 2・SK 3
SK 9
Pit 13
SB 11
Pit 14
SI 15
SI 5
SI 4
SX 6
(註) 等高線は下層のものを援用した。
0
20m

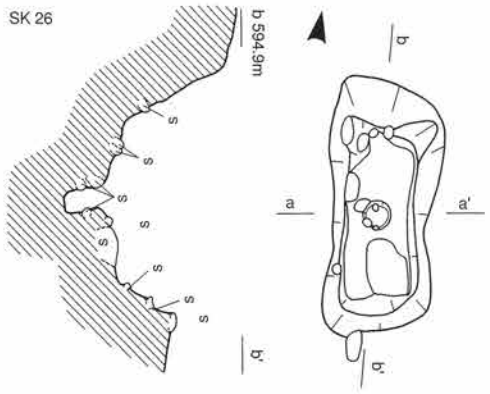
SK 25

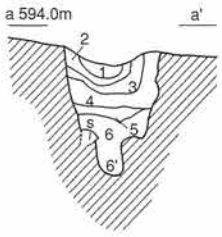




S K 25
1　撹乱。Ⅵ層ブロック。
2　黒褐色土。粘性なし。しまりあり。
3　灰黄褐色土。粘性弱い。しまりあり。
4　暗黄褐色土。粘性・しまりなし。
5　暗褐色土。粘性なし。しまりあり。
6　暗黄褐色粘質土。しまりなし。
7　5層にⅨ層の細粒が混じる。しまりなし
8　5層とⅨ層の互層。しまりなし。
9　暗黄褐色土.粘性。しまりなし。
10　5層にⅨ層の細粒が混じる。7層よりも混入量は少ない。しまりなし。
11　5層とⅨ層の互層。全体に黄色味が強いしまりなし。
12　2層とⅨ層の互層。全体に黒色を帯びている。
13　2層とⅨ層の互層。しまりなし。

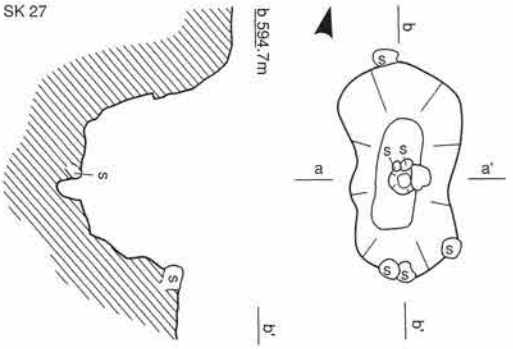
SK 26

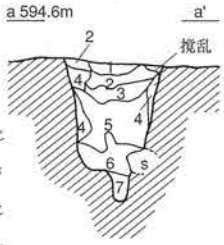




S K 26
1　黒色土。灰化物粒含む。
2　黒褐色土。しまりあり。
3　黒褐色土。炭化物粒含む。
4　黒色土。黄色土がブロック状に混じる。粘性弱い。
5　暗茶褐色土。Ⅸ層がブロック状に混じる
6　黒色土。Ⅸ層粒が混じる。しまり弱い。
6'　6とほぼ同質だが、Ⅸ層粒の混入の割合が高い。

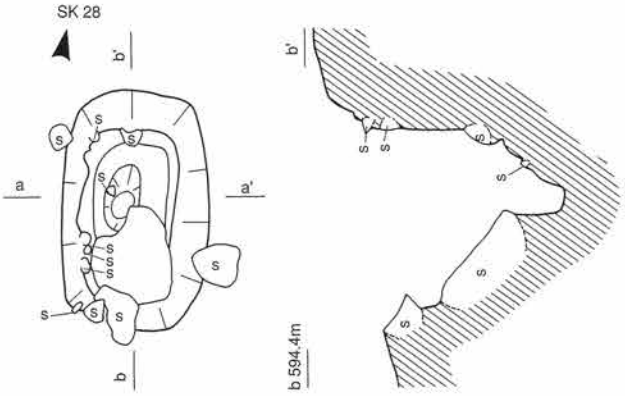
SK 27

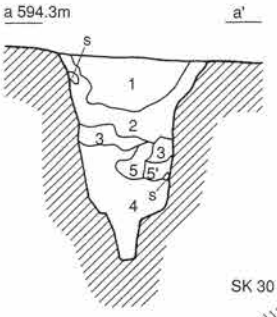




S K 27
1　黒褐色土。しまり弱い。
2　暗褐色土。しまり弱い。
3　2層と同質の土に黄褐色土が細かく混じる。
4　2層と同質の土に黄褐色土のブロックが混じる。
5　2層と同質の土と黄褐色土の細粒が混じりあう。炭化物粒がわずかに混じる。
6　暗褐色土。粘性わずかにあり。しまり弱い。
7　暗灰褐色粘質土。

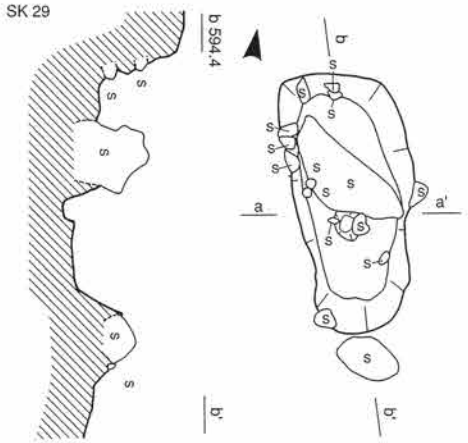
SK 28

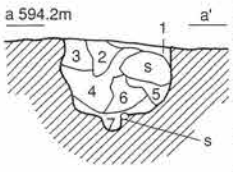




S K 28
1　暗茶褐色土。しまり良い。Ⅸ層がブロック状に混じる。
2　茶褐色土に黒色土粒が混じる。粘性なく、もろい。
3　黒褐色土。Ⅸ層粒が混じる。粘性なくもろい。
4　暗褐色土。Ⅸ層がブロック状に混じる。しまり弱い。
5　黄褐色土。黒色土粒が混じる。固くしまっている。
5'　5層と同質だが、黒色土の割合が高い。

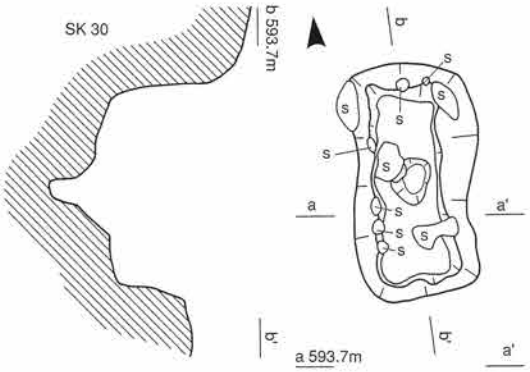
SK 29

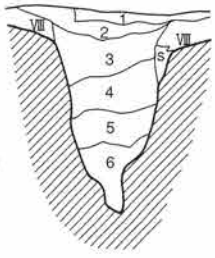




S K 29
1　黒色土。しまりあり。
2　黒褐色土。Ⅸ層粒が混じる。
3　黒褐色土。Ⅸ層がまじるが。2層に比べて粒が大きく、量も多い。
4　暗茶褐色土。しまりあり。
5　黄褐色土。Ⅸ層のブロックである。しまりあり。
6　茶褐色土。Ⅸ層粒が混じる。粘性・しまりあり。
7　黄褐色土。Ⅸ層粒・小礫が少量混じる。（1～7層までほぼ均質な土層である。）

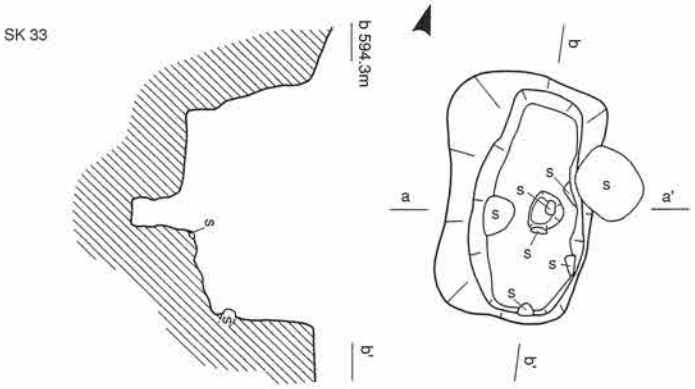
SK 30



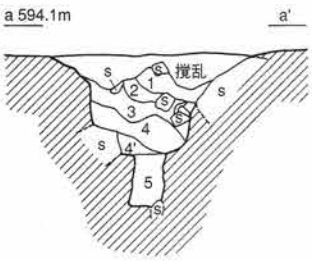


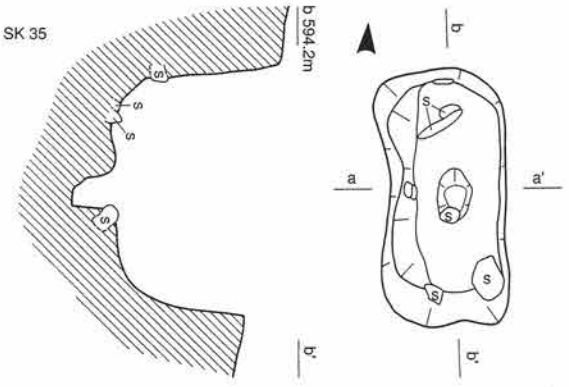
S K 30
1　暗茶褐色土。固くしまっている。SI5の床面。
2　黒褐色土。粘性あり。均質でしまりが良い。
3　黒色土。炭化物粒が含まれる。
4　黒色土に褐色土が混じる。しまりやや弱い。
5　4層に類似する暗黄褐色土にⅨ層がブロック状に混じる。しまりなくボロボロしている。
6　黄褐色土にⅨ層粒が多量に混じる。粘性あり。

0　(1：40)　2m

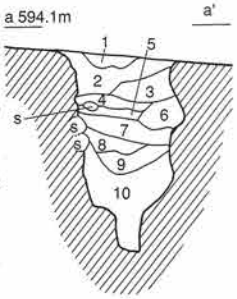


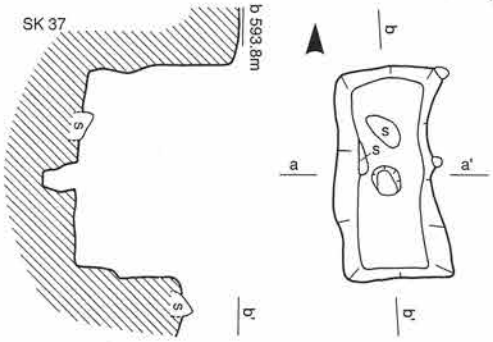
SK 33
1　黒色土。粘性あり。
2　黒褐色土。Ⅸ層粒が混じるしまり弱い。
3　黒褐色土にⅨ層のブロックが混じる。
4　黒色土にⅨ層の細粒が混じる。しまりなくボロボロしている。
4'　4層と同質だが、Ⅸ層の細粒の割合が高い。
5　黒色土。粘性あり。

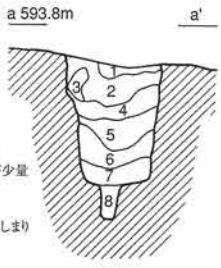




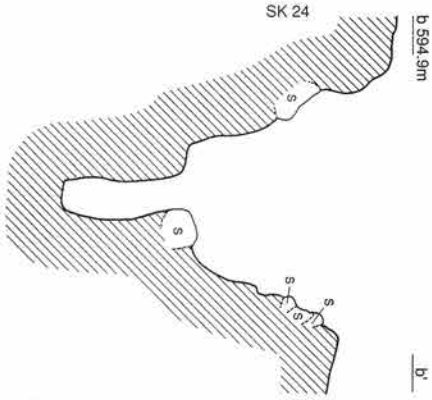
SK 35
1　黒褐色土。
2　暗茶褐色土。Ⅸ層がブロック状に混じる
3　黄褐色土。しまり弱い。
4　茶褐色土。しまりややあり。
5　黄褐色土。しまりややあり。
6　黄褐色土。Ⅸ層が多量に混じる。粘性あり。
7　黄褐色土。Ⅸ層粒が多量に混じる。
8　茶褐色土。粘性なし。
9　黄褐色土。Ⅸ層と黒色土がブロック状に混じる。
10　暗茶褐色土。Ⅸ層粒が混じる。

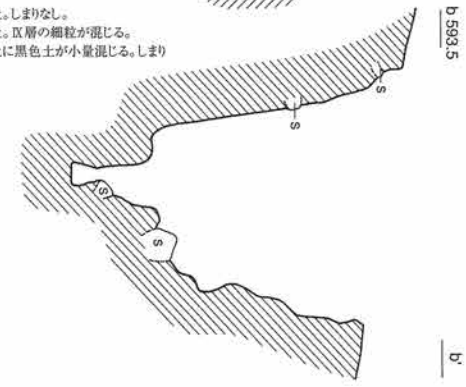


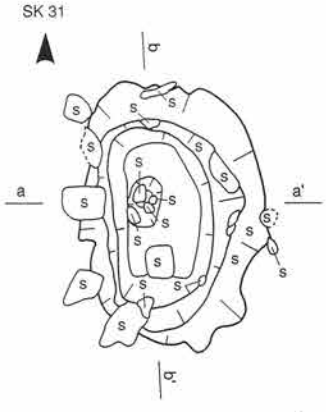


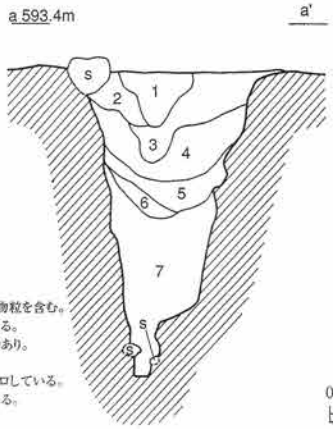


SK 37
1　黒色土。しまりなし。
2　黒褐色土にⅨ層ブロックが混じる。
3　2層に類似するが、Ⅸ層ブロックが少量混じる。しまりあり。
4　黒褐色土。粘性あり。
5　黒色土。黄褐色土の細粒を含む。しまりなし。
6　黒褐色土。しまりなし。
7　暗褐色土。Ⅸ層の細粒が混じる。
8　黄褐色土に黒色土が小量混じる。しまり弱い。

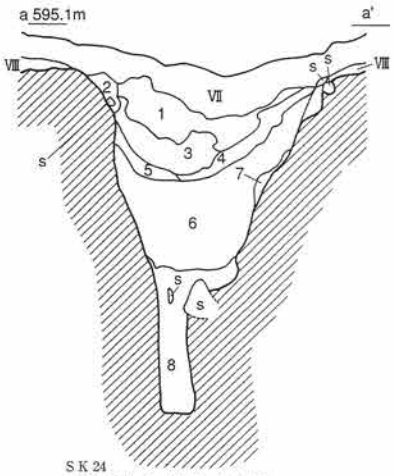




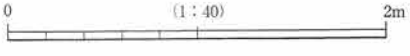




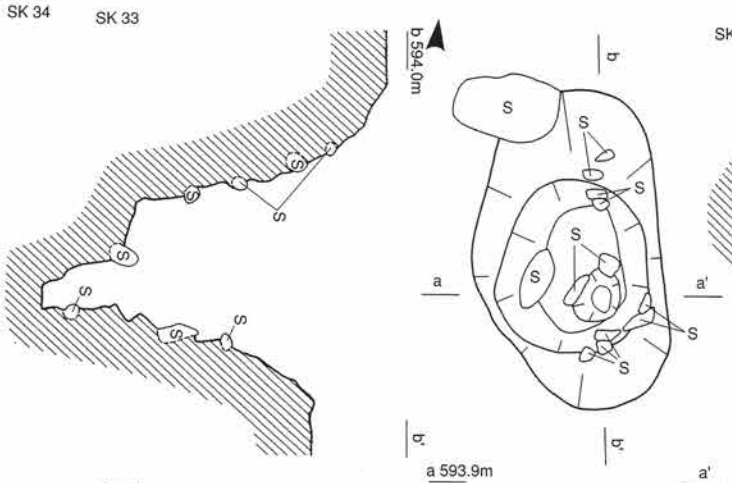
SK 31
1　黒色土。しまりあり。炭化物粒を含む。
2　黒褐色土。Ⅸ層粒が混じる。
3　暗黒褐色土。粘性。しまりあり。
4　暗黄褐色細粒土。
5　黒色土。しまりなくボロボロしている。
6　黒褐色土。Ⅸ層粒が混じる。
7　暗茶褐色土。粘性弱い。

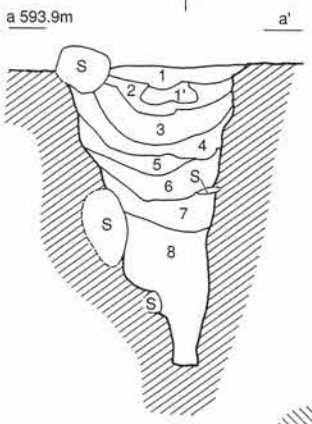


SK 24
1　黒褐色土。粘性なし。しまりあり。
2　黄灰色土。粘性弱い。しまりあり。
3　暗褐色土。粘性なし。しまりなし。
4　黒色土。粘性なし。しまりあり。
5　3層とⅨ層が混じる暗黄褐色土。粘性・しまりなし。
6　暗赤褐色土。Ⅸ層の粒が混じる。粘性・しまりなし。
7　灰褐色土。粘性なし。しまりなし。
8　暗褐色土。粘性。しまりなし。



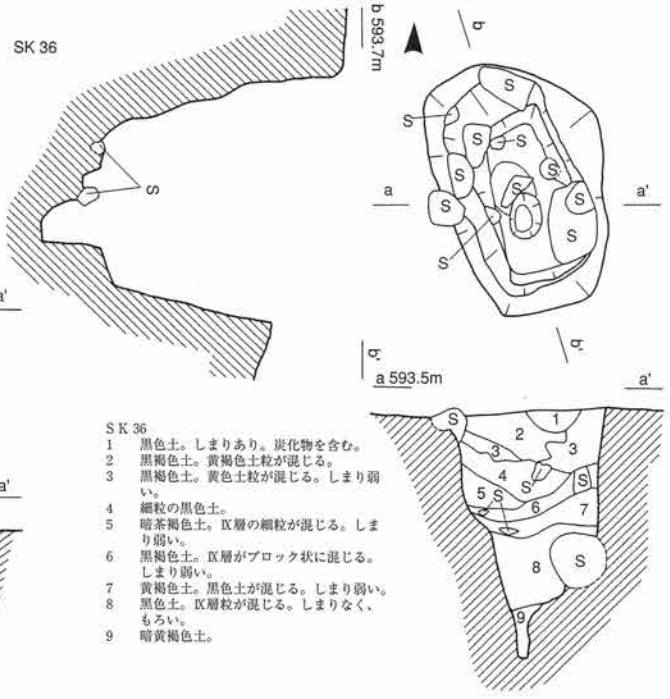
SK 34　SK 33





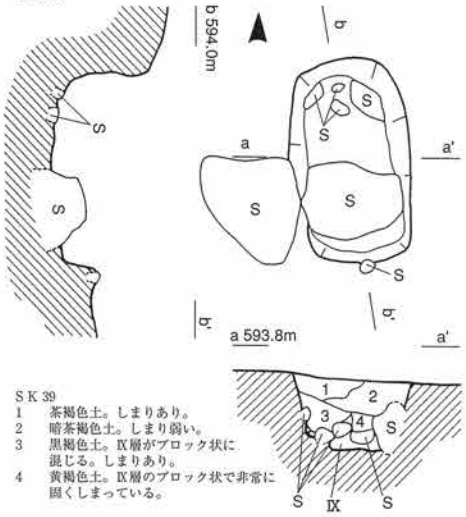
S K 34
1　暗茶褐色土。しまりあり。
1'　1層と同質の土に黄褐色土が若干含まれる。
2　暗黄褐色土。ややしまりあり。
3　黒褐色土。粘性・しまりとも弱い。一部に黄褐色土が含まれる。
4　黄褐色土。中心部に黒色土が含まれる。
5　4層とほぼ同質であるが、黒色土の割合が高い。
6　黒色土。しまりがなくボロボロしている。
7　黒褐色土。Ⅸ層がブロック状に含まれる。
8　黄褐色土。黒色土粒・Ⅸ層粒が混じる。

SK 36



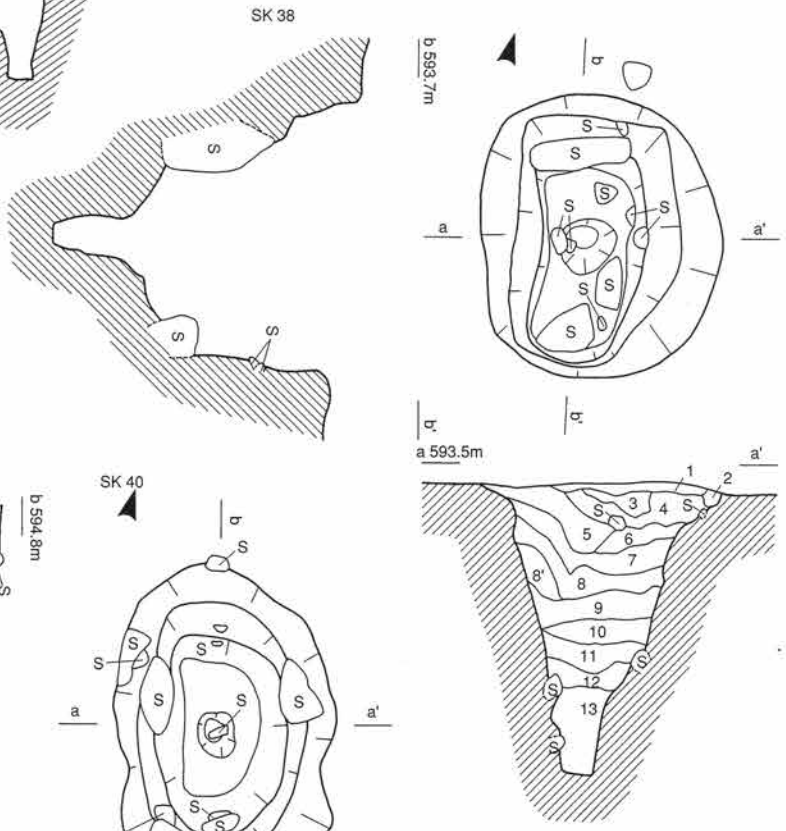
S K 36
1　黒色土。しまりあり。炭化物を含む。
2　黒褐色土。黄褐色土粒が混じる。
3　黒褐色土。黄色土粒が混じる。しまり弱い。
4　細粒の黒色土。
5　暗茶褐色土。Ⅸ層の細粒が混じる。しまり弱い。
6　黒褐色土。Ⅸ層がブロック状に混じる。しまり弱い。
7　黄褐色土。黒色土が混じる。しまり弱い。
8　黒色土。Ⅸ層粒が混じる。しまりなく、もろい。
9　暗黄褐色土。

SK 39



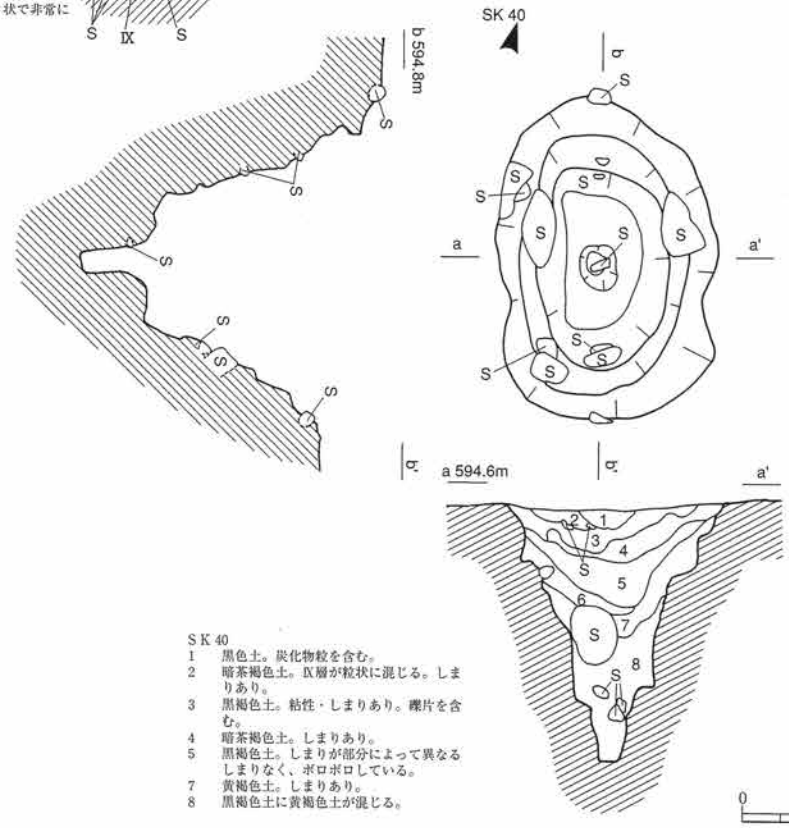
S K 39
1　茶褐色土。しまりあり。
2　暗茶褐色土。しまり弱い。
3　黒褐色土。Ⅸ層がブロック状に混じる。しまりあり。
4　黄褐色土。Ⅸ層のブロック状で非常に固くしまっている。

SK 38



S K 38
1　黒色土。炭化物粒を含む。
2　黄褐色土に黒色土が少量混じる。
3　暗黒褐色土。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土。Ⅸ層の細粒が混じる。
5　暗茶褐色土。しまりあり。炭化物粒を含む。
6　黒褐色土。粘性あり。
7　暗茶褐色土。粘性・しまりあり。
8　暗黄褐色土。Ⅸ層の細粒が混じる。
8'　8層と同質であるが、Ⅸ層粒が混入する割合が高い。
9　黒褐色土。Ⅸ層がブロック状に混じる。しまり弱い。
10　黄褐色土。黒色土粒が多量に混じる。
11　9層と同質。
12　10層と同質。
13　暗黄褐色土。黒色土粒が混じるが、9層よりは少量である。

SK 40



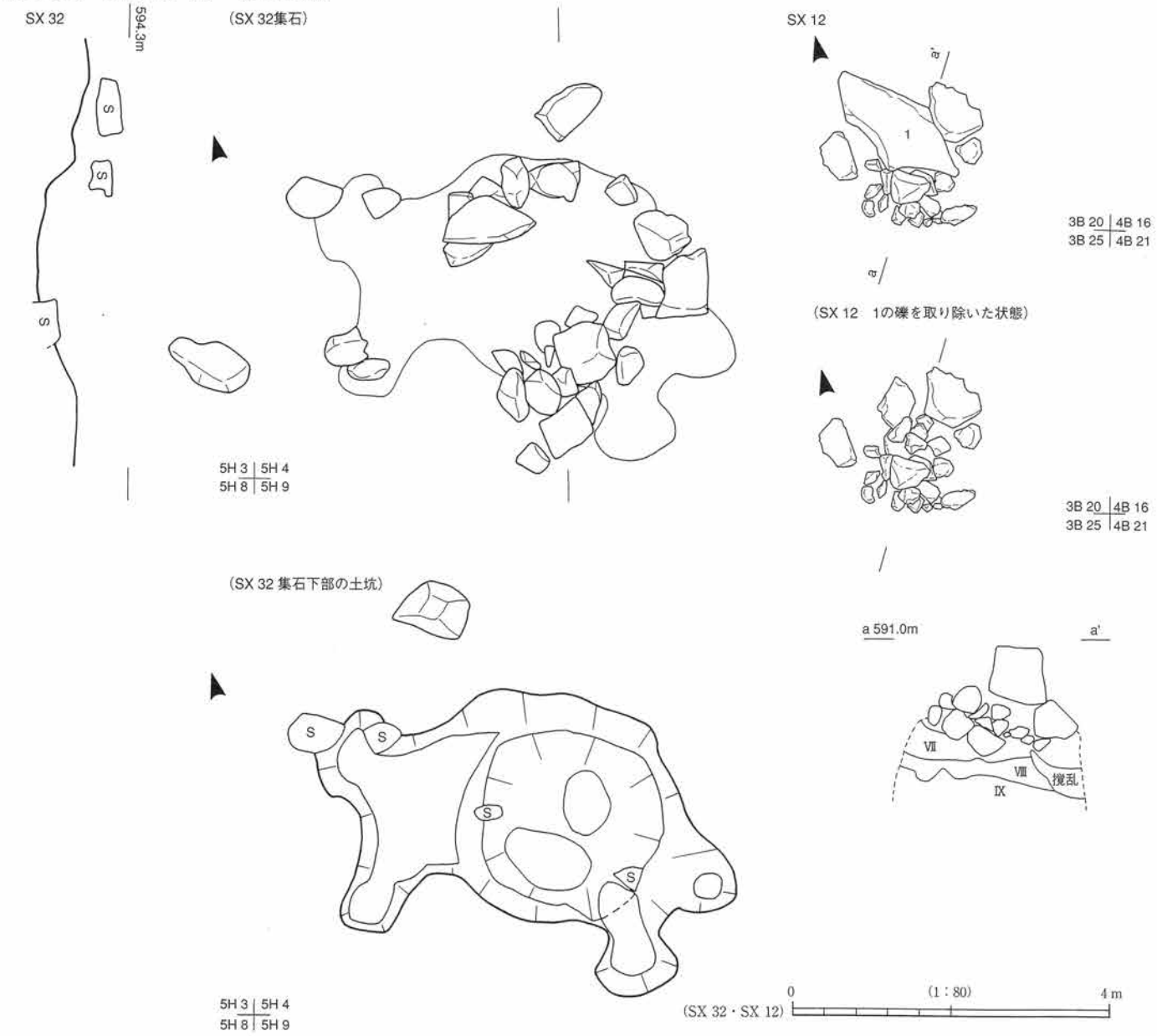
S K 40
1　黒色土。炭化物粒を含む。
2　暗茶褐色土。Ⅸ層が粒状に混じる。しまりあり。
3　黒褐色土。粘性・しまりあり。礫片を含む。
4　暗茶褐色土。しまりあり。
5　黒褐色土。しまりが部分によって異なるしまりなく、ボロボロしている。
7　黄褐色土。しまりあり。
8　黒褐色土に黄褐色土が混じる。

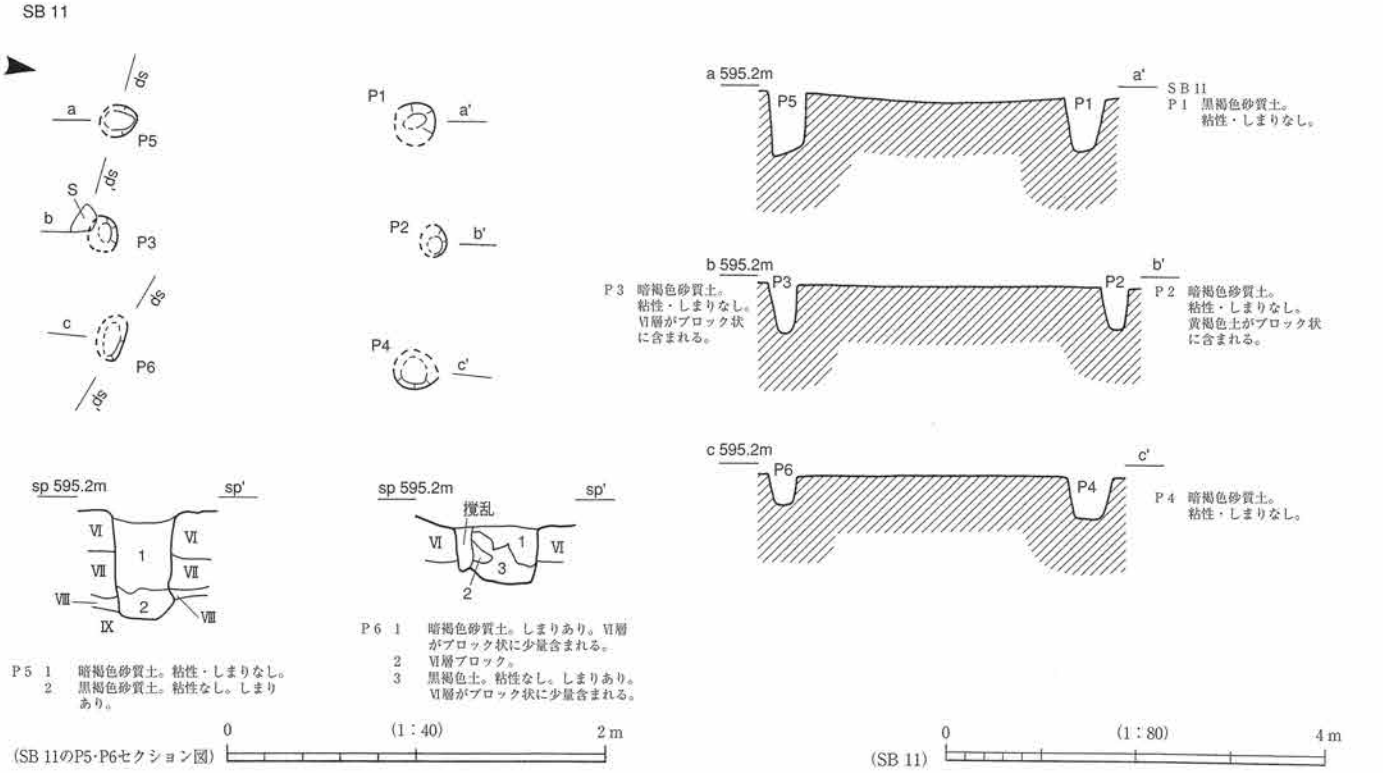
0　(1：40)　2 m

縄文時代　集石土坑（1）

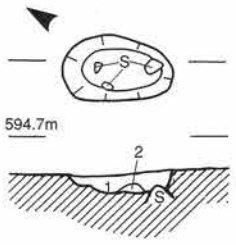
SX 20
595.3m
（SX 20 集石下部の土坑）
（SX 20 集石）
2I 19
2I 24
2I 18
2I 23
SX 21
2I 19
2I 20
2I 24
2I 25
SX 22
2I 14
2I 19
595.2m
595.3m
0
（1：20）
1m

縄文時代　集石土坑（2）・掘立柱建物



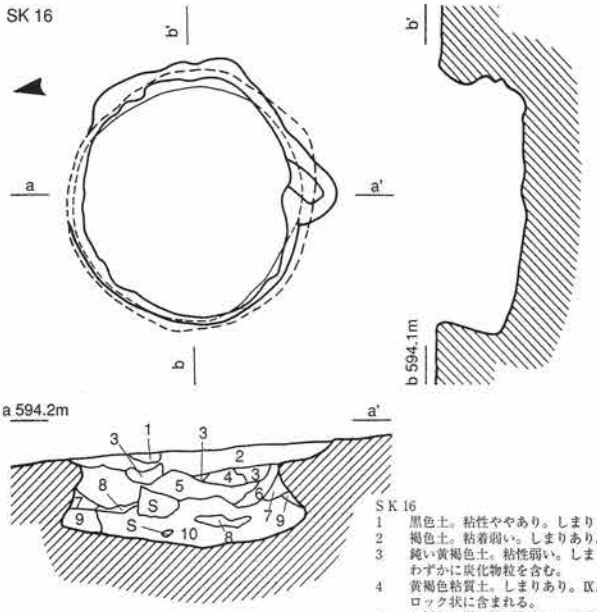


SK 23



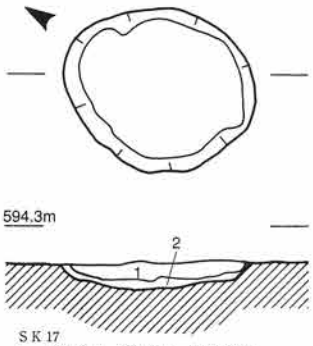
SK 23
1　灰黄褐色粘質土。しまりあり。
2　1層と同質の土に焼土粒・炭化物粒が多量に混じる。

SK 16



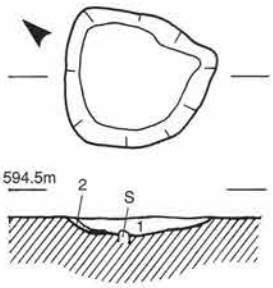
SK 16
1　黒色土。粘性ややあり。しまりなし。
2　褐色土。粘着弱い。しまりあり。
3　鈍い黄褐色土。粘性弱い。しまりあり。わずかに炭化物粒を含む。
4　黄褐色粘質土。しまりあり。Ⅸ層がブロック状に含まれる。
5　4層と5層が混ざりあった暗黄褐色土。粘性・しまりあり。炭化物粒がわずかに含まれる。
7　暗褐色土。粘性・しまりとも弱い。Ⅸ層の小粒がごくわずかに混じる。
8　暗褐色土。粘性・しまりあり。Ⅸ層の小粒がごくわずかに混じる。
9　暗黄褐色土。粘性・しまりなし。
10　暗褐色土。粘性・しまりなし。

SK 17



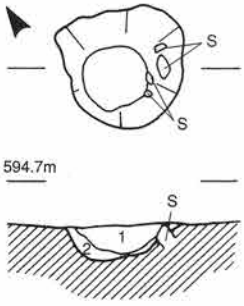
SK 17
1　暗褐色土。粘性弱い。しまり強い。
2　暗黄褐色粘質土。

SK 18



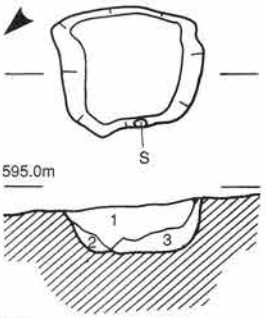
SK 18
1　暗褐色土。粘性なし。しまりあり。
2　暗黄褐色土。粘性あり。

SK 19



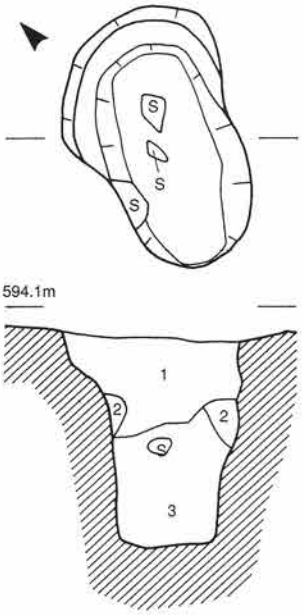
SK 19
1　暗褐色土。粘性弱い。しまりあり。
2　暗黄褐色土。粘性弱い。しまりあり。

SK 8



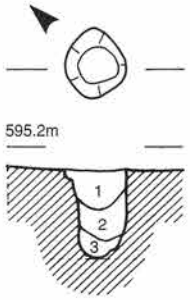
SK 8
1　暗褐色土。粘性なし。しまりあり。
2　褐灰色土。やや砂質。粘性なし。しまりあり。
3　黒褐色土に黄褐色土の小粒が混じる。

SK 9



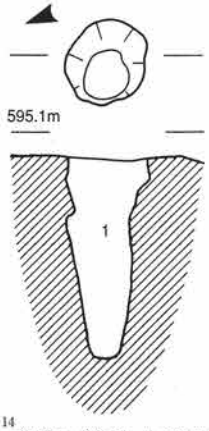
SK 9
1　暗褐色土。粘性なし。しまり弱い。黄褐色土がブロック状に混じる。
2　暗褐色土と黄褐色土が混じる。しまりなし。
3　黒褐色土。粘性・しまりなし。

Pit 13



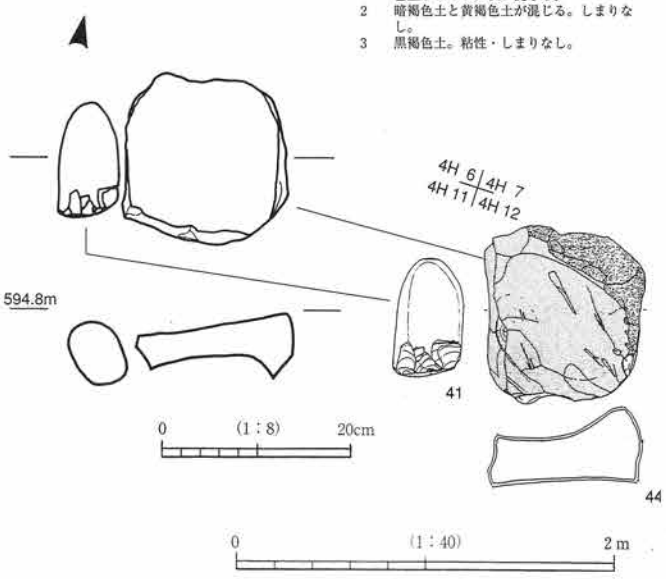
Pit 13
1　灰褐色砂質土。粘性・しまりなし。Ⅵ層の小粒を含む。
2　暗褐色土。粘性なし。しまりあり。
3　褐色土と暗黄褐色土が混じる。粘性あり。しまり強い。

Pit 14

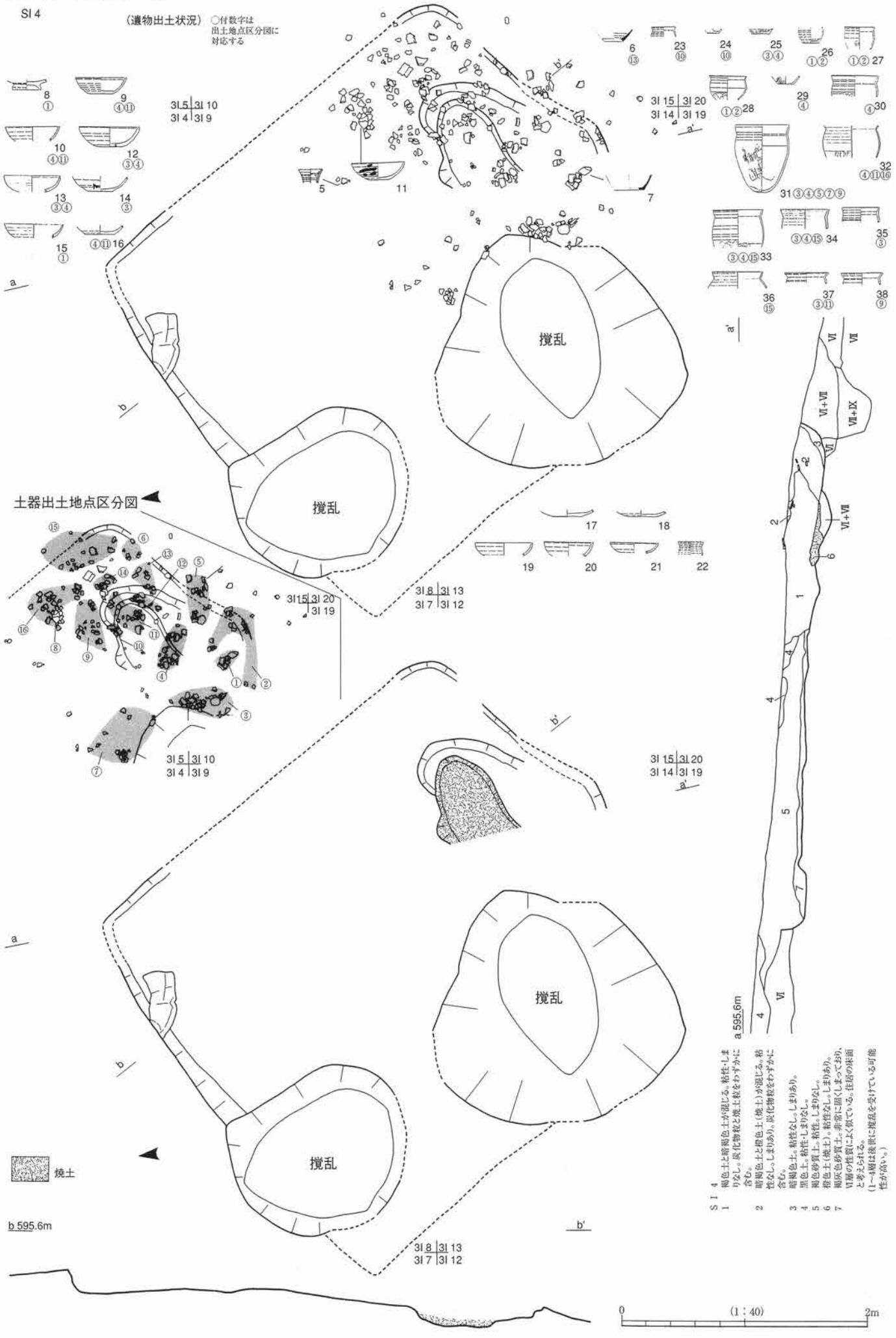


Pit 14
1　暗褐色土。粘性なし。しまり弱い。

磨石類・砥石出土状況



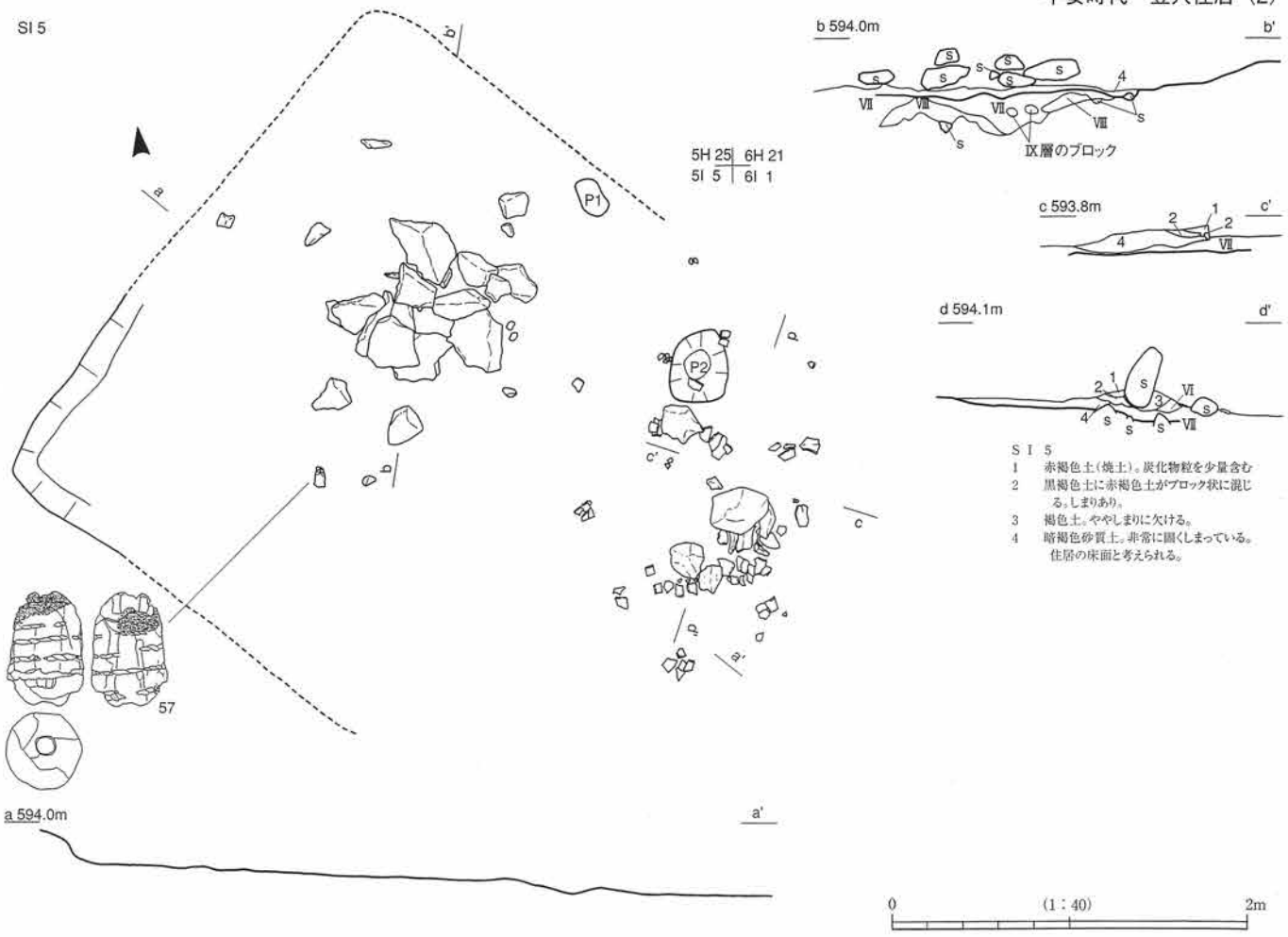
平安時代　竪穴住居（1）



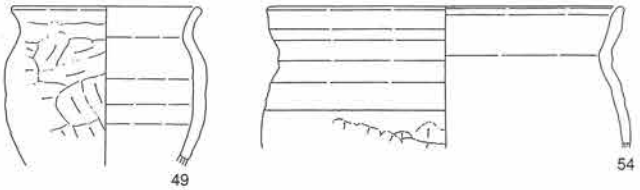
SI 4
1　褐色土と暗褐色土が混じる。粘性・しまりなし。炭化物粒と焼土粒をわずかに含む。
2　暗褐色土と橙色土（焼土）が混じる。粘性なし。しまりあり。炭化物粒をわずかに含む。
3　暗褐色土。粘性なし。しまりあり。
4　黒色土。粘性・しまりなし。
5　褐色砂質土。粘性・しまりなし。
6　橙色土（焼土）。粘性なし。しまりあり。
7　褐灰色砂質土。非常に固くしまっており、Ⅵ層の性質に大変似ている。住居の床面と考えられる。
（1～4層は撹乱に攪乱を受けている可能性が高い。）

図 版10

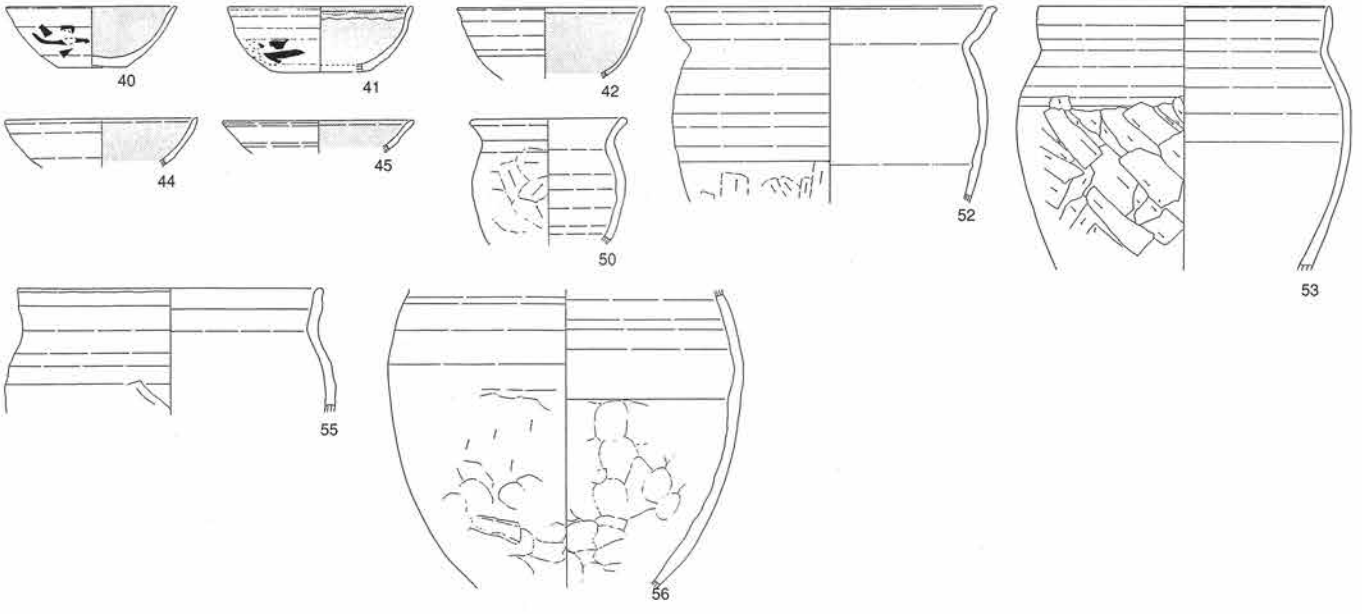
平安時代　竪穴住居（2）



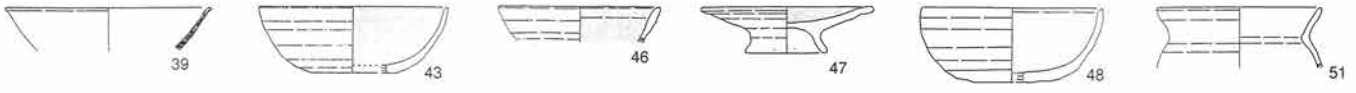
カマドの北側から出土した土器



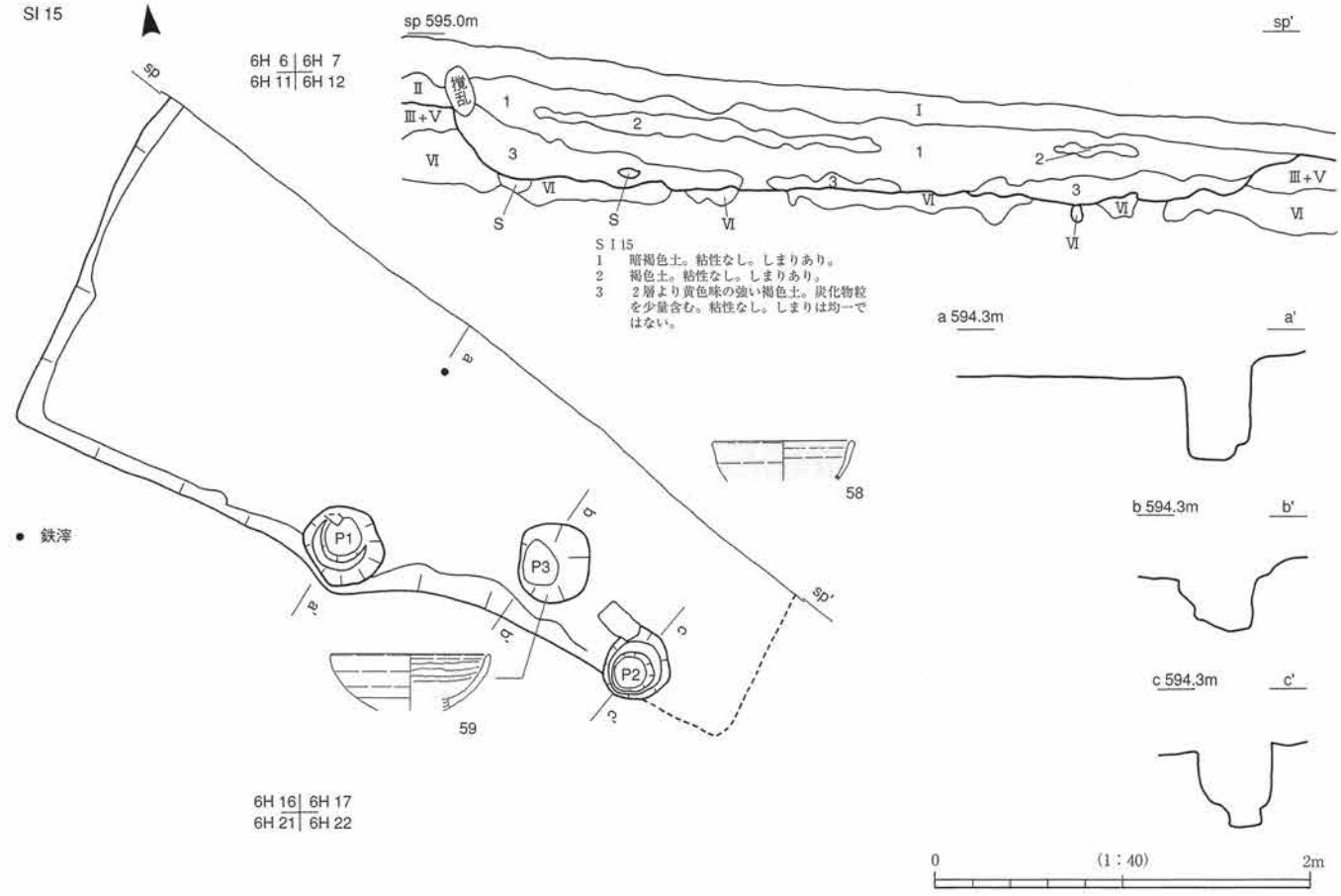
カマドの南側から出土した土器

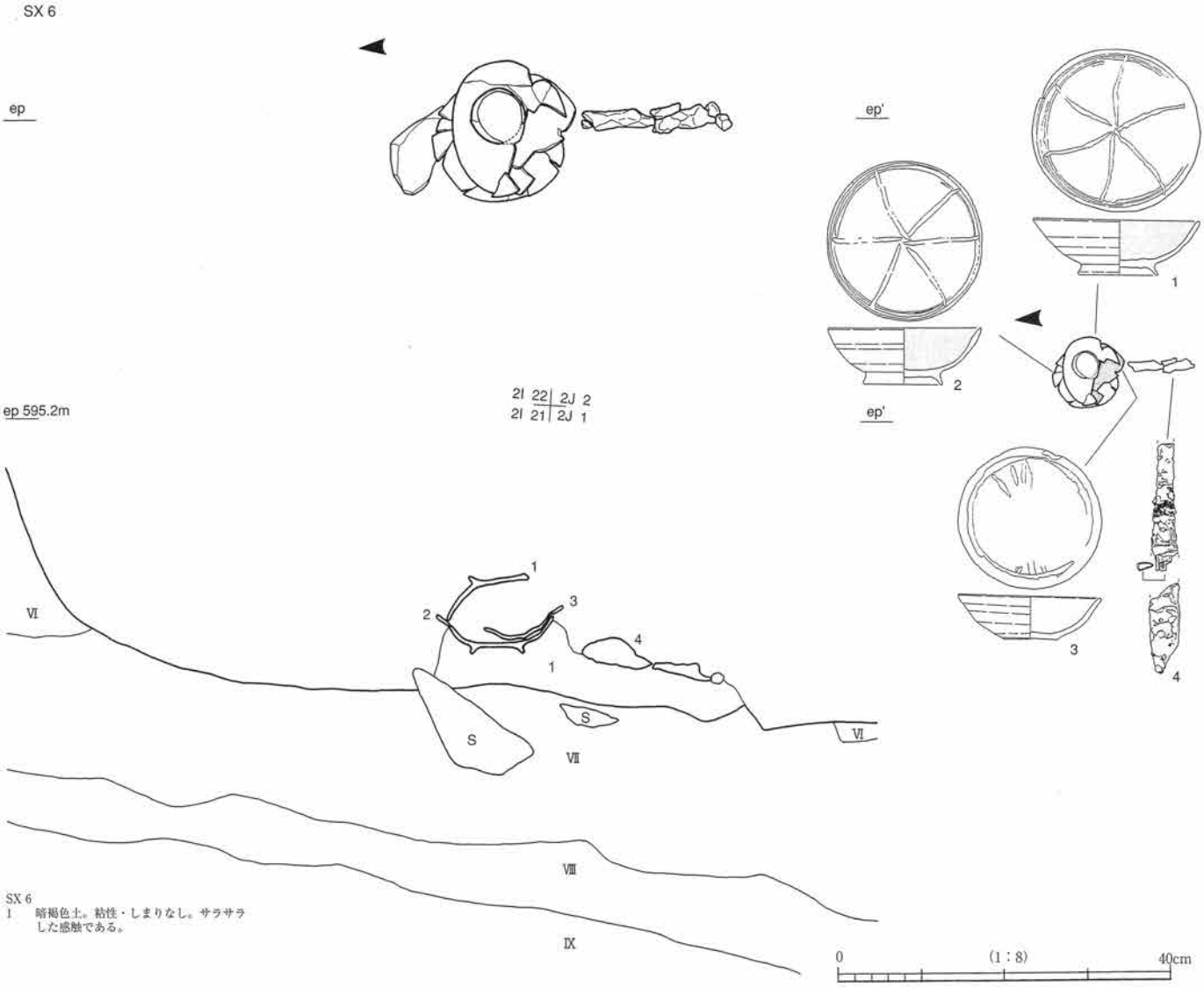


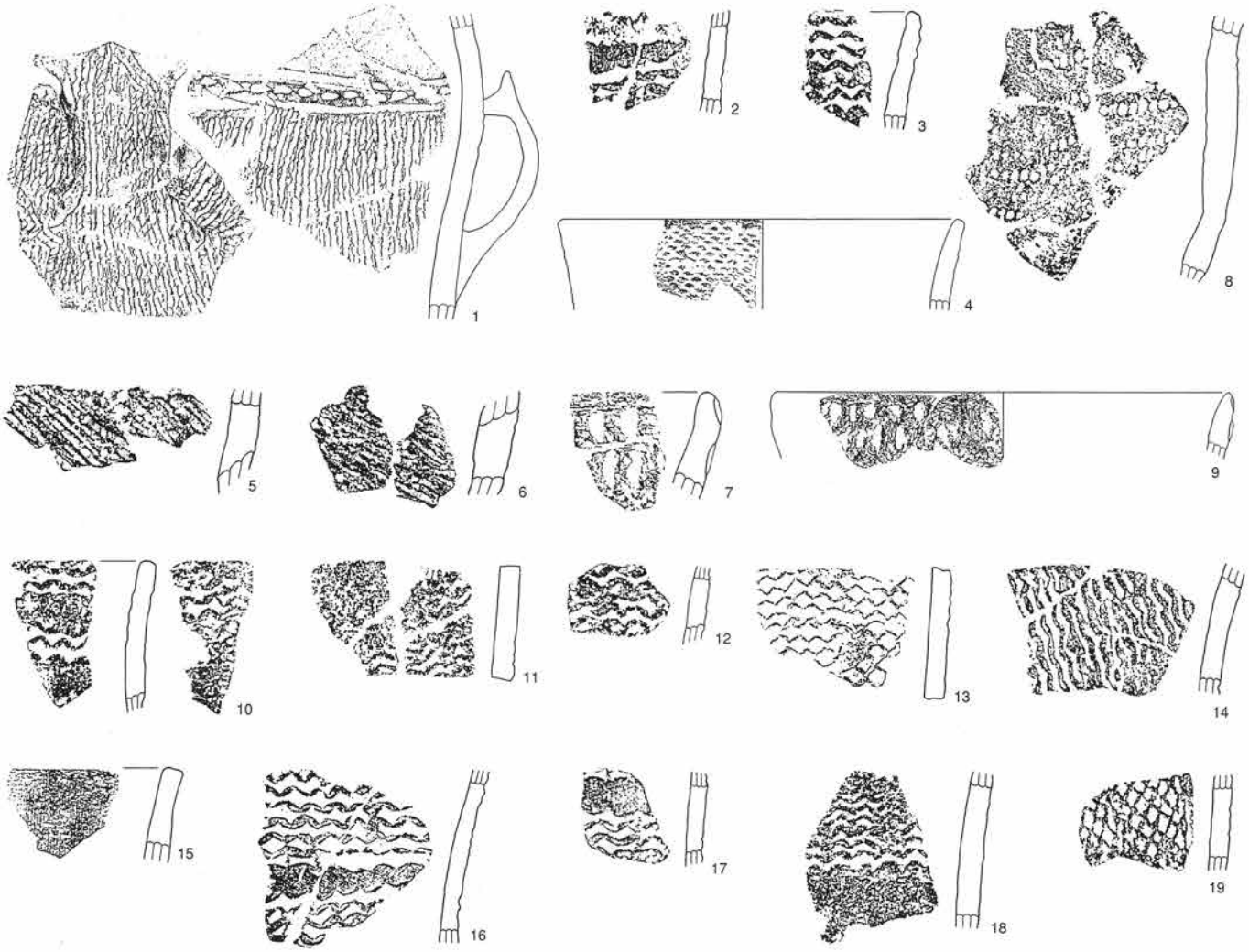
そのほか

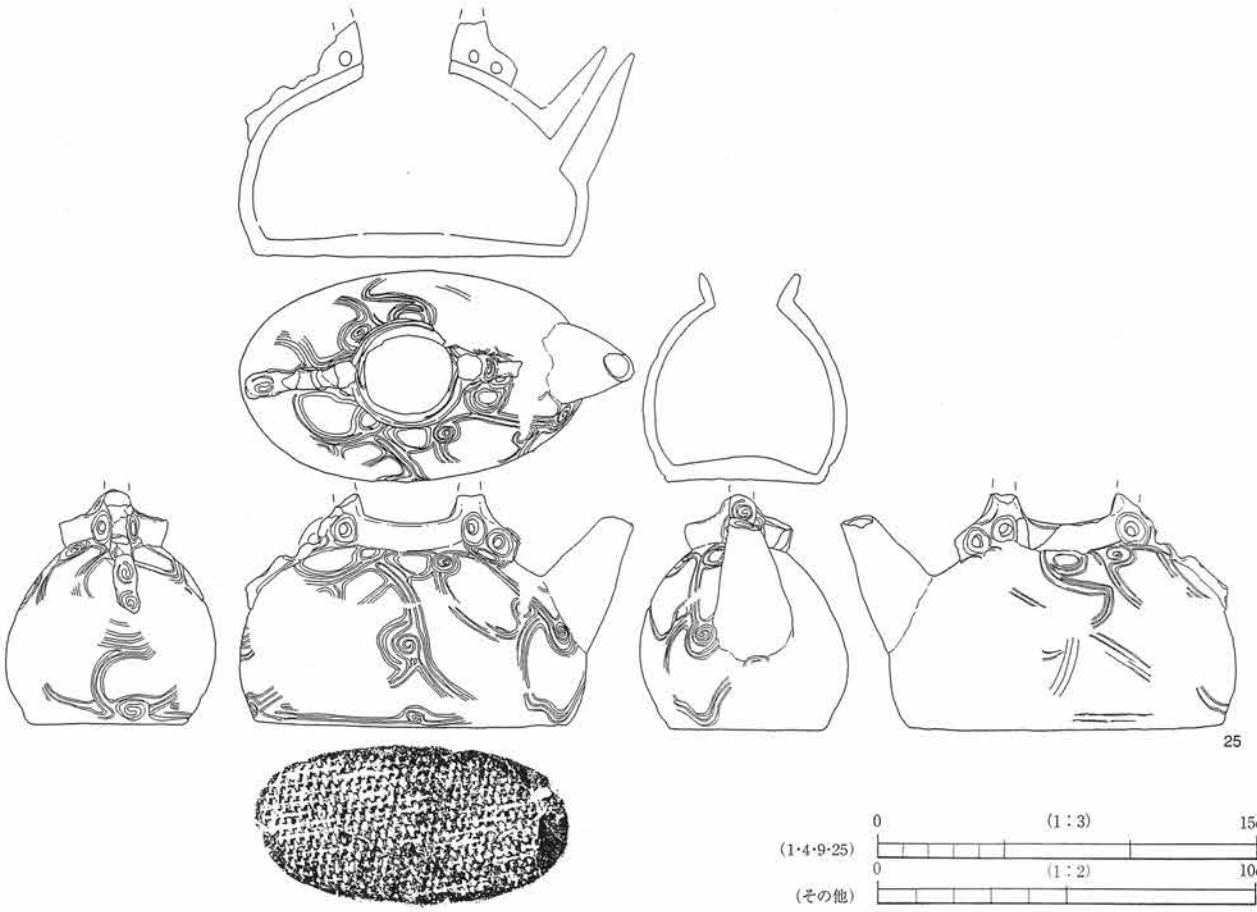


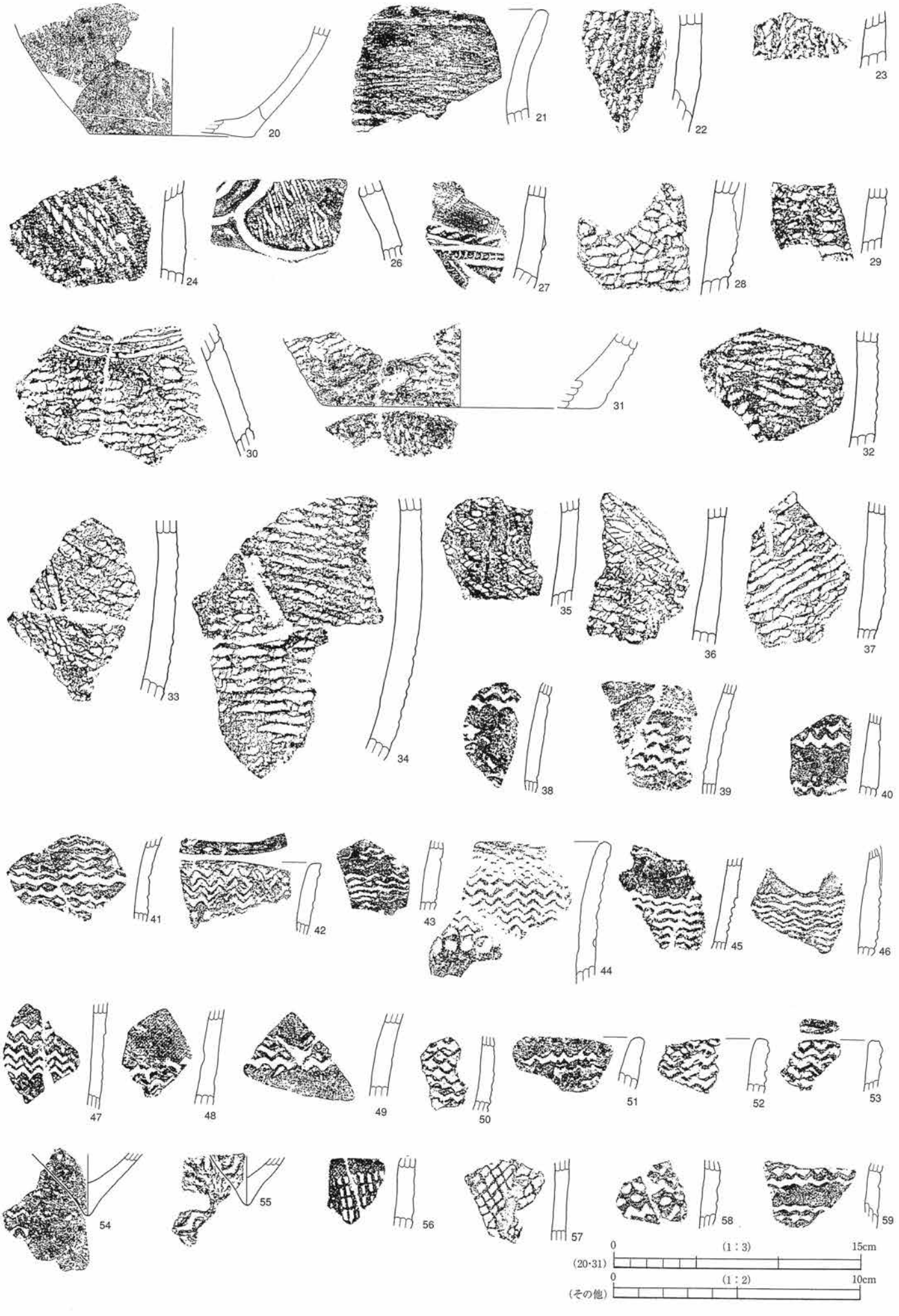
平安時代　竪穴住居（3）・土壙墓



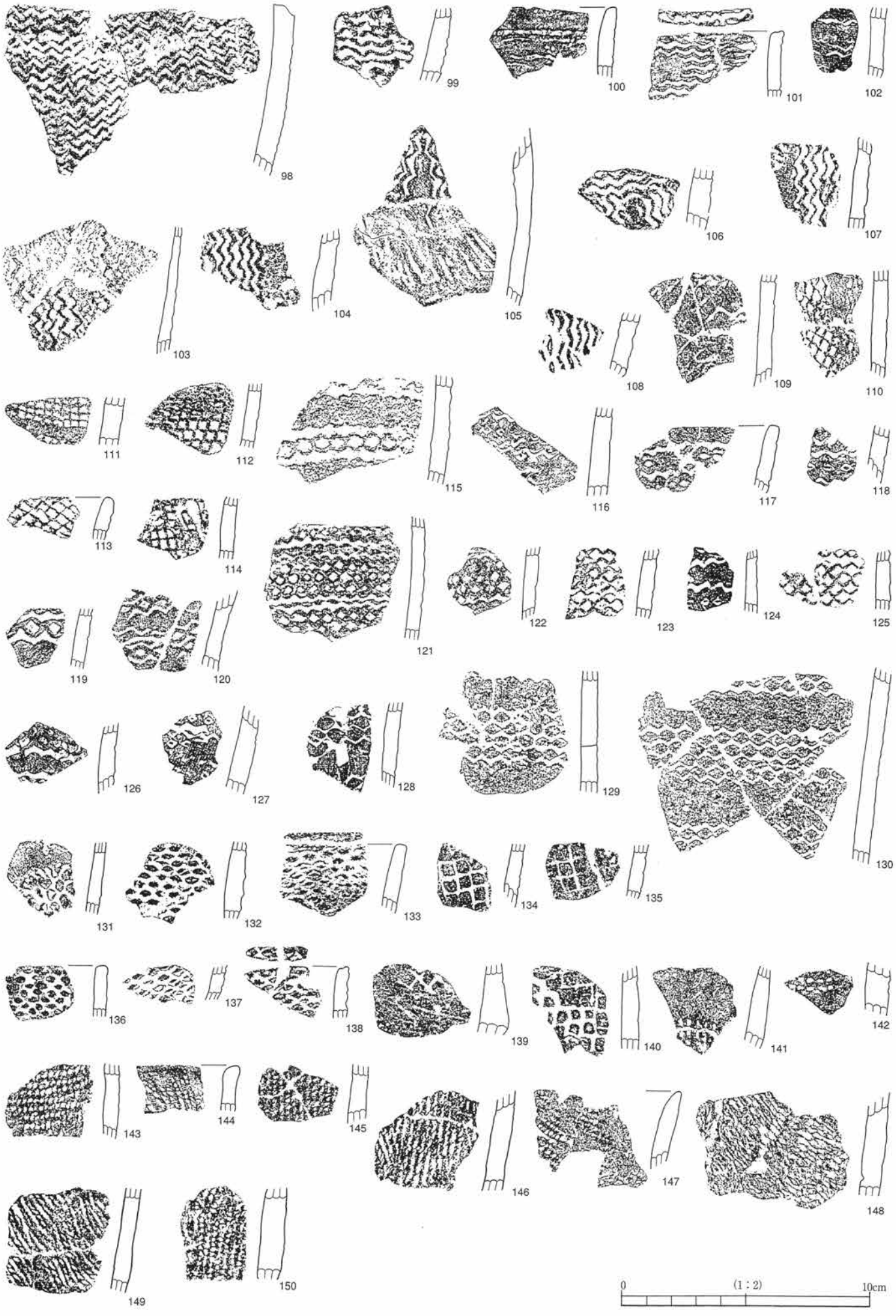


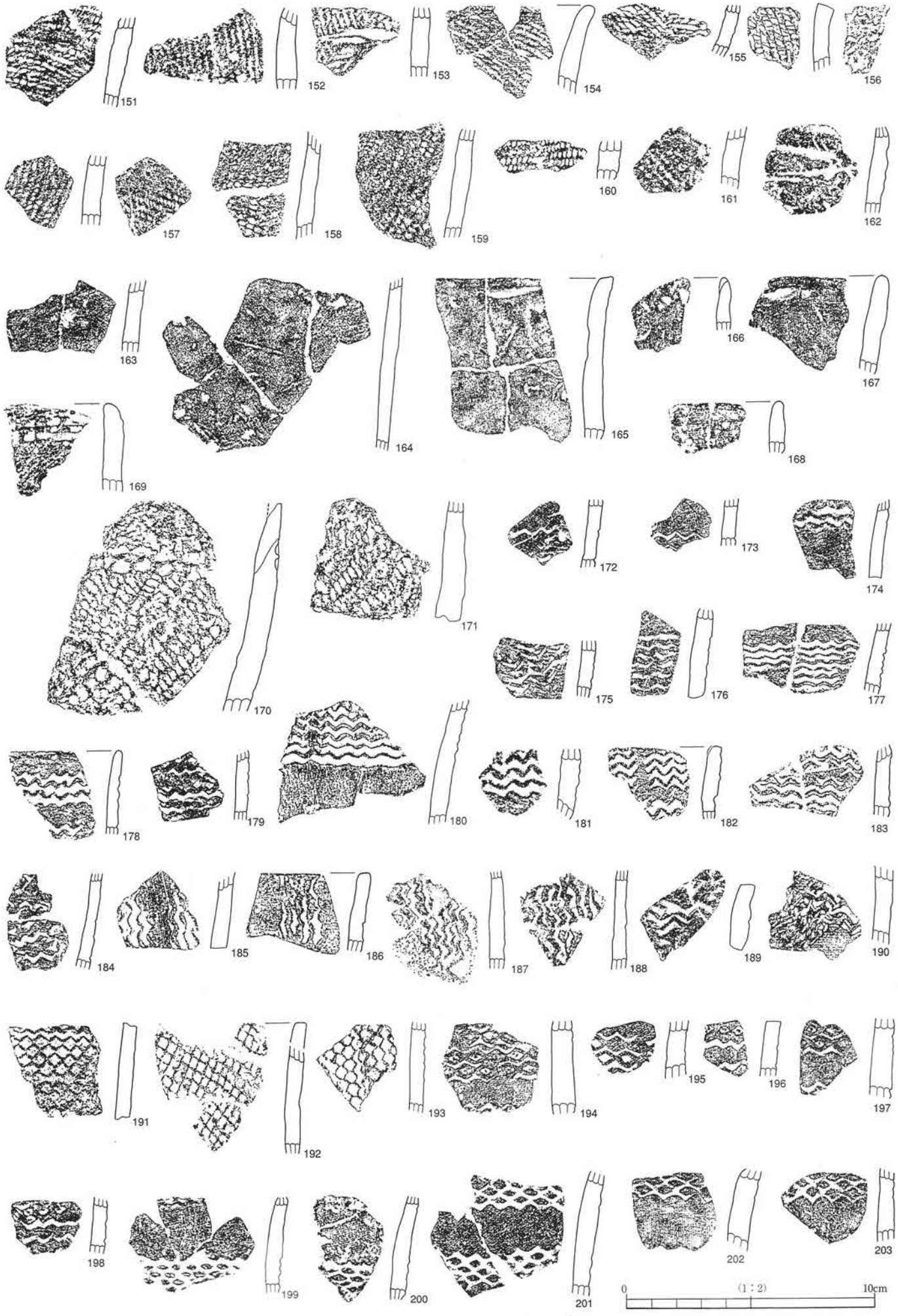

1
2
3
4
8
5
6
7
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19


25
0
(1：3)
15cm
(1·4·9·25)
0
(1：2)
10cm
(その他)

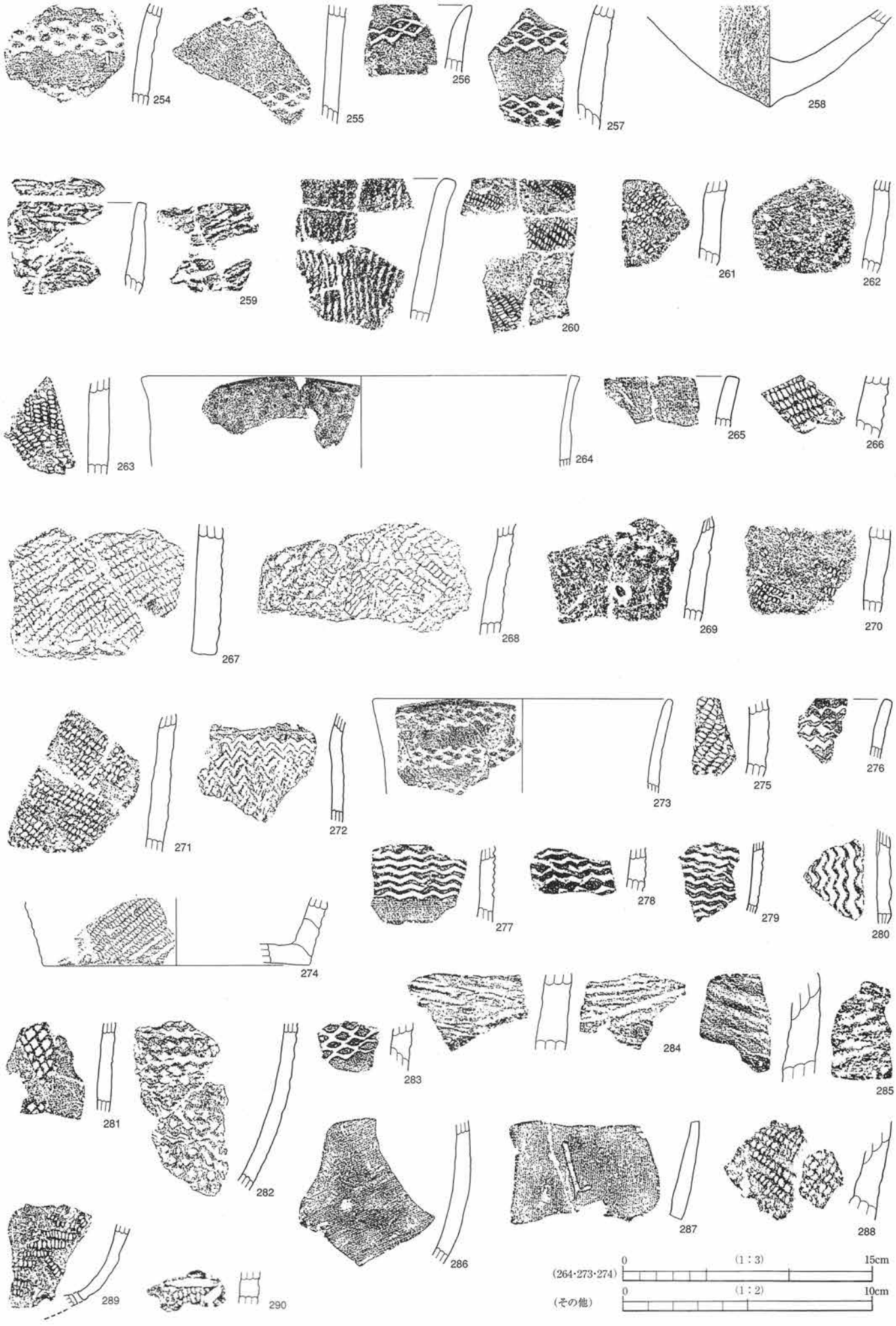

20
21
22
23
24
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
(1：3)
15cm
(20·31)
0
(1：2)
10cm
(その他)

60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
0 (1：3) 15cm
(86)
0 (1：2) 10cm
(その他)


98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
0
(1：2)
10cm

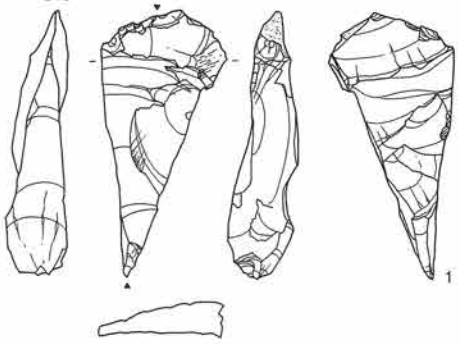

151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
0
(1：2)
10cm

204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
0
(1 : 2)
10cm

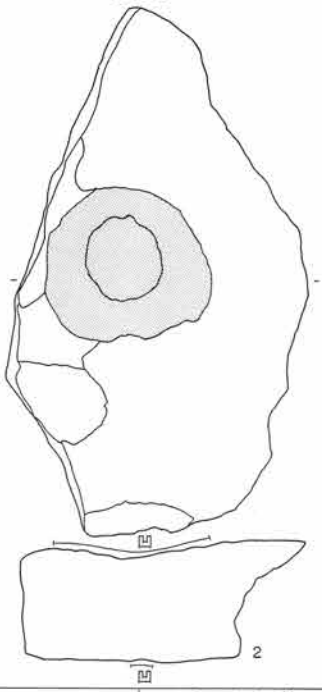

254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
275
276
277
278
279
280
274
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
0
(1：3)
15cm
(264·273·274)
0
(1：2)
10cm
(その他)

291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
弥生土器
322
0 (1：3) 15cm
(301・322)
0 (1：2) 10cm
(その他)
0 (2：3) 10cm
(319～321)

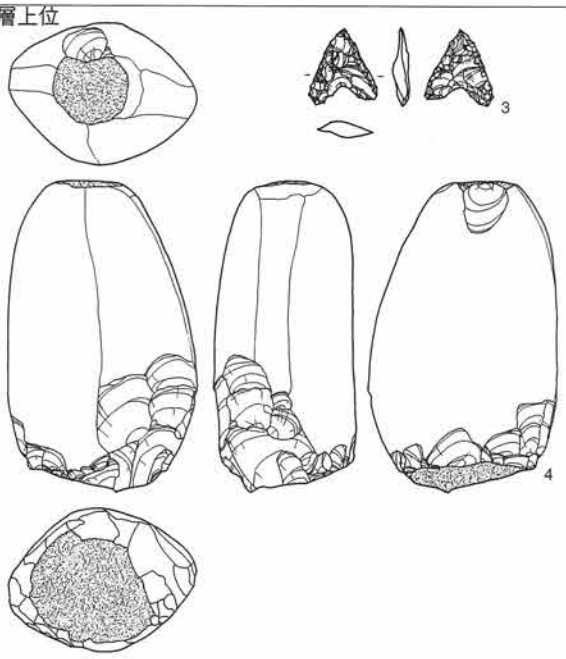
SI5



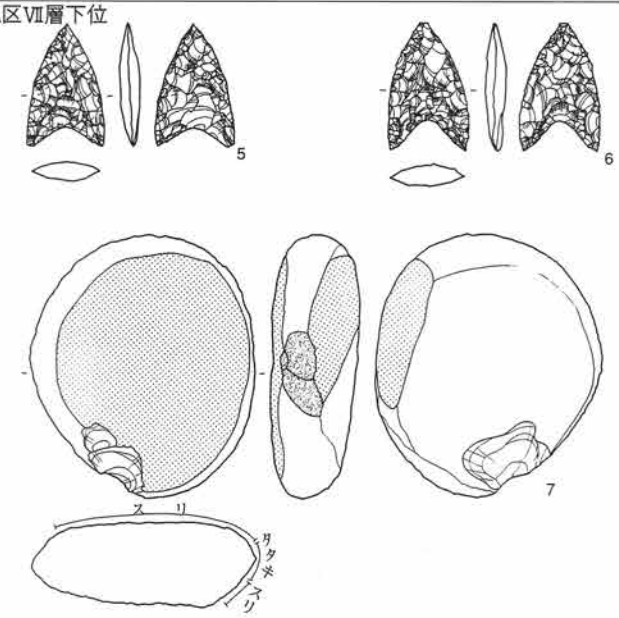
SX20



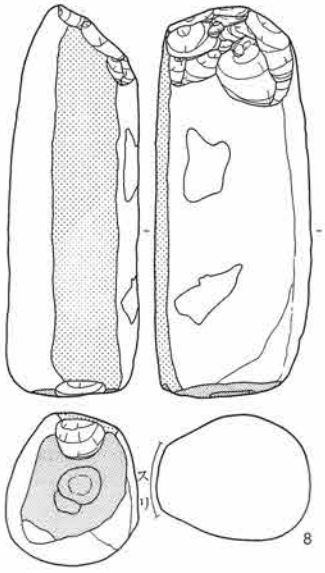
A区Ⅶ層上位



A区Ⅶ層下位



A区Ⅷ層



凡例

磨 痕

凹 痕

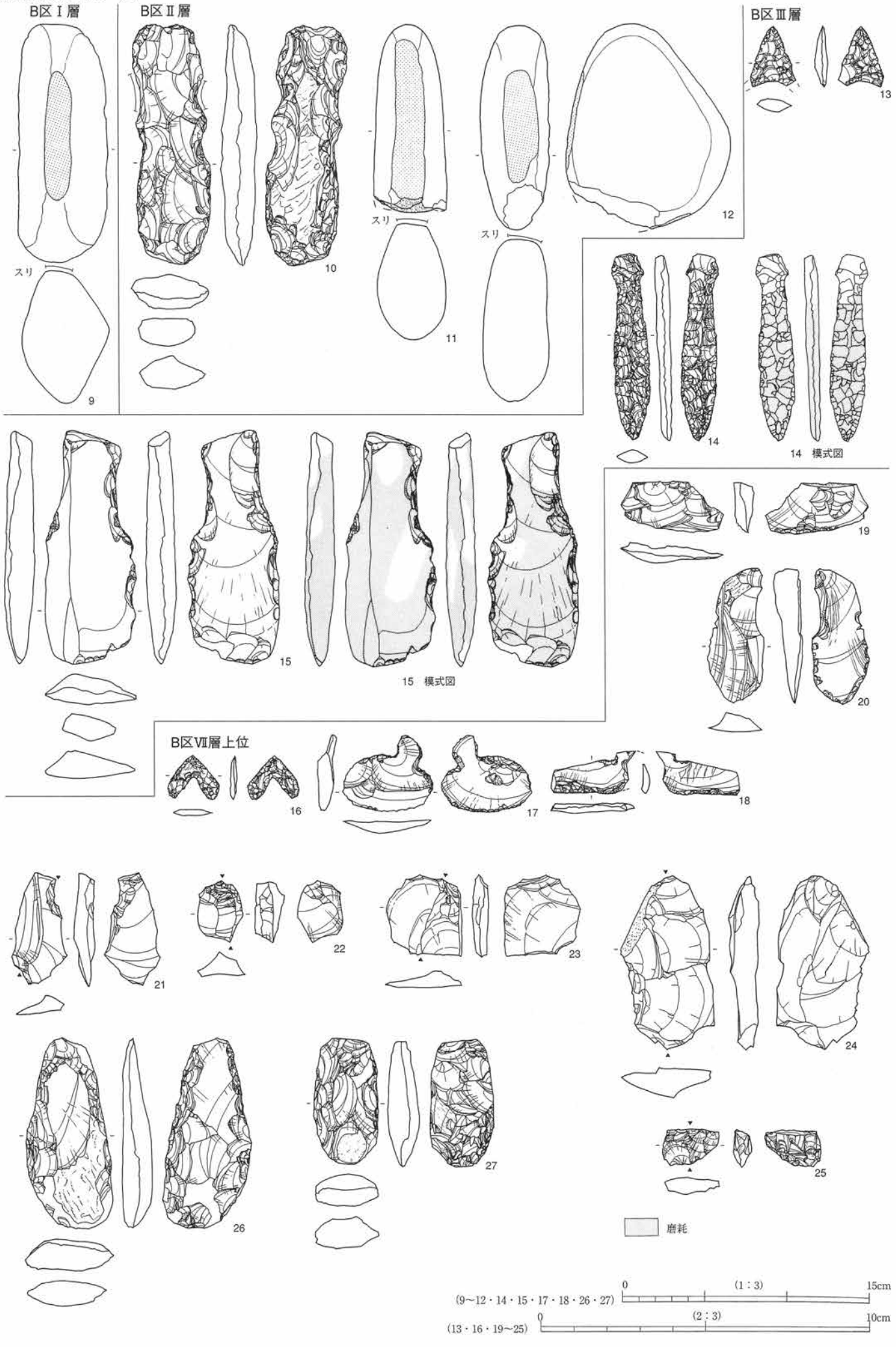
敲打痕

(2) 0 (1：4) 20cm

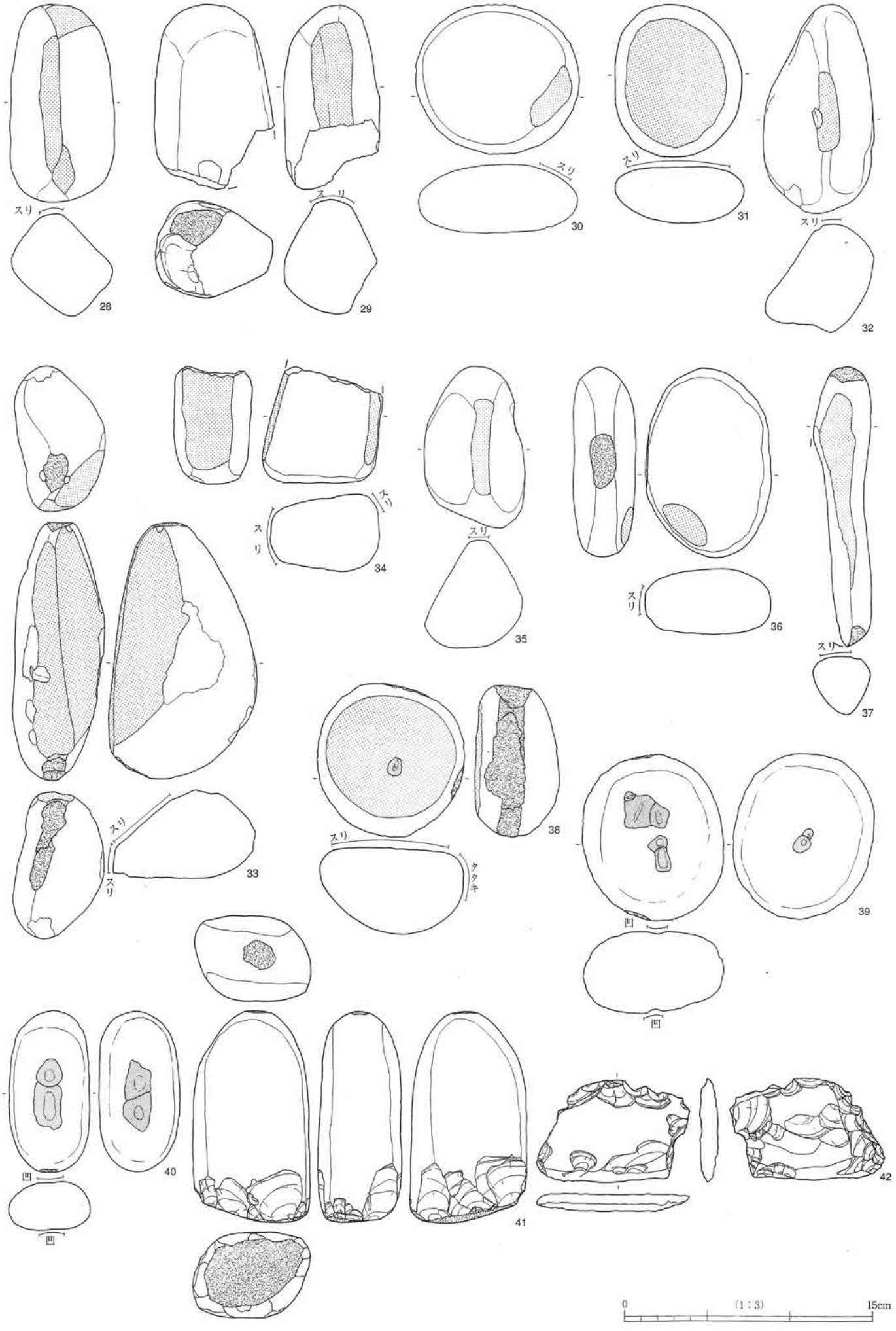
(4・7・8) 0 (1：3) 15cm

(1・3・5・6) 0 (2：3) 10cm

縄文時代の石器 (2)

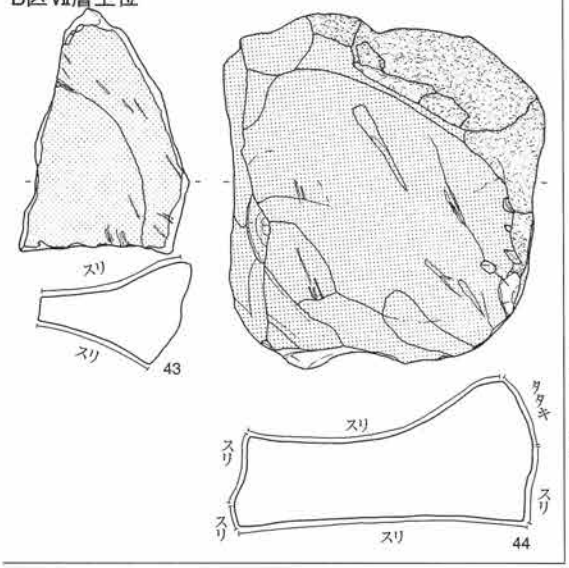

B区Ⅰ層
B区Ⅱ層
B区Ⅲ層
スリ
スリ
スリ
9
10
11
12
13
14
14 模式図
15
15 模式図
19
20
B区Ⅶ層上位
16
17
18
21
22
23
24
25
26
27
磨耗
(9～12・14・15・17・18・26・27)
0
(1：3)
15cm
(13・16・19～25)
0
(2：3)
10cm

B区Ⅶ層上位

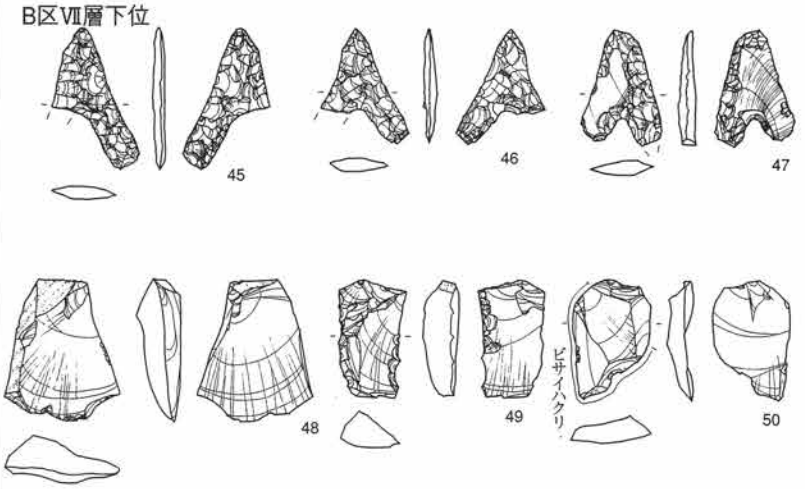


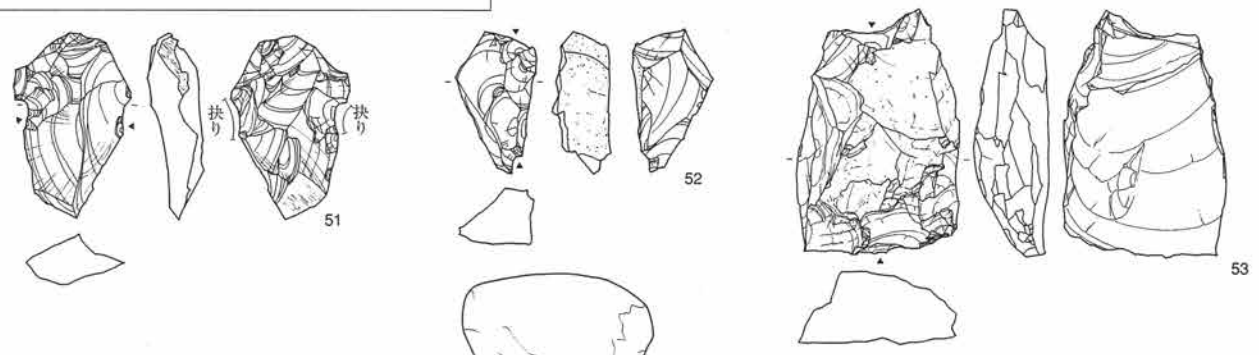
縄文時代の石器 (4)

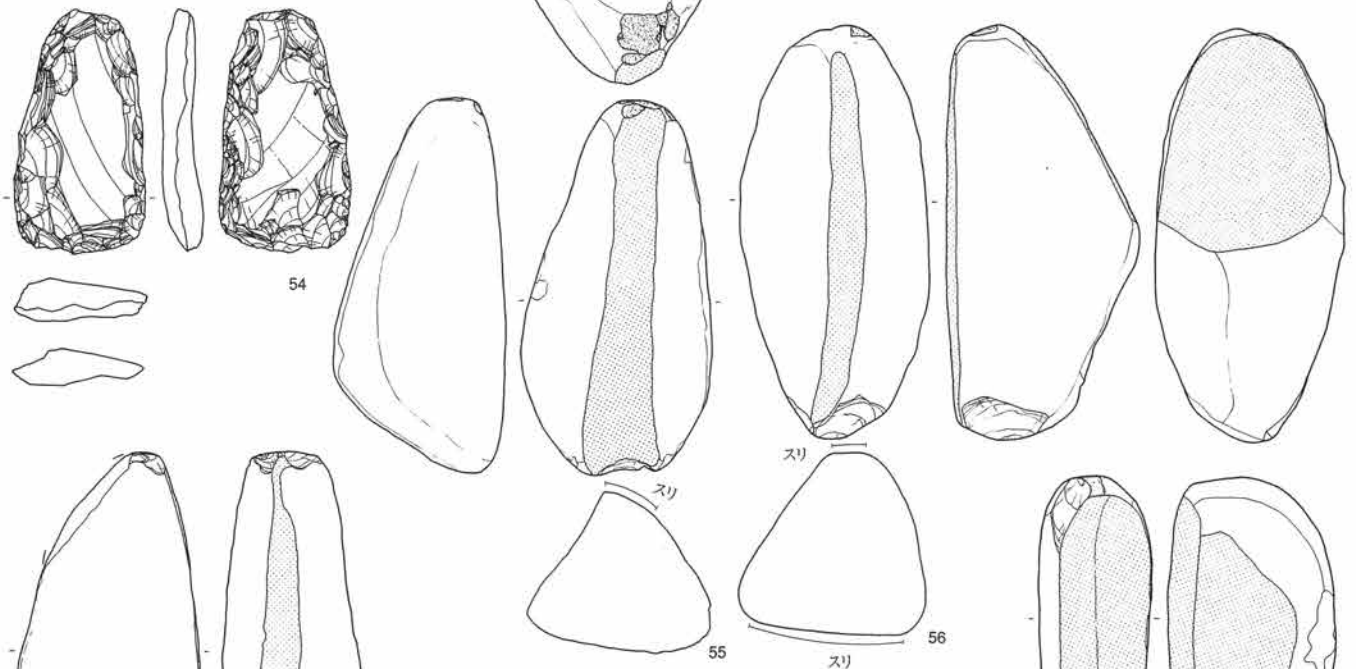
B区Ⅶ層上位

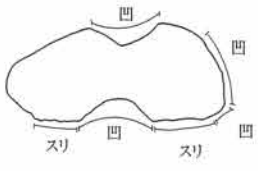


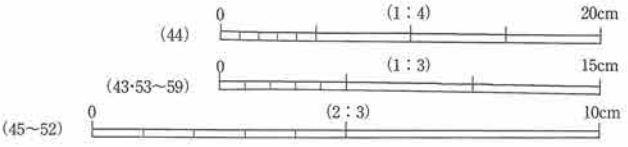
B区Ⅶ層下位







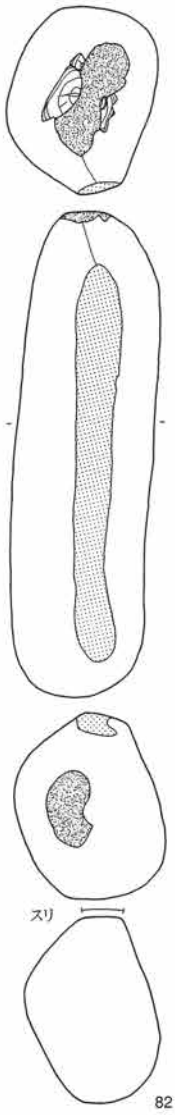


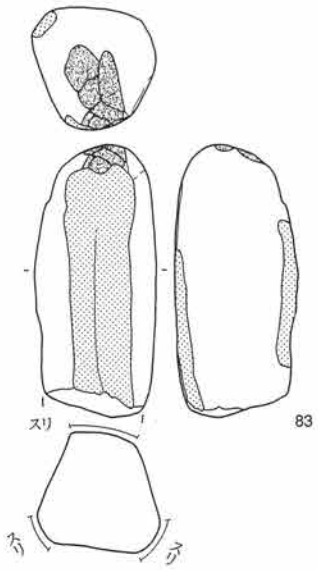


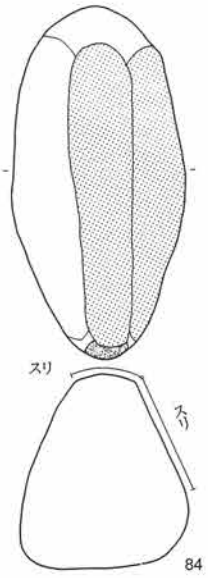
B区Ⅶ下層
スリ
タタキ
タタキ
スリ
60
凹
61
62
B区Ⅶ層
63
B区Ⅷ層
64
65
66
67
68
69
ビサイハクリ
ビサイハクリ
70
71
ビサイハクリ
72
ビサイハクリ
73
74
75
76
77
78
79
80
81
(60～62･66･79～81)
0
(1：3)
15cm
(63～65･67～78)
0
(2：3)
10cm

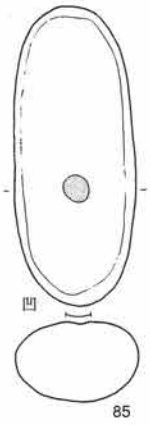
縄文時代の石器 (6)

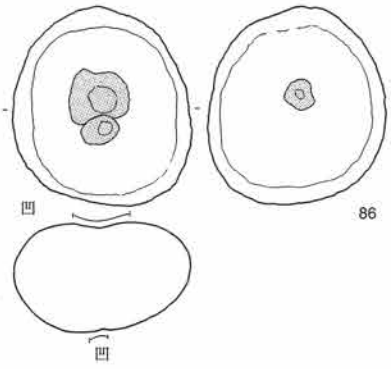
B区Ⅷ層

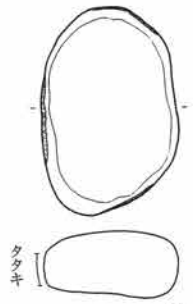




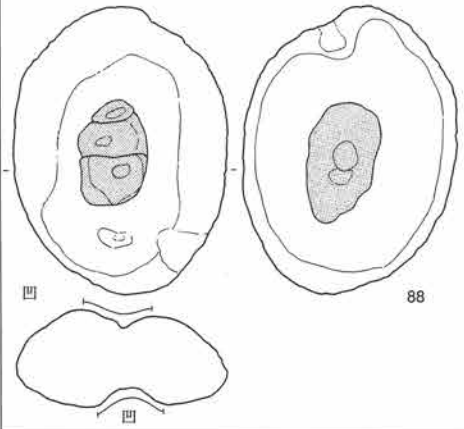




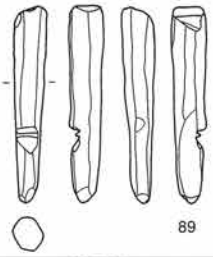




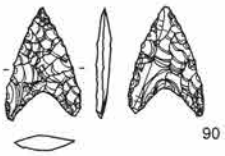
B区下層

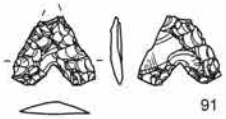


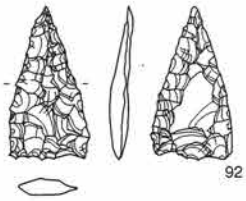
C区②層

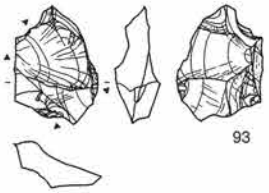


C区⑤層下位

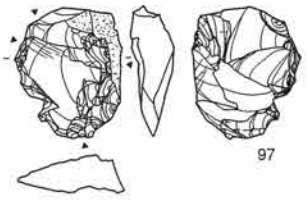


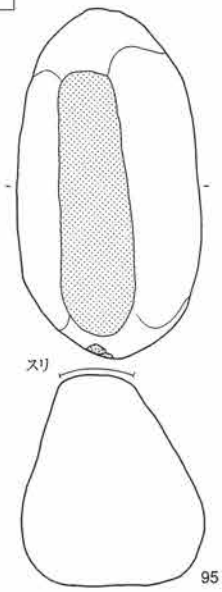


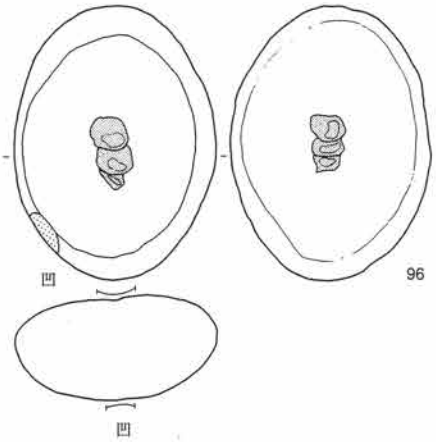




その他





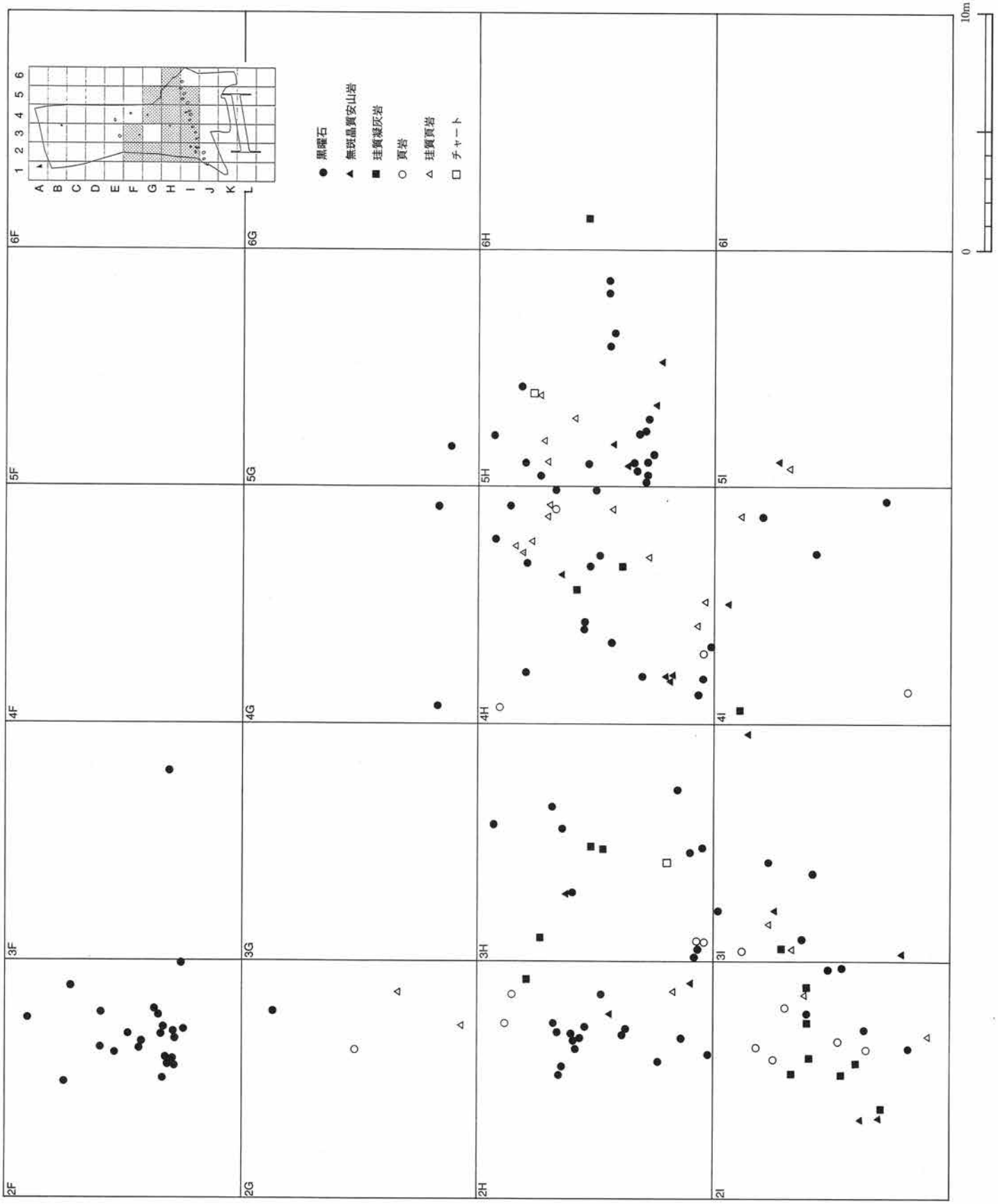


(82～88･94～96) 0 (1：3) 15cm

(89･90～93･97) 0 (2：3) 10cm

図版 26

縄文時代の石器　石材別分布



2G　3G　4G　5G　6G

2H

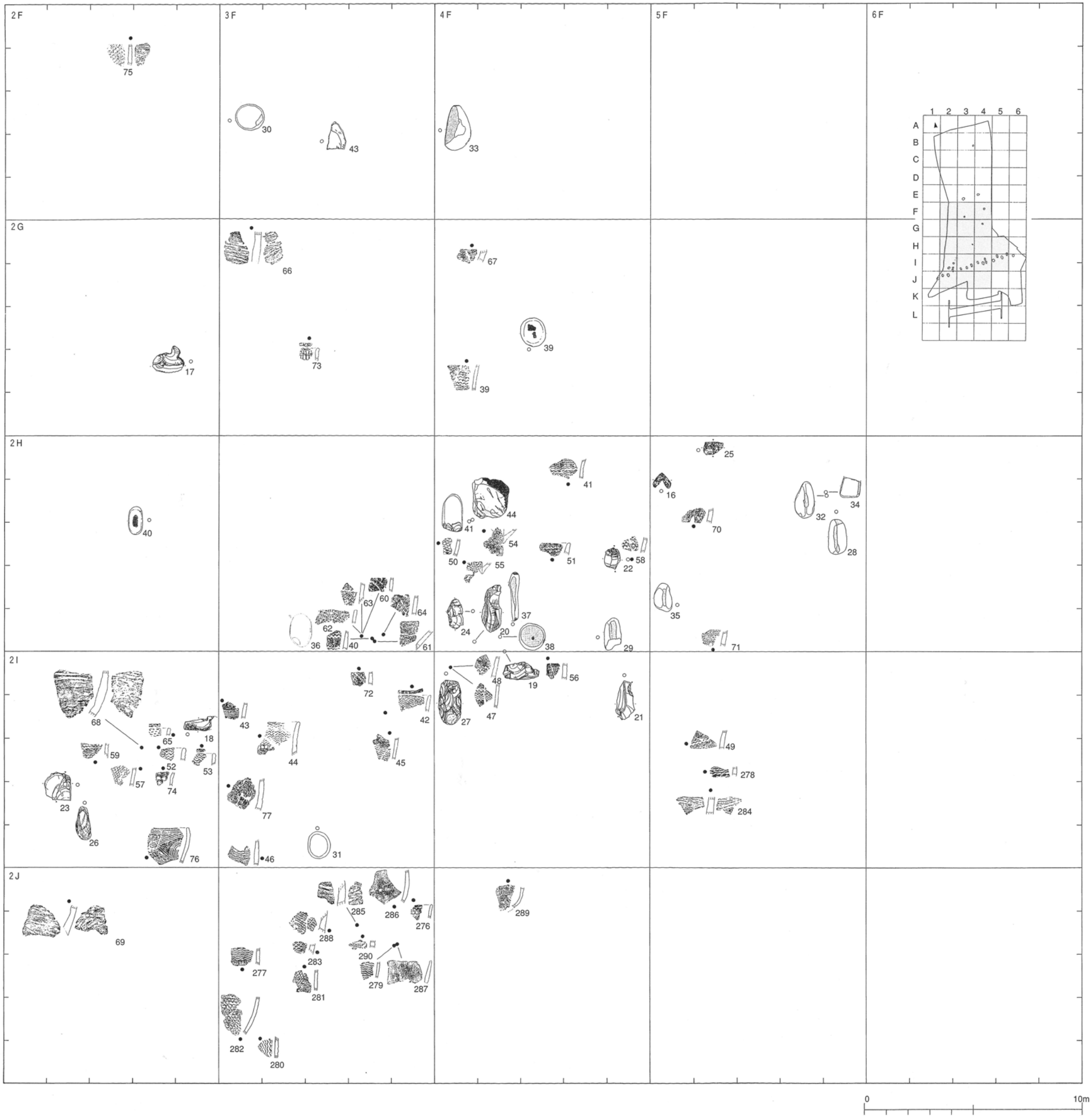
2I

2J

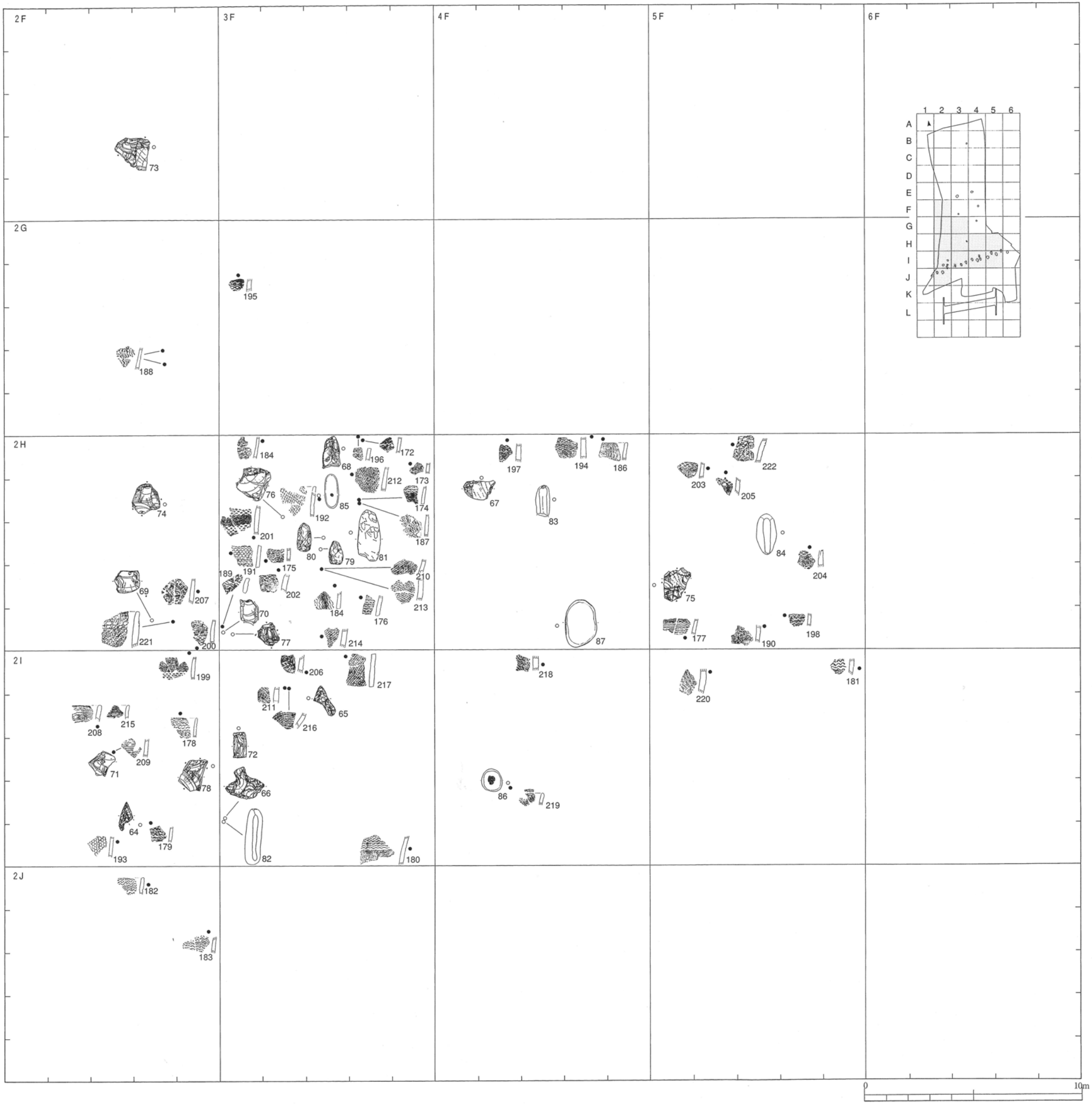
2K

1 2 3 4 5 6
A B C D E F G H I J K L

0　10m


2F
3F
4F
5F
6F
2G
2H
2I
2J
1 2 3 4 5 6
A B C D E F G H I J K L
0
10m

2F
3F
4F
5F
6F
2G
2H
2I
2J
1 2 3 4 5 6
A B C D E F G H I J K L
0 10m


2F
3F
4F
5F
6F
1 2 3 4 5 6
A B C D E F G H I J K L
2G
2H
2I
2J
0 10m

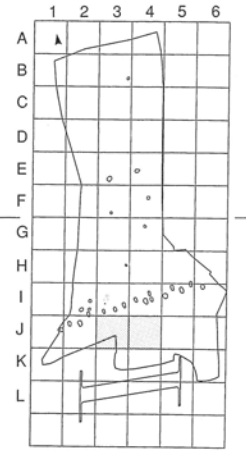
2F　3F　4F　5F　6F

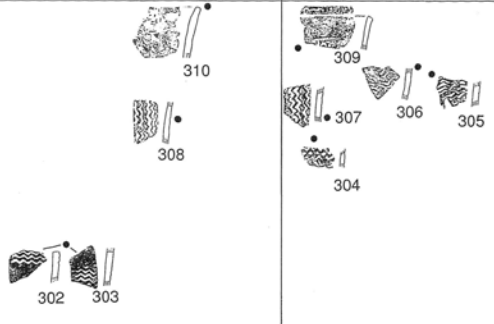
2G

2H

2I

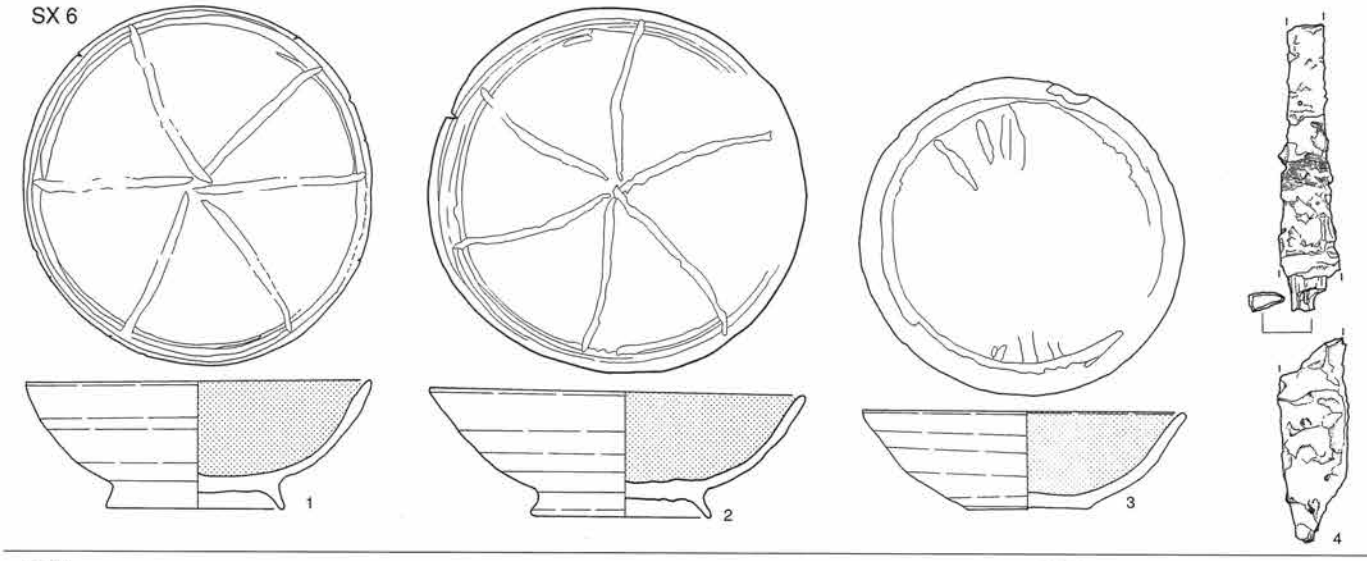
2J



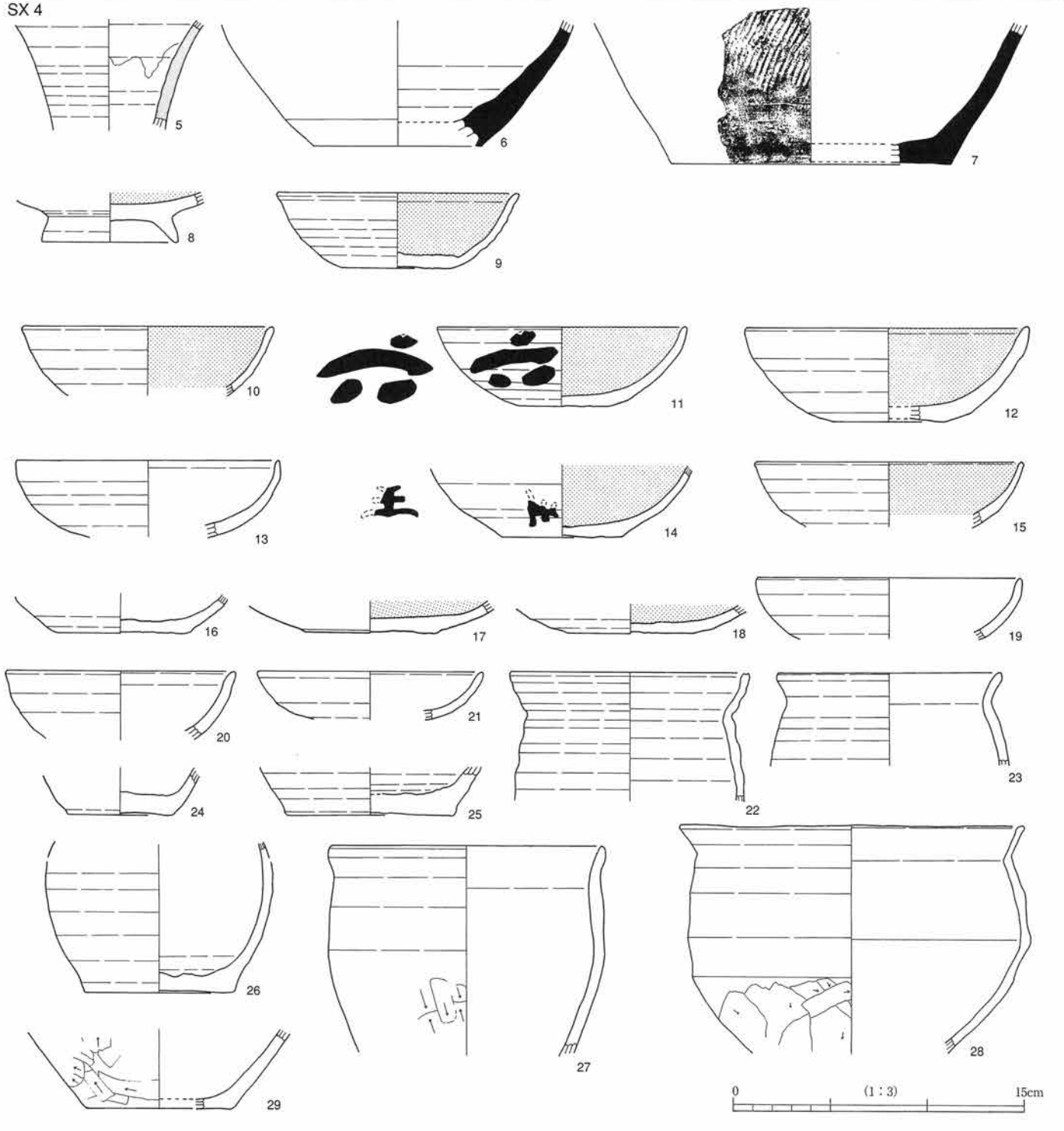


0　10m

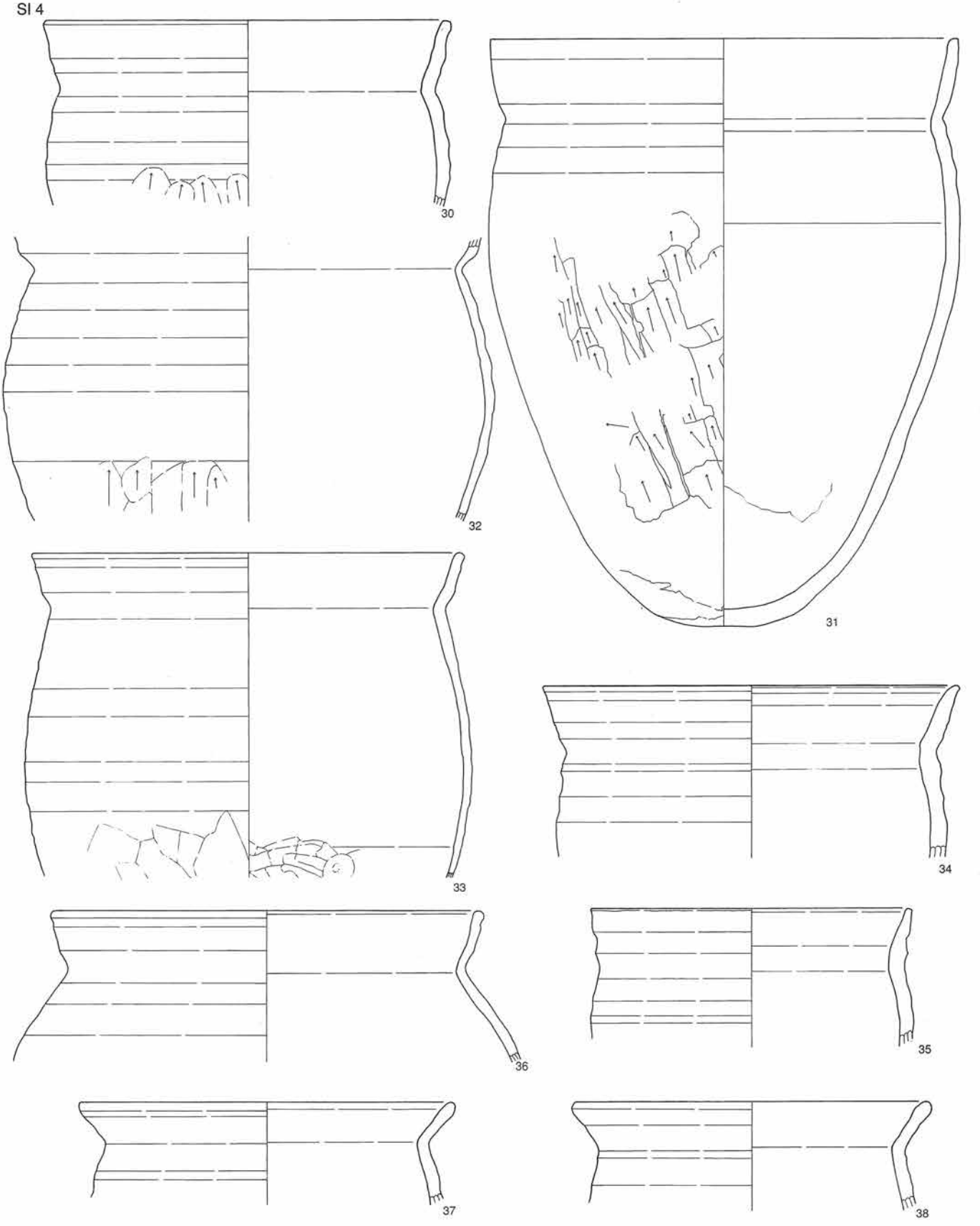
SX 6


1
2
3
4

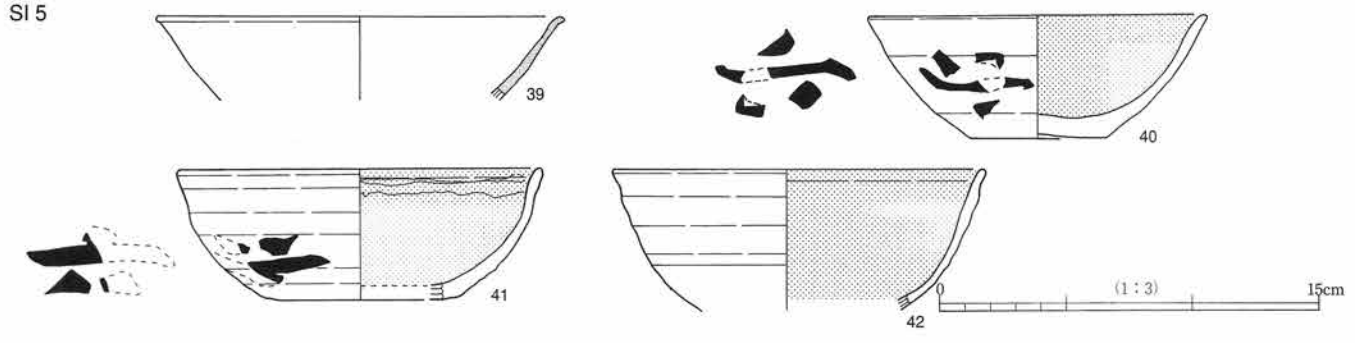
SX 4


5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
(1：3)
15cm

SI 4

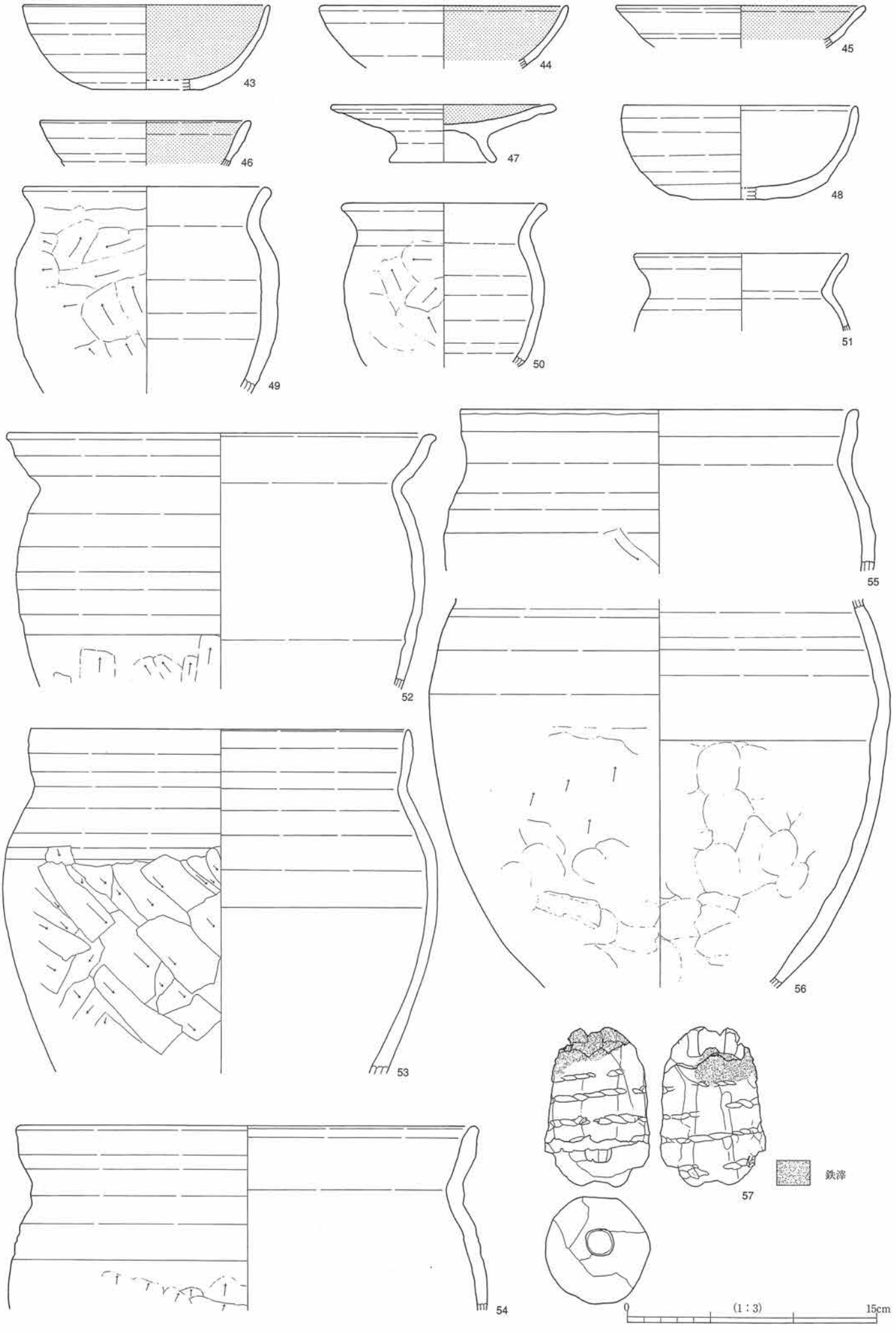


SI 5

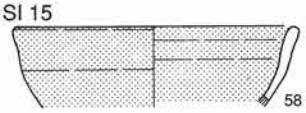


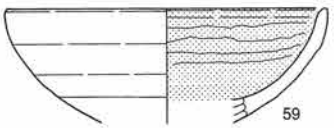
平安時代の遺物（3）

SI 5

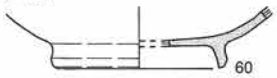


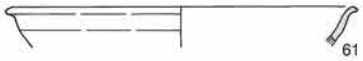
SI 15

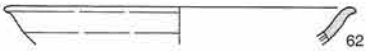

58


59

包含層

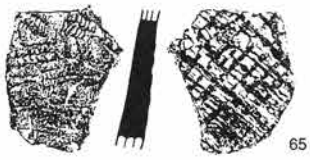

60

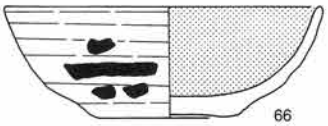

61

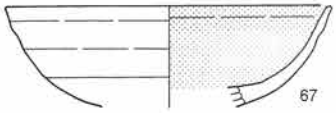

62

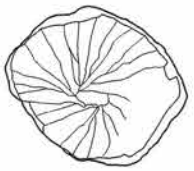
63

64

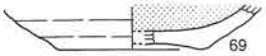

65

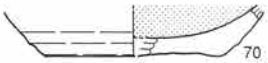

66


67



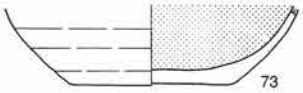
68

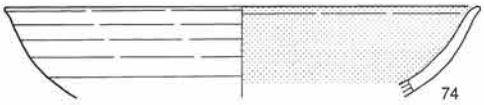

69

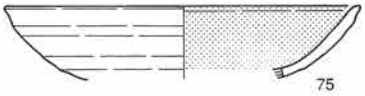

70

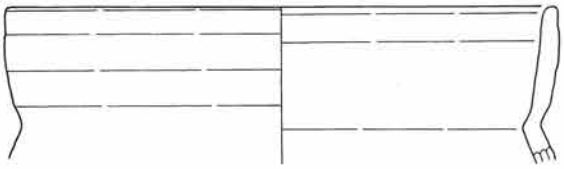
71

72

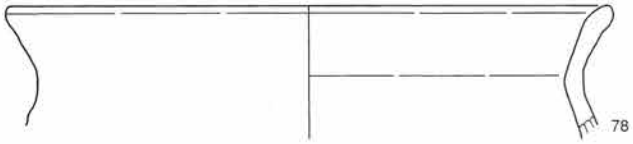

73

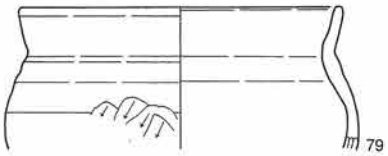

74


75

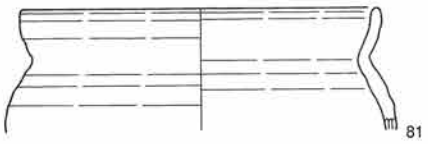

76

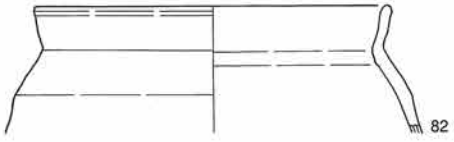
77

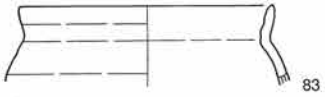

78

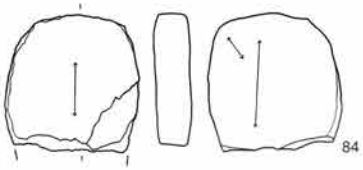

79

80


81


82


83

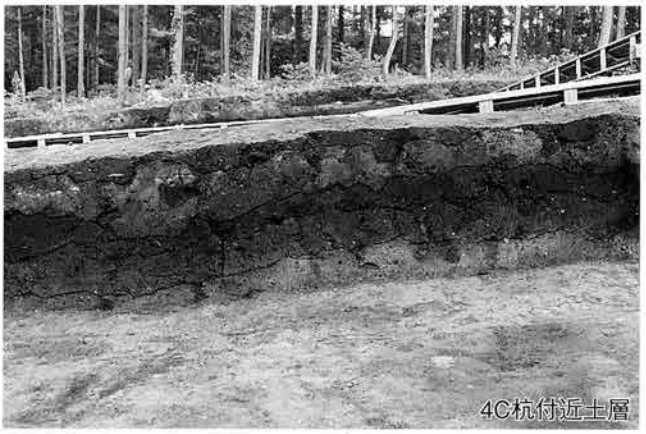

84

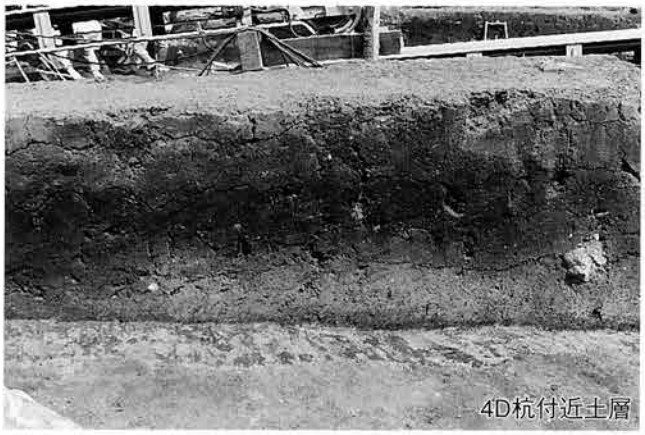
(58~83) 0 (1：3) 15cm

(84) 0 (2：3) 10cm

図版37

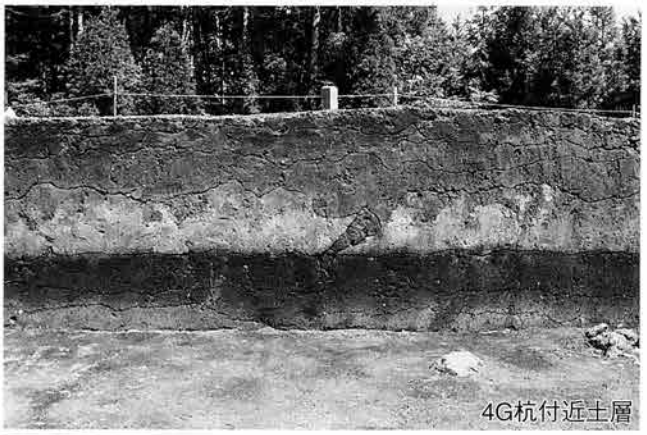
4B杭と4C杭の
中間付近土層


4C杭付近土層


4D杭付近土層

4E杭付近土層

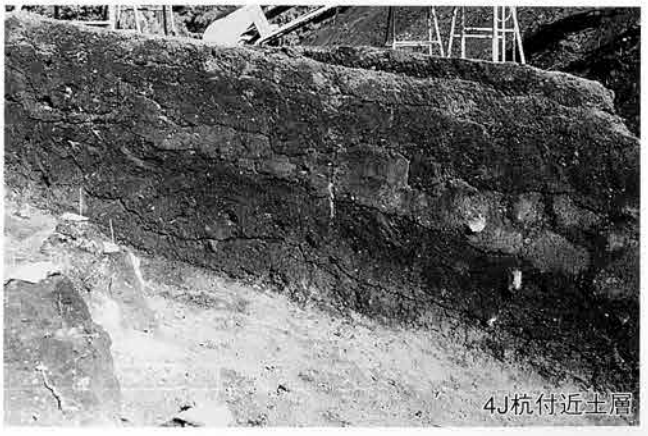
4F杭付近土層


4G杭付近土層

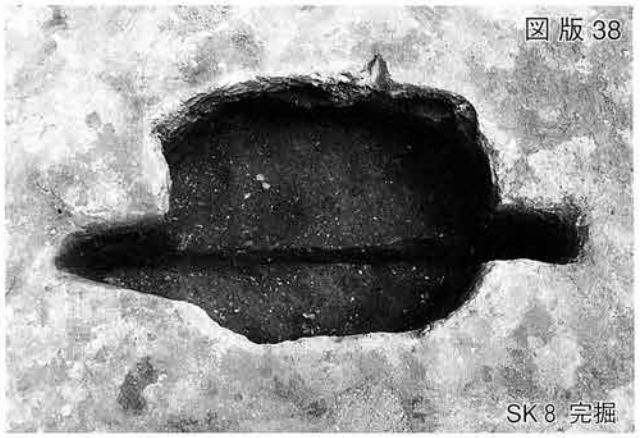
4H杭付近土層

4H杭と4I杭の
中間付近土層

4I杭付近土層

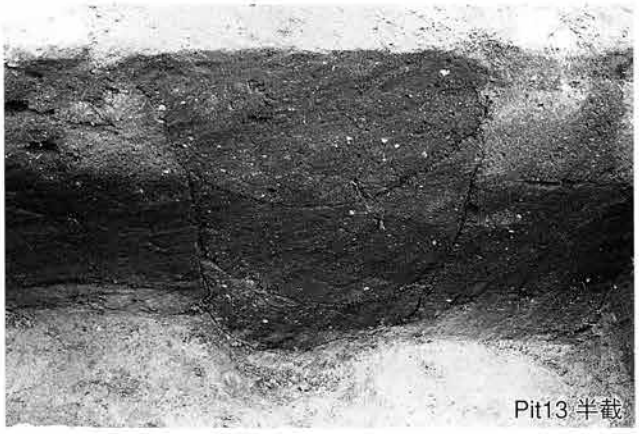

4J杭付近土層

SK 8 半截


SK 8 完掘

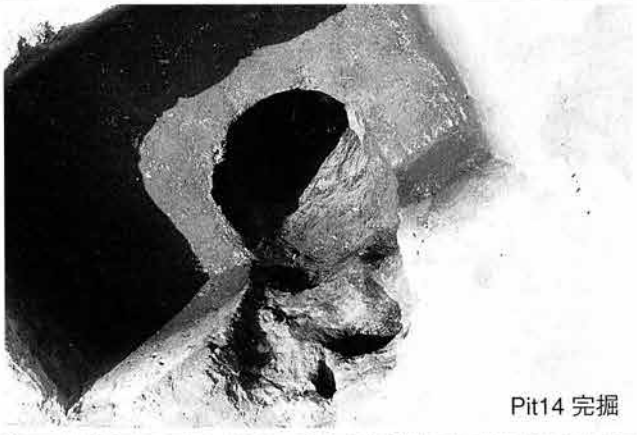
SK 9 半截

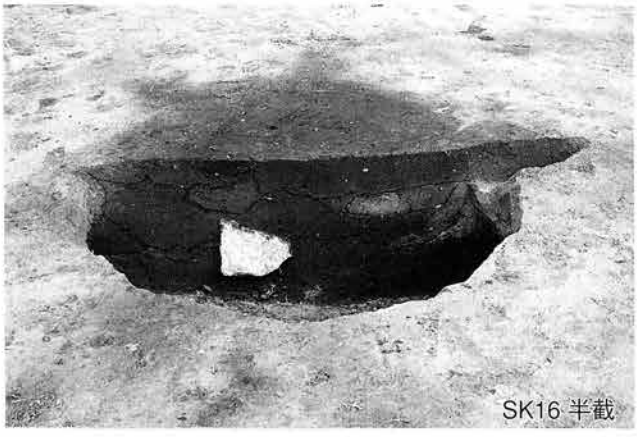
SK 9 完掘

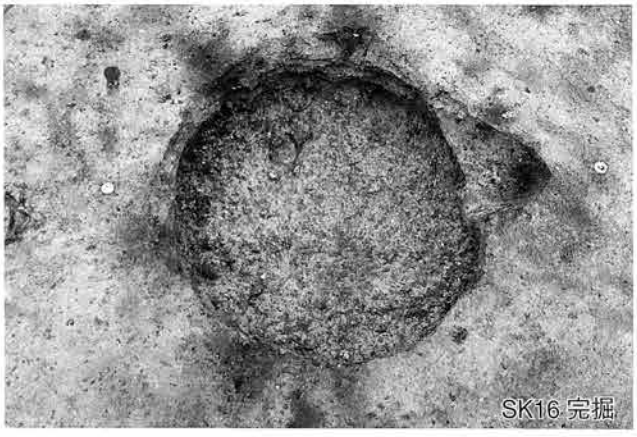

Pit13 半截

Pit13 完掘

Pit14 半截

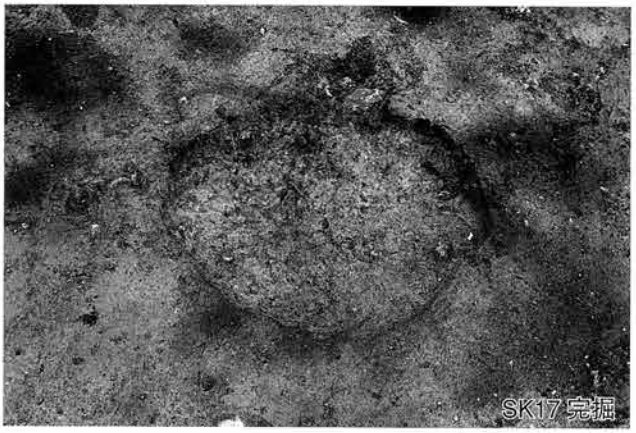

Pit14 完掘


SK16 半截


SK16 完掘

図版 39

SK17 半截


SK17 完掘

SK18 半截

SK18 完掘

SK19 半截

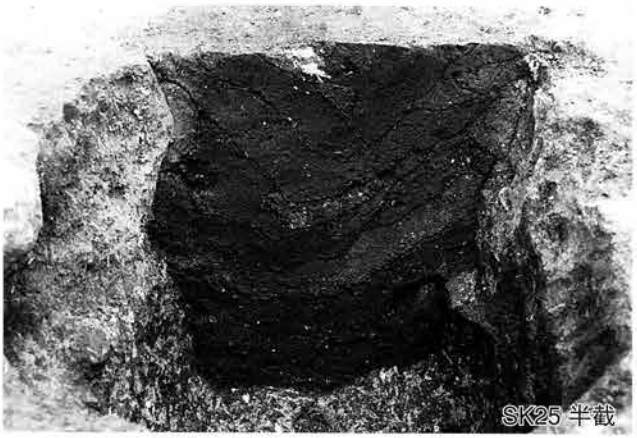
SK19 完掘

SK23 半截

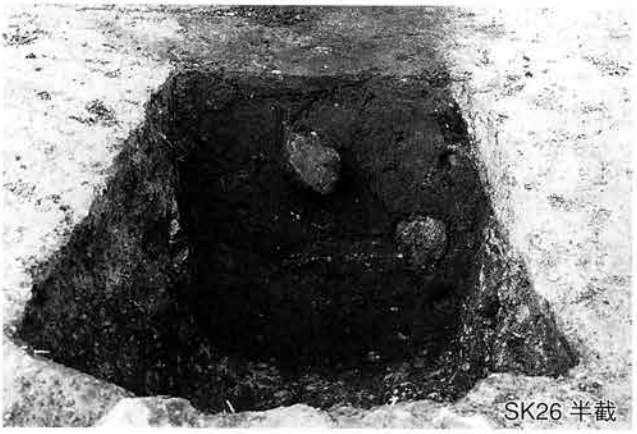
SK23 完掘

SK24 半截

SK24 完掘

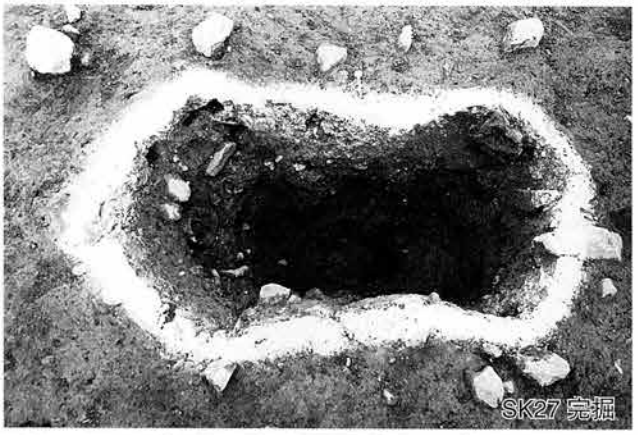

SK25 半截

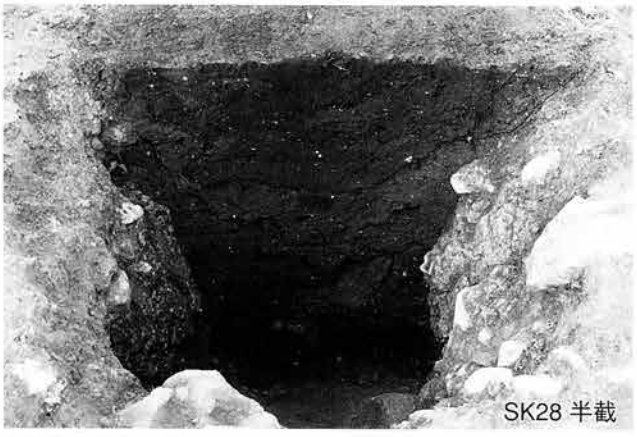
SK25 完掘


SK26 半截

SK26 完掘

SK27 半截


SK27 完掘


SK28 半截

SK28 完掘

SK29 半截

SK29 完掘

図版41

SK30 半截

SK30 完掘

SK31 半截

SK31 完掘

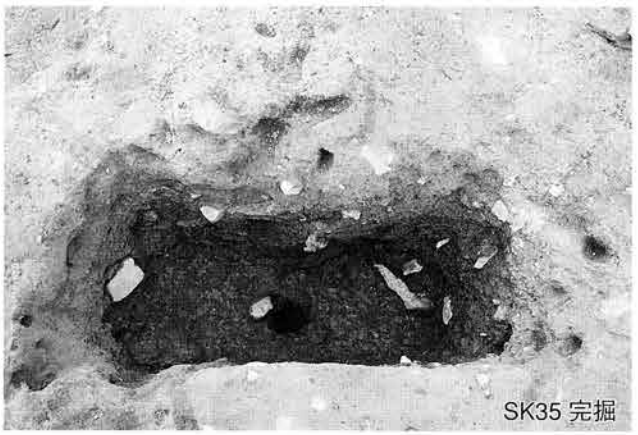
SK33 半截

SK33 完掘

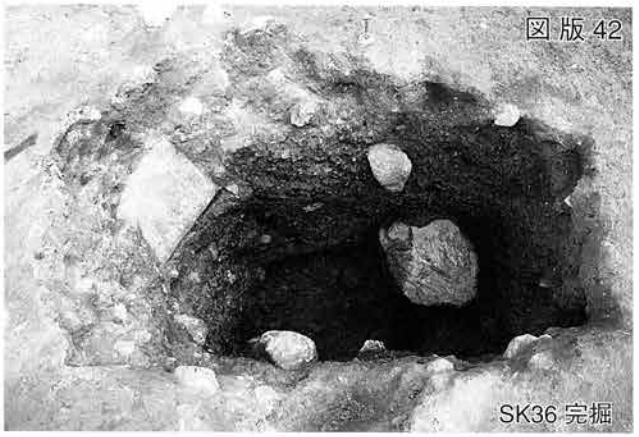
SK34 半截

SK34 完掘

SK35 半截


SK35 完掘

SK36 半截


SK36 完掘

SK37 半截

SK37 完掘

SK38 半截

SK38 完掘

SK39 半截

SK39 完掘

SK40 半截

SK40 完掘

図版 43

SB11 完掘

SX12 礫検出

SX12 半截

SX20 礫検出

SX20 半截

SX20 完掘

SX21 半截

SX21 礫検出

SX22 半截

SX22 礫検出

SX32 礫検出

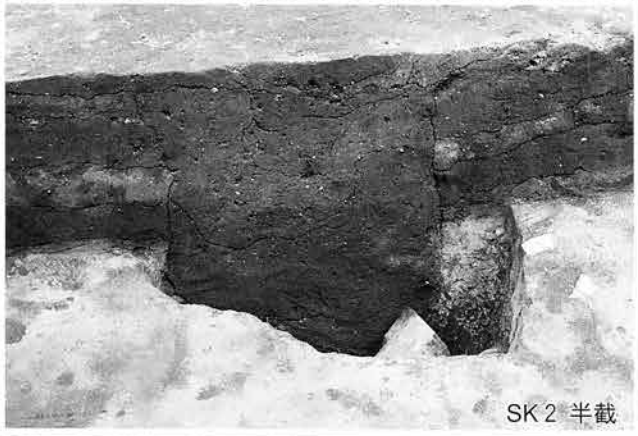
SX32 半截

集石全景

礫石・磨石
共伴出土状況

南側斜面完掘

南側沢地調査風景


SK 2 半截

SK 2 完掘

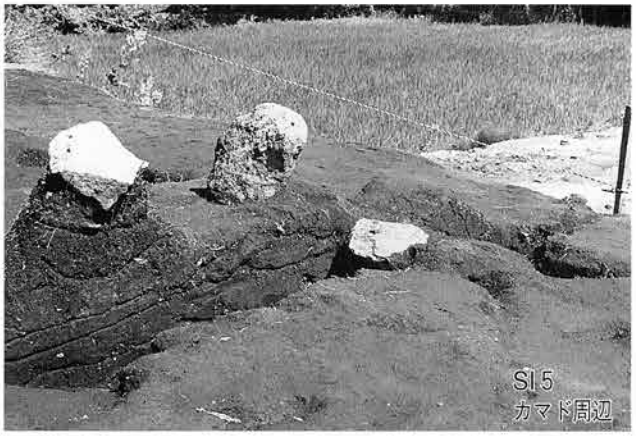
SI 4
遺物出土状況

SI 4 完掘

図版45

SI 5
カマド 半截

SI 5 完掘


SI 5
カマド周辺

SI 15 完掘

SX6 遺物出土状況

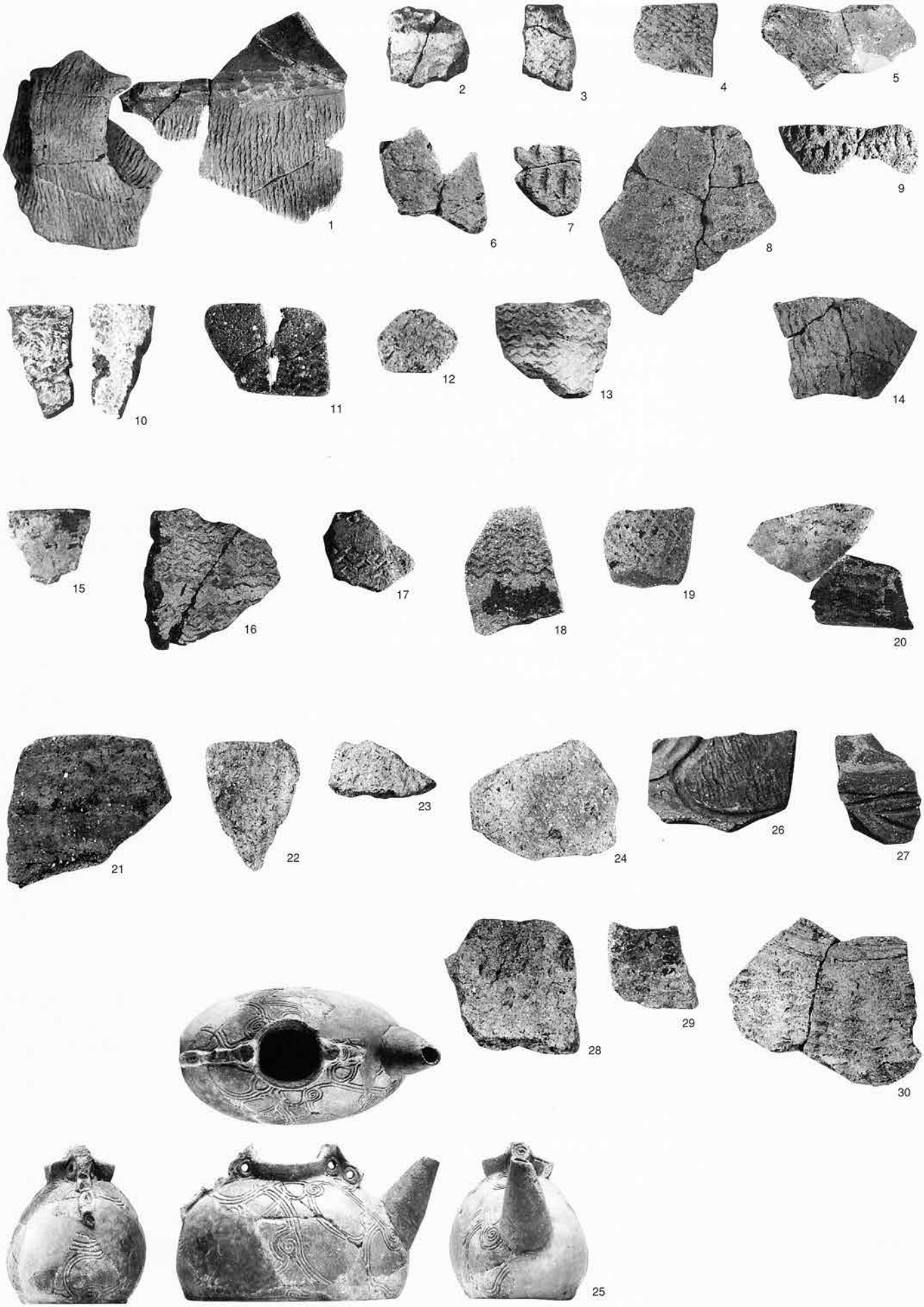
SX6 遺物出土状況

SX6 遺物出土状況

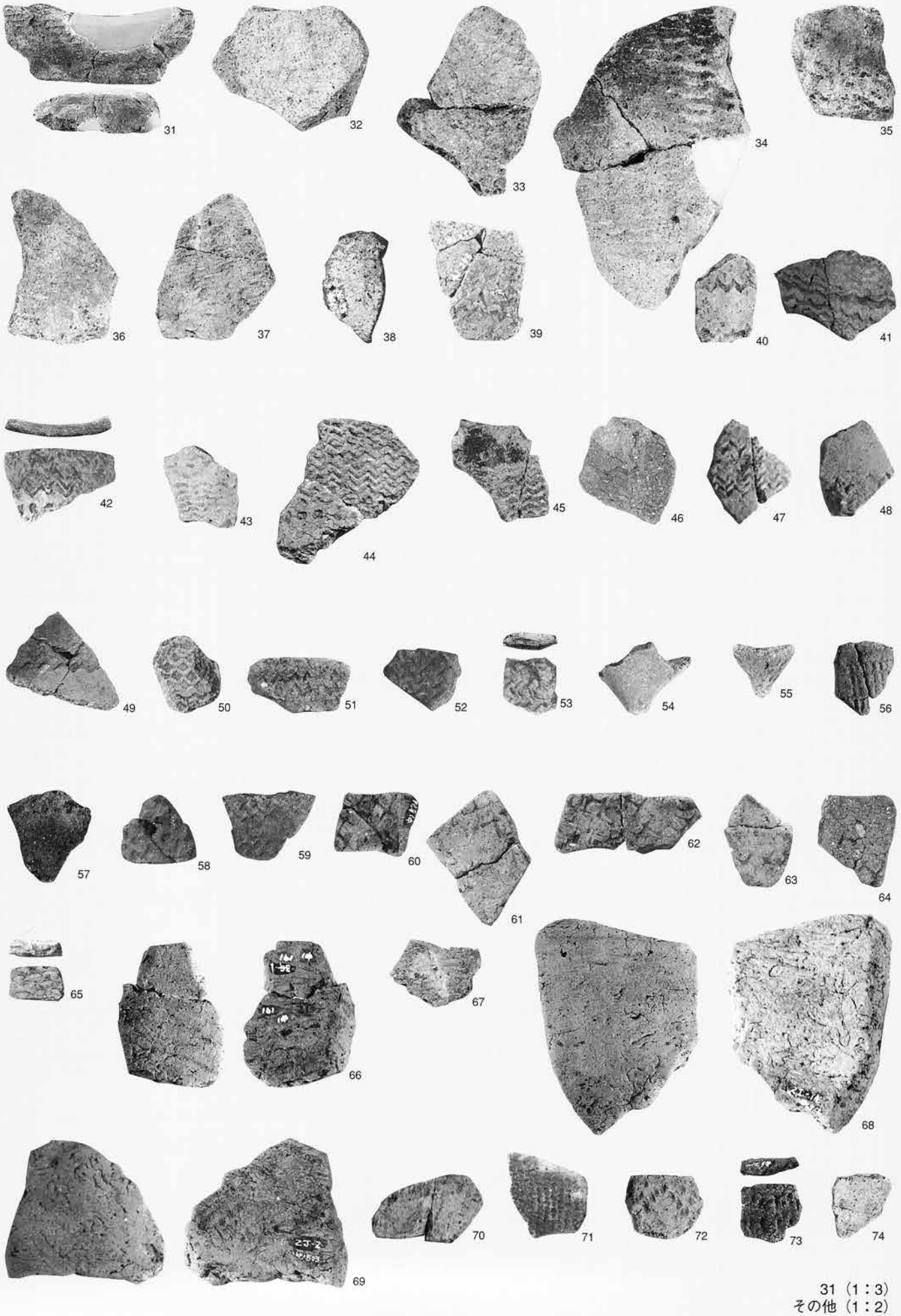
SX6 遺物出土状況

陥穴状土坑列完掘

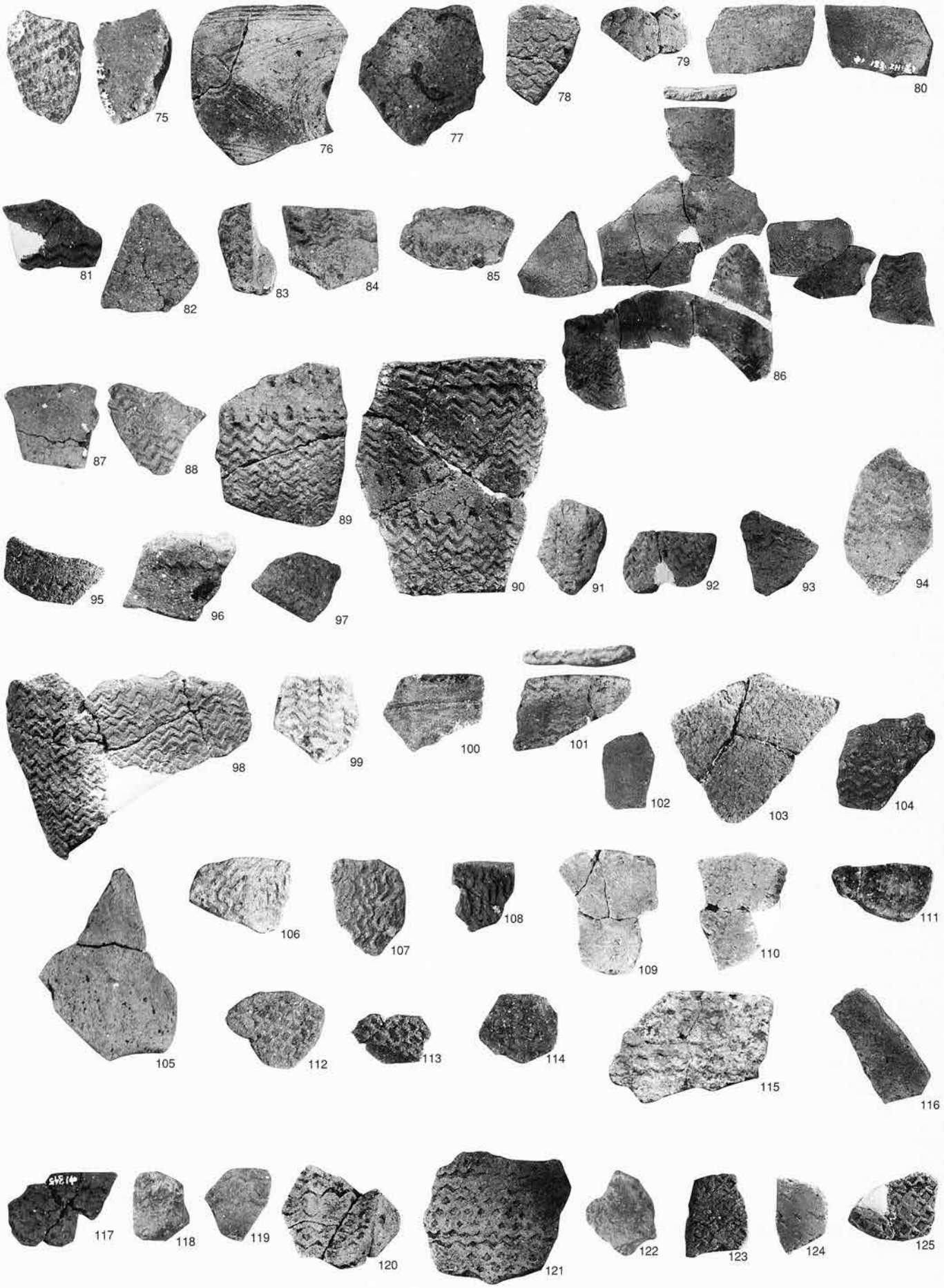
SB11周辺 完掘



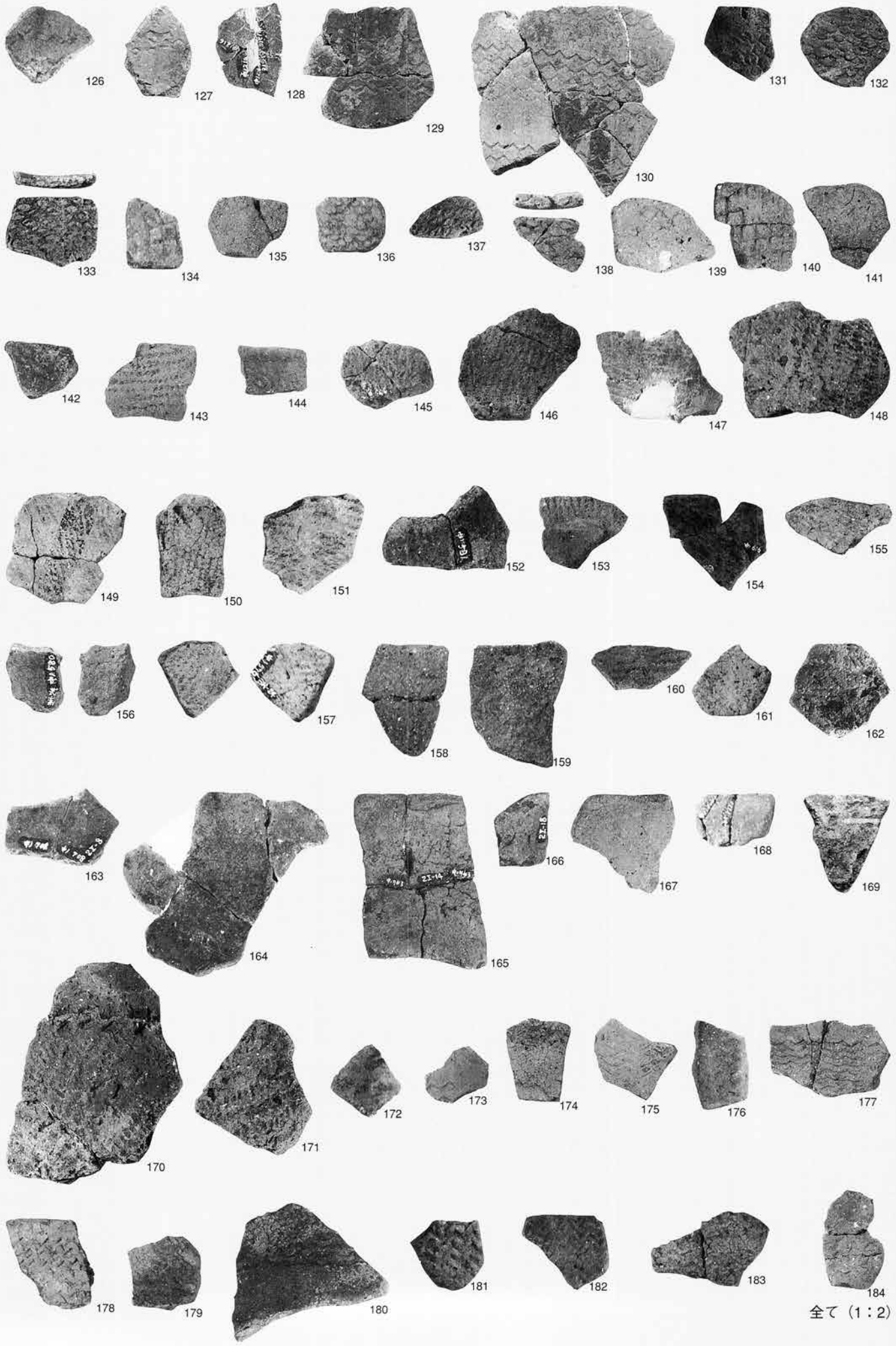
1・4・9・20・25（1：3）
その他　　（1：2）


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74

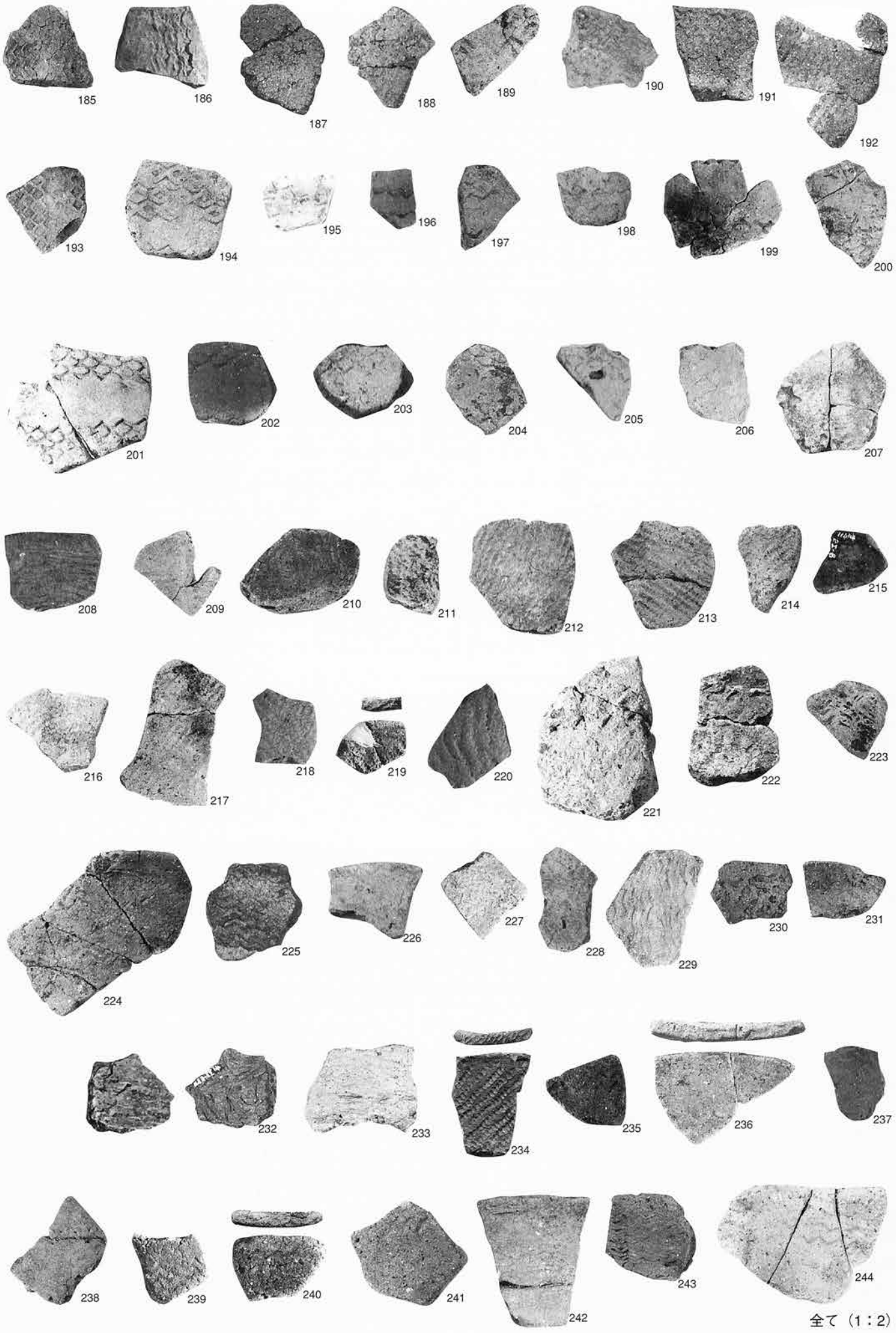
31（1：3）
その他（1：2）


75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125

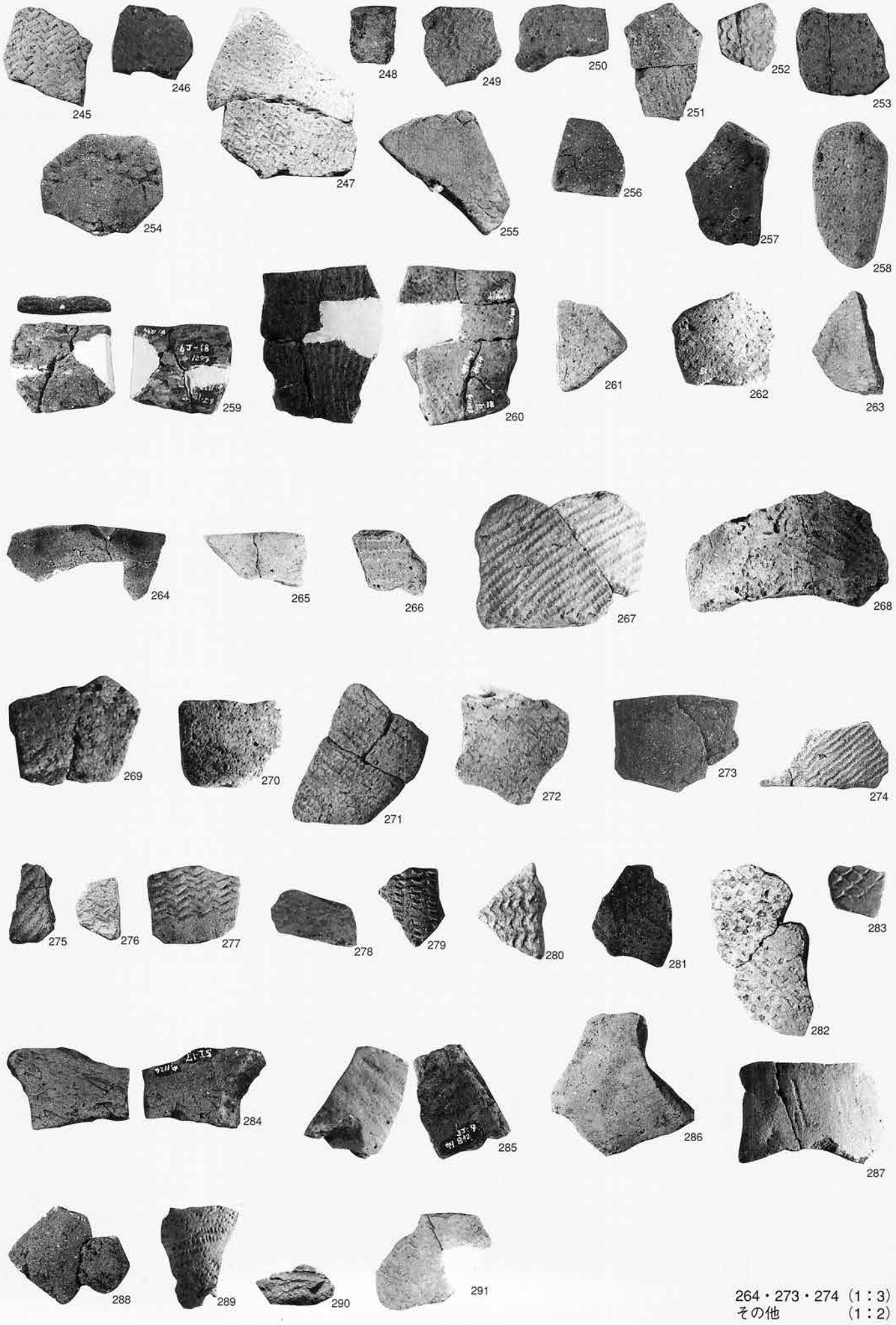
86（1：3）
その他（1：2）


126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184

全て（1：2）

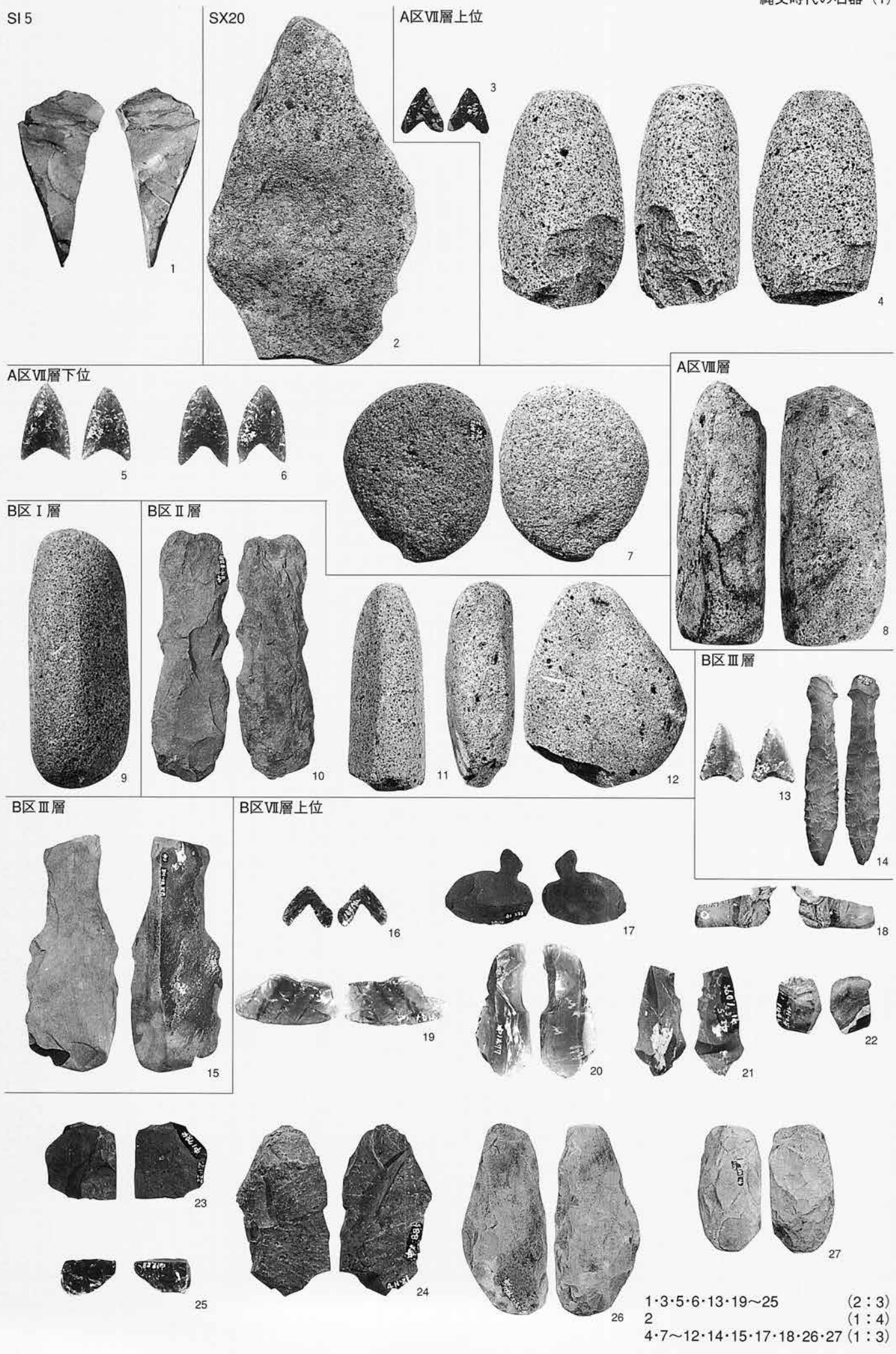

185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244

全て（1：2）



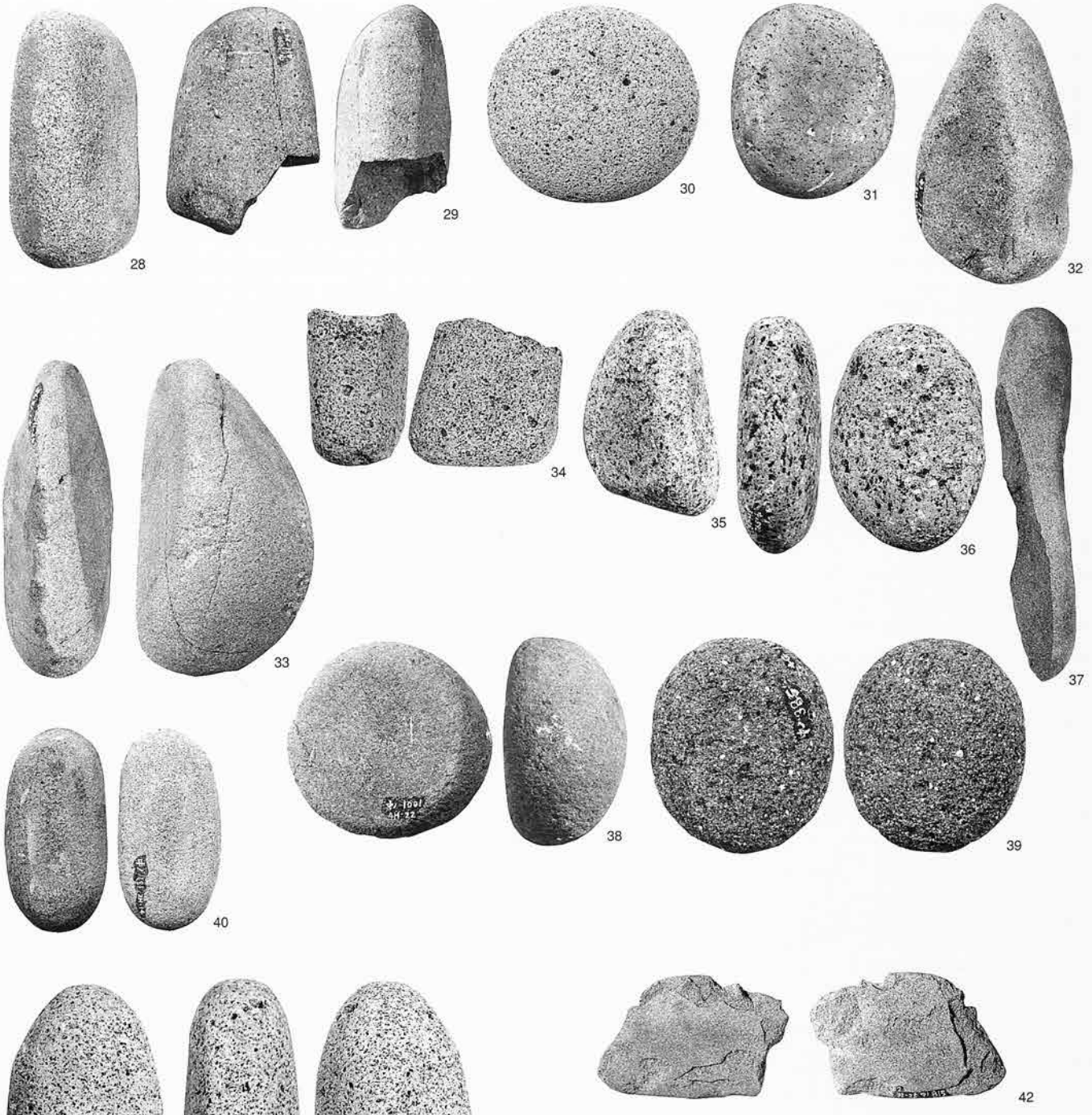
264・273・274（1：3）
その他　（1：2）

301・322（1：3）
その他　（1：2）

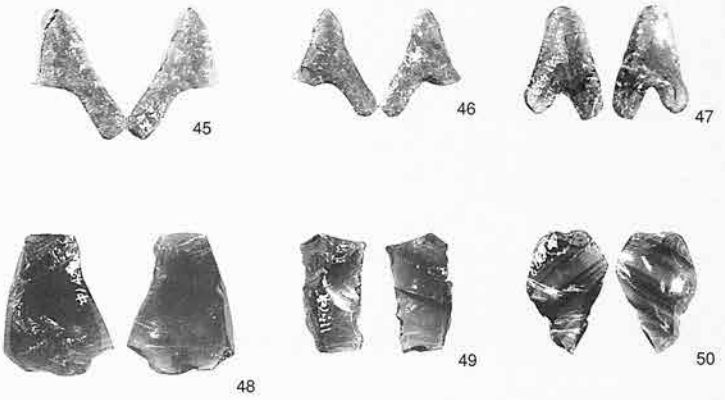


1·3·5·6·13·19～25　(2：3)
2　(1：4)
4·7～12·14·15·17·18·26·27　(1：3)

縄文時代の石器（2）
B区Ⅶ層上位



B区Ⅶ層下位

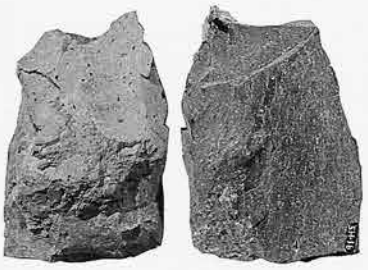


28～43（1：3）
44　（1：4）
45～50（2：3）

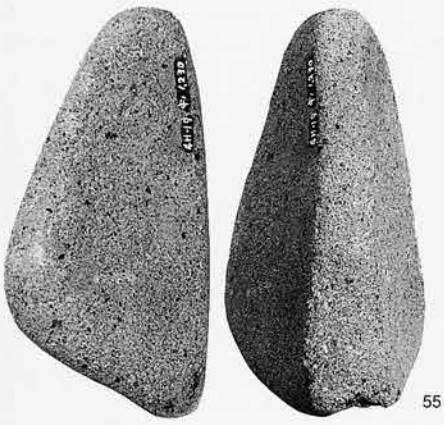
B区Ⅶ層下位

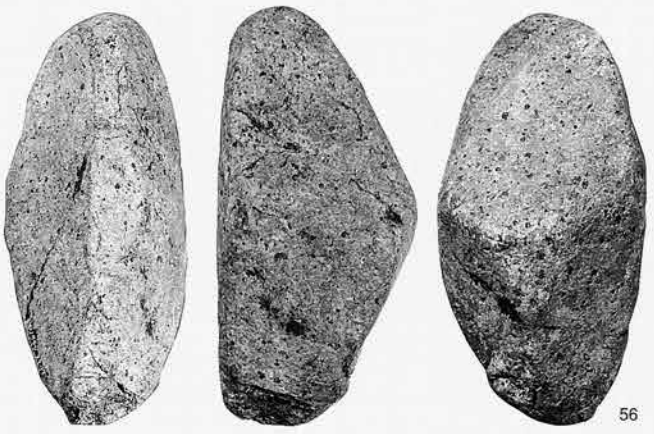
51

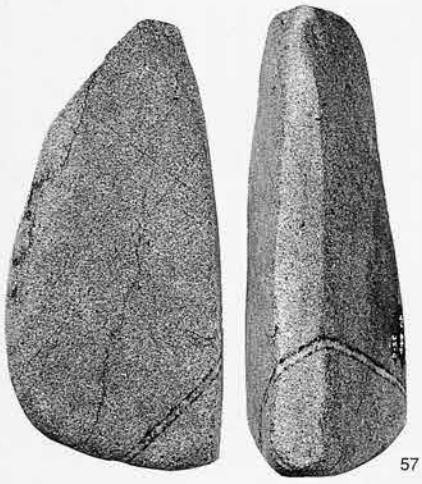
52

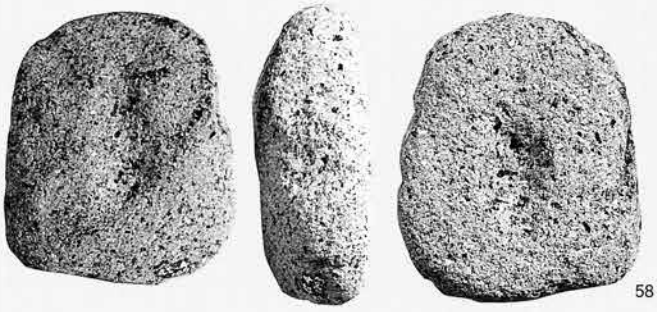

53

54


55

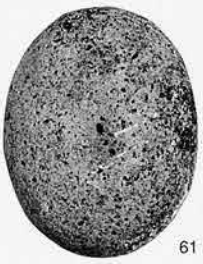

56


57


58

59

60


61

62

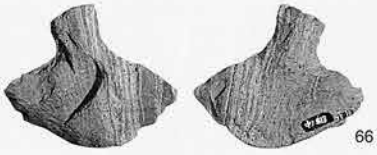
B区Ⅶ層

63

B区Ⅷ層

64

65


66

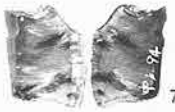
51・52・63～65　(2：3)
53～62・66　　(1：3)

縄文時代の石器（4）
B区Ⅷ層

67

68

69


70

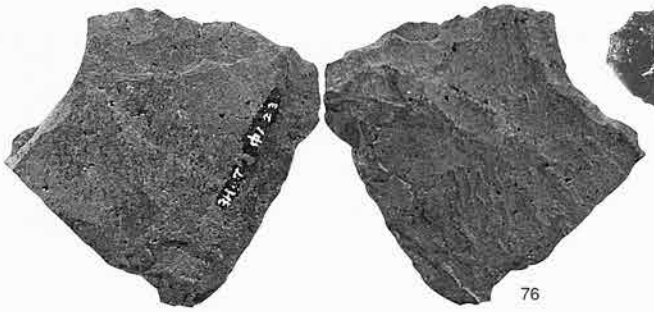
71

72

73

74

75


76

77 78

79

80

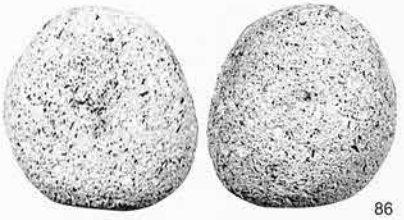
81

82

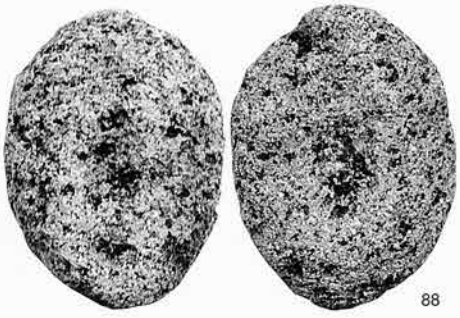
83

84

85


86

87


88

C区②層

89

C区⑤層下位

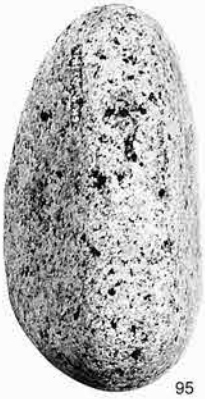
90

91

92

93

94


95

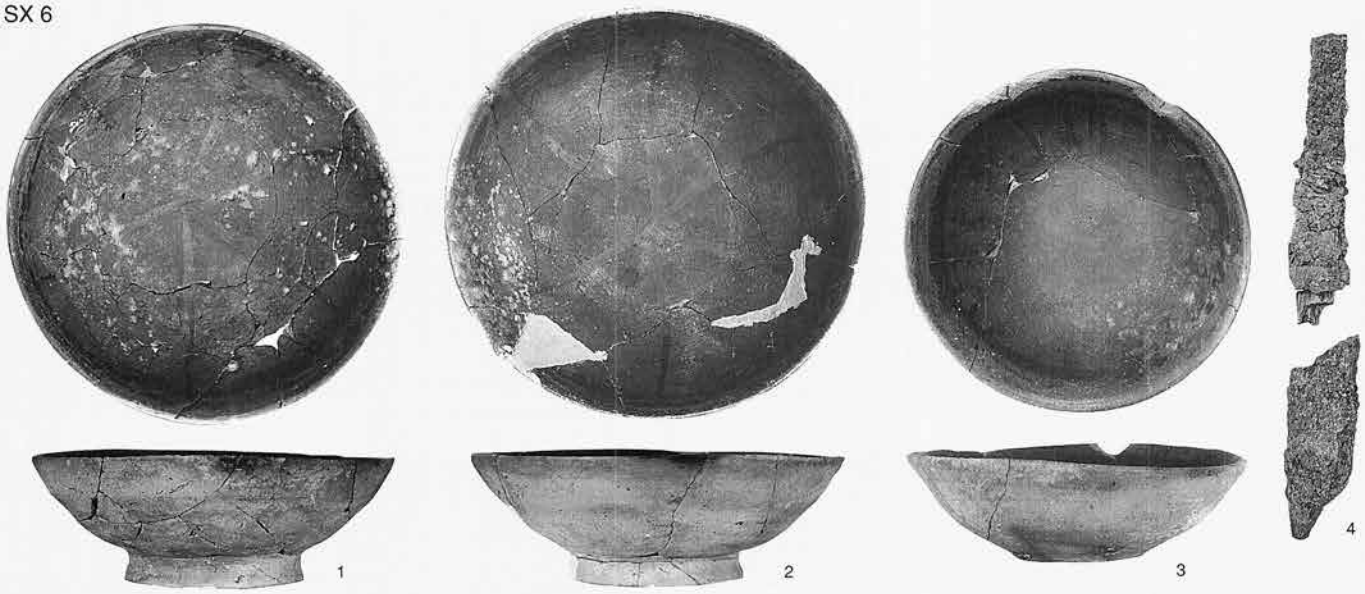
96

その他

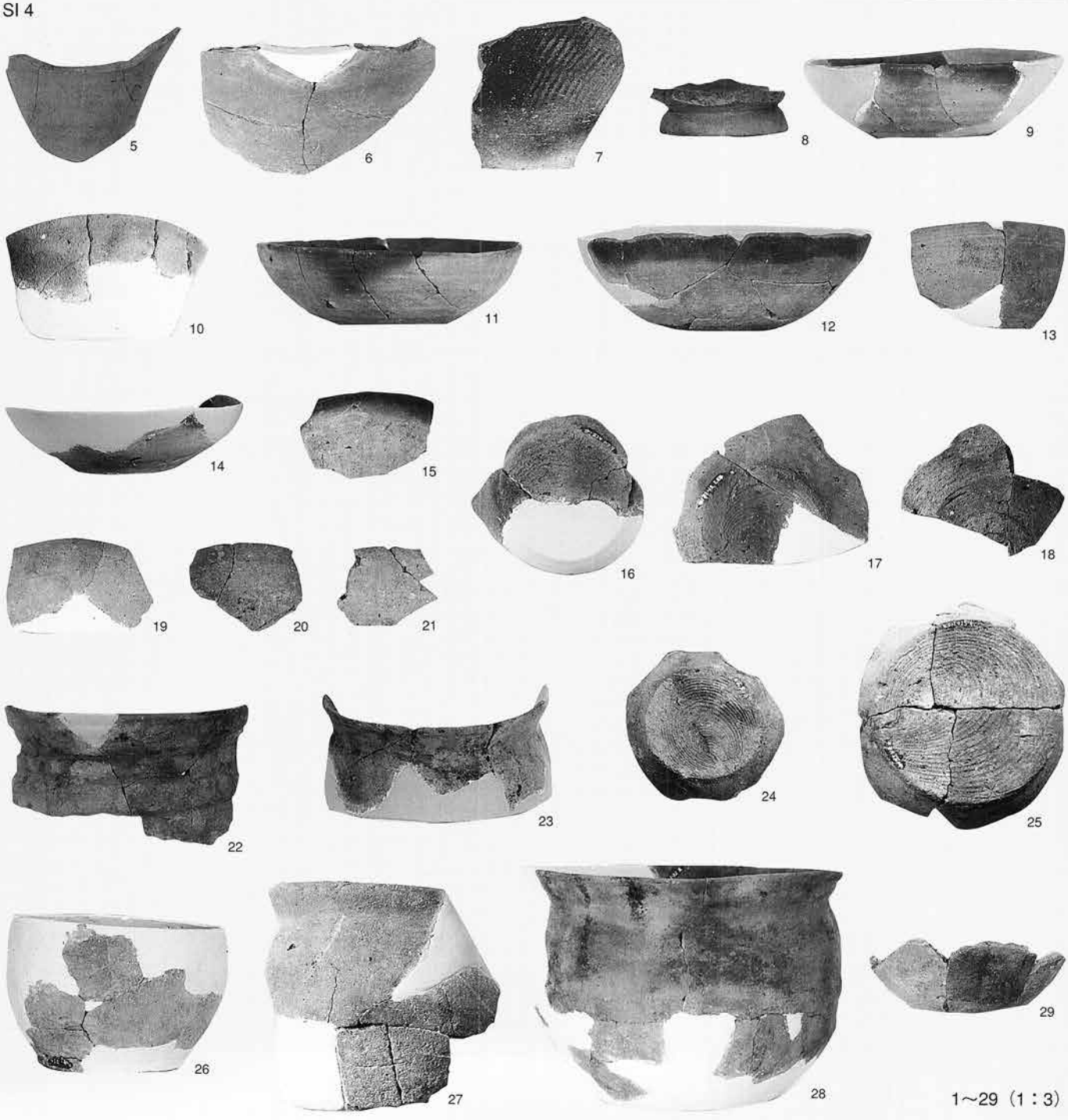
97

67～78・89～93・97　(2：3)
79～88・94～96　(1：3)

SX 6



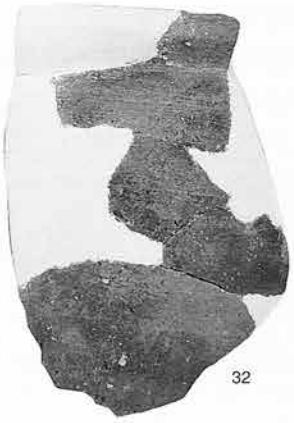
SI 4



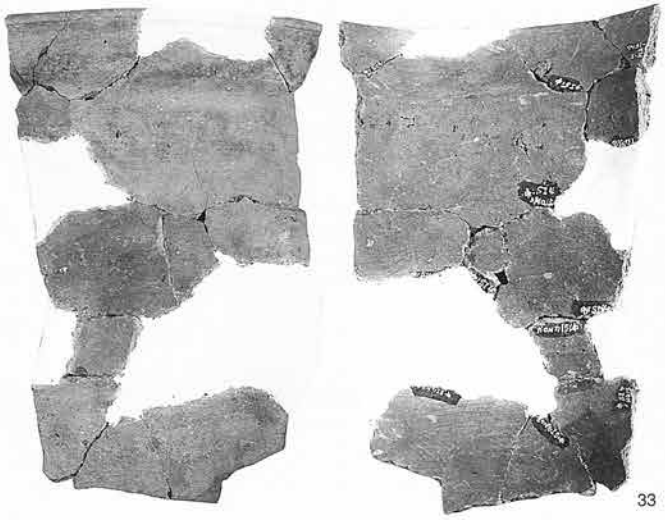
1～29（1：3）

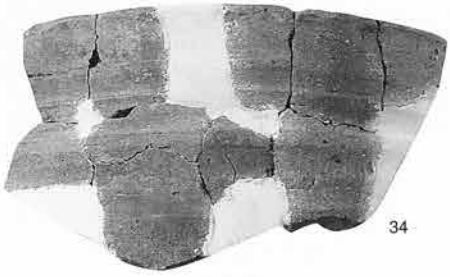
平安時代の遺物（2）

30

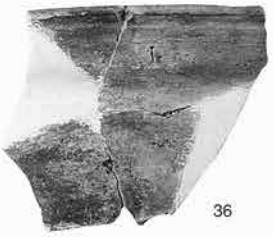

32

31


33


34

35


36

SI 5

39

40

37

38

41

42

30～42（1：3）

43

44

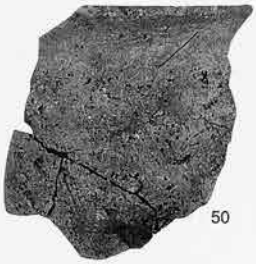
45

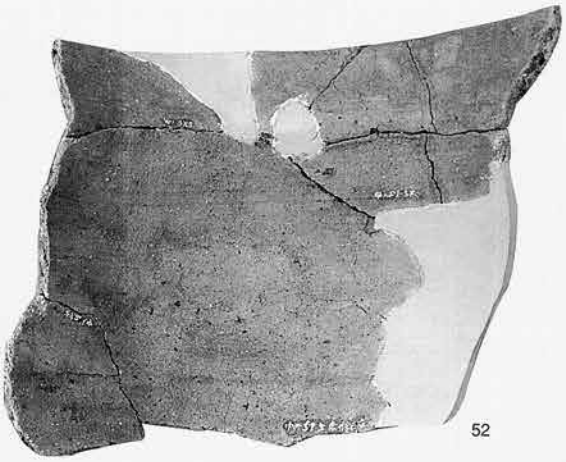
46

47

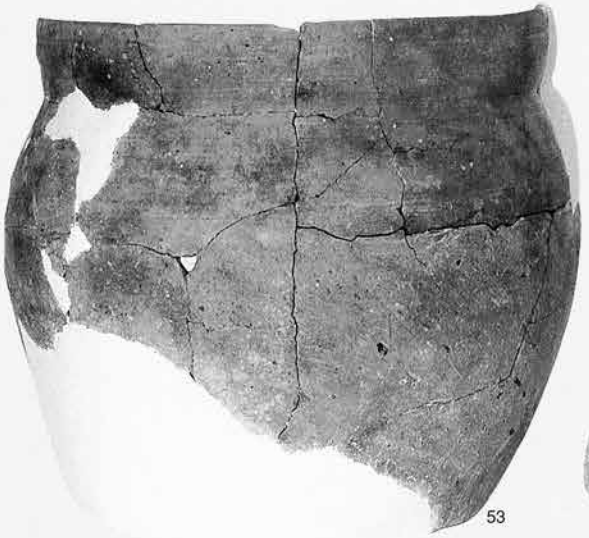
48

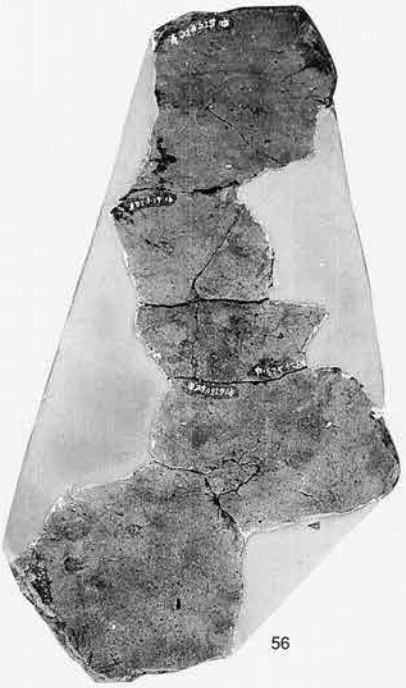
49

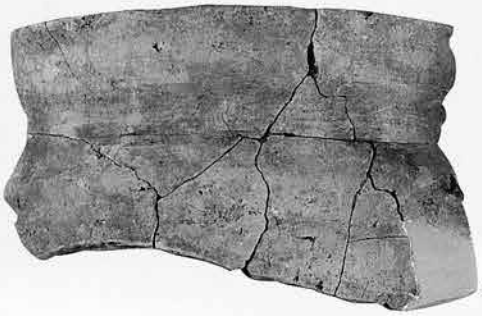

50


52

51


53

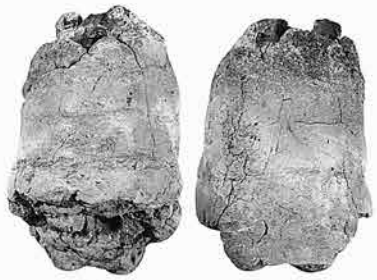

56


54

55

43～56（1：3）

平安時代の遺物（4）・近世の銭貨



57

SI 15

58

59

鉄滓

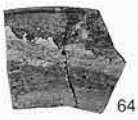
包含層

60

61

62

63


64

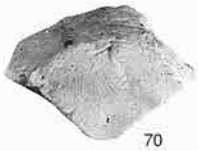
65

66

67

68

69


70

71

72

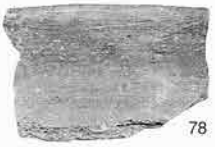
73

74

75

76

77


78

79

80

81

82

83

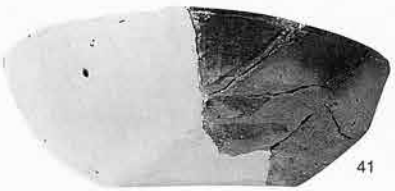
84

墨書土器（墨書正面）

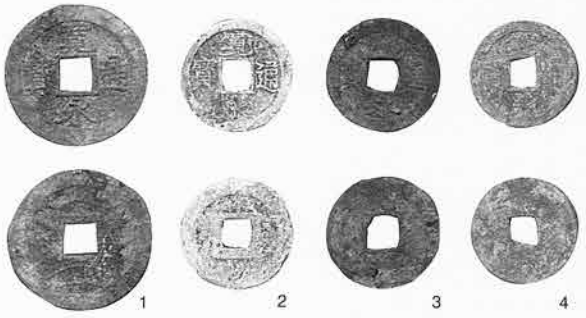
11

14

40


41

66


1 2 3 4

57～84・鉄滓・墨書土器（1：3）
銭貨（2：3）

報告書抄録

ふりがな	なかのさわ　いせき
書　名	中　ノ　沢　遺　跡
副書名	一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第84集
編著者名	立木（土橋）由理子・寺崎裕助・和田壽久・阿部雄生・佐藤執二
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956　新潟県新津市大字金津93番地１
発行年月日	1997年３月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中ノ沢遺跡	新潟県中頸城郡妙高高原町大字中ノ沢1043－１ほか	15－545	50	36度51分37秒	138度11分57秒	一次調査 19930807～19930826 二次調査 19940523～19941130	6,700㎡	一般国道18号妙高野尻バイパスの建設

遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中ノ沢遺跡	遺物散布地	縄文（早～後期） 平安 近世	陥穴状土坑16基・集石土坑４基・集石１基・掘立柱建物１基 竪穴住居３基・土壙墓１	縄文土器・石器 土師器・須恵器・灰釉陶器・刀子 肥前系陶磁器・銭貨	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第84集

一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

中ノ沢遺跡

平成９年３月25日印刷
平成９年３月31日発行

発行・編集　新潟県教育委員会
〒950-70　新潟県新潟市新光町４－１
電　話　025（285）5511

㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956　新潟県新津市大字金津93番地１
電　話　0250（25）3981
ＦＡＸ　0250（25）3986

印刷・製本　㈱第一印刷所
〒950　新潟県新潟市和合町２－４－18
第一和合ビル内
電　話　025（382）7400